
A m a r y l l i s

幼ぬこみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A m a r y l l i s

【NZコード】

N4148M

【作者名】

幼ゐこみ

【あらすじ】

『恐怖』に支配されつつある大陸には、人の皮を被り、人を喰らう人狼が跋扈していた。魔女アマリリスは、魔物と『恐怖』の蔓延る土地をさまよい歩いていた。

0 .

彼らに対抗するには、これしか方法がないんです。涙であたしの手が濡れる。その涙はあたしの涙じゃない。ここから離れたくても、彼の手は絶対にそれを許してくれない。

私達に出来る精一杯の事が、これだけ。

もはやあたしの表情なんて彼の目に入つてはいなかつた。あたしの意思を汲み取る余裕なんて、残されていなかつた。

この村を守るためなんです。

彼の掴む服は千切れそうになつてゐる。「冗談じゃない。この服、幾らで仕立てたと思つていいんだらう。この村を仮に救つてやつたとしても、どうせ仕立て直す資金になんてならないのに。でも、彼にそんなことが分かるはずもない。

お願ひです。お願ひです。もう私達は、犠牲を出したくないんです。

よく言つものだ。見つけられず、退治できないとあれば、疑わしいといつうだけで同胞を殺せるような二ングンどもが、今更何を言つたつて、綺麗事にすらなりやしない。

村が滅んでしまうなんて、今までの尊い犠牲者だつてそうは思つてはいなはずです。

それはどうだらう。犠牲者には一通りいる。村の意向とは関係なく死んだ者。村の意向によつて死んだ者。この二つだ。村の意向によつて死んだ者が、本当にこの村の存続を願つてゐると思うのどうか。理不尽にも、全の為に、生きるという権利を踏みにじられた者全員が、踏みにじつた者たちを恨まずに見守つてゐると本気で思つてゐるのだろうか。

お願ひします。報酬ならいくらでも払います。お願ひします。

何でもしますから。

頼む時だけ腰が低いのはこいつらの専売特許だろ？。そりやつて、願いを叶えてやつたらやつたで、後で追いたてるのだ。ニンゲンなぞ、一人ひとりはどうであれ、集団になれば、信じられないほど卑しい生き物となってしまうのだから。

お願いです。倒してください。この村を救つてください。

どうする？ どうしよう？ 見放す？ それもいい？

お願いです。どうか、人狼を退治してください。

義理なんてない。この村が滅びようと、わたしには全く関係ない事だ。この村が亡くなつても、わたしは何も困らない。あたしがこうやつて息をしている間に、この大陸の数多の村が、滅ぼされているのでだから。

お願いです。人狼を、退治してください。

わたしには関係ない。服を引き千切らんばかりの男の力だつて、あたしの心を動かす要因になんてならないものだ。そう、あたしには関係ない。関係ないのだ。あたしの手は、あたしのこの意思に反して動くかもしれない。右へ、左へ、とゆつくり動くかもしない。でも、それは何の関係もないこと。もし、この直後、村人に化けた人狼が引き裂かれて死んだとしても、あたしとは全然関係のないこと。

あたしは人狼退治なんて、してはいけないのだから。

金色の髪を夜風になびかせながら、アマリリスは数を数えていた。歌つているかのような夜風にリズムを与えるかのように、もしくは、夜風にリズムを取らされているかのように、彼女はただひたすら、数を数えていた。

夜風の中で煌めくサファイアの目は、夜の空という海を泳ぐ星達を見つめ、静かに微笑みかける。それに答えるかのように、星たちもまた、アマリリスに微笑みかけてくるかのように瞬いている。彼らの光があれば、孤独なこの夜もまた、無難に過ごせるかもしれない。

夜風は冷たく、決して温かみを帯びていたりはしないけれど、その上空で瞬く星たちもまた、明るい輝きとはいえないけれど、アマリリスにはそれで十分安らぐことが出来た。どうしてかは分からないし、考えたこともあまりないけれど、アマリリスはこうやつてたまに、独りで過ごす夜に星の瞬きを求めて空を見上げ、数を数えることがある。

そんな時、自分の中にどんな感情が芽生えているのか、もしくは支配されているのか、アマリリスは深く考えない。ただ、星を見つめながら数を数えていたら楽になるから、そうしている。ただ、それだけのことだった。

しかし、そんなアマリリスにも、大体の予想はついていた。

彼女がそんな事をする口は、だいたい、疲れている時なのだ。精神的だつたり、肉体的だつたりとまちまちだけれど、心にゆとりがない時に、ぼんやりと数を数えているような気がしていた。今だつてそうだ。今日は心も体も疲れてしまった。

あいつ、どこ行ったのかな。

ふと数を数えるのをやめ、アマリリスは考える。

今日はこの大陸の何処にでもありそうな平凡な村を通りて来たばかりだった。ただ通るだけと考えていたのに運悪く喰らった足止めに、その事が呼び寄せる出来事のあれこれ。そして、せりにその出来事が呼び寄せる面倒な事態のあれこれ。

考えるのも疲れる。

まあ、いいか。

アマリリスはもう一度星を見つめ、数を数え始めた。だんだんと眠気が襲ってきたけれど、数を数える口は止まらない。急に冷たい風が吹いて来て、傷を負つてしまつた右太ももにやや沁みた。アマリリスは膝を折り、その場に座り込んだ。まだ、星を見るのを止める気はないし、数も数え続けている。

日が沈んでから、どのくらい経つたのだろうか。

これからアマリリスに出来るのは、寝ること。眠気が来るまで、数を数えること、星を見つめること。どのくらい続くのかは、アマリリス本人にも分からぬ。ただ、今できるのはこれだけという事ははつきりしていた。

「狼のにおいがする」

何も考えずに、ただ言った。それが、明日やる事に直結する。

アマリリスの身体の中で、高温の気が巡つていった。

2 ·

闇夜の中、静けさの中で、アマリリスは目を開いた。

いつの間にか星も見上げておらず、数も数えていなかつた。けれど、彼女には、そんな事実に気を取られている暇なんてなかつた。開いたままの目で見つめるのは、夜風も星光も届かない闇の中。木々に囲まれ、闇の揺り籠となつてゐる空間だつた。

そこからアマリリスを見つめる視線が、ひとつ。そして、殺氣も、ひとつ。それが何者か、アマリリスは時間のある限り考えた。自分に襲い掛かつてくる可能性のあるもの全てについて、思い出していく。そして、においから、気配から、少しずつ候補を絞つていく。こういう時、最後に残るのは、いつも違つて、いつも一緒。

今日の村でのいざこざの忘れモノか。

アマリリスはそう理解し、視線に向かつて目を細めた。挑発じみた笑みだつた。それを相手がどう取つてもいいように、身構える。得物なんてない。あつたとしても、晴雨兼用のピンクのフリルのパラソルぐらいだ。それにお気に入りだから、あまり使いたくない。そもそもの話、アマリリスには得物なんていらない。考える頭、感じる身体さえあれば、十分身を守れる。それが、アマリリスだつた。

アマリリスを見つめる視線がぐらりと歪む。来るか。

闇夜に響き渡る咆哮。寂しげなその響き、それを聞く度にアマリリスの心は揺さ振られ、彼女の身体を内側から震わせる。

それが導くのは、血への欲求。欲望のままに力を放ち、目の前の化け物を滅茶苦茶にしたいという暴力的な欲求。そして、それらが

もたらす快樂への欲求だつた。

満月の光が、アマリリスと、視線の主を浮かび上がらせる。見つけた村では、たしか、スーアと呼ばれていた。小さな子どもや、友人、家族からは、スーと呼ばれていた。

魔女であるアマリリスでも、美しい青年だと思った。まるで、神話から出でたような、森に住む精靈の血を引いているかのような、美しい青年、スー。

その美しさは、やはり、人間や魔女だけでなく、異形の者さえも引き寄せたのかも知れない。

それとも、たまたま運が悪かつただけかしらね。

アマリリスはくすりと笑んだ。何にせよ、相手がこの青年を外皮としたことに、アマリリスは嘆くどころか興奮さえした。

美しいものを引き裂ける。

そんな醜い悦びが、アマリリスの中に芽生えた。しかも、相手はしぶとく、逃げ足も速かつた。

簡単に潰せないということが、こんなに楽しいなんて。

気付けば、アマリリスは声を上げて嗤つていた。

月光を浴びてこちらを睨むスーは、単なる美しい青年ではない。その外皮を捲れば、すぐに、同じくらい美しく、どんなに低く見積もつても、いい値段で売り捌ける毛皮が現れる。

「……化け……物め……」

他ならぬスーに言われ、アマリリスは嗤うのを止め、青い目を向ける。

「化け物はお互い様だらう?」

「違う」

スーの目が鋭く光る。もう田の前にいる者は、生まれた時からのスーとは別人だ。

「我々は、化け物ではない。我々は、誇り高き狼。人間とも、貴様ら魔女とも違う、世の支配者《恐怖》に打ち勝てる唯一無二の生き物、ライカンスロープだ」

スーの目が光り、夜風に長い金髪が揺らぐ。敵意によって暴発しそうな力に、彼の表情は歪みきついている。けれど、アマリリスはそれを醜いとは思わなかつた。

「あなたがライカンスロープでも、ルー・ガルーでも、ワーウルフでも、ヴァラヴォルフでも、構いはしない」

アマリリスの青い目は、どこまでも冷静だつた。

「例えベルセルクだらうと、ウールヴヘジンだらうと、あたしには関係ない」

スーの荒い吐息が、アマリリスの闘争心を刺激する。

「あたしが求めているのは、あなたが人狼であること」

スーが飛ぶように駆け出した。しかし、アマリリスは、それをじつと見つめているだけだつた。

3・METAMORPHOSE

3・

『恐怖』が包んでいくこの世の中にあっても、木漏れ日のようなやわらかな暖かさに包まれた小さなこの村を、ディアナは愛していた。

この村で生まれ育ったわけでもないのに、村人達は自分を受けとめてくれる。普通の人間じやない不気味な力を持つた自分を、村人達は受け入れてくれた。

その事が、ディアナには嬉しかつた。

生まれた村では、ディアナは悪魔と呼ばれていた。黒い髪に緑の目、時折激しく身体が痛み、大きな雌獅子のような漆黒の獣へと姿を変えるディアナを、村人どころか家族ですらも不気味がり、長く教会の地下に閉じ込められた。

だから、生まれ故郷の村が人狼達に襲われた時、ディアナはこれをチャンスだと思った。

村人たちは真っ先にディアナを疑つたが、ディアナにそんな事が出来るわけもないとも知つていた。一方、人狼達も、あからさまにディアナを疑わせようと強く出てこなかつた。そして、村人たちは一人、また一人と、内臓を喰らい尽くされた姿で発見されていき、疑いと殺し合いの果て、村はとうとう滅んだ。

ディアナが教会の地下からやつとの思いで抜け出せた時、村では屍が放り出され、生き残つた者がいたのか、全て滅んでしまったのかすらも分からぬ状況となつていた。人狼達もすでに去り、墓場と化した絶望の場所。そんな中に一人残されていた。

その後、各地を放浪し、辿り着いたのがこの村。

ディアナは驚いた。どうして、村人たちが疑いもなく自分を受け

入れるのか、理解出来なかつた。『恐怖』が世を支配しているという時勢にも関わらず、また、各地で人狼によって村だけでなく町すらも滅ぼされているという噂が飛び交つてゐるにも関わらず、どうして村人たちが、自分を疑わないのか、ディアナには分からなかつた。

その後、この村の村人たちの疑わないという特性に気付いたディアナは、決意した。

この村を、この村の人たちを、守るということ。

人狼が今までこの村に来なかつたのは、幸運であったというだけ。村人たちは自分達の崇める神を信じていたけれども、ディアナにしてみれば、偶然でしかなかつた。これから、いつ、人狼やそれに匹敵する者がこの場所に攻め込んでくるか分からない。

だから、ディアナは早いうちから自分の力を村人たちに示した。

思つた通り、村人たちがディアナの姿を見ても、怖がりはしなかつた。代わりに、獣に変身したディアナを「クーガー」と呼びわかつたが、全く悪意は感じなかつた。ディアナの黒髪を束ねる赤いリボンも、村人による贈り物だ。それどころか、服も、食物も、村での役割も、全て分け与えて貰えた。

このことばかりは、この村を守る神に感謝してもいい、とディアナは感じていた。

だけど……。

数日前から、ディアナは不安を覚えていた。

少しずつ、村に近寄つてくる気配。足音。じわじわと確実に近くなつてくる妙な雰囲気。村たちはまだ気付いていないけれど、それは、もうすぐそこまで来ているような気がしてゐた。

どうか、この地を守る神よ。

ディアナは祈つた。

わたしの勘が、当たりませんように。

べつとつと腕を汚すエンジ色。

アマリリスはその味がとても好きだった。ほんの少しの快楽。そのために行う狂氣沙汰。人間を襲うのは面倒な事態を招きやすいから、襲うのは人狼と決めている。ただそれだけのこと。

「あつ……」

アマリリスは真っ赤に染まつた両手を見つめ、ふと我に歸る。まだ。

どうしてこうなるのか分からぬ。けれど、血と暴力への欲求が、アマリリスの心を歪ませて、恐ろしく醜い化け物へと変えてしまう。どんなにそうなりたくないと思つても、人狼といざ鬪えば、自分で止められなくなる。

「どうして、あたしは……」

赤。アマリリスの手にべつたりとついて離れない赤。その足元に散らばる肉片は、ただの外皮。アマリリスが欲しかつた毛皮は、そのまま残つてゐる。美しい白狼だつた。己がもともと美しいから、美しい人間を求めたのだろう。

スーをばらばらに引き裂くのは、楽しかつた。

「まだだ」

アマリリスは自分が恐ろしかつた。外皮は人間なのだ。そしてそれは、魔女と呼ばれる自分と同じ姿をしている。それなのに、それを引き裂くのに、なんの躊躇いも起こらない。どうして自分はこんなに非情なのだろうと思つのも、全てが終わりきつた後のこと。

「狂つてゐる」

自分の中の全て、自分を包む全てが狂つてゐる。自分がどんな方

法で、猛る狼の命を奪つたのか、覚えている。身体に秘められた力を一気に放出し、生まれた凍風で相手の身体を切り刻む。そして、弱つた相手に近づくと、素手で、アマリリスは。

「駄目だ、思い出すな」

アマリリスは、人狼と戦つている時の自分と、普段の自分、どちらが本当の自分なのか分からなくなる。普段の自分だと思つているものが、本当に普段なのか、分からなくなつていく。そして、どちらの自分でいるほうがいいのかも、分からなくなつていく。そんな時、アマリリスはまた、数を数える。

そうしていると冷静になれる。そうしていると忘れられる。そうしているとどうしようもないこの気持ちを抑えられる。

「さ……て」

段々と、アマリリスの中に芽生えていた、この白く美しい獣への罪悪感が、薄れていつた。代わりに沸き起つるのは、更なる欲求。

「逃げだした人狼は、あと二匹いたはず」

獲物がまだいるという楽しみ。

足りない。人狼と戦うアマリリスには、まだ満足出来なかつた。あと二匹の人狼も、追いかけなければ。捕まえなければ。そして、立ち向かつてくる彼らを前に、力を思つままに放出し、思つままに切り刻んで、外皮を剥ぐ。

獲物は遠くへ逃げただろう。

けれど、アマリリスはそれを捕まえるまで、追い続ける。

「待つていて」

赤に染まつた手を拭き、アマリリスはパラソルを拾う。

「今、行く」

その日の朝も、昨日の朝と変わらずにやつてきた。

いつもと違うと言えば、明日、村をあげての婚礼の儀があることぐらいだろう。その前の日となるわけだから、ディアナは村の者達の準備を手伝っていた。この村に来てから、婚礼の儀を見たのは一回だけ。その時は来たばかりだったから、何も手伝えなかつた。今日は違う。この村の暮らしにも慣れてきたディアナには、手伝う事が出来る。それに、主役となる花婿も花嫁も、ディアナと近しい人達だつた。明日は、素晴らしい日になる、はずなのだが。

ディアナは緊張していた。婚礼の儀とは別の事で、身体が強張っている。何か、見落としてはいけないような気配が、この村に来ているような気がしていた。

違うと想いたい。

朝からずつとディアナは思つていた。

だから、村の子ども達の悲鳴が聞こえた途端、ディアナは心臓がひっくり返つてしまつたのかと思つたくらい、衝撃を受けた。悲鳴は、言葉にならないほど、酷いものだつた。慌てて家を飛び出して、ディアナは外へと駆け出る。

すでに他の村人たちも、その場に駆けつけていた。悲鳴の原因を見る前に、ディアナは察していた。村人たちの顔が、血というものが無くなつてしまつたかのように、真つ青だつたからだ。

ある者は泣き叫び、ある者は人だかりから逸れて、堪らずに嘔吐する。やがて風が運んできた匂いによって、ディアナの想像は裏付けられた。人だかりをかき分け、女は見るなという男の声を無視してその場所へと抜けだしたディアナの目に、それは映り込んだ。

最初、それが何なのか、ディアナには分からなかった。けれど、次第に目からの情報を頭が解析していき、それが何なのかを解明してしまった。

悲惨な状況だった。いや、それだけの言葉で表せるものではない。そこは、小屋の中。小屋は木でできている。だから、木目こそあっても、こんな鮮明な赤の斑模様なんてついていなかつた。そして、その床に散乱するのは、三つの死体。一つはこの村で飼われている豚だつた。どちらも手足がばらばらにされ、腸を食い破られていた。そして、その二つの死体の間に転がっているのは、人間の死体。この村の、豚飼いの少年だつた。

どれも夥しい血にまみれ、判断が難しかつたけれど、服の断片、そして、入口の傍に転がる豚の手足で分かつた。

「この村に、人狼が来てしまつたの……？」

ディアナの呟きは、誰の耳にも届かなかつた。

ただ、婚礼の儀の前の日の起こつたこの惨劇に、何が起こつたのかを理解せず、怯え、嘆き、冷静さを失うばかり。ついにこの村も、『恐怖』に支配される日が來てしまつた。

「皆、すぐに、広場に避難して！」

ディアナはそれでも叫んだ。

すぐにこの場から人々を遠ざけなければ。こんな場所では、誰がどこにいるか分からない。今日、誰がどこにいたか、覚えている限り聞かなければならない。相手は人狼なのだから。

ディアナの意を汲み取つた数人の者が、同じように叫ぶ。

少しずつだが、村人たちが広場へと向かい始めた。

ディアナは全ての村人が向かつたのを確認すると、小屋の中の少年だつた遺体に目を向ける。

「ごめんね、一人にさせるわ」

そして、小屋の扉を閉めて、広場へと向かつた。

アマリリスは血の匂いに誘われて、一つの村に辿り着いていた。ここがどんな村かなんて知らない。知りうとも思わない。ただ、彼女を引き寄せるのは、血の匂い。村全体に漂う、腐乱臭。そして、涎を垂らした人狼達の荒々しい吐息の音。

見つけた。

アマリリスは歩く。彼女には、足元に散らばる屍なんて見えてない。見えてるのは、隠れ潜む人狼の気配のみ。だから、彼女に背後から走り寄つてくる気配なんて、全く気付いていなかつた。それにやつと気付けたのは、まさにその気配が飛びかかつてくる寸前のこと。

だが、アマリリスはずつと冷静だつた。その誰かがぶつかつてくる寸前に、電撃を走らせて、体当たりを跳ね返す。攻撃を損ねた誰かは、地面に叩きつけられ、屍にぶつかつて止まつた。アマリリスは青い冷静な目を、その者に向けた。

「綺麗」

彼女の目に映るのは、漆黒の獣。それが何と言う獣なのかは分からなかつたけれども、それもどうでもいいこと。問題は、その獣の姿が綺麗であることだつた。

黒く艶のある毛並みが光り、緑色に見開かれた目は、本当に宝石のようだつた。そして、並みの者ならば圧倒されるだらうその大きさ。狼を大きくした人狼たちよりも、ずっと大きいだらう。真っ白な牙、真っ赤な口が開かれ、猫のようにアマリリスを威嚇している。だが、アマリリスには、その全てが綺麗に見えた。

「ねえ、あなた、あたしのペットにならない?」

獣が唸る。何を言つていいのかは分からなければども、何かをアマリリスに問いただしているかのようだつた。アマリリスはそこでやつと、今のこの状況を思い出した。

目の前の獣と、道端に転がる屍とを見比べて、彼女は獣に問い合わせた。

「あたしを人狼だと思っているの？」

人狼、という言葉に反応したのか、獣の唸り声が強くなつた。

「それとも、あなたも人狼の仲間？」

獣の唸り声が止まつた。緑色の目が、詮索するようにアマリリスを見つめてくる。アマリリスはそれで理解した。屍は、獣の仲間。人狼は、獣の敵。そして、新たに現れたアマリリスがどちらかを、この獣は判断しようとしている。

「あなた、獣のくせに人狼が誰か分からなかつたのね。妙ね。人間ならともかく、獣なら人狼を一発で見分けられる能力が備わつているはずなのに」

獣が身を低くした。

飛びかかつてくるわけではない。この獣は、逃げようとしている。そう気付いた途端、アマリリスは両手を突き出した。殺意はなかつた。殺して楽しいのは人狼だけ。この獣は生かして捕えたい。そう思つたからだ。だから、アマリリスの両手から放たれたのは、炎でも風でも氷でもなく、防衛にも使つた電撃。無意識にそう身体が判断し、放たれた。

電撃の鎖は、獣にじかに当たつた。獣は驚き、悲鳴を上げると、呆氣なく倒れる。同時に、その本性が現れた。

「やっぱり、ただの獣じやなかつたんだ」

アマリリスはその様子を淡々と見つめた。

7.

ディアナは全身の痛みと共に目が覚めた。意識は朦朧としていて、頭は重い。起き上がるのも億劫で、手を動かすのもやつとのことだつた。

何があつたんだっけ？

ディアナはふと考へた。

確かに、自分は「クーガー」の姿でこの絶望と化した村を歩いていた。どこに人狼が潜んでいるか分からぬ。どこで人狼に襲われている村人がいるか分からぬ。安全な場所へと戻れない村人のために、村を歩きまわつていたのだ。

それだけが、今のわたしに出来ること。

ディアナは悔やんでいた。最初に人狼が入ろうとした時に、気付かなかつたこと。そして、人狼の正体を掴めないまま、次々に仲間達を失つていつたこと。生まれた村のように、この村もまた、墓場へと化そうとしている。それも、自分が守ろうとしているにも関わらず、だ。

目の前で襲われそうな村人は、片つ端から助けていくけれど、その日助けた村人が、次の日に変わり果てた姿で見つかることもあつた。村人たちが注意を怠つてゐるわけではない。人狼が現れてからしばらくは、村人たちは自分達の崇拜する神の聖堂で共同生活をしていた。彼らが襲われる時は、一人になる時。だから、極力一人にならぬように、そうしてゐた。

けれど、様々な理由で、一人になる瞬間が来る。

そんな時、ディアナがどんなに注意しても、一人、また一人と犠牲者は増えていった。

もう墓場などない。埋める場所もない。

そして、ついに、村人たちはお互いを疑いあい、それぞれの家に閉じこもり始めた。

これでは人狼の思うつぼだ。

ディアナはそう言つたけれども、誰も聞く耳を持たなかつた。仕方なく、ディアナは「クーガー」になり、昼夜問わず、起きている間中村を彷徨い始めた。何処かで襲われている人がいないか確かめるために。怪しい人間がいないかを確かめるために。

そう、そして、見つけたのが……。

ディアナは、はつと我に返つた。そう、思いだした。自分がどうしてここで気を失つていたのか。どうして変身が解けてしまつているのか。何を闘い、何が起こつたのか。

「目が覚めたのね、子猫ちゃん」

甘い声に、ディアナは身を震わせた。手を動かすのが辛かつた理由が、やつと分かつた。拘束されているからだ。それも、非常にきつく。

「ごめんね、そうしないとあなた、話を聞かないでしょ?」

言葉とは裏腹に、全く悪びれる様子もなく、アマリリスは言つた。「だから、少しそうしていてちょうどだい。無理するととても後悔する事になる」

「お前、何者だ!」

ディアナは人間の姿で唸つた。「クーガー」だつた時の感覚が、まだ残つてゐる。だけど、期待する力も出なければ、霸氣も現れない。威嚇しようとしたディアナの勢いは、すぐに廃れていた。彼女を拘束しているのは、金髪碧眼の美しい女だつた。だが、その美しさこそが脅威だ。美しいものは、異形のものだとされるからだ。

「人狼じゃなければ、何者なんだ! どうしてここに来た!」

「うるさい子ね。躾が必要かしら」

女の手が、ディアナの頬に触れた途端、ディアナの勢いは、さらになんでいった。

何、この気配。

見た目には全く現れない妖氣。美しい姿の奥に、グロテスクな感情を秘めている雰囲氣。その全でが、今、圧倒的不利のディアナにだけ注がれている。

抗えない。

勝敗は最初から決まっていた。

「ねえ、あなた、名前はあるの？」

女が言った。

女の手からディアナは必死の思いで逃れた。ずっと触れられないと、『恐怖』を植え付けられてしまいそうだった。ただでさえこの世に溢れているそれに、身体の中まで侵入されるなんて御免だ。

この女、何者なの……？

「名前、教えなさいよ」

女の口調が強くなつた。

その全てに脅されるままに、ディアナは答え、勇気を振り絞つて訊ね返した。

「あなたは、何者なの？」

女はやつと笑みを見せた。

「あたし？ あたしはアマリリス。魔女と呼ばれるアマリリス。それ以上でも、それ以下でもないわ」

アマリリス。そう名乗る彼女の目を見て、ディアナは力を抜いた。しかし、警戒は解けなかつた。この拘束が解けるまでは。

アマリリスにとつて、デイアナと名乗つたこの娘の拘束を解くことは、まだ抵抗があることだった。

確かに、このままこうしていても、デイアナが信用してくれるはずもない。とはいって、別に彼女の信頼が得られずとも、彼女を飼いならす自信はあった。だから、むしろ、彼女が屈伏するまでこのままでいいといふとアマリリスは考えていた。

だが、そうも言つていられなくなってきた。

デイアナとの戦いで、人狼達が動き出したのだ。アマリリスの勘が鈍つていなければ、人狼は一匹いる。恐らく、前の村で取り逃がした人狼だろう。そして、彼らが余程うつかりしていなければ、彼らの外皮はこの村の者へと変貌しているはず。

人狼にとって、アマリリスも邪魔であれば、デイアナも邪魔であるはずだ。こうして無防備な状態になつたデイアナを狙わないはずがない。普段の冷静なアマリリスならば、デイアナを守る事が出来るだろうけれども、相手が人狼ともなれば、アマリリスには、人狼を引き裂いて遊ぶことしか見えなくなつてしまつ。片方を追いかけているうちに、片方がデイアナに危害を加えたとしても、すぐには気付けない。人狼と戦つてゐる間のアマリリスには、どうでもいい事として処理されてしまうだろう。

だから、デイアナには自分で自分の身を守つてもらうしかない。

アマリリスは、この獣には、まだ死んで欲しくなかつた。

「拘束を解いてあげる。でも、誤解しないで。逃がしてあげるわけじゃないわ」

デイアナを縛つていた氷を溶かし、アマリリスはその細い首へと手をかける。デイアナがそれに気付いて逃げようとしたが、アマリ

リスは構わず力づくでディアナの首を引き寄せた。

「ただの拘束の代わり。あなたには外せない」

アマリリスはそう言つて、ディアナの首を、ルビーの光る首輪で

軽く絞めた。

「何するの！」

「分かつていいるでしょう？ あなたは負けたのよ」

その言葉に、ディアナが言葉を失つたのが分かつた。アマリリスは構わず、首輪をしつかりと締めた。ただの首輪ではない。いわゆる、魔法具というものだ。使用者の意思なしに外すことは絶対に出来ない。

「そんな、どうして……」

「あたしに襲い掛かつたのはあなた。これは、あなたが引き寄せた未来よ。あなたは知らない内に、決められたすべての未来を引き寄せてしまう魔女なのよ」

ディアナは緑の目を大きく見開き、アマリリスを見上げた。だが、その表情も、アマリリスの心を動かすことはなかつた。

「じゃあ……」

ディアナが小さく言葉を漏らす。その意識の先には、絶望の地と化した村と、あちこちに転がる軀が映つている。

「これも？」

ディアナの目からは涙が溢れています。どうして泣いているのか、どうして震えているのか、アマリリスには少しだけ分かつていて。ただ、無表情に見つめるだけのアマリリスは、ディアナを不安にさせるばかりだつた。

「これも、あたしが招いたつていうの？」

アマリリスは無表情のまま、ディアナの頭に手を置く。とてもやわらかな髪をしていた。その髪を結ついているリボンが、猫の耳のように揺れた。

アマリリスは静かに言つた。

「あなたを貰う代わりに、仕返しを手伝つてあげる

「え？」

ディアナの問い合わせには応じずに、アマリリスは周囲の様子を探つた。人狼は二匹。その気配は、遠くはない。少しずつ、少しずつ、アマリリスの心と体に、欲求と血の猛りが起こり始めていた。

アマリリスがやつと移動する気になれたのは、ディアナがやつと大人しくなつてからだつた。

ディアナにしてみれば、つまらない自尊心のために、憎らしい人狼達が大切な村の空気を少しでも長く吸い続ける事になるのに比べれば、いつそこで、その憎き人狼を退治してくれるというアマリスにひれ伏すほつがましだと理解したのだろう。

アマリリスにとつてみれば、ディアナの心の整理などどうでもいい事であつたが、何にせよ、ディアナが大人しくなつてくれたのは有難かつた。誰にも邪魔されずに入狼を狩りたいのに、他でもないこの獸が邪魔してくるような事があつたら、この上なく面倒だつたからだ。

「さて、あなたが探しだせなかつた二匹の人狼。見つけたわよ」
村を歩くこと数分、アマリリスはとある民家の前で立ち止まつた。ディアナはその民家を見つめ、愕然とした。

他の民家と殆ど変らぬ平凡な作り。わらぶきの屋根に、土の壁。非常に作りやすいうえに、この村の気候に適している合理的な住まい。敢えて、他の民家との区別をつけるのならば、丈夫な木の扉にかけた、鈴の音と、個人的に育てていたひまわりの鉢だろう。
それは、ディアナの住んでいる家だつた。

「ここに……？」

アマリリスがここをディアナの家と知つて言つているのかは分からなかつた。

だが、アマリリスの口は嘘を吐いていない。本気でここに人狼が隠れていると言つてはいる。それがますますディアナを不安にさせた。

「待つて、アマリリス。だつて、ここは……」

ディアナの頭に過ぎるのは、家の中にいる者の顔。

そう、ディアナは一人暮らしではない。もともとある老夫婦とその息子家族と暮らしていた。というのも、村に来た日に、来たばかりで一人で暮らすのは大変だろうとの家族が招いてくれたからだ。そして、そのまま、こうして居座っていた。この人狼騒ぎにあっても、家族だけは無事だったし、ディアナが外を放浪していても、警戒心の強い家族が人狼に襲われる事なんて少しもなかつた。

今、この家の中には、ディアナ以外の六人の家族がいるはずだった。老夫婦、息子夫婦、息子の嫁の妹、息子夫婦の長女。そんな家族構成だった。

ふと、風向きが変わる。

ディアナはその瞬間、激しい嘔吐感に見舞われた。胃がひっくり返るのではないかというほど、身体の内部がうごめいている。そのせいで、呼吸すらも苦しい。彼女を苦しめるものの正体。それは、臭いだつた。あまりに酷い臭いが、ディアナの感覚と精神を少しづつ蝕んでいく。

全てを吐き出す勢いと共に、ディアナは大声で叫んだ。威嚇ではない。村人を救うべく村を走りまわり、アマリリスにまで戦いを挑んだかの勇敢な精神は、一気にしぼんでしまつた。ディアナの喉から飛び出していくのは、悲鳴。血と肉と内臓の生々しい匂いがもたらす現実への怯えと、拒絶の叫びだつた。

ディアナの錯乱にも、アマリリスは全く動じず、ただ家の方向を見つめているだけだつた。

やがて、渾身の叫びすらもかすれ、荒ぶつた呼吸を整えようと肩で息をするディアナに、アマリリスは冷静に、ただ冷静に、まなざしと言葉を贈つた。

「少しは落ち着いた?」

無機質な声は、だが、ディアナの心を逆撫ですることもなく、ただ、焦りと復讐心のみを生みだせる。

その緑の虹彩に包まれる瞳が、満月のように広がつた時、アマリ

リスは少しだけ歪んだ笑みを見せた。

人狼達は、もはや人間の皮を被らず、本来の狼の姿で現れた。一匹の人狼が現れた時、アマリリスとディアナの感じた印象は、相反するものだった。

ディアナは、今までこれほど醜い生き物を見たことがあつただろうかというほど、一匹の人狼の事が汚らわしく思つた。特に、片方の黒い人狼が小さな腕をくわえている姿を見て、このままここに立ち止まつていらざることが不思議なくらい、じつとしていられなくなつた。

一方、アマリリスは違つた。

肉を咀嚼しながら二人の前に現れた一匹の人狼の姿は、あまりに血を浴びてゐるために、それだけでグロテスクな状態だつた。また、もう片方は臓器を引きずついていたため、毛皮は血で汚らしく固まり、そうではないのに、まるで皮がめくれてしまつたかのようにも見える。

アマリリスはそれを、美しいと感じた。

どうしてこんなに美しい姿があるのか分からぬほど、美しいと感じた。そして、もつと彼らを美しく、彩つてあげたいという願いが、彼女を包んでいた。欲求は彼女の身体の奥深くを刺激し、力を流動させる。その流れを感じていると、抗えないほどの赤への欲求が、彼女の頭一杯に溢れていつた。

「今……着飾つて……あげる」

アマリリスの声が合図になつたのかは分からぬが、その途端、ディアナの姿が瞬時に変化し、肉眼では捉えられないほどの速さで飛び出していつた。アマリリスは惚けたようすでそれを見つめ、目を細めた。黒いしなやかな肢体が、赤茶色にそまつた一匹の狼めが

けて、飛び上がっていく。そのラインは計算されたように見事で、アマリリスはうつとりとしてしまった。そして、何のぬかりもなく、黒い毛皮のクーガーが片方の狼の首の根を捉えた時、アマリリスはやつと不平を感じた。

「だめ」

一撃で味方を捕えられ呆気に取られているもう片方の狼を尻目に、アマリリスはクーガーに言った。

「それは、あたしの」

指をさすのは、クーガーに捕われてもがく巨大な人狼。クーガーは緑の目でじつとアマリリスを見つめ、それ以上噛む力を強めるのをやめ、狼をくわえたまま制止した。それを見て、もう片方の狼が、慌てて動き出した。仲間が殺されることを理解したからだ。

アマリリスの矛先は、はじめからそちらの狼に向けられていた。彼女の指先から放たれるのは、極限に冷たくした、風。炎でもいいが、それでは毛皮がもつたらない。外皮を壊す楽しみがないのなら、一撃で腹を裂くだけでいい。

だが、アマリリスの攻撃は、当たらなかつた。

寸前に、助けに入ろうとした人狼が、アマリリスの目的に気付いたからだ。その人狼は方向転換し、アマリリスとディアナから十分距離を取り、そして、人間の外皮を被りなおした。

ディアナはそれを見て、はつとした。それは、人狼がやつて来た日、その次の日に結婚するはずだった花婿の姉、オーロールの姿だった。

「仲間を放せと言つても、お前達は放すどころか、仲間の前でわたしを殺すのだろう?」

オーロールの姿で、その人狼は訊ねた。

「ウェアウルフは仲間を重んじる。でも、わたしには、お前達から仲間を奪い返す力なんてない」

オーロールの声で、その人狼は嘆いた。

「逃げることしか出来ないわたしを、許しておくれ」

オーロールの目で、その人狼は泣いた。

そのすべてが、ディアナには許せなかつた。

だが、もう片方の人狼の言葉を聞くや、アマリリスにはもはや、ディアナの捕えている人狼しか目に見えていなかつた。手間をかけて捕まえるよりも、今、すぐそこに用意されている玩具で遊ぶ方が遙かに楽だつた。

「ねえ、ディアナ」

アマリリスは心から笑んだ。今からすることを考えると、楽しくてたまらなかつた。

「その子ちょうどいい」

その言葉には、今は味方であるはずのディアナでさえも、ぞつとした。

11.

ディアナは人の姿でその場に立ち尽くして、目の前にて繰り広げられる光景を、眺めていた。

ちつとも見たいなどと思わないのに、何者がディアナの身体を縛り、見せ付けていたようだつた。

アマリリスの言葉は、要請ではなく、強制であり、絶対的命令。それに逆らうなど、ディアナには一生不可能だうと自分でも分かっていた。

さきほどまでのディアナにあつたのは、人狼への憎悪であり、嫌悪であった。しかし今のディアナにあるのは、人狼への悲哀ただひとつ。

たつた今ディアナの前で絶叫し、彼を救う可能性のあるあらゆるものを持ちうように太く咆哮する生き物が、人狼として生まれ、人狼として生き延びようとして、人狼としてディアナ達に……いや、他ならぬアマリリスに出会つてしまつたことは、いかに村を滅ぼした人狼を憎むディアナまでもが、思わず哀れんでしまつた。

されほどまでに、アマリリスは化け物だつた。

整つた美しい顔立ちに浮かぶやわらかな微笑みは、この場には明らかに不釣り合いで、微かに聞こえてくる彼女の鼻歌は、命の瀕戸際に立たされ、ひたすら安息を求める人狼の悲鳴とは、まったく協和しなかつた。

とんでもない魔女と出会つてしまつた。

ディアナの心をざわりとした寒気が包み込んでいく。その寒気の根源は、首元をきつめに縛る首輪だ。手に触れた途端、全身に電撃が走つた。

とんでもない魔女に捕まつてしまつた。

所詮自分は彼女の気紛れに生かされただけ。たまたま人狼ではなかつたから、彼女の暴力への欲求を刺激しなかつたというだけ。

その考えはディアナの思考に渦を巻くように漫透していった。

やがて、アマリリスが肩を落とし、空虚な目を地面に向ける。

「終わっちゃつた」

その空虚な目に映るもの。もつ、アマリリスの澄んだ声に、不協和する悲鳴は重ならない。

ただそこにあるのは、美しさとは本来不釣り合いなはずのグロテスクなモノが、アマリリスという存在を飾り立て、不気味な調和を生んでいるという光景のみだった。

「つまらない」

アマリリスの声は、もはや生き物ですらなかつた。ディアナを打ち負かした時の、有りふれた強い生き物の声ではなかつた。空虚に包まれるアマリリスと、その足元に散らばる、ただの真つ赤な有機物と化した残骸。

そこにはディアナが憎み、哀れんだ人狼は、もういなかつた。

物陰から、苦しそうに呻く声が聞こえた。それがオーロールの声だということを、ディアナはしばらく経つてから気付いた。

ディアナが振り向いた先には、オーロールの皮を被つた人狼の姿はない。

けれど、啜り泣く声だけは、小さくこだましていた。

人狼が人間を狩るのだとすれば、魔女は人狼を狩る者なのだろうか。

ディアナは事を終えて冷静になつたアマリリスが狼の皮を剥ぐのを見ていることしか出来なかつた。得体の知れない生き物へ変身するディアナを、周囲の者たちは魔女と称した。けれど、それは正しかつたのだろうか。いや、そんなわけがない。実際の魔女を目の前にして、ディアナは心から怯えていた。知らなかつたとはいえ、アマリリスに一度でも戦いを挑んだ自分がとてつもなく愚か者にすら思えた。

「ディアナ。そろそろ行きましょ」

アマリリスが冷静な声で言った。

それは、人狼を前にしている時とは全く違う、生き物らしい声。剥いだばかりの狼の皮を抱えて、彼女は整つた顔で笑みを作つた。それが他ならぬ自分に向けられている事を思い出し、ディアナはうろたえた。

行くつて、何処へ？

冷たい首輪が、ディアナに現実を教える。

「どうせ、もうあなたの居場所はないの」

アマリリスの言葉が、ディアナに突き刺さる。

「だから、あたしと来なさい」

仮に拒否できるとしたら。自分が拒否していたかどうか、ディアナ自身疑わしく思つた。たつた今、惨劇を見せ付けられたばかりだというのに、逃げていいという言葉に反応できるなんて思えない。それでも、ディアナは動けなかつた。

例え死の村と化したとしても、愛すべき村人が、まだ生き残つて

いるかもしれない。もしかしたら、姿の見えぬディアナを求めて、怯えているかもしれない。そう思うと、動くことが出来なかつた。

「アマリリス……わたし……」

勇気を振り絞るしかない。アマリリスに、自分の気持ちを伝えるのだ。

「わたし、あの……」

「オーロール」

そんなディアナの言葉を、アマリリスは遮つた。
アマリリスは、ディアナが一緒に来る気のないことを知つていた。
だが、そんなディアナを手放すわけにはいかなかつた。
手放さずに済む方法。それは、ひとつの大口を口ずさむことだとも、アマリリスは知つていた。

「あの雌狼が被つた人間、ずいぶんな美人だつた」

ディアナの表情が凍つた。アマリリスの狙い通りだつた。あとは彼女に嫌われようとも、殺意を持たれようとも、アマリリスにとっては構わないこと。

「きっと中身も、美しい毛皮をしているかもね」
アマリリスが横目で見つめたディアナは、俯いていた。飛び掛かつてくるかもしれないと思ったが、そうではなかつた。

彼女は泣いていた。

微かに漏れる嗚咽が、アマリリスの冷たい耳に、入り込んでいく。

「いい姉さんだつた」

嗚咽混じりに、ディアナは言った。

「弟の結婚を誰よりも喜んでいて、準備を手伝うわたし達家族に、いつも親切してくれたわ」

ディアナはまっすぐアマリリスを見た。人形のようになにかの通わない表情がそこにある。

「わたしがここへ来たばかりの日、わたしを見つけて、受け入れてくれる家族を紹介してくれたのが、オーロールなの」

この村の連中はみんなバカがつくほどお人好しだ。

ディアナの頭の中で、オーロールの言葉が蘇ってきた。

世の中は人狼だの吸血鬼だので裁判だの処刑だの物騒だね。信じられないよ。

「オーロール……」

食い殺された家族。皆、血の繋がりも、契りもないディアナを、快く受け入れてくれた。それなのに、守れなかつた。

「もうオーロールはあなたのお友達じゃないの」

アマリリスは無表情で告げた。何の思い入れもない。ただ真実として、ディアナに伝えただけだつた。

「オーロールは人狼になつてしまつた」

「違う！」

ディアナは反射的に叫んだ。アマリリスの言葉が、やつとディアナの怒りを刺激した。

「あれはオーロールじゃない！ オーロールは死んでしまつた！」

奴はオーロールの生皮を被つてるのよ…」

自分で放つた言靈に、ディアナは苦しめられた。

目眩ましとしてオーロールを選んだ女人狼。その瞬間を思つだけで、ディアナの心がぐにやりと変形する。込み上げてくるのは、変身の瞬間にも似た苦痛。

「オーロールは……」

ディアナのこともあり、家族ぐるみで付き合いのあつたオーロール。注意深かつた家族が、どうして人狼の侵入を許してしまつたのか。

アマリリスが引き裂いた方の人狼が、誰の皮を被つていていたのかは、もう分からなくなつてしまつた。だけど、もう片方のオーロールの姿だけで、十分だつた。

助けて、ここを開けて！

聞こえるはずのないオーロールの切羽詰まつた声が、ディアナの耳にしみ込んできた。

お願ひ、入れて、みんな！

その時、ディアナは初めて、「復讐」の一文字を自分のなかに感じた。

「どちらこそよ、同じことよ」

アマリリストはディアナの変化を見つめ、目を細めた。

「どちらにせよ、あたしは逃がした獲物を追い掛け続けるの

もはやアマリリストには、ディアナを支配する言葉なんて、必要な

かつた。

13 .

バステトという名は、彼女の母が、命と肉体を他として、唯一彼女に贈つたものだった。

バステトの母はバステトを産み落とすと同時に召されてしまった。父は知らない。そもそも父なんて言葉自体、バステトが知ったのは、祖母の元でどうにか十歳を迎えてからのことだった。

母はどういう思いでこの名を贈つたのだろう。

バステトはその疑問を抱えながら、祖母が亡き人になつてからも何度も空を見上げた。

死んだ人は輝くものになるんだよ。

バステトの祖母はそう言った。

なら、宝石にもなれるの？

幼いバステトに、祖母は笑いかける。

魂とは輝くもの。宝石も昔は、魂だったのかもしれないね。優しかった祖母の笑顔が、バステトの目蓋の裏で再生される。

「おばあちゃん、わたし、会いたかっただけなの」

母は燃えるような赤毛に、宝石のような赤い目をしていたと祖母は言った。それならきっと、母の魂は赤く輝いているのだろうと、バステトは思った。

素晴らしい輝きを放つ赤。

ぶつかるつもりではあった。突き飛ばすかもしれないと思付いていた。でも、赤く輝くそれだけを摺つて、母に会えても会えなくても、後でちゃんと返すつもりだった。

だから、返す相手がそのままになくなつてしまふなんて、バステトは思いもしなかった。

よろけた老紳士が転んだ先。そこを通るうとしていた馬車は、急

には止まれなかつた。

そう、彼は馬車にひかれて死んだ。

確かにそれはバステトのせいであり、その原因が盗みを働いたことによるとも分かつてゐた。

処刑されるとしたら、その理由は盗みによる殺人。それでも、バステトにとつてみれば殺意はなく、過失致死だと反論したかもしない。

そう、バステトが罰せられるのは、盗みと他人の命を失わせてしまつたことによる罪についてのはずだつた。だから、「この準備」は間違つてゐるし、「この罪」も間違つてゐる。

自分のやつたことと、昨日の人狼騒ぎは、全く関係のないことだ。いくらバステトが訴えても、そもそも盗人の話など聞いてくれる人がいない。

バステトは明日の朝、人狼として処刑されることになつてゐた。人狼処刑なら、よく知つてゐる。もう、何回も、この日にきちんと焼き付くように、見せつけられた。

だが、その主役が自分になるとは、思いもしなかつた。

「おばあちゃん……お母さん……」

夜が明ければ、バステトは吊し上げられ、銀弾を受け、まだ息の根も止まらぬうちに、焼き殺される。

うまくいけば、銀弾で死ねるかもしれないけれど、大抵は火を点けられてからもしばらく生きている。

心臓を一発で撃ちぬくなど、難しいことなのかもしれない。

「わたし、人狼じゃないんだよ」

独房から見える星に向かつて、バステトは呟いた。

明日には消される、その命を抱き締めながら。

今もどこかで息を潜める人狼を、心から呪いながら。

ある村の街角で、アマリリスは新しい獲物を見つけた。新しい獲物は、ルー・ガルーと名乗った。

でも、アマリリスにはそんな事どうでもいい。このルー・ガルーが、一体何匹目のルー・ガルーかも分からぬのだから。ともかく、目の前に折角現れた獲物を、逃すわけにはいかなかつた。だが、ディアナはそんなアマリリスを言葉で止めようとした。

「待つて、あれを止めなきや！」

アマリリスにしてみれば、ペットのくせに生意気なこと。だが、まだ人狼を見つけたばかりで興奮しきつていなかつたアマリリスは、ディアナの言つていることに賛同出来た。どうせ、人狼を追えば、また自分でもどうにも出来ないほど、醜い気持ちに支配されてしまうだけだ。

行われようとしているのは、公開処刑。今から一人の人間が吊るされ、各地に従来伝わる人狼殺しに乗つ取つたやり口で殺されるところだつた。

殺されようとしているのは、アマリリスと同じくらいの年の女。赤毛の美しい、アーモンドのような茶色い目をした女だつた。アマリリスは人間達による人狼の処刑の仕方を知つていた。彼らはアマリリスのように入狼を仕留められない。多くは、恐れるあまり、そんな事が出来ないのだ。

だから、彼らの多くが悪魔にもたらされたと信ずる火の力を使う。「全く笑えるわね、悪魔と呼ばれる者を、悪魔に貰つたもので殺そくするなんて」

アマリリスはくすりと笑つたが、ディアナはちつとも笑わなかつた。ディアナの無言の抗議に、アマリリスは溜め息混じりに言う。

「冗談よ」

全く、自分のペットはくだらない人間の心をしつかりと持つている。アマリリスはそのことが、少しだけ気に喰わなかつた。とはいえ、悠長なことを言つていれば、彼女はあつという間に撃たれ、燃やされてしまうだろう。

あの赤毛、塵にするのは惜しいな。

アマリリスは群衆に歩み寄つて行つた。

流れ者の出現に、誰しも一度以上アマリリス達を振り返る。まだ、女は吊るされていなかつた。「構うな吊るせ」という声があがつたのだが、吊るす者達が、アマリリスの正体にいち早く気がついた。

「狼狩りの魔女だ……！」

アマリリスはいつも思う。意外と人間というのも、なかなかの感性を秘めているものだと。それは他の動物に劣るものだが、日頃の人間のイメージからすれば、感心できるものだつた。アマリリスの青い目が、群衆と、今日の狂氣の生贊となる女の姿を見つめた。

「お前達人間は、同胞を丸焼きにして酒を交わすの？」

その言葉に、誰もがはつと息を呑んだ。魔女による審査。この者は、人狼ではないというお告げ。だが、それを鵜呑みにすべきかを、人間達は悩んでいた。一方、処刑される女は、目を丸くして、アマリリスを見つめていた。助けられるなんて思わなかつたのだろう。

「魔女よ、お前が真実を言つているのなら、どうして我々を止める？」

魔女は人間の行く末なんてどうでもいいのだろう？」

すぐ近くにいた村人が、アマリリスに訊ねた。アマリリスはそれを鼻で笑い、じつと女の顔を見つめた。

「そいつに万一気付かれでもして、何故、人狼でないことを知つていたのに救つてくれなかつたのか、つて亡靈になつて纏わり憑かれたら迷惑じやない」

アマリリスの言葉に、村人たちは何も言い返せなかつた。

「……その人はどうして人狼だと疑われたの？」

ディアナは傍にいる村人に訊ねた。人狼の処刑なんて初めて見た

し、本当に信じられなかつた。生まれ故郷ではやつていたのかもしれないけれど、自分を受け入れてくれた村では一切なかつたからだ。

「あいつは盗みを働いて、人を死なせてしまつた。だからです」

傍にいた青年が、ディアナの問いに答える。アマリリスは不敵に笑んだ。

「ほう、つまりは些細な理由で疑われることはまだないということかしらね」

アマリリスはそう言つて、何かを握るような動作をした。その途端、女を縛つっていたロープが、すたすたに切れた。ロープが地面に落ちると共に、群衆も二つに割れた。

「何があつたかは知らないが、人狼でない以上、お前達の感覚だと、魔女への生贊にするのも十分極刑になるんじやない？ その女、あたしが貰つていくわ」

誰も反論しなかつた。

女の名はバステトといった。

自分を何故救つたのかと、バステトは何度も訊ねてきた。が、ディアナには答えられなかつたし、アマリリスも答える気もなくただ、風を読みながら村の道を進んでいた。

「じゃあ、せめて、あんた達の名前を教えてくれないか？」

バステトがそう訊ねた時に、ディアナはやつと、そういうことに無頓着なアマリリスだけでなくディアナ自身までもまだ名乗っていない事に気づき、慌ててバステトに名を告げようとした。が、その瞬間、空気を切り裂くようなアマリリスの声が、放たれた。

「ディアナ」

呼ばれたのかと思い、ディアナはびくんと身を竦ませた。アマリリスとの立場は決して対等ではない。ディアナの心は常に張りつめていた。

「それが、その娘の名前」

アマリリスは振り返り、整つた顔をバステトに向ける。

「クーガーに変身するの。あたしの大切なペットよ」

その異様なまでの無機質さに、バステトは一瞬圧倒されていた。が、すぐに苦笑いを押し出して、アマリリスとディアナを交互に見つめた。

「使い魔、にしちゃあ、随分と高位な魔獣じゃんか。魔女つてやつも達が悪いね」

そう言いながらバステトは服の隠しに手を突つ込み、折りたたみナイフを取り出して遊び始めた。それを見てディアナは、あんな事があつたというのに、よく取られなかつたものだと感心すると同時に、そんなもの持つっていても逃げる事が出来なかつたのか、と疑問

にも思った。

「で？」

バステトはアマリリスを見つめた。

「あなたの名は？」

凛とした目がアマリリスを見つめる。アマリリスの血の通つていないような気配に対し、燃えるようなバステトの気迫が、覆いかぶさっていく。アマリリスはだが、それにも全く応じず、じつとバステトだけを見つめていた。アマリリスにしてみれば、世界そのものがバステトのような熱さに溢れているため、そんなに不思議でも、物珍しくもなかつたのだ。

「アマリリスよ」

彼女のお気に入りのパラソルが、軽く揺れる。

その軽めの声に、バステトはやや捕え撃じたかのように身じろいだ。

「アマリリスねえ……」

バステトは頭を抱え、その名を繰り返す。せつかちな彼女にとつてディアナはともかく、アマリリスは舌がもつれそうな面倒な名前だった。他人の名前に失礼だとは彼女も思つたが、呼ぶたびに言い淀むよりも、もつといい方法で未然に防ぎたかった。

「アリスつて呼んじゃ駄目かな？」

アマリリスは少しだけ意外そうな顔をした。その表情は、すでに幾らか長く一緒に居るディアナも、見たことのない表情だった。そして、アマリリスが見せるという事 자체が意外な表情だった。

だが、アマリリスにしてみれば、自然な反応だった。今まで、アマリリスはそういう風に呼んだ人なんていなかつたからだ。アマリリスや魔女以外で呼ばれるなんて、初めてだった。

「いいわよ」

それに、別に否定する理由もない。

「じゃあ、わたしもたまにアリスつて呼んでいい？」

アマリリスにとつてはペットのディアナまでそう言い始めた。だ

が、悪い気はしなかつた。一旦アリスと決まった以上、いちいち長つたらしくアマリリストて呼ばれるよりも、省略してもらうのも別に嫌ではなかつた。

「いいわ。好きに呼びなさいな」
アマリリストは快諾した。

16.

アマリリスが立ち止まるとすぐに、ディアナは寒気を感じた。アマリリスから漂つてくる気配が変わったのだ。そこにいるのは、さつきまで少なくとも話が通じているという感覚を持てたアマリリスではない。ディアナが感じたその気配は、少しばかりだがバステトも感じ取っていた。瞬時に、バステトですらが言葉を発し難い空気になつた。

アマリリスの気配が変わつた理由を、ディアナは知つていた。

「いるの？」

ディアナは返答を期待せずに答えた。

アマリリスが振り返る。その目を見て、バステトも思わず身構えた。

「ルー・ガルー」

アマリリスは呟いた。だんだんと彼女の中の狂気が、枠をぶち壊すかのように増幅していく。

「あたしに殺されたがつているのかしらね」

もはやアマリリスは、辛うじて理性を保つてているという状態だった。それも、本人が我慢しているのではない。本人もただ、正気という檻を狂気がぶち壊していく瞬間を、待つてはいるだけだった。ディアナは覚悟した。アマリリスの狂つた舞いが始まる。空間そのものを縛りつける強烈な舞いを、アマリリスが始めよつとしている。

「バステト……」

ディアナは突然の事に固まつたバステトに話しかけた。

「しばらくアリスに近づかない方がいいわ」

ちょうどバステトが当然のように頷いた時、アマリリスの醸す雰囲気が一変した。

獲物

人狼が現れたのだ。それも、愚かにも獲物となることには気が付いていないかのようになってしまった。太刀打ちできると信じて止まないのか。それとも、死を覚悟して、自棄になっているのか。どちらにせよ、アマリリスにしてみれば有難く、ディアナやバステトにしてみれば、迷惑な話だつた。

「いらっしゃい、狼さん。あなたの毛皮は何色なの？」

アマリリスの声が、少しづつ蝕まれていった。

ディアナはアマリリスと人狼の対峙を見つめ、その場の空気の流れを読んで、すぐさま変身した。ディアナの変身に驚くバステトに頭をぶつけ、どうにか意思を伝える。順序が逆だったと後悔している暇も惜しかつた。

「ディアナ、お前……」

ディアナはクーガーの声で唸る。驚いている場合じやないと云つたかつたが、うまく伝わらない。言葉を発しようと、口を動かすが、唸り声しか出てこなかつた。

だが、バステトは懸命だつた。驚愕に支配され切らす、ディアナが何か伝えたがつていると判断し、それが何かを把握し始めたのだ。「なるほど、この場はちょっとわたしらには辛いね」

ディアナは静かな唸り声でそれを肯定した。

「よし、ちょっと避難しよう。分かつて、自分の身は守れるさ。あとは、アリスの邪魔をすんなつて言いたいんだどう？」

ディアナは安心した。バステトはちゃんと状況を分かつている。身を守る得物がナイフだけというのは頼りないけれども、そこはディアナがフォローすればいい。

その時、人狼が吠えた。

「五月蠅い！ 僕をバカにしやがつて！ 僕は誇り高きルー・ガル一だぞ！ ひれ伏せ！」

彼の雄叫びは、アマリリスにとつては仔犬の鳴き声のようには可愛く思えた。それを愛撫するアマリリスの方法は逸脱している。アマリリスの目線を浴びて、人狼は急に雄叫びをやめた。

「お前は……」

興奮して思慮が足りなくなっているかのように見えた人狼だったが、ぶつかっていく直前で、それにやっと気付けたらしい。

「くそつ」

アマリリスの身体から風が流れ出していく。狼を切り刻むための風だ。人狼はそれをいち早く察知して、バステトの居る方向へと逃げた。

「切り刻めるものなら切り刻んでみる」

人狼は高く笑いながら、バステトへと飛びかかった。

「人間め、肉塊にでもなつちえまえよ！」

口が裂けるように笑う人狼の姿はディアナから見たら醜かつた。けれど、その姿すら、アマリリスから見れば、美しいものなのだ。バステトは鋭い目で人狼を見つめている。一撃で仕留められると確信した人狼は、さらに歪んだ笑みを作った。だが、人狼の一撃を、バステトはひらりとかわした。その姿は、クーガーの姿のディアナにも匹敵するかのように鮮やかだった。外した人狼の腕は、土を空しく掴んでいた。人狼は外した一撃を見つめ、呆けたように咳く。「逃げるなよ、せつかく内臓取り出してやろうと思ったのによう」ディアナは気付いた。この人狼、恐らくまだ若い人狼だ。力があり、身体能力にも優れるけれども、経験も浅く、思慮がもともと足りないので。

だから、いちいちまぬけな行動を取つて不利になる。

だから、接近するアマリリスに気づかない。

「おまえ、いつの間に……！」

すぐ後ろにアマリリスが来たとき、やつと、自らの危機に人狼は気付いた。

アマリリスはまるで、遊ぶためのあらゆるアイデアを出しつくして事も退屈な子どもが、スコップでひたすら砂場の砂を掘り起こしているようだつた。

もちろん、彼女はスコップなんて持つていなかつた。彼女が持っているのは、風の手綱を引く魔力のみ。そのことは、ディアナも、まだ会つたばかりのバステトですらも、すでに分かつていて。

だけど、アマリリスの様子は、まさに遊び飽きて退屈な子どもだつた。

見つめている一人の耳に時折届くのは、数を数える声。時計の秒針を遅めたような、ゆつたりとしたリズムだつた。アマリリスがどんな気持ちで数を数えているのか、ディアナにも、バステトにも想像すら出来ない。

ただ、彼女が数を数えながら、無心に引き裂いている獲物。ずたずたになり、毛皮ももはや塵のようになつてしまつた獲物に対しては、そのどす黒い感情を隠せてはいなかつた。いや、隠そうとも思つていいのかもしれない。

とにかくディアナとバステトは、アマリリスが完全にその行為に飽きてしまうまで、何も出来なかつた。バステトとしては、早くこの地を去りたかった。こんな光景、村の者にでも見られたら、人狼狩りどころの騒ぎじやなくなる。

村の中には人狼狩りに魔女の手を借りる村もあれば、その魔女すらも狩ろうとする村もあるのだ。この村は後者。人狼に困っている時は魔女なんて放つておくけれども、いざ人狼がいなくなつてしまえば、村人たちは次の獲物として魔女を標的にし始める。

それが、人々を癒す力しかない魔女だとしても、同じこと。

バステトは身体についた痣や傷を感じていた。

ただの盗人ですら、こんな目に遭うのだ。アマリリスのような、ディアナのような力を、村人がどう見るかなんて容易に想像できる。それも、あんなに村人たちが手間取っていた人狼を、あっさりと捕えてみせた。普通の村ならば、アマリリスを戦いの女神と祭るだろう。けれど、ここは違う。この村は、血に飢えているのだから。バステトはその時、遠くより何かが近づいてくるような気配を感じた。

「ディアナ……」

バステトの震えた声の理由を、ディアナは察していた。

ディアナの気持ちも同じだった。この村が、もしも彼女の生まれた村のような場所だつたら、この光景を村人がどう見るのか。村人が、自分達をどう扱うのか。ディアナとて、生涯をささげようと思っていた村がごく少数しか存在しないことぐらい知っていた。大半が、生まれ故郷と同じような場所であることを、知っていた。

「アリスはどうやつたら元に戻るんだい？」

バステトの緊迫した声と、近づいてくる気配が折り重なる。

非常に味の悪い感覚だった。

「分からぬわ。でも、段々と正気に戻つていつてる気はするのだけど……」

ちょうどその時、アマリリスは数を数えるのを辞めた。

急にとまつたため、いささか不気味な空気が醸し出されている。不安定な闘争心の牙が、こちらに剥かれるのではないかという疑いと恐怖が、瞬時にディアナとバステトの身体を駆け巡った。が、二人を振り返るアマリリスの目は、澄んだ青だった。

「長居は無用、か」

その声は、あの冷静なアマリリスの声に戻っていた。

村人に知られずに村を出ることがこんなに難しい事だなんて、バステトは思いもしなかつた。

そもそも、今までバステトは、いつ誰がどのように村に入り、村を出していくかなんて、全く考えた事がなかつた。一度だけ意識したとすれば、まだ祖母が生きていた頃、近隣の村にて盗賊が現れた時ぐらいだつた。この村にも現れるかもしれないと思つと、夜も眠れなかつた。

そう、今の村はその時と同じ。いや、それ以上だつた。

散々村人たちを恐怖させた人狼はもう生きていない。けれど、村人たちにとつては新たな脅威とも言つべき者が現れたのだ。それが、アマリリスとディアナ。

ただの魔女ならば、村人もそこまで恐れなかつただろう。この世に存在する魔女と噂される多くの者は、実はただ医学や薬学の知識に秀でているだけだつたり、確かに摩訶不思議な力を持つけれども、その力は占いぐらいにしか役に立たないほど小さいという者ばかりなのだ。

しかし、二人は違う。特に、アマリリスは大きく異なる。彼女は本当に人狼を殺してしまつた。大いなる力を以て、人狼をハつ裂きにしてしまつた。人狼を退治しただけでも、村人に喜ばれるのは最初だけだというのに、アマリリスは、その最初すらも村人を恐怖させるやり方で、人狼を仕留めてしまつた。それも、殺戮行為を楽しむかのように、肉と肉が引き千切れる音を深く味わうように、アマリリスは人狼を仕留めてしまつた。

彼女はもはや、この村にとつて、女神でも何でもなかつた。

新しい魔物。

人狼の無残な遺体はすでに村人に発見されている。村の中で起つたあの惨劇に、気付かない方がおかしい。冷静になつたアマリリスに言わされてあの場を去つて、少しも立たない内に、村で飼われている犬達の吠える声と共に、村人たちの悲鳴が聞こえた。

あとは、この村を一刻も早く出ていくだけ。それだけなのに、村人たちが何處もかしこも存在していて、村を出る事が出来ない。村人は皆、武器になる者を持つてゐる。恐れに縛られた人間ほど恐ろしいものはない。こちらがいくら危害を加えないと言つても、通じるわけがないのだから。

バステトは段々とむしゃくしゃしていた。

何処へ行つてもいる村人たちに、段々と殺意を覚えてきた。

「一人二人犠牲にしてもいいんじゃないか……」

ついにそう口走つてしまつた。バステトが後悔した時には遅かつた。だが、意外なことに、アマリリスは首を振つた。

「人間を殺す事はお勧めできないわ。さらに面倒な事態を招くだけだもの」

アマリリスのその言葉に、バステトは「魔女狩り」の言葉を再度思い出した。

魔女の中でも人間に危害を加えたと伝達のあつた魔女は闇の魔女と呼ばれ、何処へ逃げても「魔女狩り」の戦士達に追われる羽目となるという話だ。戦士はここよりも大きな町や、城下町などから排出され、この世の人間を脅かす闇を払うために旅をしているという。どの戦士もみな、類稀な力を持ち、魔女にしてみれば、万が一敵対でもすれば面倒なことこの上ないというわけだ。

バステトもまた、この戦士について子どもの頃からよく話を聞かされていて、盗賊や魔物、人狼や闇の魔女など、人間を脅かす存在を想像しては怯え、そのたびに、その時には必ず戦士が駆けつけてくれるのだと自分を安堵させてものだった。

「戦士……」

バステトが呟くと、アマリリスの表情がやや動いた。

「戦士からみれば、あたしもディアナも、何もしていなくても、人間を脅かす間に他ならないでしょうね」

アマリリスの言葉に、ディアナも俯く。その言葉にバステトは何か反論しようと思った。が、何も言えなかつた。人狼を思うままに切り刻む危険人物。そして、その人物と共にいる猛獸に変身する女。危険じやないと何を以て言えるのだろうか。

そう、ただでさえ彼らは、人間から拒絶される者なのだ。

この上人間を殺すとなれば、大陸の中でも名上の戦士が駆けつける事になるだろう。

「そうね、でも、危害さえくわえなければ、言い訳の余地はあるわね」

アマリリスはそう言つてディアナを見た。危害を加えずに道を開く方法。脅しもせずに、人々を避けさせえる方法。それは、ディアナになら出来ることだった。

「二人も乗せられるかな……」

ディアナがぽつりと言つたが、アマリリスの視線は外れなかつた。「乗せられるようにするの。いつもよりも大きなクーガーになればいいじやない」

いつも簡単に言つアマリリスに、ディアナは困惑した。が、頷く事しか出来なかつた。

「やつてみる……」

巨大なクーガーが目の前で自分に向かつて牙を剥いている。

そんな経験をすれば、誰だって冷静にはならないだろう。例え死闘を戦い抜いた剣士であつても恐れは感じるはずだ。それに恐れではなく胸の高ぶり、或いは、恍惚とした快楽を感じる者がいるとすれば、そいつはアマリリスのような狂った奴だろう。

少なくとも、バステトはそう思つた。

獣に姿を変えたディアナの大きさは、バステトとアマリリスを背に乗せてもまだ余裕があるところからして、かなりのものだつた。こんな獣、地にいるとすれば、獣ではなく間違いなく魔物だろう。そんな魔物が他ならぬ自分に向かつて吠え、突進してくるのだ。それも、鍬^{くわ}や斧^{つぶ}ぐらいしか手に持つていらないという状態の自分に向かつて。

村人が声にならぬ悲鳴を上げて道をあけるのも、無理はなかつた。全ては速さがモノをいう。漆黒のクーガーの駆け出しが、村人が自棄になつて捨て身で反撃してくるという隙すらもなく、ただ避けなければ死ぬという考え方だけを村人たちに植え付けていた。

物音に駆けつけてきた村人たちもまた、クーガーの地を轟かすかのような吠え声に圧倒され、誰も飛びかかつてこれる者などいない。この村には勇者も猛者もいなかつた。いるのはごく普通の村人達。ただ平穀に暮らしを続けていくことだけが願いの、普通の村人達だけだつた。

クーガーはアマリリスとバステトを乗せて、悠々と駆けていく。そのテンポは馬よりも軽く、そして、荒い。時折聞こえるのは、猛獸独特的の唸り声と、何かを追いかけるための吠え声。耳を劈くような

それらを聞きながら、アマリリスとバステトは村を後にした。

そう、バステトは村を後にした。この世に生まれ落ちて、祖母に育てられたこの村を。身寄りがいなくなつた後も、ずっと居座つていたこの村を、後にした。

居座つても、殺されるだけ。

バステトは静かに、故郷へ別れを告げた。目的もなく、アマリリスとディアナという二人の怪物の旅に加わる。そんな彼女を送り出してくれるのは、ここまで彼女を育てた想い出だけだつた。バステトは目を閉じて、クーガーとアマリリスにしがみついた。もう戻らない。一度と戻つたりしない。だから、振り返らない。そう自分に言い聞かせて、クーガーが進んでいくのをただ待つた。当てもなく広い海原を彷徨うだけと分かつていながら、この船から降りなかつた。

クーガーの咆哮が、響き渡る。

追い払つているのは、獸か、人間か、魔物か、それとも人狼か。バステトはしがみ付いた。何匹もの人狼を引き裂いた魔女の背中に。その魔女に好かれ、飼われる魔獸の背に。それは、人間との決別。人間として、彼らを恐れる心を捨てるという決別。

もう村はとつくに出ているだろう。

けれど、バステトはまだ、振り返る事が出来なかつた。

何故なら、別れはまだ終わつていないから。

谷を越えた向こうへ行こうと言い出したのは、ディアナだった。谷を越えた向こうに何があるかを見たいからという単純な動機だった。バステトは、何も考えずに賛同したし、アマリリスもまたそれに異論は唱えなかつた。だから、その後起こつた事は、ディアナにとつてもバステトにとつても、予想外のことだつた。いや、むしろ、アマリリスがすんなりとディアナの意見に賛成した事を疑うべきだつたのかもしぬ、とバステトは思つた。アマリリスが、その存在に気付いていなかつたとは思えなかつた。

そう、谷を進む最中に、人狼に出会つてしまつたのだ。
その人狼は谷間に住む者で、集落に寄生する人狼とは少し違う者だつた。人間の傍に近寄らず、ただ気高く生きる存在。人狼というだけで、他はただの狼と何ら変わらないという生き物。

ディアナもバステトも放つておこうとアマリリスを諭した。が、諭すのが遅すぎた。人狼を前に、アマリリスの人格はすでに魔物と化してしまつっていた。その気高さが、アマリリスの体内に巢食う欲望を強く刺激したのだろうか、それとも、人狼の中でも数段美しいその姿に、心惹かれたのだろうか。

ともかく、そんなアマリリスの欲望を大きく爆発させてしまつたのは、他ならぬ人狼の忠告のせいだつた。

「人間ども、ここは天空と地を結ぶ聖地だ。『恐怖』を運ぶ貴様らが土足で踏みにじつてよい場所ではない」

人狼は女の姿をしていた。

女人狼というだけでも、ディアナはいつかのウェアウルフを思い出し、身体の奥で身勝手な反発心がこみ上げてきた。だが、ディアナから見ても、美しいのは確かだつた。真っ白な髪を風に靡かせ、

澄んだ青の目でこちらを見つめている姿。透き通るような白の素肌を襤襤切れで纏っているだけの姿。

「バラバラにしたい」

アマリリスの声に、ディアナもバストもぞつとした。人狼の女もアマリリスの異様さに気がついたが、忠告は止めなかつた。

「ここを立ち去れ。この私、ヴァラヴォルフのせめてもの情けだ。登れば後悔するだろ?」「うう」

だが、獲物の忠告など、アマリリスには聞こえていなかつた。「ヴァラヴォルフ、あなたの本当の名は何?」

ヴァラヴォルフはいよいよ警戒し始めた。人狼を進んで襲ってくる魔女など、アマリリスぐらいしかいないのかもしれない。もしくは、襲つてくる中に、アマリリスのよつなタイプの者がいないかもしれない。

「お前、何者だ?」

明らかにヴァラヴォルフは恐れを見せていた。

「アリス……やめよ!……」

ディアナの言葉が届くわけもなかつた。アマリリスの両目が、赤く光つた。見つめているのは、ヴァラヴォルフのみ。何かが彼女を捉えて、放さない。ディアナもバステトも、気持ちは同じだつた。ヴァラヴォルフと名乗つた彼女が逃げてくれればいい。彼女は他の人狼とは何かが違う。殺す必要なんてない、そんな気がした。だが、ヴァラヴォルフが逃げる事が出来なくなつていても、察していた。

やがて、アマリリスの甘い声が、静かに響いた。

「そう、ツバキっていうの……」

アマリリスが一つの名を口にした途端、ヴァラヴォルフの様子が一転した。彼女は身を翻し、雪のような毛並みの狼となつて逃げていく。アマリリスはそれを見越していいたかのように追つていった。

「アリス、駄目!」

ディアナの声なんて、アマリリスには聞こえていなかつた。

「どうしよう、あのままじゃあの人……！」

「ディアナ、変身して！　アリスを追おう！」

バステトに言われるままにディアナは変身した。が、その間に、白い狼とアマリリスの影はかなり遠くなってしまった。バステトは素早くクーガーになつたディアナに乗つた。

「ディアナ、頼む！」

バステトの一喝と共に、クーガーは走り始めた。

21 ·

ツバキ。その名前はツバキ自身が忘れていた。

そう、私はツバキ。

ツバキは逃げながら思つていた。

追いかけてくるのは、間違いなく魔女。魔女の中には人狼を殺せる力を持つた者がいるというのは知つていた。けれど、人狼を執拗に追つてくる魔女なんて聞いたこともなかつた。そう、目があつた時から気付くべきだつた。アリストと呼ばれていた魔女。そいつは、他の魔女とは何処かが決定的に違つた。

もう逃げ切れない。

ツバキの足は限界だつた。

(あなたは人狼)

追いかけてくるのは魔女。けれど、人間とよく見間違える。

(情けは身を滅ぼす)

この地で生きていくと決めた時、誰かにそう言われた。何も知らず近づいてくる人間達に忠告を与え、それでも破る者は、襲い喰い殺してきた。それは、単なる食物としてでなく、一種の情け。ツバキが放つておけば、その人間はもっと酷い目に遭う事になる。生きながら少しづつ身を裂かれるのと、一瞬で楽になるのと、どちらを選びたいかという話だ。

それを今までしてきた。今日も変わらずしようとしていた。

相手を間違つた?

遠目では、人間と魔女の区別は難しい。

「ねえ、ツバキ……」

魔女の声が正面からする。そんなはずないとツバキは思つたけ

れど、間違いなく、あのアリスとかいう魔女の声は前方からした。ツバキは立ち止まつた。その瞬間、あの魔女が何処から迫つてきているか分からなくなつてしまつた。

「来ないで！」

ツバキは信じていた。集落に入りこんで人間を襲わなければ、平穏に暮らせると。人狼と言うだけで殺されるなんてことはないと信じていた。

魔女が人狼を殺す時は、集落というものが関わつてていると思い込んでいた。

それなのに、違つた。特別な例に巡り合つてしまつた。

「やめてよ！ 私に近づかないで！」

魔女がそんな事、聞いてくれるわけがないとツバキだつて分かつていた。けれど、叫ばずにはいられなかつた。このままでは確実に殺されてしまう。

「人狼を殺したいの？ 戦いたいの？」

姿は見えない。けれど、確実に潜んでいる。魔女はツバキをじつと見ている。血走つた目で、ツバキを捉えている。

「私は他人の人狼とは違う！ お前が求めているモノなんて、きっと手に入らない！」

次第にツバキを取り囲む空気は濃くなつていぐ。視線の向こうから漂つてくるのは、欲。それが何の欲なのか、ツバキは知つていた。ツバキには覚えがあつた。

「アリスつて言つたわね？ お前、暴力からのスリルと流血を求めているんでしょう？」

ツバキに纏わりついてくる欲。それは、ツバキが放つこともある欲に酷似していた。

「抵抗する私が一瞬にして消えていくのを見たいんでしょう？」
この感覚には、覚えがあつた。

「お前、人狼と同じ心を……」

「いいえ」

ツバキの首筋を、白く柔らかい手が触れていく。ツバキの背筋が凍る。冷たい汗が全身から流れしていく。耳元で聞こえたはずの声が、何度もこだまして、ツバキの全身をすっぽりと包みこんでいった。うなじで感じるのは、静かな吐息。もう片方の手が、内臓の詰まつたツバキの腹部に宛がわれた。

「あたしはただ、あなたを壊したいだけなの」

喉元と腹部に爪が食い込んだ途端、ツバキの頭の中は真っ白になつた。

耳から入つてくるのは、魔女の声のみ。

「あたしは、あなたのすべてを手に入れたいだけ」

そう言って、アマリリスは笑みを浮かべた。

アマリリスの手に力がこもる。

今触っているこの薄い皮膚の下に、アマリリスの求める生温かいものが秘められている。美しい外皮を少しづつ剥いていくて、この声が痛みによつて捻じ曲げられていくのを聴くのはどんなに官能的なものなのだろうと考へると、アマリリスの手はさらに食い込んでいった。その残忍な欲望をさらに刺激するのは、他ならぬツバキの呻き声。恐怖と緊張から来る痙攣が、アマリリスを誘つた。

美しい外皮の下には、どんな美しい毛皮が隠されているの？高まつていくツバキの鼓動は、アマリリスを更なる深みへと導いていった。この鼓動が流すもの、この皮膚のすぐしたに詰まつているもの。アマリリスの欲は、そちらへと向かつていった。

「食べてしまいたい」

ゆつくりとツバキの左腕を引きよせて、アマリリスは静かに口づけをした。ほのかに触れる汗の味。そして、薄っぺらい皮膚のすぐ下を流れている血潮の感覚。アマリリスはそれを求めて、ゆつくりと歯を喰い込ませていった。

ツバキは微動だにしない。

「できない。

「おいしそう」

アマリリスでさえも、こんな感覚は初めてだつた。人狼を殺したい、手に入れたい、バラバラにしたいという事は何度もあつた。けれど、「味わいたい」というのは覚えがない欲求だつた。この人狼がとりわけ美しいからなのか、この人狼があまりに愛らしいからなのか。アマリリスは自分でも不思議だつた。それは、ひと目惚れに

近い感覚。ひと目見ただけで、身体の髓まで欲しくなるといつ不思議。

「ツバキ……」

アマリリスの歯が、ツバキの腕に喰い込んだ。途端に、濃い血の味が染み込んでくる。血の味が、アマリリスの身体の中へと吸収されていく。ツバキの震えが、アマリリスの狂気をさらに増幅させる。求めるのは、ぎっしり詰まっているこの肉。

だが、アマリリスの欲は、それ以上満たされなかつた。

アマリリス達を見下ろす空が異変を生じたのだ。雲が集まり、稲妻が走り去り、暴風が小高い岩を越えて吹き荒れる。アマリリスはそれでもツバキの肉を味わおうとしたが、やむなく口を放し、異変の元を睨みつけた。ツバキはまだ、呆然としていた。だが、小さく動く口からは、啖きが漏れていつた。

「ジズ様……」

ツバキの啖きに反応するかのよつて、雲が晴れていく。太陽を何者かが覆い隠している。

アマリリスは注意深くその雲の向こうに居る者を把握しようとした。だが、それは、大きすぎて、把握しきれなかつた。把握できた時。それは、雲が綺麗に晴れ、元の大空が現れるはずだつた光景を再び目にした時だつた。真つ青に輝く空。だが、何処か岩肌にも見える。何者かの集合体。雲に隠されていたそれは、空じゃなかつた。

羽毛？

アマリリスはその時初めて、自分が見るべき場所はもつと隠された太陽に近い場所であることを理解した。目で追うその先。二対の鋭い眼光が、ちつぽけなアマリリスを睨んでいる。

「怪鳥……？」

そこにいたのは、真つ青な鳥だつた。空の一部がそのまま鳥になつたかのような巨大な姿。何もかもを包み込んでしまいそうな翼を広げ、ゆっくりと、岩で出来た止まり木に止まる。アマリリスとツバキの見上げる先は、その鳥で一杯になつてしまつた。

「ジズ様、お許しください」

ツバキが呟いた。崩れ落ちるようアマリリスの手を離れ、彼女

はジズを呼ぶその怪鳥にひれ伏した。

「『恐怖』を止められなかつたことをお許しください。この者は、『恐怖』に支配されずとも、『恐怖』を引き連れてやつてきてしましたのです」

ツバキの言葉に、アマリリスは段々と落ち着いて來た。もうツバキを食おうなどという気持ちは起こらなかつた。ただ目に映るのは、鋭い光を宿しているジズの目だけだつた。

ジズは少しだけ首を傾げ、鋭いくちばしを開けた。猛禽特有の高い声が、谷中に響き渡つた。こだまが治まるごと、ジズはもう一度アマリリス達を見降ろし、穏やかな表情を浮かべた。

「そしてその『恐怖』とやらは……」

アマリリスの頭が一瞬ですつきりするほど、暖かい声だつた。

「お前の中にも埋め込まれたようだな、ツバキ」

ツバキは息を呑み、さらにひれ伏した。

ジズは目線をアマリリスに戻した。

「魔女よ」

その目は色を定めず、ぐるぐると渦を巻くようにしている。アマリリスはその渦に目を奪われていた。

「ツバキはわたしに使える者。どう足搔いても、お前のモノにはならぬ。そこに隠れているクーガーと人間を連れて、立ち去るがいい」ジズは再び鳴いた。その声が空間を振動させる。再び大きな風が起こり、アマリリスの目を一瞬だけ奪つた。風はすぐに止んだ。が、アマリリスがもう一度目をあけた時には、すでにジズも、ツバキもいなかつた。

少女にランという名をくれたのは、巨大な樹木だった。

彼女の生まれた町では、羊の耳を持つていようと、幼い頃から不思議な癒しの力を持つていようと、不気味がられたりはしなかつた。何故なら、その町ではそういう存在は当たり前のことであり、今更気味悪がるようなことでは全くなかったからだ。むしろ、彼女の持つ力は、重宝されるべきものだつた。

だが、彼女の両親は、彼女に名を贈つてくれなかつた。彼女は捨てられ、生まれてすぐに、町の外れに佇む樹木の子どもとなつたからだ。ランという名を町の者が聞いたのは、本人から。彼女には、町の者達には聞こえない、樹木の声が聞こえていた。

「わたしの名前はラン。お母さんがくれた名前なの」

ランは初めて会う者には、必ずそう言つた。母が樹木のことであるのは、彼女の様子から明らかだつた。

いつしか、町にはランを知らぬ者はいなくなり、ランは樹木に当たり前にいる存在となつていて。ランの持つ癒しの力は特に評判がよく、ランはさまざまな物品と引き換えに、さまざまなモノを癒していった。そしていつしか彼女の力なら、魔物の瘴気や猛毒ですらも無効化出来ると言われるほどの存在となつていた。

だが、彼女の存在とその力は、町全体の秘密でもあつた。外部からの侵入者を防ぐためだ。噂は怖いもの。世の中数多の価値あるモノが引き起こした争いは、いつも悲惨な結果を生み出している。町の者たちはそれを知つていたから、部外者にはランの事を隠し通していた。

ランもまた、争いを避けるために、部外者の前では極限の癒しの

力を封印し、樹木に寄り添うひ弱な魔女として振る舞つた。

こうして、ランの住む町は均衡を保つていた。

だが、そんな努力は、ちょっとした偶然によつて軽々と崩されてしまうものだつた。

「どうやらこの町に人狼が巢食つたらしい」

初めにランにその情報を持つてきたのは、河原で転んで酷い擦り傷を作つた青年だつた。

「肉屋のおやつさんがやられたそうだよ」

ランはその時初めて人狼という魔物の存在を知つた。いくらランでも、死んだものを甦らせるることは不可能だつた。だからそれは、この上なく恐ろしい知らせだつた。

「まだ誰が人狼に乗つ取られてしまつたか、分からぬいそうだよ。

君も気を付けて、夜道はこの樹木から離れない方がいい」

そう忠告してくれた青年は、数日後に些細なことから人狼と疑われ、町人達に殺されてしまつた。

段々と、ランには治せなくなつてしまつたモノ達が増えていく。人狼の手によつて、そして、町人達の手によつて、ランの極限の癒しを使つても治せない身体となつた者たちが、どんどん増えていく。人狼は巧みに姿を隠し、町人たちを狂氣へと駆り立て、一人、また一人と、罪のない人間達を吊るし上げていく。

ランはそれを樹木の傍から感じていた。

この狂氣が、自分に牙を剥くのは、いつになるだろうか。

樹木に寄り添いながら、「その時」を恐れ続けた。

いつの日からか、毎晩、狼の遠吠えが聞こえるようになつていてこの町で、母である樹木の声を唯一の癒しとして、ランは祈りながら眠りについていた。

「お願い、誰か、この町を助けて」

人狼はまだ生きている。今夜も罪のない者が、吊るされている。

「お願い、誰か、みんなを救つて」

今夜は誰が餌食となるのだろう。

今夜は誰が、極限の癒しを受け付けない身体となってしまうのだ
うう。

24 ·

アマリリスは歓喜を抑える事が出来ないほど、冷静さを失つていた。

笑いがこみ上げてくることはなかつたけれど、それでも微笑ましくはない。その場が微笑んでいいような状況ではないのに、アマリリスは嬉しくて仕方なかつた。

人狼がいる。やつと次の人狼を見つけた。人々を食い荒らして『恐怖』と『嘆き』にまみれた人狼に、やつと出会えることが出来る。アマリリスはそれしか考えていなかつた。

一方、ディアナとバステトは町の不穏さに愕然とした。ディアナがかつて暮らしその後崩壊した村も、バステトが処刑されそうになつた村も、村人たちが皆、『恐怖』による狂気に苛まれて、もとの平穀さの欠片もない状況を創り上げていた。けれど、この町はもつと酷いように思えた。

すでに、十数人の人が人狼と疑われて処刑されたあとらしく、それらの死体は吊り下げられたまま、町人たちはその下を死人のような顔で歩いている。誰かが処刑による犠牲者に目を向けているとしたら、恐らく彼らの身内と思われる町人だけ。彼らの悲鳴が、『嘆き』を生んでいた。

この町はとつぐに崩壊しているのに、町人が多いばかりにまだ町として生きていた。だがそれは、屍に命が宿つてゐるようなもの。『嘆き』を生む人と『嘆き』を生ませる人が、この町を支配する『恐怖』をさらに増幅させていた。

ずっとといるだけで、こちらまで絶望の淵へと追いやられてしまいそうなほど病んだ町。ディアナとバステトは、さつさとこの町を抜

けたかつた。

だが、アマリリスが不敵に微笑んだのを見て、泣く泣く覚悟を決めるしかなかつた。

この町に入つたのは、アマリリスが何かに引きつけられるように進んだ結果だつた。その何かというものが、二人に分からぬわけがなかつた。

また、危険な人狼と戦い、憐れな彼らがアマリリスの犠牲となる瞬間を、見なければならぬと思うと、今から憂鬱だつた。しかし、だからと行つて、アマリリスと別れるわけにはいかない。魔術で縛られているディアナはもちろんだが、そうでないバステトにとっても、アマリリスの存在は重要だつた。この大陸において、一番の脅威は人狼。その人狼を見境なしに殺してしまうアマリリスの傍に居れば、人狼やその他の魔物に怯える事なんてない。だから、アマリスが行くという場所について行くしかなかつた。

「アリス……居るのか？」

バステトが意を決してアマリリスに訊ねると、アマリリスはゆっくりと頷いた。

「居ルわ。あタシを待つテルの。アタシに殺されるノを樂しミに待ツテル」

アマリリスの声は異様だつた。もはや彼女は堪え切れなくなつてゐる。人狼の気配さえ感じ取れば、ディアナとバステトのことなんて忘れて、駆けだしてしまつだらう。

アマリリスの目が、血走つた。

「ミツケタ」

樹木の近くにさえいれば、ここだけは絶対安全で自分だけは助かるのだという想いが少しもなかつたといえば、嘘になる。

少なくともランが思いつく限り、狼たちの咆哮や犠牲者たちの噂を耳にし、狼検めによって殺される人々の嘆きとそれの産み出す恐怖を感じているうちに、何度もそう思つたという自覚はあつた。

そう、いつも、そう思つ側だつた。全く根拠のないことだが、ランはこの場所に人狼が踏み込んでくることなんて決して考えていかつた。

目の血走つた狼が、自分の周りをぐるりと取り廻すことなんて、全く考えたことがなかつた。

だから、この状況がいまいち理解できなかつた。

村人が怪我をしたから癒してくれといつ話だつた。それは覚えている。五人来た内に知らない者なんていなかつたし、最近会つたばかりの者だつていた。だから、疑いようがなかつた。そもそも、どうして疑うに至れるかすらも、ランにとつては難しい問題だつた。

今、こうして、一人の人狼に取り押さえられている間も、ランの頭は整理できていなかつた。

「急げ。あの女、ここをかぎつけるかもしれないね」
たくましい体つきの男がランを取り押さえたまま言つ。

ランの記憶が正しければ、この男は鍛冶屋の亭主だつたはずだ。それだけではない。ランを覗きこむように目の前に座つている女は魔女の血を引いていると噂される薬屋の娘だつた。外の様子を窺つている少年や青年はそれぞれ町を守る兵士の家の者だつたし、ま

だ幼い少女も権力者の家の令嬢だつたはずだ。みんなたしかに町で各々の家庭にいる者だ。

「早いとこそいつを食つてずらかろうぜ」

心底面倒そうな顔で少年が言つた。その声も、顔も、たしかにあの少年なのに、その様子はまるで別人だつた。薬屋の女がさらにランを覗きこみ、その頬に手を添えた。そのあまりの冷たさに、ランは針で刺されたかのような衝撃を覚えた。

「あたし一人だつたら、ゆつくり時間をかけてぜーんぶ食べれるのになあ」

にこりと微笑むその表情は、ランを凍らせた。

「おいおい、一日一匹じわじわと狩るほうがスリルがあつていいとか言つてたの、お前だろ？」

青年にそう指摘されて、女は「違いないわね」と、くすくすと笑つた。

ふと、空気が重くなつた。人狼たちの表情が変わつてゐる。呼吸をするだけで命を削られているかのような感覚が、ランを包み込んだ。自分はあと何分生きることができるのだろう、そう思うと、今ここにいるということ自分が不自然なものにすら思えた。

これが悪夢だつたらいいのに、と考えるランの意識は、もはや、自分をどこか別の場所から見ているという不思議な感覚に包まれていて、今の状況はまるで、別の誰かが人狼に捕まり、食べられようとしているかのようだつた。

死ぬのは自分じゃない。きっとこの町の不幸な誰か。

ランの頭の中で、そんな考えが、急速に深く根付いてしまつていた。

「さて、と、そろそろいただきましょつか？」

女の冷たい声が、どこか遠い場所で聞こえた。ここではないどこかで、ランの知らない誰かが食べられようとしている。

「あたしからで文句はないでしょ？ 女を食べるとときは女からつて昨日言つたものね」

女が掴んでいるのはランの肩だつたけれど、ランはそれが自分だと気づかなかつた。

どこか遠い場所で、自分によく似た少女が、人狼の女に食われようとしている。助けられるわけもなく、ランはただそれを見ていることしかできない。そう、いつものように。そのよく似た誰かがいくら助けを求めるような目でランを見ても、ランは駆け寄ることすらできなかつた。

もうこんなとこ、立ち去つてしまおう。

ランは涙を浮かべるその少女を見ながら思つた。

どうせ、助けられないんだから。

心の中で発したはずの声は、空間の中をこだまし、責めるようにランの耳の中で暴れまわつた。

26 ·

今のアマリリスにとつては、人狼こそが大切だった。

それ以外は、とるに足らないこと。彼女にとつては、本当にどうでもいいことだった。どうでもいいと思うことすらしない。存在しないことに等しかった。

人狼の潜んでいる独特の感覚。人狼からただよう極わずかな匂い。人狼の吐息。そのどれもが、アマリリスの五感を刺激し、その足を急がせる。やがて、彼らの生きている気配が、アマリリスを導き果たした時、アマリリスは美しい人狼の姿を目にし、心の底から興奮を覚えるのだった。

たくさん。

満足を求めているのではない。満足など求められるわけがない。ただ、目の前にいるから、奪うだけ。その全てを手に入れて、その全てを取り入れて、体の隅々まで、彼らを感じること。斬つて、浴びて、そして食べることとして、アマリリスはその欲求を満たそうとしていた。

そんな彼女に、人狼以外の者が見えるはずもなかつた。

「誰？」

はじめに人狼の女がアマリリスに気づいた。

だが、もはや手遅れ。アマリリスから逃れるには、遅すぎた。狼たちもアマリリスを見た瞬間、それを悟つていた。悟つたからこそ、彼らは混乱しはじめた。見張りをしていた人狼が、仲間に言い逃れをしようと振り返った瞬間、さらに狼たちを恐怖に貶める事態が起つた。

誰もが、何が起こつたかなんて分からなかつた。

ただ、仲間の人狼が、突如自然にバラバラになつたようにしか見えなかつた。

見張りが立つていた辺りが真つ赤な肉片と血で汚れていくのを見つめながら、狼たちは完全に我を失つてしまつていた。

誰もが言葉すら発せない状況の中で、ひとり、またひとりと、人狼たちがバラバラになつていく。

悲鳴をあげる間もなく、自らの身に何が起こつたかを把握するまでもなく、アマリリスによつて、吸収されていく。

やがて、人狼があと一人となつてから、アマリリスはやつと言葉を発した。

「オイシイ……狼ノ……血」

残されたのは、アマリリスに最初に気づいた、人狼の女だつた。捕まえたばかりの獲物を抑えていたはずの仲間が、いつの間にか肉片になつてゐるのを見つめ続けて、彼女は次第に今ここで起こつていることを把握し始めた。そして、アマリリスの発した声を遅れて理解し、血まみれで同じく呆然としている獲物を引き寄せて、その場をすぐに逃げようとした。が、足に力が入らず、獲物もろとも転倒してしまつた。

逃げなければ、という想いを、恐怖が邪魔する。

「あなた……残しタの……」

アマリリスの声は、少しずつ穏やかになつていく。辺りにただよう血だまりと生肉の匂いが、アマリリスの心を安らげてくれた。恐れと混乱に引き攣つた人狼の女の顔を、アマリリスはじつと見つめた。

「一番、綺麗だつタカラ……ゆつクリ、食べ……タ……い」

アマリリスの歩みが、人狼の女の心拍数を急上昇させた。彼女と取り囲む仲間たちの屍が、さらに彼女を追い詰めていく。

仲間が殺された。自分も今にこうなる。その事ばかりが、彼女の冷静さを奪つていく。もはや彼女にとつて、食べるはずだつた獲物は、ただ恐怖から逃れようとしたしがみつくだけの存在となつていた。

アマリリスが、やつとその獲物に気づいたのは、その時だつた。すでにある程度の冷静さを取り戻しつつあつたアマリリスは、その獲物が人間の亞種であり、人狼からすれば極上のご馳走となるだろう事も想像できるほど落ち着いてきていた。だが、獲物は所詮、人狼にとつての獲物。アマリリスにはその亞種が可愛いと思えても、取つて食おうなどとは思えなかつた。

ともかく、これで目の前の人狼を十分楽しみながら味わえる。そんな想いが、落ち着いてきた彼女をさらに冷酷にした。

人狼の女は今や、小動物のように震えていた。獲物を抱きかかえながら、死への恐怖から逃れようとしている。否、むしろ、恐怖に恐怖して、どうにか逃れようとしていた。

アマリリスには、そんな人狼の女が愛しくてたまらなかつた。

27 ·

ディアナとバステトがやつとアマリリスを見つけたのは、全てが終わつた後だつた。厳密に言えば、全てが終わつてゐると信じたい状況だつた。

辺りはもう十分すぎるほど血で穢れていたし、人狼らしき者など、影形ない。特に、獣となつたディアナの感性には、ふんだんに赤が塗りたくられたの空間にぼつんと立つアマリリスの姿は、全く興奮していないうに映つていた。

しかし、アマリリスはディアナにも、バステトにも気付いていかつた。不思議そうに見つめる先にいるのは、血に塗れた少女。羊のような耳を持つ、人間の亜種と言われる異形の娘だつた。

「あなた、だれ？」

そよ風のようになびいたその言葉は、他でもないアマリリスのものだつた。

「狼の匂いはするのに、狼じゃない」

狼よりも厄介な者を前にしてしまつた絶望的な相手にじっと睨まれているという状況。羊の耳を持つ少女は、本物の子羊のように震えていた。

「……アリス」

見るに見兼ねたのだろう、バステトが落ち着いた声で声を掛け始めた。

「その子は狼じゃない」

「……狼じゃない」

アマリリスはその言葉を繰り返し、少女の頬にべつたりとついた血を拭い、それを舐めた。少女の潤んだ目が、じつとアマリリスを見つめている。

「あの子たちの最後の『ご馳走』

アマリリスがそつと呟いた。

ディアナとバステトは、その「あの子たち」を、もう見ることができない、もしくは、もうちらりとだけは目にしていることを各自で静かに受け止めて、アマリリスの心が静まるまでじつと待つた。

「あなたは、この樹の娘ね……」

アマリリスの声は、段々と安定していった。少女の小さい体が、どうにかアマリリスから離れようともがいている。

しかし、それをさせないのがアマリリスの視線だった。

「この樹は死ぬ」

アマリリスは少女を見つめたまま、淡々と言つた。

「町に漂つた『恐怖』を吸つて、町に溢れた『嘆き』を吸つて、それらは次第に『恨み』へと変わつて、あなたのお母さんを蝕んでる」アマリリスの声は、ぞつとするほど優しかつた。

「あたしがあの子達を『捕まえた』とき、たくさん『恐怖』がその樹を汚した。『恐怖』は時間が経つたら変化するの。『嘆き』、そして、『恨み』」

じつと少女を見つめたまま、アマリリスは言つた。

「そうしたらどうなるか、知りたい？」

アマリリスの目は、冷たい色をしていた。少女の動きを縛る、妖艶な目にも見える。

「名前を言いなさい」

アマリリスが少女に言つた。唐突で、命令的な声。従わねばならないのかどうか、少女はその瀬戸際で狼狽えた。

「名前を言いなさい」

アマリリスがもう一度言つたとき、少女は息を呑んだ。

ディアナは、名前を言わないよう、と願つた。この状況で名前を言つことがどういう事か、分かっていたからだ。

一方バステトは、名前を言つめうに、と願つた。この状況でアマリリスを怒らせれば、どのような状況を引き起こすか、分かってい

たからだ。

少女はアマリリスから目を離すことなく、どこか人間離れした円らな瞳を潤ませながら、そつと口を開いた。

「ラン」

ランはアマリリスのことをアリスと呼べなかつた。そう短縮して呼ぶだけの心の力量がまだ足りなかつたのかもしれない。

いくらディアナとバステトが、アリスとばかり口にしても、ランだけはそう口にすら出来ない日が続いていた。

初め、ランは出来るだけバステトの傍に寄り、道中もアマリリスの方から話し掛けられないかぎり、バステトにしか話し掛けなかつた。

ディアナを恐がつたのは、彼女が猛獸であることを最初から知つていたからだらうし、ディアナの方もまた、ちよろちよろと動くこの小動物を見ていると、頭のどこかが刺激されて、居ても立つてもいられなくなりそうになるため、あまりランのことは見ないようにしていた。

そんなわけで、この新しいペットの面倒を見るのはバステトとなつてしまい、バステトは内心うんざりとした。が、ランのことおしさも手伝つて、次第にその役目を厭わずに、呼吸をするぐらい当然に担うようになつていった。

また、ランの方も、アマリリスよりもはずつと人間らしいディアナへの恐怖が薄れていき、一、二、三週間も経てば、一言一言ぐらいために会話を交わすようになつていった。

ディアナも、ランに話し掛けられたときは、ちゃんと対応できるようになつていき、段々とその距離は縮まつていった。

だが、アマリリスとだけは、いつまで経つても縮まらない。

ランはいつまで経つても、アマリリスにだけは話し掛けられなかつた。アマリリスの目もまた、いつまで経つても、ランを食べる生

き物を見る目で見ていた。そのたびにランは、人狼に捕まつたときは違う、不気味さを感じた。突き放したようなその目線は、ディアナに向けられるものでもなければ、バステトに向けられるものでもない。人狼に向けられるものとも何か違つた。

しかし、ランはアマリリスについて行くことを厭わなかつた。厭つたとしても、どうにもならないという事もあつたけれども、何故か厭う氣にもならなかつた。たしかに、故郷に居座りたくないという事もある。これからもたくさんの者がランの力を求めてきたろううことを思つても、やはり、喰われそうになつたというショックが、ランに強く押し掛かり、ずっとねぐらとしていた樹との別れすらも決意させるほど強かつた。

だが、それだけではなく、根本的に何か放つておけない理由が、ディアナでも、バステトでもなく、アマリリスにあるような気がしたのだ。それは運命とでもいうべきなのだろうか。とにかく、それは、不自由で強制的なものだつた。

だから、道中で見つける人狼を次から次に叩きつぶすアマリリスが怪我をつくる度に、ランはその傷を治していた。アマリリスに頼まれたわけでもなく、時にアマリリスが拒否しようとしても、ランは治療をした。これは自分の意思だつた。どんなに恐ろしいと思っても、彼女を支えることは続けようという意思。役立ちたいという意図。

たとえ、アマリリスにとつて、ランは非常食ぐらいにしか考えられていなかつたとしても、癒すという力でどうにか関係を繋ぎとめるのに必死だつた。

サファイアといつ名を貰つたのはどうしてだらうと彼女は何度も考えていた。

生まれたのは裕福な家。教養を身につける事に関して口うるさいが、そのくせ、召使いなどの日下の者の扱いは最悪であつたろう家庭で育ち、命をつなぐことに関しては何一つ苦労せずに済んだ恵まれた環境だつた。

だが、それが決して狂わないなんていう妄信はなかつた。いつか必ず狂うだらうという覚悟はあつた。しかし、目線はいつも狂つた後にあつた。狂わないように努力するなんて、サファイアに出来るわけがなかつた。また、それに対する罪悪感も持ち合せていなかつた。それが悪いことだと知らなかつたからだ。だが、知らないとう事が許されるほど甘い事ではなかつた。

沢山の墓碑を前に、そして、人狼検めのために吊るされ、燃やされ、バラバラにされた家族の躯を目にし、サファイアは故郷を逃げるように去つた。

問題は、その後だつた。森にあつた廃屋に住んだはいいものの、また、元より狩猟に関しては才があつたはいいのだが、もはやサファイアの舌は、鹿だの鳥だの狐だの兎だの生肉で満足できはしなかつた。求めるのは、もつと濃厚なもの。生きたままかぶりつける、あの感触。

いつそ、人狼に生まれればよかつたとサファイアはいつも思つていた。このサファイアといつ名も、昔大陸を彷徨つていたという伝説の女人狼の名前。力強く、人間を含めた全てを無に帰そうとした悪魔と戦い、この世を救つたとされる人狼の中の賢者。両親はその

女人狼から名前を取つたと言つていた。

では、何故、人狼に生んでくれなかつたのだと、サファイアは今になつて恨んだ。人狼であれば、もつと力がある。人狼であれば、もつと好物に近づける。人狼であれば、開き直ることが出来る。

好物を思い出すたびに、サファイアは自分は何者なのかという思考に捉われ、錯乱しそうになつた。

生まれ故郷に居た頃は本当に幸せだつた。

あの頃、あの町には年頃の者たちがたくさん生き場を失つて彷徨つていた。青年もいたし、娘もいた。サファイアは同じ年頃の娘が好みだつた。娘の肉は柔らかく、血は赤ワインのようになつて濃く、今際の時にあがる悲鳴と嬌声は、サファイアの欲望を満たしに満たした。それまで散々尽くして、気を引いて、心を食い尽くした後に、命を喰い始めるという過程が、サファイアには堪らなかつた。

狩りで得た獣の肉を一人廃屋で喰うたびに、サファイアは思い返す。

あの頃は、幸せだつた。欲望のままに好物にありつき、楽しんでいたあの頃。

サファイアはそれらを思い出しながら、何度も何度も嘆息した。

「……ニンゲン食べたい」

その呴きは誰にも聞こえなかつた。

ランが居ない事に最初に気付いたのは、意外にもアマリリスだった。ディアナもバステトも、てっきり自分達のすぐ後ろに居るところから考えていて、ランが逸れてしまつた事に全く気付かなかつた。アマリリスが気付けたのは、一旦振り返つたためだ。

里から外れた森の中には漂わなさそくな不得体の知れない気配がした。人狼のものではない。アマリリスにはそう断言できた。人狼に漂う欲望の気ではない。もつと別の、禍々しい気配。それは、狂氣。人間独特の狂氣だつた。ヒトでありながら、ヒトでない何かになつてしまつた者の発する、狂氣。アマリリスにとつては、不快なものだつた。

その気配が森に入つてからぴつたりとついて離れない。段々と濃くなつていくそれが何なのかはつきりとさせようと思つて、アマリリスは振り返つた。そして、ランが居ない事に気付いたのだ。

「今夜は羊を食べるつもりなのかしら」

アマリリスは冷静な声で言つたものの、内心穏やかでなかつた。自分とよく似た気配を、ただの人間が放つていいという事への嫌悪。そして、自分のモノに手を出したかもしれないという怒りが、彼女の心を乱している。

「ラン？」

アマリリスの言葉に、バステトとディアナがやつと気付いた。全く気付かなかつたという驚きと、この森で居なくなるという絶望に、二人は愕然としていたが、アマリリスはそれよりも、木々の向こう側からじっと貼りついている気配の方にしか注意がいつていなかつた。

「アリス、何か分かるの？」

ディアナの問いに、アマリリスは答えなかつた。代わりに、アマリリスは、木々の向こう側へと声をかけた。

「ねえ、返してよ。それ、あたしのなの」

木々の向こうの気配に、バステトもディアナも気付いていなかつた。それほどこの森には気配が溢れていだし、その中に紛れる人間の気配なんて、取るに足らないものだと無意識に判断していたからだ。しかし、それが決して放つておいていい気配でなかつたことは、目にしたら明らかだつた。

木々の間に潜んでいたのは、女だつた。赤い長髪を伸ばした、異様に青い目を持つ女。じつと見つめるその姿は、神秘的な彫刻のようだ、バステトもディアナも思わず息を呑んだ。しかし、すぐに我に返つた。その女の腕に、ランが居たからだ。口を塞がれ、震えながら、こちらを見ている。まさに盗人に盗まれる子羊そのものだつた。

「聞いてるの？」

アマリリスの問いに、女は答えなかつた。代わりに、女はくるりと身を翻すと、そのまま木々の向こうへと姿を消してしまつた。アマリリスはじつとその光景を見つめながら、静かに嘆息した。

「面倒な人ね、狼でもない癖に」

「アリス、追うんでしょう？」

ディアナの問いに、アマリリスは今度は答えた。

「うん、あの子、痛い目にあわせてあげなくちゃね」

31 ·

さらわれた瞬間を、ランは覚えていなかった。ただ、気が付いたら離れた場所からアマリリス達を見ていた。そして、アマリリス達の姿が、自分の視界からだんだんと遠ざかつていくとき、やつと、ランの全身が《恐怖》を包み込んだ。

わけが分からぬといつ混乱から、本物の《恐怖》への変化だった。

やがて、アマリリス達の姿が完全に見えなくなると、ランの心は《嘆き》で満ちあふれた。

自分を抱えるこの女が、ただ者でないことを本能的に悟っていたからだ。

口を塞がれて運ばれる間、ランは自分の命のともしひが消え入る寸前にあることを感じていた。そして、焦らしに焦らした上で消されるだらうことを、予知していた。

女が走ることしばらく、アマリリス達の気配はすっかり消えてしまっていた。ランはもはや助けだと、逃げなくてはだとか考えられる余裕がなかつた。

ただ、追つ手の気配が消えたことに気付いた女が、余裕の笑みを浮かべて、腕のなかのランに微笑みかけた瞬間、ランは頭が真っ白になつてしまつた。

何も考えられないし、何も思い浮かばない。ランの頭の中は黒ではなくて、白に支配されていた。

女がランを抱き直し、耳元で囁いた。

「もうすぐ着くわ。あなたの名前を教えて」

名前を要求されたのがこんなに恐ろしいのも、アマリリスを省くならば、初めてだった。

それも、アマリリスとはまったく違つ、粘着的につきまとつ甘い誘惑に満ちた恐ろしさ。蜘蛛の糸のよつなそれは、ひっかけた獲物をなかなか離そうとしない。

それでも、ランは耐えた。せめて名前だけは、洩らしたくなかった。

女はそれを見越してか、ランを抱いたまま、再度囁く。

「あなたのすべてを知りたいの。心も体もすべて。あなたの名前くらい、あたしの力だけで引き出せるけれど、あなたの口から聞いたいの。名前を教えて」

最初よりもきつい口調だつた。

ランはますます震えた。名前なんて教えてやる義理はない。むしろ、教えてはならないはずだ。しかし、そんな思いも打ち砕かれるほど、ランは追い詰められていた。

「ねえ、教えてよ」

女の甘い声が、ランの頭を鷲掴みにする。ランは身動きがとれなまま、一瞬だけ全身の力を抜いた。急な脱力に、女の力が弛んだその隙に、ランは急に力をこめて、体を地面にぶつけるように落下していった。

鈍い衝撃がランを包み込んだ。同時に、解放されたという安堵も、ランの体を刺激する。地面から跳ねとばされた勢いで起き上がると、ランは真っ直ぐ走った。

女が追つてきているのか、まだ動いていいかなんて関係なかつた。ただ逃げなければといつはつきりとした理解が、ランを動かしていった。

前へ、ただ前へ、ランは走り続けた。

森の中で見失うほど厄介なものはない。ましてや、人狼とは違い、体の底から求める相手ではないのだから尚更だつた。

しかし、アマリリスは探し続けた。人狼を追う自分と、今の自分は違う。そう信じて、ランを奪つていつた女を捜した。

アマリリスには分かる。あの女、明らかに人食いの目をしていた。かけがえのない食料として、ランを攫つたわけだ。

「なあ、分かれて搜すほうがいいんじゃねえの？」

バステトがそんなことを言つたが、アマリリスは何も答えずに進み続けた。

落ち着いてランを食べたいというのなら、女がどう動くか、少しだけ予想があつた。

「このまま進むべきってことか？」

バステトがほほ独り言のようになつてそう言つた時、アマリリスの思つたとおりの事が起きた。

「来るわ。一人かしら」

木々の影から見つめてくる。何かを手に持つているその姿。の方からこちらへとやってきた。

剣だろう、とアマリリスは睨んだ。

ただの剣だといいが、そうでなければアマリリスの魔術を跳ねとばすかもしれない。

アマリリスは警戒して、女が近寄るのを待つた。

「邪魔しないでよ。余所者のくせに……」

女はそう言つと、剣を振るつた。

「ここは私の場所。私の新しい住居。やつと食べ物を見つけたと思ったのに、とんでもなく面倒臭い相手だわ」

剣を振るうたびに、空気が妙な音を立てて振動する。やはり、ただの剣ではないようだ。

「この私の手を煩わせないでちょうどいい。魔女どもめが」「そんな大切なご馳走、あなたはどこへやつたのかしら?」

アマリリスは冷静に訊ねた。この女の苛立ち氣味に少し引っ掛けたところがあつたからだ。

「まさか、あなた程の御方が小羊」ときに逃げられたわけではないでしようよ?」

アマリリスの言葉に、女は眉をひそめた。その変化は、ディアナとバステトにも伝わるほど顕著なものだつた。

「うるさいわね」

女は低く唸るように身を潜め、剣をしつかりと握つた。

「どうせお前たちとは話なんてしたくないの。私に口を聞いていいのは、この剣だけ」

女の深い青の目が、サファイアのように輝いた。

彼女が剣を振るうと、空気と大地が裂け、ディアナへと刃の波が襲い掛かってきた。

しかしディアナは透かさず跳んで、黒いクーガーとなつて女に襲い掛かつた。女はクーガー姿のディアナを見て、落ち着いた声で言った。

「綺麗。漆黒の毛艶が堪らなくいいわ」

女が剣を払うと、再び衝撃がディアナを襲つ。今度は直撃だつた。ディアナの毛皮を、細やかな風が痛め付ける。

「安心して、傷はすぐ治るわ」

ディアナの変身は、地面に倒れると同時に解けた。右足の筋を深く斬られてしまった。その痛みは、呼吸すら荒くなるくらい酷いものだった。

「あなたの肉は美味しくなさそうだけど、毛皮は最高ね」「女はディアナに言うと、残りの一人を見つめた。

「なんだ。美味しそうな子は一人だけじゃない」

女はバステトを見つめた。

「あの小羊よりは美味しくなさそうだけど、それでも十分よ」
女が動きだしたとき、バステトは一瞬動けなくなつた。

今までとは違う、異様な恐怖感が一気に攻めてくる。人狼とも違うし、アマリリスとも違う。はたまた、疑われて処刑されかけた時とも違う、一瞬だけの恐怖。

ほんの数秒遅かつたら、きっと呆氣なく止めを刺されていただろう、とバステト自身ひやりとした。

女は剣を叩きつけるようにしながら、バステトを狙い打つ。ディアナの時とは違う、確実に斬ろうとしている。
バステトは急いでナイフを探したが、ナイフ」ときでの剣を受けとめることは出来ない。結局身軽さを利用して避けることしか出来ない。

しかし、女が力をこめて、一発二発と打ち込んで」ようとした時、女の行く手を氷柱が覆つた。

アマリリスだ。

「あたしを無視してその子たちを獲られるわけがないでしょ」
女はアマリリスを見つめると、黙つて氷柱を叩き割つた。
アマリリスはきつい目を柔らかくして女を見つめた。
「面白い剣なのね。あたしにもよく見せてよ」

はじめ、ランはそれが小山だと思つた。

それは縁の苔を生やし、よく見れば小さな木の芽までも生えてい
る。様々な色の花も咲き、蝶や小鳥がまとわりつくという様は、ま
さに小さな野山そのもの。それが野山ではないと証明するモノは、
頭、尾、そして、四足だった。小さな耳に、鼻先に伸びる角、がつ
しつとした四足でのつそり歩くその姿は、見るからに重厚なもので、
それでいて、縁の苔に覆われる田は田らで、優しげで、ひと田した
だけのランですら、心落ち着く印象を受けた。

苔の下に見える皮膚の色は灰色。姿形こそ野山のようになつてしまつて
いるが、元々はサイか何かの姿をしていたようだ。ランがぼ
んやりとその者を見つめていると、あちらから声をかけてきた。

「羊かと思つたが、人間のようだねえ」

穏やかな老婆の声だった。

「里から迷い込んだのかえ？ 道案内出来る程、この場所を知らん
のだけどねえ」

呆然とその巨体を見上げるランを、老婆は微笑ましく見つめる。
「そうだ、名前を言い忘れたね。妾はベヒモス。この地の獸たちに
はよくして貢つていいよ」

ベヒモスと名乗つたその老婆の背中に居る小鳥たちがランに対し
て何か意見しているかのように鳴き始めた。ランには彼らの言葉は
分からなかつたけれど、何処となく心穏やかでない事を言われてい
る気がして、居心地が悪くなつた。ベヒモスは、田をちらりと動か
して、小鳥たちのいる方向を見つめたまま静かに言つた。
「これこれ、言葉は通じなくとも心は通じるのだよ。妾がいつも言
い聞かせていいだらう？」

ベヒモスの言葉に、小鳥たちは首を傾げ、さつきとは違つ調子で囁り始めた。

「こ子らには悪気はないんだよ。ただ、思ったことを隠すのが下手なだけでねえ」

ベヒモスの声を聞いていると、ランも少しほは緊張が解けた。と、同時に、はつと思い出した。自分を追つてきていた女の気配がない。辺りをきょろきょろと見渡しても、それらしい殺氣などはなかった。

「どうしたのかえ？」

ベヒモスの声に、ランは答えた。

「追われているんです。人間の女に。仲間ともばぐれて、迷つてしまつたのです」

ランは嫌な予感がしていだ。アマリリスが自分を捜してくれているのかは分からぬ。バストやディアナがそう仕向けてくれるだろうけれども、ランが不穏に思つてゐるのは、そういう事ではない。アマリリスとあの女の衝突の方だ。もしもアマリリスが人狼狩りに似た状態に陥つてしまつたら。もしもその事が女を逆上させ、バストやディアナへと危害を加えていたら。そちらのほうが、恐ろしかつた。

そう思つと、居ても立つてもいられなかつた。

「人間の女にかい？」

ベヒモスは非常に不思議そうに訊ね、ランはそれに頷いた。
「やつぱり人間は理解に苦しむ生き物だねえ。お前達、ちょっと様子を見て来てくれないかえ？」

ベヒモスのゆつくりとした言葉に、さつきまで囁り続けていた小鳥たちが、一斉に飛び立つていつた。後に残る蝶たちが、代わりにベヒモスの周りを飛び回り始める。ベヒモスはじつと遠い場所を見つめ、のんびりとした口調で咳き始めた。

「魔女と人間が討ち合つてゐる。獣の血を引く女が倒れ、人間の女が倒れ、魔女がそれを守りながら闘つてゐるようだね。可哀そうに、怪我をしているようだよ」

ベヒモスが見ているものは、まあじくランが気になつていること
だつた。

「それは何処ですか？ 今すぐわたしが駆けつけられる所？ わた
しはそこに行きたいんです」

「ベヒモスは落ち着いた眼差しで、そんなランを見つめていた。
「場所は小鳥たちが知つてゐるよ」

「ベヒモスはそう言つて、身をふるふると震わせた。

「妾の背中に生える白い花を一輪持つて行きなさい。悪鬼に取りつ
かれた女を大人しくさせる魔力の秘められた花だよ」

白い花からの甘い香りが漂つてきた頃、小鳥の一羽が戻つてきた。
ランは一輪だけベヒモスの背中から花を摘むと、ベヒモスの頭に止
まる小鳥を見上げた。

「さあ、お行きなさい」

ベヒモスの声とともに、小鳥は再び飛び立ち始めた。

ランが駆けつけた時、ベヒモスが言つていた通りの光景がそこにはあった。

ランを案内した小鳥はその異様さに驚え、飛び去つていつてしまつた。一輪の花を手に、ランは動搖していた。自分を攫つていつた女が、アマリリスと鬭つている。その傍らで、ディアナとバステトが倒れている。田の色を変えたアマリリスが、彼らを守るように女と対峙していた。

女の田は深く鋭い青。冷たい炎がゆらゆらと揺れるように光つていた。そして、その田は新しく現れたランへと向いた。青い眼光がランの背筋を凍らせようとしたけれど、ランは必死に耐えた。手に持つ花を落とさないよう気につけながら、じつと女のサファイアのような田を見つめ返した。女の持つ剣が、がたがたと震えている。女の田線はランの手元、白い花へと向いていた。

ランは、はつと気づいた。

女がこの花を嫌がつてゐる。この花を拒否しているように思えたのだ。そう思つうと、急に勇気がわいてきた。ランは女をじつと見つめると、走り出した。女が透かさず剣を構えたが、ランは動じなかつた。ただ花を散らさないように、散らさないように、とだけ心がけて、ランは女の体にぶつかるように飛び込んだ。

アマリリスはその様に啞然とした。ついさっきまで小羊以外の何とも認識していなかつた少女が、自分で守らてこする女相手に物怖じせずに飛び掛かつたのだ。感心よりも驚きのほうが勝り、しばらぐじつと見つめていることしかできなかつた。

ランの方は、アマリリスが驚いていようがいまいが構つてられな

かつた。

とにかくこの花を、女に近付けることしか考えていなかつた。

そして、花びらが少しだけ女の皮膚に触れたとたん、女が金切り声をあげた。痛みからの叫びというよりも、もつと違う苦痛を表す叫び。それは、嘆きにも似ているし、恐怖からあがる悲鳴にもよく似ていた。ともかく、花による女の悲鳴は森中に響き渡つていき、唐突にその響きは止んで、耳が痛くなるほどの静寂が訪れた。さらにその緊張に満ちた静寂を震わせたのは、剣が地面に落ちる音だつた。微かな音であるはずのそれは、ランにとつては、鼓膜をぶち破るかのような暴音だつた。

一方、剣を落とした女は、悲鳴を上げた時の格好のまま、じばし制止し、やがて、崩れ落ちるように倒れてしまった。剣のすぐ傍で伏せる彼女は、泣いていた。哀という感情が色になつて醸されてい

るかのように、女の目からは涙が溢れていた。

ランはしばらく恐れのあまり、動けなくなつていた。ただ、悲哀という色に染まる女を見つめていることしか出来ない。しかし、それを打ち破つてくれたのは、アマリリスだつた。アマリリスはそれまでの荒々しい気迫の一切をしまいこんでしまつていた。そつと女の傍に近寄り、しゃがんで女の顔を覗きこむその姿は、ランが初めて目にする《優しさ》が籠つていて見えた。

「あなたは悪くないわ」

アマリリスは女に向かつて言った。

「あなたは悪くない。悪いのは、あなたに取り付く欲だけよ、サフ

アイア」

アマリリスの目が細められる。

その目を見た瞬間、ランはぞつとした。それまで《優しさ》すら感じていたその姿が、全く違うものに見えた。アマリリスが静かにサファイアと呼んだ女の額へと手を置くと、女は震えを止め、そのまま寝入つてしまつた。

アマリリスは乳飲み子の母のようにその姿を見つめ、甘い声で咳

いた。
「眠りなさい、じぱらぐの間は」

35 ·

アマリリスが名前を読み取ったことで、サファイアは随分落ち着きはじめたが、それでもランに向かう欲求は消滅してはいなかつた。意識を取り戻したディアナとバステトもまた、サファイアに対しては気を抜かず、警戒心顕わに様子を窺つていた。

しかし、アマリリスは、大人しくなつたサファイアに対して、警戒するどころか、サファイアもまた連れて行こうとし出した。それに対して、とやかく口を出せる者などいなかつたが、その事がさらにラン達を不安にさせた。

サファイアはそれを十分理解していたようで、いまだ警戒を解かないディアナ、バステト、ランに対して、静かに告げた。

「あなた達のように私よりも弱い者が警戒心を解かないのは賢明なことよ」

悪びれた様子一つせずに、サファイアは異様に青い目をじつと二人に向ける。

「だつて、私、あなた達が食べ物と毛皮にしか見えないもの」

宣戦布告ともとれるその言葉に、いよいよサファイアの存在が疎ましくなつてきたが、アマリリスが連れていいくというのなら反対は出来ない。それに、こんな場所で独立する事なんて出来ないし、独立出来る場所があつたとしても、この世の中を独りで生きていく事に対しては大いに不安があつた。

だから、いかにサファイアに食人の気があつたとしても、いかに自分達が不安定な捉われ方をしているとしても、あからさまに彼女に拒否を示す事なんて出来なかつた。

「安心なさいな」

サファイアは面白がるように微笑む。

「私があの魔女に逆らって、あなた達を襲うなんて事、出来るわけがないじゃない」

そう言つて、手入れをした剣を仕舞つた。そんなサファイアを見つめ、ランは少しだけ、その姿にアマリリスの姿を重ねた。似ていなければ、似ている。そんなややこしい感覚が、彼女の中にぽつりと浮かんできた。

「あの子は悪魔憑きなのよ」

また、サファイアが寝入つてから、アマリリスが咳くよつて言つた。誰に話すわけでもなく、独り言のように、彼女は口を開く。

「食欲と色欲の混じつた、不安定な状態。悪魔が生まれ落ちる前より彼女の中に巢食い、彼女の精神と融合し、切つても切れぬ特性となつて、今に至つている。あの子を満足させるのは、肉欲が最後に手にする崇高な快楽。人間の娘を生きたまま食することで、それを味わえるというのは、とても不幸なことよね」

機械的に途切れ途切れで言つアマリリスの言葉は、ランの心に深く圧し掛かった。そして、あと少しで自分もその肉欲を解消させる道具となるうとしていた事を思い出して、すでに寝てているバステトに縋り寄つた。

「そんな悪魔憑きをアリスはどうするつもりなの？」

アマリリスにそう訊ねたのは、獸姿のディアナだった。サファイアは、そのディアナの毛皮に埋もれるように寝ていた。

「わたしのように、僕にでもするつもり？」

ディアナの問いかに、アマリリスはゆらりと田田を向ける。その田は、何かを強制するような脅しの念が籠つていた。

「あなたのよう、ではないわね」

ただそつとだけ言つて、アマリリスは寝そべつた。そして、それ以上、会話は起こらなかつた。

先に自分のペースを乱した方が絶命するだらうことは、プシュケもよく分かつていた。

段々と集中力も途切れ、意識も朦朧としてくるたびに、ここで死ぬために生まれてきたのだろうか、という想いが頭の中を過ぎり、その度にはつと我に返るという事を繰り返しているうちに、時は刻々と過ぎ、気付けば半日以上は同じように過ごしていた。

疲れているのは自分だけではない。相手も同じ。数も一対一。性差もない。ただ、種族の差は越えられない。相手は人狼。女とは言え、人間の男よりもずっと体力も腕力も持久力もある。捕まれば、それが最後。群れでなかつたことを有難く思うしかないだろう、と、プシュケは苦笑した。捕まつて死ぬのだろうか、それならば、あの相手なら、それも本望かも知れない、そんな想いすらもプシュケの中には生まれていた。今、プシュケの身を守つてくれるのは、愛する人の残した弓矢しかなかつた。何年も共に過ごし、プシュケの中に眠るあらゆる魔力を封じ込めたこの弓。

弓で倒せる相手でないことは十分分かつっていた。だが、目くらましにはなつた。プシュケの生き残りたいという気持ちが作り出す炎、電撃、冷氣を帯びる矢は、人狼の警戒心を呼び起こし、それ以上深く近寄らせないといった効果を持つていた。プシュケは近寄られるたびにこの弓を放つては逃げ、放つては逃げていつた。近寄られ過ぎれば、全てが間に合わなくなる。だからこそ、ペースが大事だつた。

人狼の方は何度追い立てられても、かつてその美貌を褒め称えられただろう女の顔で笑みを作り、その都度名残も惜しまずプシュケ

から離れていった。まるで、今だけの余興を楽しんでいるかのよう
に見えて、そのたびにプシュケは焦られた。遊んでいるかのよう
な人狼のその姿は、状況を忘れていれば見惚れてしまう程、美しい
ものだった。

いけない。

プシュケは自分に言い聞かせた。

人狼は心を惑わす。それにまで捉われてしまえば、もう逃げ道はない。待っているのは、惨過ぎる死。人狼の持つ無数の欲に、たつた一つの命を吸い取られるという苦痛。死ぬまでの幾時間、まだ生きている事がこの上なく恨めしいと思う程の状況に陥れられる。

いつそ、楽に止めをさして欲しい。

プシュケは願つた。しかし、相手の人狼がそんな生温いことを好むような者でないという事は、半日以上も相手をしているプシュケにとつて明確だった。戦いが延びれば延びる程、この女にだけは、捕まつてはならないという気持ちが高ぶり、一層に緊張してしまつ。プシュケは首を振り、息を殺した。再び人狼が動いている。その思念を手のよう伸ばし、プシュケの身体に掴みかかるうとしている。プシュケはすぐに移動した。その見えない手に捕まれば、さらに不利になる気がしたのだ。

移動しながら、プシュケは人狼の潜んでいそうな場所を探したが、知らず知らずに焦りに取りつかれていっている彼女には、見つけられるはずがなかつた。

「いつも、楽に死なせて」

氣付けばプシュケは呟いていた。

町が近いらしく、辺りには民家が目立つようになってきた。では、行き交う人も多くなるだろうと思われたが、不思議なことに、通行人は全くいなかつた。

否、不思議でもなんでもないという事は、アマリリスの様子を見れば明らかだつた。それに、サファイアまで、この場所に立ちこめる血と肉の匂いに中でられて、周囲が警戒するほどの殺氣を放つていた。その矛先は、容易く手に入る獲物の方に向いているはずなのに、ランは逃げ出さないでいられるのが不思議なくらい、居心地が悪かつた。しかも、今この場でサファイアが発狂したとしても、アマリリスは守つてくれないだろ。今のアマリリスは、ラン達よりもずっと優先的なものを抱えている。そんな彼女が自分達を放つて飛び出していくのは、もう数秒先の未来だろとランは踏んでいた。その未来予知は見事に当たつたが、飛び出していつたのはアマリスだけではなかつた。アマリリスに続くようサファイアまでも飛び出していく。二人が飛び出していつたのにつられたのか、デイアナも瞬時にクーガーとなつて追いかけていく。その三人に置いて行かれるのはさすがに困るどばかりに、バステトはランを促した。ランも勿論、同じ思いだつた。何処に何人の人狼が潜んでいるかなんて分からない。アマリリスが飛びついた人狼の他に、別行動をしている人狼がいないとも限らないのだから、ここで一人だけになるのは非常にまずいと思つた。それも、ここにいるのは、この辺の民家を静まりかえらせる程行動力のある人狼だ。バステトとランを狙わないわけがない。そう分かれば、走りだしていつた彼らから引き離される前に、追いかけていくしかなかつた。

一方、アマリリスの方は、心の底から欲する人狼の匂いのほかに、妙な気配を感じ取っていた。芳しく、心安らぐ匂いではあるが、同時に全てを想いのままにしたいという強い欲望を刺激される不思議な匂いだった。それらは同じ所にいるらしく、進めば進むほど、アマリリスの頭を刺激していく。

すぐ後ろを走っているサファイアもまた、この匂いを嗅ぎ取つているのだろうか、とアマリリスはふと考へた。否、サファイアが走つてているのは、寧ろ、この匂いの為かも知れない。彼女が人狼なんかに興味を持つはずがないのだ。彼女からすれば、人狼なんて所詮食えないモノ。人肉を愛する彼女が、狼肉なんて食べるはずがない。それは、人狼の悲鳴を愛するアマリリスが、人間の悲鳴なんかに興味を持たないのと一緒に。だとすれば、アマリリスは安心出来る。邪魔さえしてくれなければいい。サファイアの邪魔は、アマリリスにとつては脅威なのだ。力もほぼ対等で、それを制するだけでも結構な労力を使うのだから、当然だった。

しかし、アマリリスとサファイアの求める者達の姿が見えた時、アマリリスの考へは変わつた。恐らくサファイアが求めているであろう者は、アマリリスにとつて壊すには惜しいタイプの美しさを秘めていたからだ。それはサファイアにとつても同じだつたらしい。一瞬だけ、互いの冷静さが蘇り、一人は互いに見合す事が出来た。

「勿体無いわ、あんなに綺麗な娘を食べようだなんて」

「あれほど美しい獣を殺すつもりなの？」

お互の言葉は、お互を反発させるものだつた。アマリリスは自分が求めていた人狼の姿を見て、その反発心をますます深めた。その人狼は、初めて見る人狼ではなかつた。その時点で、今すぐにとびかかつて過去に解消できなかつた欲求を今ここで激しく解消してしまいたい程だつた。アマリリスは彼女の呼び名まで知つてゐる。名前は、オーロール。オーロールという女の皮を被つた、美しい雌人狼だ。

「あれはあたしの獲物。前に取り逃がしたあたしの獲物なの」

アマリリスの言葉に、サファイアは目を細める。

「奇遇ね、それなら私も同じよ。あの娘を私は知っているの。あの娘はプシュケ。私がまだ貴族だった頃、いつか食べるつもりで可愛がっていた娘」

「嫌な運命ね。あの娘を食べさせることは出来ないわ。諦めなさい」「なら、私も人狼殺しを妨害してやる。プシュケはもともと私のものなのよ」

ディアナがやつと追いついた時は、アマリリスとサファイアが同時に戦いの場へと飛び出した時だった。ディアナはその瞬間、二人が向かう先にいる者達へ、そのうちの、人狼に目を奪っていた。

「オーロール？」

厳密に言ってそうではないという事は、しばらく経たないと分からなかつた。それが誰かを理解した瞬間、考えよりも先に、身体が動いていた。自分の大切な人を奪つた今までいる人狼が、目の前にいる。

返せ。

ディアナは大きく吠えた。

プシュケは突如の乱入者の一人に目が行くや否や、全ての意識を攫われてしまつたかのように動けなくなつてしまつた。それが誰か分からぬなんて事、あり得なかつた。短い期間ではあつたが、かつて心から敬愛していた者がそこにいる。初めて本当の意味で愛した相手がそこにいた。今や、その愛した分だけの恐怖を、その者に對して持つていた。

「サファイア……」

プシュケはその者の名を呟いた。サファイアはゆっくりとプシュケを見ると、雀を見つけた猫さながら、目を細めて笑つた。一氣に力が抜けてしまつた。今この状況で、人狼云々などと考えられない。もしもこれが人狼の見せる幻想であつたとしたら、完敗だつた。しかし、幸か不幸か、これは幻想などではなかつた。

「久しぶりね、プシュケ」

サファイアの声が、プシュケの耳をくすぐる。その恐怖は、人狼の比ではなかつた。もう一人の方が、はつとプシュケを振り返つた。金髪に碧眼の整つた顔の娘。赤い服が異様に似合うその娘は、咎めるようにサファイアを睨んだ。その様子だけで、すぐに分かつた。あの娘は味方だ。

「助けて……」

気付けばプシュケは、娘に向かつて叫んでいた。

「お願い、助けて！」

サファイアはくすりと笑むと、姿をすつと消した。あまりに突然だつたため、プシュケには何処にいるのか把握できなかつた。しかし、すぐに金髪の娘が駆け寄つたため、不安にならなかつた。娘

はプシュケの傍から周囲を注意深く窺いながら、口を開いた。

「あたしの名前はアマリリスよ」

「このような状況の為か、刺々しい口調だつた。

「あなたを襲つてゐる人狼はあたしの獲物なの。それに、あなたを死なせるなんて勿体無いから、守つてあげる」

プシュケはふと人狼を見つめ、はつとした。それまでプシュケを喰らう事ばかりを考えていたはずの人狼が、アマリリスと名乗つたこの娘を目にし、動搖していた。

「オーロール……」

不意に、違う者の声が聞こえた。人狼の声でも、アマリリスの声でも、況してやサファイアの声でもないということは、プシュケには分かつた。置かれている状況も忘れて辺りを見渡してみると、そこには黒いライオンのような生き物がいた。目をぎらつかせて見つめている先は、人狼ただ一つ。プシュケ達の姿は目に入つていよいよだつた。

魔物の類かもしれない、とプシュケは思つた。ただ、魔物だからといって、それが無害な獸なのか、有害な獸なのかは分からぬ。それに、この獸の狙いははつきりとしていた。少しだけ、自分の方が有利な気がした。

「ディアナ、ああ、ディアナじゃない」

人狼がひきつった笑みをつくつて黒い獸を見つめた。

「やつぱりこの女と一緒にいたんだ。物騒な子。自分の村を守れなかつた責任から逃れたいの？だからわたしを追つてゐるの？ちつぽけな復讐心で……」

人狼の言葉の途中で、アマリリスが獸に言った。

「ディアナ、あなたは下がつてて。邪魔をしないで」

しかし、双方にディアナと呼ばれたその獸は、低く唸るだけで、下がろうとしないまま、じつと人狼を睨んだ。

「へえ、ディアナも相手になるの。でも構わない。そんな弱い獸が相手になつたつて、全然苦しくなんてないもの。むしろ、狩りの増

えてが増えて、楽しいだけ

サファイアはくすりと笑み、そして人狼に言った。

「ねえ、狼の方、もしもアマリリスが怖いなら、わたしがサポートしてさしあげますわ」

サファイアの言葉は、人狼の気持ちを拗らせない完璧なものだった。プシュケには、サファイアならば、人狼と共に渡り歩けるそんな気さえした。

人狼はちらりとサファイアを見つめ、目を細めた。

「なるほど、ヒトでありながら魔に生まれ墮ちた者か。ただ人ならばお前を喰らうところだつたが、それならいいだろう。一時的にサポートさせてやる」

サファイアが人狼に味方した事で、ディアナはサファイアにも牙を剥けた。大きく咆哮するディアナを見つめ、サファイアは青い目を細めて、恍惚とした表情でぽつりと呴いていた。

「綺麗」

バステトとランがやつと駆けつけた時、事態はもうすでに始まつており、取り返しのつかない所まで来ていた。

これを止めるなど、自分達に出来るわけがないとひと目で思う程、いざこざは激しく、二人共々近づく勇氣すらも奪われてしまつたのだ。それも、ディアナまでもが我を忘れて果敢に狼に挑んでいくと、いう状況に、バステトもランも一気に居場所がなくなつてしまつた。このまま飛び込むなんて出来ない。止めるなんてもつと出来ない。そんな事すれば、ディアナに獲物と間違われて喰い殺されるか、これ幸いと人狼の獲物になるか、サファイアの獲物になるか、アマリリスに「石ころの」とく消されるかのいずれかだらう、そうバステトは思った。

しかし、そこで、バステトはふと気付いた。よく見れば、もう一人、あの凄まじい状況に相應しくない者が紛れている。巻き込まれているのか、あの状況のそもそもその原因であるのかは分からぬが、驚くべきことに、アマリリスはその者を守りながら闘つていた。人狼もサファイアもその者を果敢に狙うが、アマリリスの放つ旋風に阻まれ、手出しが出来ないでいるのだ。バステトはこれがアマリリスらしくないようにも思えた。普段のアマリリスならば、その者を囮にしている隙に人狼を捕まえようとするような気がしていた。酷い誤解かもしれないけれども、バステトにはそちらの方がアマリリスらしいと思っていたのだ。一方、ランもまた、アマリリスの守る者について、奇妙に思う事があつた。

「あの人……」

じつと見つめ、羊の耳を震わせる。サファイアが狙い、人狼が狙

う娘。春という季節そのものを娘にしたような人物だった。美しい中に可愛さを盛り込ませた華やかな娘。サファイアの青く冷たい光に対して、仄かに薄紅に輝く光をその目に宿している。それは、確かに薄っぺらくて仄かではあるけれど、じつと見ていると、生き物の命を繋いでいる血潮を思わせる輝きだった。

ランは直感で分かつた。

「あの人……」

あの見覚えのない娘。人狼とサファイアの両方に狙われている奇妙な娘は……。

「人間じゃない」

「え？」

ランの咳きに、バステトは空かさず振り返った。他の誰かが言ったとしても、迷信深い人だとしか思わなかつたかもしだれないが、なんせランが言うのだ。それが亞人の言葉だと考えると、どうにもそれらしく聞こえてしまう。バステトは改めて娘を見やつた。言われてみれば、少々人間離れした雰囲気を有している。それに、あの場にそぐわないという事も納得できるような気がした。人狼だけでなく、サファイアが固執するのもなんとなく分かるかもしれない。

「人間じゃない何かつてこと？」

バステトの問いに、ランは表情を固くした。

「分からぬ。でも、あの人を死なせてはいけない。そんな気がするの」

「どうして？」

バステトは訊ねたが、ランからの返答は期待できないと分かつていた。というのも、バステトも少しほ感じていたからだ。あの不思議と人間離れした娘を今ここで死なせてしまえば、とても後悔する事となる。もしも彼女が人狼かサファイアに喰われることがあれば、とても困る事が起きる。

直感だが、無視できない程の力を持つていた。

バステトは意を決して、ランの手を握った。その無言の行動に、

ランは、はっと息を詰ませた。バステトが何を決心したのかが、瞬時に分かったからだった。

バステトは大きく息を吐くと、じっと争いの場を見つめた。

サファイアの強さは厄介だった。

アマリリスはここまで苦戦するとは思つておらず、その上、オーロールにこれほどのしぶとさが備わつているとも露程も思つていなかつた。だから、隙をつかれてディアナが氣絶させられた事に気を取られているほんの少しの間に、プシュケをサファイアに奪われた時は、悔しさのあまり、思わず唸つてしまつた。サファイアは勝ち誇つたようにアマリリスを見つめ、呟いた。

「私とあなた。強さは五分五分なのね。今回は私の勝ちよ。プシュケは私のモノ。この狼さんはあなたのモノじゃない」

オーロールはそれを耳にし、ふんと鼻で笑い、アマリリスを見つめた。

「なんだ。今日はあの時のような異様さはないのね。この娘に大切な意味合いでもあるのか？ 私の大切な連れを殺してくれた時は、誰の死なども目に入らないくらい私達の身体を壊すことしか考えていなかつたのに」

アマリリスはそつと手を細め、ぐつたりと動かないディアナと、平静な様子でこちらを窺うオーロール、そして、青と赤が絡まつているかのようなサファイアとプシュケをゆっくりと見回した。

アマリリスはまだ冷静だつた。だが、その冷静さが揺れ動かされようとしている。動かされ切つたらよくないとアマリリスはよく知つていた。これ以上、搖させられてはいけない。人狼はたつた一匹。たつた一匹じきに影響されてはいけない。そう自分に言い聞かせ、頭の中で闇雲に数を数えていた。数さえ数えれば、混乱が整頓されるとでも感じていたのだろうか。アマリリス自身、それは分からな

いけれども、とにかく今は、数を数えなければ落ち着けなかつた。プシュケは殺してはいけない。綺麗だから。自分が気に入つたから。いや、それだけでない気がしてた。プシュケを死なせてはいけない何かがあるような気がしてた。

「駄目よ……」

アマリリスはサファイアに呟いた。

「あなたの食べていい人は、その娘じゃない」

人を食べるなとは言わない。自分が狼を殺すからだ。アマリリスは、人狼を殺す事に捉われる余り、邪魔をする人間を殺したことだつてある。だから、サファイアの食人を辞めさせようなんて考えは、アマリリスにはなかつた。だが、プシュケだけは駄目なのだ。プシュケだけは、殺させてはいけないのだ。プシュケが今に食べられそうな状況となつて、アマリリスは改めて、その想いを強く感じた。

「でも、どうしてなのかしら……」

アマリリスは自分に問う。

「どうして、その娘は駄目なのだろう?」「サファイアもオーロールも、もはやアマリリスの様子に動じたりはしていなかつた。ただ、じつとアマリリスを見つめ、低めの声で告げるだけ。

「私達の勝ちでいいわね?」

その言葉は、アマリリスに同意を求めていた。アマリリスが同意すれば、今すぐにサファイアとオーロールはプシュケを喰らう始める。しかし、アマリリスが拒否したとしても、どうせこの二人はプシュケを抱えて逃げるだけだろ?とアマリリスは分かつていた。

「駄目よ。駄目」

アマリリスは唸る様にそう呟き、じつとプシュケを見つめた。プシュケは顔を蒼ざめさせたまま、死人のように突つ立つていた。サファイアとオーロールは、アマリリスが認めないことを悟ると、その場を去ろうとし始めた。プシュケを食べるには、アマリリスから

の邪魔を防がなければならない。だが、二人共々、そのタイミングをうまく外してしまった。

ディアナが目を覚まし、新たに、バステトとランが駆けつけてしまったからだ。

バステトと目を覚ましたばかりのディアナはすぐさまサファイアとオーロールの逃げ道を塞いだ。敵の増えたことを悟ると、サファイアもオーロールも険しい顔をしてみせた。後、オーロールの方は低く唸り続け、狼の姿となつて、ひと跳ねしてみせた。

逃亡だった。

サファイアはブシュケを抱いたまま、突然のオーロールの逃亡を呆然と見送った。アマリリスは唯一の獲物の逃亡に慌てて対処しようとしたが、それは叶わなかつた。

オーロールが逃げようとした瞬間、ディアナはすぐに勘ぐりそれを追おうとしたが、その後、留守になっていたディアナの理性がいきなり帰ってきたため、ディアナははっと立ち止まつた。その間に、オーロールは無事に逃げ果してしまつたが、今のディアナはそれどころではなかつた。

狼に気を取られている場合ではないという気がした。

その考えを肯定するかのように、突如豪雨がその場を襲つた。全てを水浸しにしてしまうのではないかという程の豪雨。ディアナには、それが、捨てておけないほどの強大な力を持つ何かの代弁をしているような気がした。いつの間にか追いついていたランとバストが、ディアナに駆け寄る。ディアナが平静になつたことを悟つたのだろう。ディアナは変身を解いた。サファイアはプシュケを抱えたままだつたが、獣姿で脅す必要はないと感じたからだ。

「サファイア、その子は駄目。その子は離して」

ディアナにはこの豪雨の原因が分かつっていた。そして、その意味も。だからこそ、早く伝えなければという想いが、言葉を焦らせた。

「その子は駄目なの」

「何が駄目なの？」

サファイアが訊ねた。

ディアナには分かつている。どんなに反論できない完璧な理屈でその訳を話せたとしても、サファイアは納得こそしても、従いはない。分かつた上で開き直つてすぐにこの娘を連れ去つてしまつだろう。それではいけない。この娘だけは、食べさせてはいけない。オーロールは恐らく、娘が捕まつた時になつてやつとそれに気付いたから逃げたのだろう。サファイアは気付いていないのだろうか。

それとも、気付いていても、彼女の欲は構わないと言つているのだろうか。

ディアナはふと、ジズに仕えていた人狼ツバキを思い出した。ジズを前にしていても、アマリリスはツバキへの執着を抑えられていなかつた。欲への執着が強すぎて分からなくなつているのか、それとも、分かつているのに自分はどうすることも出来ないのか。

「サファイア、抑えられないのね」

アマリリスが口を開いた。

「あなた、本当は分かつてゐる。よくないつてことも、意識の根底では分かつてゐる。けれど、抑えられないのね。この人、と思った人を口にしない限り、あなたの気持ちは治まらないのでしょうか？」

アマリリスの声はさほど大きくもないはずなのに、この豪雨の中でもかき消されることはなかつた。サファイアは少しだけ表情を歪ませた。しかし、プシュケを抱える腕は緩めない。ぎらついている異様な青の目は、豪雨で薄暗くなつてゐる中でも光つてゐた。アマリリスは落ち着いた声で、サファイアに呼び掛けた。

「あたしだつて、人狼を前にしたら誰の声も届かなくなるわ。数を数えても、一向に冷静になれないし、ほんの少し、普段の『あたし』が起きそうになつても、すぐに入狼を殺したい『あたし』に抑え込まれてしまつて、結局人狼を殺さないと元に戻らなくなつてしまふの」

アマリリスの目も、豪雨の中で輝いている。

「だからあたし、あなたのこと、少しは分かるわ」

その淡々とした声に、ディアナは寒気を覚えた。

アマリリスはふとランを見やつた。

「ラン、あなたが前に使つた花はもう枯れちゃつたの？」

ランは思い出したように懐に手を入れたが、出てきたのは萎れてすっかり変色してしまつた枯花だつた。花弁もぱらぱらと散り、使えそうもない。ランが少し氣を抜いただけで、そのみじめな枯花は地面に落ち、空しい姿をさらした。サファイアはそれをじつと見つ

め、拾い上げた。花弁も少ししか残つていらないような枯花を、サファイアは大事そうにその懷にしまつた。しかし、その間も、プシュケを捕まえる手の力だけは抜かなかつた。

どうしようもないかもね、というアマリリスの冷静な咳きが雨の間をすり抜けていった時、大きな雷鳴が響き渡つた。

雷鳴が声に聞こえたという事は、その場にいた誰もが同じだった。ブシュケを喰らうという狂気に苛まれているサファイアさえも、その声にはっとした表情を見せた程だった。

アマリリスはその声を少し耳にしただけで悟る事が出来た。この声こそ、自分達がずっと感じていた重たい気配であると。ブシュケを食べさせてはならないという意識を持たせた張本人であるという事を。その者の姿はない。きっとこの場にはいないのだろう。ただ声だけが、アマリリス達の耳へと訴えかけてくる。

サファイアはこの気配を警戒していたが、それでもブシュケを放そうとしなかった。

豪雨と雷雲しか持たない空から、突如、何者かの視線を感じるようになつた。その視線はまっすぐサファイアを睨み、ブシュケを放さないという頑なな欲求を罰しようと唸り始めた。だが、サファイアは、睨み返すばかりで全く恐れていなかつた。

アマリリスは自分がツバキと対面した時を思い出した。あの時とは対峙している者の霸気の強さが比べ物にならないほど強力だが、だからといって、それだけがサファイアにブシュケを諦めさせる効力を持つてはいるとは思えなかつた。自分がジズに対峙してまでツバキを欲しがつた時のように、この欲求というものは無双の魔力を持つてゐる、とアマリリスは思つてゐた。

だから、他人がやめさせなければ。

「アリス……」

ディアナが不安そうに呟いた。アマリリスはちらりとディアナを見るだけに留め、すぐにサファイアへと振り返つた。

「サファイア、聞こえる？」

豪雨と雷雲の中からの唸りと視線を盾に、アマリリスは落ち着いた声でサファイアに呼び掛けた。

「その娘はあなたのじやない。この方のものな」
サファイアの視線がちらりと雷雲の中へと向く。その目には恐れも戸惑いもなく、ただ、そこにあるものを認識しているだけの気持ちが宿っていた。

アマリリスはそつと肩に手を置くように、サファイアに言った。
「プシュケを放してあげて」

アマリリスの言葉を受け取りつつも、サファイアはまだプシュケを放さない。

大きな獣が唸る声が、空全体に響き渡る。やはり、ジズとは格が違つ。

「ヒトでありながら魔を宿す汚らわしき者め、我が贊を放すがいい」
聞く者を圧倒させるその声は、水辺の生き物を思わせる不思議な響きを宿した音色で一声鳴いて、再び言葉をつないだ。

「我が名はリヴィアイアサン。大海の者、最強を冠する事を許された者。我が贊は精霊の娘、そこにいるプシュケは海に捧げられし供物。ニンゲン如きが口に出来る代物ではない」

やはり、とアマリリスは思った。

最強の怪物、リヴィアイアサン。プシュケはその加護を受ける精霊の娘。もしもサファイアがプシュケを喰らってしまえば、リヴィアイアサンの怒りが世界を殺すだろつ。しかしこの言葉に一番驚いていたのは、プシュケ本人だった。

「わたしが、海の供物？」

アマリリスは意を決した。サファイアからプシュケを奪うのは、今しかない。

アマリリストがサファイアからプシュケを引き離した途端、豪雨も雷雲も消え、それまでこの場を縛っていた鋭い視線も消えてしまった。

サファイアはプシュケを奪われてからも暫くは呆然としていた。いきなり静寂に包まれた周囲を見つめ、惚けた表情で突っ立つてゐる。自分が心から欲した獲物を奪われていると気付いても、すぐには奪い返そうとしなかった。

「プシュケがリヴィアサンの供物？」

サファイアが呟いた。共学も含まれてゐるその様子に、アマリリスは深く頷いた。

「大いなる生き物の供物を勝手に触ればどんな事になるか、あなたならお分かりでしょう、サファイア嬢？」

アマリリストはわざと言葉を改めてサファイアに問い合わせた。サファイアの意識が、狂氣から解放されようとしている。そこにいるのは、もはや、『恐怖』に操られるままに残酷な欲望を獲物にぶつけれる魔物ではなかつた。

「ヒトでありながら魔を宿すもの」

アマリリストは静かに言葉を続けた。

「あなたはそう呼ばれているけれど、あたしにはそう見えない。あなたとあたしは同じで真反対の者。あなたが欲望に捉われる気持ち、少しだけ分かるけれど、あなたは所詮、ニンゲンなのよ」

サファイアの目から、闘志が消えていく。

ふと彼女は、ついさつきまでリヴィアサンの声がしてゐた場所を、丸々とした目で見つめていた。その表情には、たつた今、リヴィアサンという絶望的なほど絶対的な生き物を前にしてゐるかの

ようなものだつた。

ヒトとして正常な意識に戻つた証拠だらう、そうアマリリスは思つた。

「プシュケ……」

しばしの沈黙の後、サファイアは絞りだすように言葉を発した。

「お前は私を軽蔑するだらうね」

返答を期待していない捨て台詞のよつた口調だつた。当のプシュケは、何も言い返せずに、ただ下を向くばかり。だが、サファイアはさらに続けた。

「私は……たぶん、お前を諦めではない……のだと思う……私の口がヒトの血肉を好むかぎり……最初に襲うのは、お前だらう」「プシュケは答えない。サファイアは、静かに無言のプシュケに促した。

「再び私が欲に支配される前に、私の元から逃げてしまいなさい。私は人食いなんだから」

少なくともそれは、今のサファイアではない。そうプシュケは信じていたのかもしれない。そして、アマリリスはそれを少しだけ羨ましいと感じていたかも知れない。

これが、ヒトに生まれたものと、魔に生まれたものとの違い。アマリリスは承知していた。

「サファイア、あなたは確かに恐ろしい人食いだわ……」

プシュケはか細い声で呟いた。

「でも、わたしがもし本当に海の供物なのならば、わたしにはもう行き場がないの」

プシュケは縋るようにアマリリス達を見やつた。

「わたしの本来の天敵は、人狼でもサファイアでもない。人間の群れよ」

プシュケの中の『恐怖』が、一気に『嘆き』へと変異する。

「人間の群れは供物を恐れてる。大いなる生き物達を恐れているから、当然かもしれない。でも、彼らには常に悪魔が宿っているの。

彼らは、大いなる生き物の持つ力を手に入れたいという身分不相応な強欲に負けるぐらい、愚かな群れなのよ」

プシュケの今までの《恐怖》は、吐き出しても吐き出しても底を突かなかつた。

「わたしは嫌だ。たくさんの身勝手な思いに巻き込まれ、醜く死んでいくなんて嫌。人間の群れに押し潰されたくなんてない。それなら、サファイアに食べられたほうがましよ！」

プシュケの《嘆き》に、サファイアの表情が歪んだ。アマリリスはじつとプシュケを見つめ、一瞬だけランに目線を移し、すぐに戻した。

「そう、つまり、あたし達にくつついていたいという事なの？ 宛てもない、ただの放浪よ。あなたの主人となるリヴィア・イアサンに会えるかも分からぬ流浪の旅にくつついていたいというのね？」アマリリスの問いに、プシュケは目を潤ませながら頷いた。

嫌な噂が耳に入ったのは、プシュケが泣きながら旅路に加わった日から数日後、アマリリス達が森を抜けた先の集落に辿り着いた時のことだった。森の中の集落とはいえども、そこは商人達の旅路の真ん中であり、大陸をめぐる様々な噂が、様々な商品と共に流れ込んでくるような所だった。

そこでアマリリス達が聞いたのは、大陸の中央に位置する王都の噂話。『恐怖』に支配され、さらに人狼などの魔物達に脅かされつゝも、変わらずに栄え続ける町から流れた噂話だった。人々を襲う『恐怖』は、魔術の為に『嘆き』を求める魔女たちが放つた呪いの結果であるという噂話。

アマリリスが最初に聞いた時、それはそれであり得る話ではあるとは思った。実際、アマリリスは興味がないからやつていらないだけで、もしもそれをしたら楽しいというのだったら、迷わずによつていたかもしれないような事だからだ。つまりは、人々を陥れるなんて、魔女にとつては簡単すぎること。魔女たちが疑われるのも仕方のないことだった。だが、人間というものは単純な生き物であり、その疑いの目は、一部の魔女ではなく、魔女全体にかかるてしまうから油断できない。

「あなた達、魔女ではないと思っているだらうけれど、人間の定義する魔女なんて、人間社会にいなうだけで当てはまつてしまうものなのよ」

アマリリスは村人たちが近くにいなう時に、他の者たちにそう零した。

「特に、魔女でないのに人間達に魔女扱いされる人々は、不幸以外

の何者でもないわ。魔女と呼ばれ、畏怖されるだけの力はないから、迫害され、裁きをうけてもろくに抵抗出来やしない。せいぜい、十人ほど道連れにするだけが限界でしょうね」

「集団相手に十人も道連れになんて出来ないわね」

ディアナがぽつりと零した。

ここにいる者達はアマリリス以外、魔女ではない。魔女ならば、群がる人々を一気に片付けることなど簡単だろう。何の痛みもなく、それをやつてのける残忍さも秘めているだろう。しかし、ディアナ達にはそれは出来ない。深い意識の中でもそれが許さないという以前に、不可能なのだ。ほとんど意識の制約を受けないサファイアでも、あまりに多くの人々を敵に回しては上手く動けないだろう。

「そうね、あなた達は魔女ではないもの。人間か、人間に属するものばかり。暴漢や魔物から身を守るので精一杯の人達。でも、こんな噂を聞いたの。王都から、勇士が送り出されたつて。世を『恐怖』に染めようとする悪しき魔女たちを討伐するために、討伐軍が送り出されたつて。彼らが狙う獲物は、あたしだけじゃない。あなた達も同じよ」

「わたし達も、殺されてしまうの？」

ランが恐る恐る訊ねた。ランには想像出来なかつた。人間にとつて人狼は魔物の中でも最も悪とされるもの。その人狼を喜んで倒すアマリリスこそ、人間にとつて好ましい存在であるはずなのに、魔女に生まれたというだけで攻撃されてしまうなんて思えなかつた。そして、幾ら自分達が人間社会の中心から外れた所で生きているからといって、魔女扱いを受けて殺されるなんて思えなかつた。

しかし、この中で澄ました表情をしているのは、サファイアだけだつた。

ランはその事もショックだつた。

「所詮わたし達はいい子にしていようと、欲望のままに生きようと、同じようにしか見られない」

サファイアが澄ました表情のまま呴いたその言葉が、ランの心に

深く突き刺さつた。

集落では幸い、噂こそ耳にせよ、村人たちに危害を加えられたりすることはなかつた。

まだ商人達が噂を持つて来たばかり。感化されていないだけのこと、とアマリリスは言ったが、ランは信じていなかつた。サファイアはそんなランを嘲笑うように不可思議な発言を繰り返すし、ディアナとバステトは直接的なことは言わないが、不安は隠せていなかつた。ただブシュケだけが、ランに賛同する形でこう言つた。

「アリスの言つことだけじゃまだ分からぬもの。それに、噂は噂でしょ?」

その言葉に対し、アマリリスは何も返答しなかつた。

そして、集落を去る日。ついに村人たちは何もされないままでつた。村人たちは、アマリリスの事を赤の客人と呼び、魔女である事を理由に尊敬しているようにさえ見えた。この集落ならば、村人たちの気持ちは変わらないのではないだろうかと思つ程、ここは穏やかな所だつた。きっと、人狼やその他魔物も迷い込んだことはないのだろう。世を支配する『恐怖』の色も、ここだけは薄かつた。しかし、村人數人に見送られながら集落を後にしてから暫く経つて、集落が完全に見えなくなつてから、アマリリスは不吉なことを言つた。

「死臭……あの人達は、もう、諦めているのでしょうかね」

「死臭?」

問い合わせられる言葉に、アマリリスは不敵な笑みを浮かべる。

「そうね、あと数ヶ月したら風の便りで分かるかもね」

そう言つて、突如彼女は不機嫌そうな表情で一点を見つめた。

「狼ではないわね。美しくないもの」

その言葉に、全員がそちらを見やつた。

旅の一団だ。それも、全員が高価な武具を身につけている。どうみても、豊かな場所から出てきた者たちだった。逞しい身体付きと闘志に燃える目が印象的な、戦士たちの一団。

「赤い魔女、お前の噂は聞いている。狼を破り捨てる美しい悪鬼のような姿。見る者を凍てつかせる青い目。輝く金の鬚は禍々しい力の証なのだろう？」

五人いるうちの全てが同じ武具を付けている。誰が言葉を放っているかも分からぬ程、彼らの顔は鎧に隠れ、見えている皮膚も死んだように白く、血の通わぬ人形のようだった。どの口元も結ばれたままなのに、言葉は聞こえ続ける。

「六人。お前達の心臓を持つていけば、それだけの報酬が手に入る。生け捕りなら倍だ」

「ええ、それで？ あなた達はあたし達を使って、たんまり報酬を貰うつてわけね」

アマリリスの言葉に、戦士たちが身構える。

「分かつていいるじやないか。その通りだ。さあ、お望みはどちらだ？ ここで死ぬか、王都で見せものとして死ぬか

「どつちも死ぬんじやねえか」

バステトは呆れ顔でそう言うと、すばやくナイフを取り出した。「人間相手だと気が引けるとかいつてる場合じやねえしなあ」軽く空を斬つて、バステトは五人の戦士たちを睨んだ。ディアナもそれを見て、深い溜め息を吐いた。

「出来るだけ手加減したいわね」

そう言つて、黒いクーガーへと変わった。

闘う気を見せた二人を見つめ、ランはおずおずと引き下がつた。

もつとも戦いを恐れる彼女は、この雰囲気そのものが『恐怖』に見えたのだ。そんなランを守る様に、プシュケが前へ出る。

「後ろにいて。わたしが守つてあげるわ」

ランはその言葉に甘えて、そつと身を隠した。

「その代わり、誰かが怪我したら力を貸してよね」

ランは小さく頷いて、ブシュケの後ろから、戦士たちを見つめた。アマリリスを初め、ほとんどの者たちは戦士たちの攻撃に備えたが、サファイアだけは剣を構えずに、ぼんやりと戦士たちを見つめているだけだった。しかし、その目には、鬪気とは違う異様な不気味さがこめられていた。

真っ先に飛び出した戦士は、そのサファイアの不気味な気配に気づかなかつたのだろうか。それとも怪しいからこそ先に叩こうとしたのか。真っ先にサファイアへと切り込んでいった。

サファイアに斬りかかった者は、すぐ先の未来、己の持つ剣にこびり付くのは、サファイアの血と肉だろうと思つていただろう。無意識的にも、意識的にも、それ以外の者の血肉が付くなんて、直前まで、或いは、直後ですら思わなかつただろう。しかし、現実は違つた。違つたという事だけが、明らかになつた。

その場に転がるのは、サファイアではなく、男の方だつた。サファイアが魔の剣を抜いたとは誰も気付かなかつた。ただ、抜いた形跡のみが、転がつて動かなくなつた男の身体についている。サファイアの方は、口元を血で一杯にして、薄つすらとした笑みを浮かべてゐるだけだつた。大量に浴びた返り血は、すぐに鉄の生臭さとなってその場に充満する。

サファイアはさつきまで男だつたものの欠片を踏み、ゆつくりと刀を振るつた。赤く染まる彼女の周辺で、刀だけが白く光つてゐる。いや、赤くないのはそれだけではない。サファイアの目もまた、真つ青に光り輝いていた。

「美味しくない。ニンゲンなのに、美味しくない」

サファイアは呟いた。

「どうして？ あなた達、ニンゲンなのに、駄目になつてる」

そこにあるサファイアに、プシュケは一瞬怯えた。ヒトの肉を好む魔物。今のサファイアは完全にそれだ。かつてニンゲンの皮を被つてプシュケを騙して喰らおうとしたその時と同じ目をしている。本当なら逃げ出してしまつたかった。

しかし、後ろにはランがいる。自分よりも力なく、その場に蔓延する『恐怖』に弱々しく抵抗する生き物が、すぐ後ろにいる。プシ

ユケはそつと後ろ手にランの頭を撫でた。ふわりとした暖かさが、ランの手を包んだ。

「さつそく一人死んじゃったわね。あたし達に構わなかつたらこうならずには済んだのに」

アマリリスが今日みなさげにそう言った。

「でも、もう遅いわ。鬪わなきや、あなた達、この場にいる女全てを殺すのでしょうか？」

アマリリスの言葉に、戦士たちは反応できなくなつていた。目の前で一瞬にして死を迎えた仲間の姿を、じつと目に焼き付けている。しかし、その表情は、単に仲間の死に驚いている人間の表情とも違つた。わなわなと彼らの身体を震わせるのは、恐れではなく、怒り。

「よくも、よくも我々の仲間を……」

ディアナもバステトもこれは意外だつた。普通の人間ならば、アマリリスやサファイアの異常性に怯えて逃げるのではないだろうか。それとも、それだけ彼らの仲間意識が強いということなのだろうか。いや、そうは見えない。彼らを戦いに導いているものは、仲間を思うという事ではないような気がした。

他の戦士たちが一斉に躍り掛かつてきた。その先は、アマリリスでも、仲間を殺したサファイアでもなかつた。ディアナ、バステト、そして、一番戦いから離れた場所にいる、プシュケとランだつた。ディアナはクーガーの声で唸り、その場を回避したが、バステトは回避しきれず、そのまま戦士の一人ともみ合つ形で地面に叩きつけられてしまった。

「貴様ら、人間じゃないな？」

もみ合いながら、バステトは襲いかかつてくる戦士に問う。戦士は何も言わず、ただバステトの息の根を止めることしか考えていなかのように戦いを続けた。

「何なんだよ、仲間の敵つていうのか？ お前らが仕掛けでこなかつたら、あいつも死ぬことなかつたんだぞ！」

バステトは抵抗しながら、不利を感じていた。自分の持つている

のはナイフ。それに引き換え、相手は剣に鎧の戦士だ。勝てるはずがない。攻防が長引けば長引くほど、バステトの表情に焦りが表れていった。

男女という力の差の上、長剣に対してもナイフだけで暫く抵抗できただけでも大したものだろう。

バステトの力はすでに限界だった。ナイフを握る手も痺れ、次第に握りが緩んでくる。そもそも、バステトには持久力がないのだ。力ではなく、素早さで蹴りをつける彼女にとって、この状況は最期の足掻きでしかない。それでも暫く持つたのは、死にたくないという気持ちからだったのだろう。

しかし、足掻けたのはそれまでだった。わき腹を蹴られ、手の力が緩んだすきに、ナイフを飛ばされてしまったのだ。無防備となつたバステトは、自分にのしかかってくる戦士をじつと見上げた。戦士の数は一人減つて四人だつただろうか、五人だつただろうか。どちらにせよ、彼らは襲う相手として、ディアナとプシュケとランを迷いなく選んだ。この状況を真つ先に助けてくれそうなディアナも、今頃戦士の一人と戦つている頃だろう。プシュケとランもそうだ。下手すれば、彼らも危機に陥っているかもしれないというのに、助けなんて期待できるだろうか。

戦士が剣を構えた。

「お前が人間だつと、魔物だつと、構わない」

戦士が低い声で呟いた。

「死んだ奴だつて、本当はどうでもいいのさ」

唯一見える口元がにやりと笑みを浮かべる。その瞬間、バステトには見えないはずの彼の目線が、脳裏に刻まれた。赤く鋭い目線が、ヒトとは思えない輝きを放つていて。至上の悦を前にしたその男は、狂氣という言葉では語りつくせないほど、気味の悪い声で囁い、剣

をバステトの首元に突き付けた。この男こそ、まさに『恐怖』その

その者に取り押さえられる自分の未来は、《嘆き》どころか《絶望》

『しかし取り巻いていい! そうバステトは思った。』

男の声が、バステトの耳から頭へと沁み込んでくる。その気持ち悪い感覚に、一度枯れてしまつた逃げたいという感覚が、再び蘇る。戦士は剣をバステトの首元に突き付けて制止したまま、ずっと呟き続けている。もみ合つていた時とは違つて、そんなに力を込めているようには見えないのに、バステトはそこから抜け出す事が出来なかつた。このままこの声を聞いていたら、何か取り返しのつかない事になつてしまつのではないだろうか、バステトの不安は最高潮に達していた。

しかし、その不安は急に緩んでいった。

バス停にかかっていた重しが、突然消えたのだ。はつと起きあがり、見渡すと、そこには黒いクーガーがいた。

「ディアナ……？」

クーガーは声に反応して、振り返った。バステトは思わず肩をすくめた。クーガーは何かをくわえていた。赤い液体のしたたる何か。それは、戦士の首だつた。

一人のみならず、二人仲間を失つた戦士たちは、さらに闘志を燃やしていた。

しかしどの戦士たちも失った仲間に對して悲しむそぶりを見せない。ディアナは戦士の首から口を放した。低く唸りながら、じつとバストの後ろを睨む。

「バステト、後ろに気をつけてよ

ランの声が響き、バステトは振り向くと同時にその場から回避した。袖を何かがかかる。剣だ。さつきまで相手をしていた戦士のものと同じもの。ディアナを追つてきた戦士なのだろうか。息を切らしながら、じつとディアナを睨んでいる。バステトに危険を教えたラン達は、別の戦士と戦つている。生き残っている戦士の数は、三人だ。ディアナを睨んでいるのが一人、ランとブシュケへと迫つているのが一人。あと一人。あと一人いたはずだ。

テイアナが叫んだ。戦士が動き出したのだ。

戦士の姿は異様だつた。何かに取りつかれたように咳いているが、攻撃は適度で、冷静さすら感じる。機械か何かにしては、生き物の生身を感じるし、魔物の類にしては、生々しさが足りない。戦士の動きは美しい程に完璧だつた。重そうな剣を持ち、重そうな鎧を纏つてゐるとは思えないほど、軽やかに斬り込んでくる。バステトはさらに彼から遠ざかつた。解放されたばかりの彼女は、もはや戦士の相手が出来る程体力を残していなかつたのだ。

代わりと言わんばかりに、ディアナが戦士に襲いかかっていった。バステトを追い詰めた戦士の首を取った時のように、鋭い牙と鋭い爪を剥いて、戦士に飛びかかっていく。しかし、さすがに一発では倒せなかつた。元々ディアナと戦つていたその戦士は、ディアナの動きを把握し始めていたのだ。執拗なディアナの攻めを、回避し続ける戦士。

「ディアナ、駄目だ」

バステトの声は力なく地面に落ちていく。それでもバステトはディアナに呼び掛けた。

「いけない。奴にチャンスを与えてしま」

それでも、バステトの声はディアナに届かなかつた。段々と、ディアナの動きに切れがなくなつていく。それに引き換え、戦士の動きは乱れることなくずつと変わらない。このままではどうなつてしまふか、そろそろディアナも気付き始めたのだろうか。ディアナは急に攻撃を止め、戦士を睨んだ。戦士は剣を構え、ぴたりと動きを止めた。

「どうした、魔物。お前の身体にはもつと禍々しい力が宿つているのだろう? それをもつと解放してみたらどうだ? 俺達の同胞を殺した時のように」

ディアナは牙を剥き出し、唸り続けた。だが、その姿には、何処か弱々しさが見え隠れし始めていた。

49 ·

三人の戦士たちはそれまで、一番警戒すべき者の存在を忘れていた。

もともと後回しにするつもりだったとはいえ、その者自身が己の気配を闇の中に包み込んでしまっていたからと、いうほうが正しいだろう。

その者が気配を現したのは、戦士たちがやつとの思いでディアナとバステトを抑えた後だった。起き上がる力を失った彼らの息の根を完全に止めてしまおうと、戦士たちが走りだした瞬間のことだった。急な冷気とともに、戦士たちの頭に重石のような威圧がかかってた。

「結構」

それまで存在を消していた女の声が、戦士たちの背中を痺れさせる。

「あなた達の心に揺らぎなんてないってよく分かつたわ」

この声こそ、彼らが倒すべき者と教えられた魔女の中の魔女だ。しかし、その魔女がこんなにも恐ろしい声で啼くなどと、教えられていなかつた。狂信的な彼らの闘争心ですら、静かに怒り始めたアマリリスの前では、悲しい程にひ弱なものだった。

彼らの瞳を通して、その魔女、アマリリスは戦士の中に巢食い始めた《恐怖》の様子を見つめ、険しい表情を見せる。アマリリスの周囲に常に漂つていて、その気配は、彼らの中においてだけ、微妙に変化していた。それは、人狼と人の群れが作り出す《嘆き》によく似ていた。

取り憑かれている……？

身体の中を《嘆き》で一杯にした彼らはもはや、ヒトとは言えない存在となっている。耐えきれないほどの《嘆き》で身体を満たした者たちが辿る、虚構の世界。彼らの意識はすでに、原始的な感情のみを残された、生きた機械のようなものだった。その原始的な感情すらも、今やアマリリスを前にして、恐れ慄き震えている。

「怯むな……行くんだ……」

やがて声を絞り出した戦士たちが、弱々しく闘志を燃やし、アマリリスへと突っ込んでくる。

アマリリスは自分にかかる生き残った三人の戦士、一人ひとりの姿を見つめた。どれも、見分けがつかず、どれも、生き物らしくなく、どれも、アマリリスにとつてはどうでもよかつた。

おいで、人形たち。

戦士たちの剣が、アマリリスを切りつけようと迫ってくる。アマリリスはしかし、動かなかつた。《恐怖》に狂わされ、誤作動を起こしたその機械達を見つめ、そつと右手を横に振つた。その直後、鮮血の雨がアマリリスの頬を真つ赤に染めた。赤い血を流して壊れていく機械を見つめ、アマリリスは冷たい青の目を光らせる。つまらない。

もう一度、右手を握りしめて、機械達を見つめる。凍てつく冷気が彼らを包みこみ、一瞬にしてその動きを止めてしまう。アマリリスの耳に障つていた機械音も、すぐに消えてしまった。アマリリスは青く凍りついた三人の機械を見つめ、最後に、握りしめていた手を放した。

凍つた機械達が、粉々に碎ける。赤い氷片と化したそれらは、地面に叩きつけられて粉々に砕け、きらきらと輝きながら、空気中の塵となつて消えてしまった。

アマリリスはその残光をじっと見つめながら、呟いた。

「人狼じゃないと、つまらない」

世界が淀んでいく。

何となく世の中全体が違和感に包まれていると気付き始めてから、
ゲネシスは何かに急かされるように剣の稽古に勤しんでいた。周囲
から見て異様なほどに、まるで、止めを刺すべき何かがすぐ目の前
にいるかのように、周囲の者たちが疲れ果てて動けなくなつても、
ゲネシスだけはいつも最後まで稽古を止めなかつた。

世界が淀んでいく。

その妄想染みた考へが、ゲネシスの頭に沁み込み、一層、休むと
いう道を開ざしてしまつ。ゲネシスが剣の稽古を止める時は、いつ
も、半ば意識を失つてからの事だつた。しかし、いやだからこそ、
ゲネシスが修行場で有望視されることはなかつた。

力のみが強さではない、己の事をもつとよく頭に入れるよう、
とゲネシスは常々叱られた。

しかし、自分ではどうしようもないのだ。どうしようもないほど、
稽古をしている時は夢中になつていて、周りどころか、自分すらも
眼中に入らなくなつてしまつ。剣を震わすゲネシスが見つめるのは、
異次元の何か。ここにはいない、何か。それが何なのかはまだ分か
らない。けれど、ゲネシスは、その何かこそ、自分を奮い立たせて
いるものだと信じていた。

世界が淀んでいく。

それを止められるのは、自分しかいない。そう信じ、ゲネシスは
稽古に打ち込んだ。

魔女狩りの話を耳にしたのは、そんな最中の話だった。

魔女は人狼と繋がりがある。世が人狼に喰われ、『恐れ』に支配

されていくのも、そして、世から『嘆き』が堪えない原因の一つが魔女である。よって、ゲネシスの暮らす大陸一の国を治める王は、これら魔女の駆逐を決定した。

世の中には魔物や魔女が人に紛れて暮らしていることは、勿論ゲネシスもよく知っていた。しかし、今まで魔女が害をなす可能性について考えた事はあるものの、魔女こそが憎むべき敵であると考えたことはなかった。

しかし、国王が言っているのだ。もしかしたら、自分の感じている違和感も、魔女たちと何か関係があるのかもしれないではないか。そう思い立ったゲネシスの行動は早いものだった。修行場から飛び出し、剣と最低限の荷物だけを持ち、そのままの足で城へと向かったのだ。

驚いたのは、修行場の者たちだった。

あれほど修行を欠かさなかつたゲネシスが、姿を見せないのだ。修行場の者たちは何度もその理由について語り合い、暫くはその話題で持ちきりだった。だが、修行場に置いて、突然誰にも何も言わずに姿を消すものがいるというのも珍しい事ではなく、ゲネシスが居なくなつた事実も、次第に影が薄くなつていった。

一方、ゲネシスは、修行場の仲間たちが自分の事を忘れ始める頃にはとつに大国の国境を越えてしまつていた。この不思議な焦りを解消できるやもしれない魔女たち。討ち込むべき相手を見つけ、ゲネシスは燃えさかる弓矢のように大陸を巡り始めていた。

51 ·

ほんの少しだけ華やかな町についた時、ランとプシュケの体力は限界だつた。

というのも、この町に来る道すがらで、人狼に出会つてしまつたからだ。厳密に言えば、アマリリスが人狼を見つけてしまつたと言つた方がいいかもしない。ともかく、そのせいで、アマリリスの欲が現れ、ランとプシュケのような体力の少ない者を考慮しない速度で人狼を追いかけ始めてしまつた。

アマリリスとともに人狼を追うという持久力ついて行けるのは、変身したディアナか、サファイアくらいのものだろうとバステトは思つていた。そのくらい、アマリリスに人狼というのは、他の者たちにとつては厄介なことだつた。

結局その人狼の最期は、無残なものだつた。そもそもアマリリスに目を付けられた時点で、終わつてはいる。彼女に目をつけられて生き延びてはいるのは、バステトの知る範囲では、二人だけだ。大いなる空の者ジズに仕えていたツバキと、異様な印象を与えてきたオーロールとかいう者。二人とも、アマリリスの好みそうな美しい女性だつた。

ともかく、前の人里からこの町に辿り着くまでに、人狼に二回は遭遇した。遭遇するのがただの魔物だつた時と、人狼だつた時との肉体的、精神的疲労は計り知れない。自分は全く闘つていはないはずなのに、アマリリスの狩りにつきあわされ、見せつけられる度に、肩を大きく裂かれるよりも苦しい疲れが、バステトを襲つてきていた。バステトがそうなのだから、他のものだつてそうではないとは言えない。

ランもプシュケもバステト以上に限界なはずだ。

「なあ、まずは休む所を探そうぜ？」

バステトの声に、アマリリスもサファイアも答えない。聞いているのかいなかすらも分からぬ程の無言ぶり。しかし、バステトはもう慣れていた。ちらりとディアナを見つめ、返答を待つた。

「そうね。疲れを癒したいわ。いいでしよう？」一人とも？

アマリリスもサファイアもやはり答えず、それぞれ何かを考えているようだった。しかし、返答がない時は、異論がない時とほぼ等しいと行動を共にしてきた中で、二人は学んでいた。

「ラン、プシュケ、あなた達を休ませるのが先ね。宿を探しましょう」

ディアナの言葉は、バステトやラン、プシュケだけに向けられているようだった。

プシュケは内心その言葉を待っていた。自分が一番体力のない事を理解していたし、そのために無理はしないと考えてはいたが、さすがに全員に置いていかれるのも、サファイアとだけ残されるのも嫌だつたため、ランやディアナ、バステトとは離れたくなかった。その結果が今の疲れである。

自分より体力のあるランすらも疲れているこの状況、プシュケが寝台で思う存分横になれるることを思い描いていても何も不自然なことはなかつた。

「泊まるなら、この指輪を換金したら？」

ぼそっと呟いたのは、さつきまで、空虚な様子しか漂つていなかつたサファイアだった。

彼女が見せたのは、赤い石のはめ込まれた指輪。宝石に疎いディアナには、それが何か分からなかつた。

「換金場所は、町のもっとも中心より。換金屋が詐欺師じゃなければ、この人数でもしばらくは町でも困らない」

「でも、いいのか？　なんだか貴重なもの見たいなんだが……」

バステトが指輪に触ろうとした途端、サファイアは指輪を拳のな

かに隠し、険しい表情を見せた。

「安易に触つては駄目。これはただの指輪じゃないんだから」

そう言って、一人先に歩きだした。

この町も例外なく《恐怖》に包まれている。

そんなこと、ゲネシスにはよく分かつていた。何処へ行つても、《恐怖》は人々に取り巻いている。いや、人々だけでなく、その他の動物、そして驚く事に、魔物や魔女すらも例外ではなかつた。魔女の討伐の命を受けて旅を続けるゲネシスの前には、当然、魔物や魔女自身が立ちはだかつたが、そのどれもが《恐怖》を支配しているようで、《恐怖》に支配されている。

では、この《恐怖》の根源は何処なのだろう。

それが《嘆き》だとしても、その前に《嘆き》を生み出す根源の《恐怖》があつたはずだ。

それは、誰が、生み出したのだろう。

「それは勿論、私達の仲間……」

ゲネシスの目の前で息絶えようとしている老魔女が、力なく嗤つた。

「私達の崇める御方の力さ」

「それは誰なんだ？」

ゲネシスの問いに、老魔女は嗤うばかりだった。

「答える」

ゲネシスの剣が、老魔女を貫いた。しかし、それでもなお、老魔女は嗤いを止めなかつた。自らが死に絶えるまで、この嗤いを止めないつもりらしい。結局、動かなくなるまで、魔女はそれ以上言葉を発しなかつた。ゲネシスは怒りに身を震わせた。

たつた今、息絶えたこの魔女は、ゲネシスが町の者に頼まれて退治したものだ。昔は善良な仙女で、町の者たちの病を薬草と魔力で

治してくれたらしい。大陸が『恐怖』に支配され始めた頃に、町で発生した奇病への対策にも、この魔女は人々に力を貸してくれたのだが、同じ頃に起こっていた大量殺人の犯人がこの魔女だと分かつたらしい。どうやって分かつたのか、どうやってそんな事をやってのけたのか、ゲネシスは知らない。だが、重要なのは、この魔女が自供した事。

犠牲者的心臓で、奇病の薬を作っていたという事が分かつたことだつた。

「奴らには抗体があつた。だが、奴らは他の者たちの事など虫けらほどにも思つていないような卑しい心の持ち主たち。だから、私が回収してやつたのさ」

老魔女はそう言つていた。

ゲネシスはもう言葉を発しないこの老魔女の亡骸を見つめ、しばし老魔女の言葉を反芻した。この町の、『嘆き』はとても濃いものだろう。

犠牲になつたのは、いずれも子どもたち。権力のある家の子ども、並みの家の子ども、商人の子ども、兵士の家の子ども、身分の低い家の子ども、そして孤児。その子ども達の心臓で、薬は作られた。それを呑んだ者達は、全員、病の魔の手から逃れる事が出来たという。

ゲネシスはじつと老魔女を見つめると、その首を切り落とした。これでもう、復活はしない。

「心臓泥棒……？」

ランとプシュケが問い合わせ返すと、質屋にいた男は不敵ににやついた。サファイアの指輪の鑑定がなされている間、男が急に持ちかけてきた話だ。

「どうして心臓泥棒なの？」

プシュケの問い合わせに、男は答える。

「いい質問だ！ 理由はそのまんまさ。そいつあ他人さまの心臓を失敬しちまうつてわけだよ」

「心臓……？」

「ああそつさ。お嬢さんのような可愛い子どもが夜道を一人つきりで歩いているとねえ、暗闇から闇のような真っ黒いロープを纏つた婆さんが話しかけてくるのさ。そんでもって、話しかけられた子どもはあつちゅう間に心臓を奪われて死んじまうつていうわけだ」

「何それ、すごく怖い」

ランはその話を聞いた途端震えあがつた。プシュケも内心は怖かつたけれども、ランの手前、それをぐつと自分の中に押し込んで、笑い飛ばした。

「ただの怪談ね。いまどきそんな作り話、怖くもなんともないよ」
だが、プシュケのそんな冷めた言葉にも、男はくつくつくと意地悪そうな笑みを浮かべた。

「ところがよ、作り話じゃねえんだこれが

「どうということ？」

ランが訊ね返した時、ティアナの声がした。

「終わったわ。プシュケ、ラン、行きましょ」

「おつといけねえ、長く話しちまつたな。ともかく、夜道は何があ

るか分からねえから出歩くんじゃねえぞ」

男はそう言つと、さつさと店を出て行つてしまつた。男は何を言おつとしていたのだろう、プシュケはそれがとても気になつた。

「一人とも、来なさい」

ディアナの声に、渋々プシュケは動き出した。何であろうと、きっとあれは余所者をからかつた性質の悪い冗談。きっと余所者を見ると、言わざにはいられないのだろう。

それにしても、不気味。

心臓泥棒。これもまた、人狼によるものなのだろうか。それ以外の魔物によるものなのだろうか。

それとも、とプシュケはちらりとアマリリス、そしてサファイアを見つめた。黒魔術のなかには、人間の臓器を使つたものも多々あるといわれている。また、心臓をこよなく愛し、食べてしまうという性癖を持つ者も世の中に入るという。まっさきに思いついたのが共に旅をしている者という時点でプシュケにとつては気が狂いそうな事態だが、仕方のないことだろう。

どんな者がやつたにせよ、悪趣味極まりないとプシュケは思つていた。

それに、プシュケはこの噂の背後に不穏を感じていた。このような話の中には、町の人々の偏見と恐れが隠されてはいるものだ。もしも、心臓泥棒とやらの話も町の人たちの心を忠実に反映しているとしたら。心臓を奪うかもしれない者へ対しての、恐れと侮蔑が含まれているのではないだろうか。

プシュケはそつと横にいるランの手を握つた。

「心臓泥棒？」

宿の主人は訊ね返し、ああ、と頭を搔いた。

「思い出したくもないね。あの婆の話は」

そう言つて、新聞に顔を隠してしまつた。プシュケとランは首を傾げた。宿の主人の様子から、何も知らないはずはないと分かる。それも、心臓泥棒の話をしてくれた人よりもずっと詳しいことを知つていそうだ。プシュケは思い切つて、もつと触れてみた。

「あの……」

それ以上の言葉は見つからなかつた。

だが、宿の主人は、思い出したくないと言いつつも、話を続けてくれた。

「昔は本当に仙女様だと思つていたさ。病で苦しむ人がいたらすぐに駆けつけて病を治してくれた。薬草を煎じて、ちょっとだけ自分の魔法をかけてやるのさ。そしたらどんなに恐ろしい病もあつとう間に治つたもんだったよ」

しかしながら、と宿の主人は溜め息を吐いた。

「十年近く前だろうか、町に黒い風が吹き抜けていつたんだよ。酷いもんだつた。体が石のようになつていく病氣でね、沢山の人が石化して、最後にはぼろぼろに碎けちまうんだ。悲惨なもんさ」

世の中には呪いよりもずっと恐ろしい病氣があるということを、プシュケは知つていた。細胞が少しづつ分解されていく病、全身から血が滲み出る病、体中が癌だらけになり少しづつ壊死が進んでいく病。どれも、決して多いわけではないが、珍しいわけでもない病。「この町を統治する御方ですら頭を抱える事態だった。だが、大国のお偉方は、我々の味方はしてくれなかつた。奴らはこう言つた。

『穢れの病は裏切りの証。魔に加担する者どもの刻印。神聖なる我が国に、そのような町は不要だ』とね』

迷信深い人は、患者が苦しみぬく病について、それが魔女の仕業であり、魔に加担した証であると本気で信じていることがある。

プシュケはそんな迷信に寒気すら感じるのだが、人間の世界とうのはややこしくて、その迷信深い者の身分次第で、簡単に他人に迷惑が及ぶ。

これは、まさにその例だとプシュケは思つた。

「いざとなれば大国などそんなもんさ。だが、かといって、統治者すらお手上げだ。奴らは奴らで自分達の命を守るので精一杯さ。だから、俺なんかは、ただただ怯えて、泣き暮らしてばかりだつたなあ」

ところがだ、と宿屋の主人は新聞を畳み、プシュケを見つめた。
「そんな悪魔のような日も、たつた一日を境に終わつちましたんだ」「一日で……？」
宿屋の主人は深く頷き、顎を搔いた。そして、ぶつきらぼうに、告げた。

「勇者がお出ましになつたのよ」

55 ·

アマリリスはふらりと宿を抜け出して町を歩いていた。

何処かへ行く時は声をかけなければいけない。何時までに戻らなくてはいけない。そんな決まりは、全くなかつた。ただ、勝手に町を抜けて、独りで行方を暗まさなければ、後は本人の自由。本人の責任。アマリリスはそう思つていた。だから、誰にも決まりなんて押しつけないし、誰からも決まりなんて押しつけられなかつた。

半ば徘徊のように町を歩いていると、普通に歩くよりもずっと、その町の中身が見えるものだとアマリリスは常々感じていた。

町人たちが余所者になかなか見せない顔が、驚くほど簡単に見せつけられてしまうのだ。そして、その顔は、余所者がフィルター越しに見ることのできる安定した整つた顔ではなく、もつとドメステイックでがさつな、でこぼことした現実的な顔なのだ。

だから、アマリリスは町を歩く時、いつも客観的に町を見つめていた。

人間つておもしろい。

一步一步ふらつくように進み、辺りをさり気なく目に映していくアマリリスは、人々の作りだす世界を感じていた。この世界は、『嘆き』に満ちあふれている。『嘆き』は『嘆き』を呼び、段々と膨れ上がり、『恐怖』となつていく。

この『恐怖』こそ、アマリリスがよく知る魔物たちにとつての酸素のやうなものだった。

「一、二、三」

アマリリスはとあるアパートの前で、数を唱えた。そして、その青い目の色をすっと深めて、アパート全体を目に宿した。

「三匹……ね」

自然と笑みが浮かぶ。やはり、ここにもいた。この町に入った時の違和感はともかく、アマリリスにとっては彼らさえいてくれればそれだけで十分な程だった。

じつとアパートを見つめるアマリリスの姿に、次第にアパートの住人たちは気付いた。彼らの様子は、まさにただ事ではなかつた。アマリリスの正体について薄々感づき始めた住人たちが、わらわらとアパートから抜け出してきたのだ。人数は、十六、七人くらい。アマリリスが思うに、これはここアパートに住んでいるほぼ全員だろう。しかし、傍で遊んでいる子ども達の何人かはこのアパートの子どもかもしれないの、本当はもつと多いかもしれない。

ともかく、その十六、七人がアパートの住人であることが分かつたのは、話しかけられた時だった。

「あなた、もしかして、我々のアパートにて気配を感じるのですか？」

そう訊ねてきたのは初老の男だった。

アマリリスは流し目で男初めその場にいる全員を眺め、もう一度アパートに目線を戻した。しかし、口は閉ざされたまま。すぐに開く気配はまるでなく、住人たちとアマリリスの間に、冷たい一筋の風が吹き去っていくのが分かる程だった。その緩やかで息長い風がやんだ時、アマリリスはやつと口を開いた。

「そうね」

住人達の目の色が変わった瞬間だった。

「……お願いだ。お願いがあるんだ」

住人達に取り囲まれる瞬間、アマリリスはぼうつとアパート全体を見つめていた。

アマリリスは、彼らが何を求めているのか、何に困っているのかを分かつていた。

頼まれるというのは珍しいことではないし、頼む側がどんな状況にあろうと、アマリリスにとって、それは、至福さえ感じる遊びの誘いでもあった。

しかし、アマリリスは面白くなかった。

人間は困っているときはこうして、アマリリスの性癖と力を頼るくせに、いざ、怖いものがなくなつた途端、どんな大胆な行動に出るか判らない。

特に、討伐軍を名乗る魔女狩りの連中に下手に影響を受けていれば、頼みを見事に遂行してみせたというだけで厄介ごとにもつれるという可能性はおおいにあるのだ。

だから、アマリリスは、目の前で苦しんでいるだろう人々、三匹の人狼を含む彼らと関わりたいと思わなかつた。

変ね。

血が騒がない。確かに目の前のどこかに三匹も人狼が潜んでいるのに、全く追う気になれない。

意識的に人狼へ対する欲望を爆発させようとしても、体の力が抜けて、面倒な気持ちしか湧いてこないのだ。

人狼の体に留めなく流れている血も、いつか自分に裂かれるのを待つている肉も、アマリリスの冷静な判断力を打ち破り、その濃厚な味の虜にするには、魅力が足りなかつた。

アマリリスは目を細め、住人たちに告げた。

「あなた達のなかに、狼はいるわ

三丘を含め、住人たちが皆、動搖の色を浮かべている。アマリリスの言葉は、その動搖をさらに深めるものとなつた。

「でも、頼みはきいてあげられない。今のあたしに狩りなんて出来ないわ」

「待つてくれ……」

アマリリスが言い捨てて去ろうとした時、住人の一人が悲痛な声で呼び止めた。

「お願いだ、狩らなくてもいい。せめて、せめて、狼が誰なのかを……！」

アマリリスは再び振り返り、住人たちを見つめた。今ここで言ってしまうおうか。しかし、今すぐに人狼が他人の手で狩られるというのは、何だか癪な話だ。それよりも、しばらく経つて、また人狼を狩りたいという気持ちになるかもしれないじゃないか。

アマリリスは彼らを見つめたまま小さな声で呟いた。

「ヒントをあげる」

うつすらとした笑いを浮かべ、続ける。

「目立たない。頼れる。冷静。それが人狼というのよ」

告げおわると同時に、アマリリスは歩きだした。今度は誰に何を言わても、振り返りはしなかつた。

後は、彼らがたくましく生き残るのを待つだけ。

「気が向いたら迎えに来てあげる」

アマリリスはぼそりと呟いた。

あんなに人狼を前にして、自分の暴力的欲求がおとなしいまま動きださないというのは珍しいことだった。疲れているのか、満たされているのか、今のアマリリスにとって、彼らなどどうでもよかつた。

どうして自分があんなに人狼を求めるのかすら分からぬくらい、今のアマリリスには興味の湧かないものだった。

「いったい何日後のことかしらね」

アマリリスの呟きは、もちろん、彼らには届かない。

独りきりで外出しようとしたのに、とプシュケはランを見つめた。ランが心細いという事もよく分かる。ディアナもバステトも優しいけれど、二人とも個人主義ですぐに何処かに行ってしまう。本来、プシュケもその二人と同じなのだが、歳が近い上に、何処か行動に抜け目があるのか、必ずいつもランを見る係りとなってしまうのだ。そういう時は大抵、アマリリスは不在。残っているのはサファイアだが、彼女にランを預けるなんてプシュケにはとても出来ず、結局、ランを連れて外出というのが決まりとなっていた。

しかし、今回は、ディアナとバステトを見つけ出すべきだったかもしれないとプシュケは思っていた。というのも、向かっている先が、近づけば近づくほど物騒な噂の濃くなる場所であつたからだ。

それは、質屋や宿屋で聞いた、少し前の事件の話にまつわる場所。犯人である老婆の住んでいた場所と、犠牲となつた子ども達がそれぞれ住んでいた場所である。

プシュケが向かつたのは、好奇心だけでない気がしていた。何か、その場所に引き寄せられるものがあつたような気がしていた。だが、それが何なのかは分からぬ。しかし、進んでいけばいくほど、プシュケの足は止まりそうになつた。

老婆が住んでいたアパートでは、最近、奇妙な噂が流れているという。

それを教えてくれたのは、そのアパートから少し離れた場所の街路の住人たちだつた。アパートの者たちは何も語ろうとしないが、アパートの付近の住人たちから出回つた噂が、巡り巡つて様々な場所に流れていつてゐるらしい。

噂は奇妙かつ物騒だった。

夜な夜な悲鳴のようなものが聞こえるのに、アパートの者たちは聞こえていないとの一点張りであったというものであつたり、アパートの裏手から時々異臭がするという苦情であつたり、転居人が相次ぎ、その転居人たちの行方が分からぬといふものである。

プシュケが噂を聞けば聞くほど、ランを連れいくのは間違つていると思うようになつていた。

でも、向かう足を止めることは、もう出来なかつた。

「ラン、あなた、宿に戻りなさい」

プシュケはアパートが近づいた時に、ランに言った。

しかし、ランはプシュケを見上げ、首を振つた。

「わたしもそのアパートに何があるか知りたい。何だか放つておいてはいけない気がするの」

プシュケは呆れた。これが、他人の弓だけが攻撃手段のような者の台詞でなければ素直に引き下がれるのだが。しかし、ランが戻る気がないのなら、連れていくしか選択肢はない。

「そう言う事は、自分で自分の身を守れるようになつてから言いなさい」

ぐつと手を握り、プシュケはランを連れて、アパートへの道を歩き出した。

バステトは一人で町を歩いていた。

町がどのように賑わい、どのように栄えているのかに興味があつたからだ。ディアナでも誘おうかと思ったが、この集団は、全体的に個人主義なようで、団体行動でなくてよい限り、皆一人でいたいらしい。かくいうバステトもまた、誰かに会わせるよりも、一人で気ままに出歩く方が好きだつたりする。

しかし、近頃はブシュケに不満を訴えられることもしばしばだつた。ディアナや自分がさつさと出かけてしまうために、ランを看なくてはいけないという責任が圧し掛かってくるというものだ。それは少し悪い気もしたが、バステトはいつも外に出て、しばらく経つてからブシュケからの不満を思い出すのだ。

だから、結局、ブシュケにランを押しつける形で外出してしまつ。「冗談じゃねえぜ」

その都度バステトは開き直ることで、自分を正当化していた。頼みやすいのが自分しかいないという事が十分に分かつている。人間だといつても、猛獸に変身するディアナや、自分を食べようとしていたサファイアに、ブシュケが馴れ馴れしく頼みごとを出来るわけがない。だから、バステトにばかり不満を漏らすのだ。

「アリスさんよー、たまには自分で子守りをしろつてんだ」

バステトは溜め息混じりに漏らした。思えば、アマリリストランを気に入り、旅路に加えた時から、全くの放任主義だつた。獸の血が騒ぐのか、ランはディアナに心は開いても、甘えたりはしない。一番匂いの近い、バステトばかりに懐いたものだつたし、ディアナもまた、ランに過干渉はしなかつた。もしも、バステトまでがア

マリリスのように放任主義だったら、とっくにランは死んでしまっているだろう。それくらい、アマリリスの放任は酷い。

それが、プシュケが加わってくれたおかげで、やっとバステトの負担も軽減されたわけだ。もうこのままプシュケにプレゼントしてやりたいくらいなのだが、そもそもランはバステトのものでもない。アマリリスさえちょっとでも自分が連れていくと決めた者の様子に興味を持つてくれたら、と、バステトはさらにアマリリスへの不満を抱えていた。

「まあ、頼まれているわけじゃねえんだし、放つておいて何かあっても私のせいじゃねえだろ」「

バステトはそう自分に言い聞かせていたが、何処か腑に落ちなかつた。

放つておけないのは、周りからの圧力を感じているからとかいうものではなくて、もつと単純に、そうしなければならないと無意識に思っているからなのだろうとバステトは自覚していた。だからこそ厄介だった。

自分は自由に動き回りたいのに、彼らの存在を忘れてさえいればそれが出来るのに、一度思い出してしまえば、そして、叩撃してしまえば、こうして見守らずにはいられないのだから。

バステトはつくづく嫌になつた。

不吉な予感ばかりが頭の中をぐるぐると回つていて。プシュケがまだまだ子どもであることは分かつていただけれど、思つて以上に子どもだ。ランよりも少しだけ大人と言つだけで、まだまだ保護者は必要なのかもしない。

「だからって……もう、アリスのせいだぞ……」

旅路に加えたのはアマリリスだ。それに、この集団の中で一番の権限を持つている者がいるとすれば、それもアマリリスになる。彼女が何かを命令することがあれば、背くものなんていないだろう。勿論、それをつかえばランやプシュケに身を守らせる事だって可能なはずなのだ。

バステトは、見るからに怪しげなアパートに向かっていくプシュケとランを見つめながら、いよいよどうするかを迷いだした。止めるべきか、否か。しかし、何と言つて止めればいいのだろうか。具体的な理由が思いつかない。しかし、ともかく、彼らをアパートに行かせるのはよくない気がした。

「それはそうね。あんなに小汚いアパート、何もないわけがないもの」

心臓が止まるかと思った、というのはこういう時なのだと、バステトは生きてきた中で一番よく理解出来た。プシュケとランを尾行している間に、尾行されている事に気づかなかつたのだ。

そこにいるのが誰か。もし知つてゐる者だとしたら、声ですぐに分かるものだが、バステトにはすぐに分からなかつた。あまり声が記憶になかつたのかもしれないし、まさかここにいるわけがないと無意識に思つていたのかもしれない。

ともかく、バステトが振り返つた時に目に映り込んだのは、二つの青い宝石。

サファイアの目だつた。

アパートは古ぼけていて、まるで廃墟のようだつた。人が住んでいるらしいのに、まるでその気配がない。アパートの傍で無邪気に遊んでいる子どもたちの姿が不釣り合いで、それもまた不気味だつた。

「プシュケはここに来て迷つた。

自分が探るうとしているのは、ここにいる皆が早く忘れないのに忘れない事なのだと思つ。そんな複雑な物事に、余所者が軽々しく首を突つ込んではいけないという気がした。けれど、アパートを目にした途端、プシュケはその違和感に気付いた。

「ねえ、ここ、アマリリスは知つているのかな……？」

ランが呟いた。

「ラン、戻りましょう」

プシュケは声を潜めて言つた。関わつてはいけない。これほど危ないことだとは思わなかつた。ただ物騒なだけの場所ならばと思つたが、これは違う。余所者がたつた二人だけで来ていいい場所ではなかつた。プシュケはランの手を引っ張つて、来た道を戻ろうとした。その時初めて、目の前に一人の少年が立つてゐるのに気付いた。さつきまでアパートの脇で遊んでいた子ども一人だ。いつの間にか、プシュケ達の背後に回り込んでいたようだ。少年が口を開く。

「お姉さん達、ここに何しに来たの？」

他愛ない子どもの質問だつたのだろうか。プシュケにはそうは思えなかつた。彼の言葉の裏には、もっと切実な何かが秘められているという気がした。しかし、プシュケはそれでも、気付かなかつたとこうことにしておきたかつた。

「たまたま通りかかっただけ」

すぐに答えられなかつたプシュケに変わつて、ランが答えた。プシュケはランの手を強く握ると、その先を続けた。

「これから、もう戻るところなの」

だから此処を通して、という言葉を噛み締めて、プシュケは少年を見つめた。少年は両手をもぞもぞとさせてから、静かに肩を落とした。

「そう、そうか、お姉さん達、僕たちを助けてくれないんだ……」

「何があつたかは知らないけれど、わたし達じゃ力不足よ。もつと相応しい人に頼みなさいな」

「相応しい人……か……」

少年は咳くと、突然笑い出した。歪んだ笑みに含まれる感情は、怒りでもなければ、嘆きでもない。笑うという皮を剥いでしまえば、中には何の感情も含まれていない。そんな印象の笑いだつた。

プシュケは危機を感じた。けれど、彼の脇をすり抜けるには勇気が足りなかつた。

「ねえ、町の人たちに言いふらすの？」

「言いふらすつて何を……？」

何のことかは分かつてゐた。少年もまた、怖いのだ。ここに巢食う魔物よりも、民衆の方が。

「そうでしょ？ その方が手つ取り早いもんね。本当は、誰が人狼かなんてどうでもいいんだ。人狼さえいなくなつてくれれば、この人達がどうなつたつていいんでしょう？」

少年の形相が変わる。それは、子どもとは思えないほどの、恐ろしいものだつた。

「恐いから、殺すんでしょう？」

少年が叫んだ途端、プシュケは堪らず、アパートの扉を開いて中へと逃げ込んでしまつた。

逃げ込んだ後も、少年が追つてくるのではないかと不安で、暫く階段裏で隠れて様子を見た。プシュケもランも、少年の異様さに恐

れ、すぐに外に出ようなどと考えたくもなかつたのだ。
しかし、幾ら待つても、少年が追つて扉を開くことはなかつた。

住人に見つかる前に早くこのアパートを出なくては、そうプシュケは思ったものの、扉の先にさつきの子どもがいると思うと、なかなか出ていく勇気が持てなかつた。こうしている間にも時間は経ち、日が暮れてしまうと、この間に、プシュケはまだ階段裏から出ていくことすら出来なかつた。

そして、今この瞬間の不安は、目の前、廊下を挟んで先の、扉にあつた。

さつきから物音がする。住人が出てこようとしているのかかもしれないと思うと、プシュケの緊張は最高潮に達した。ランが動く僅かな音でさえも、プシュケの緊張を悪化させ、苛立ちを生んだ。かちやり、という音がした。プシュケの心臓が張り裂けそうになつた。直後、足音らしきものが響き渡る。いつの間にか閉じていた目を恐る恐る開けて見ると、それは、目の前の扉からのものではなかつた。上の階だろうか。

「そろそろ帰りたい……」

「しつ」

ランの咳きを制し、プシュケを身を潜めた。こここの住人だけには知られたくない。面倒には巻き込まれたくない。『恐怖』には巻き込まれたくない。そんな想いが、プシュケの身体を爆発させそうなほど膨らんでいった。

「狼の匂いがする……」

突然、ランの声が緊張を帯びたものになつた。プシュケははつとした。このアパートにて『恐怖』をばらまいている犯人。さつきから鳴り響いているこの足音は、その張本人のものなのだろうか。い

や、もしかしたらプシュケは、部屋の何処から漂つ匂いに反応しているだけかもしれない。だが、いずれにしても、やはりここには 。

「どうじみつ、どうやって帰ろう、どうしたらいいんだろ……」

プシュケの思考はもはや、口から漏れ出していた。

弓矢は宿。今のプシュケにあるのは、頼りないナイフと、己の足と、ランの治癒能力だけ。ナイフがあつても『がなければプシュケは、ただの少女にすぎない。

その時、ランは声を殺してプシュケに縋りついた。プシュケがその姿に気を取られた直後、アパート全体が揺らがされた。悲鳴だ。それも、この上なく切羽詰まつた声。まるで、断末魔の様なそれ。その途端、様々な場所の扉が開き、足音が響いた。

そして 。

「助けて！ 開けて！ お願い！」

扉を叩く音、ドアノブを乱暴に回す音、扉のきしめく音、何処かの部屋の中にある女性を呼ぶ声。住人達は、必死に彼女に呼び掛けていた。

「ここを開けるんだ！ 鍵をあけてくれ！」

「誰だ！ 誰が前にいるんだ！」

「窓から逃げろ！ 軽傷で済むはずだ！」

どれも重なつていて、瞬時には把握できない。やがて、尋常でないほど激しい悲鳴が上がつて、急に静まり返った。

部屋が静まつた理由、プシュケにはすぐに分かっていた。

人狼が……。

ここにいる。

61.

バステトとサファイアがアパートを訪ねた時、その中は静まり返つていた。

この中の何処かにプシュケとランが入りこんでいったのは間違いない。さほど広くもないアパートだ。すぐに見つかるだろう、とバステトは軽い気持ちでプシュケとランの名を呼ばうと口を開いた。と、その時、サファイアの手が、バステトの口を塞いだ。

「静かに」

サファイアの鋭い囁きが、バステトに瞬時に物事を把握させた。サファイアが剣を抜く。まだ、帯刀していたのか、と問うまでもなかつた。見知らぬ土地にて、禁止されていない限り得物を手放さないのは、当たり前のことだ。それを忘れたバステトが愚かなだけのこと。

サファイアはちらりと各階の廊下を見渡すと、独り言のように呟いた。

「住人はいる。でも、息を潜めている」

バステトにしか届かないくらいの小さな声だった。バステトも今度は極小さな声でサファイアに訊ねた。

「プシュケとランはまだ此処にいるのか？」

「分からぬ。だけど、あの子の気配はする」

あの子、がプシュケのみを指している事、それが普通に考えたら不気味な意味を秘めている事は、明らかだった。だが、今の状況で、サファイアの力を借りずしてプシュケとランを見つけることは不可能だとバステトは思った。

ふと、サファイアは一方を見つめ、目を細めた。その先、二階右

奥の部屋。扉が開いている。

「誰かが私達を見ている」

何処かの扉が閉まつた。注目していいた場所の扉ではない。もつと違つ場所だつた。

サファイアは不敵な笑みを浮かべ、剣を光らせた。

「アマリリスが好みそうな目線」

その言葉の意味を、バステトはすぐに察知した。もしもその勘が当たつていたとしたら、ここはどんでもない場所だ。猜疑心に苛まれ、『恐怖』に固められる窮屈な場所。バステトはもう一度辺りを見渡した。この場所に、巢食つている者がいる。アマリリスの力なら、すぐに打ち破れるかもしれないものがいる。それまで、ここの人たちは、どれだけ苦しむことになるのだろう。

「サファイア、戻ろう」

バステトの声に、サファイアは首を傾げる。

「どうして？」

「どうしてつて、アリスを呼びに行くんだよ。アリスがいれば、人狼なんてさつさと退治できるだろ？」

バステトの言葉に、サファイアは小さく笑つた。

「彼女が話を聞いてのこのことこちらに向かうかしら」

「あいつは人狼を殺すのが好きなんだろ？ 喜んで退治するんじやないのか？」

「そうは思わない

「なんで？」

「だつて、まだ、環境が整つていらないもの」

サファイアは笑みを殺し、冷たい声でそう言つた。バステトには彼女の言つている意味が分からなかつた。だが、サファイアはなおも言つ。

「環境が整わないと、彼女は人狼に手を出さない」

断言。予想ではなく、確信をもつた断言だつた。バステトにはサファイアの考えている事が分からなかつた。だが、サファイアは搖

らぎない確信を持つている。まるで、自分の気持ちを告げるようだつた。

「どうして、そつはつきり言えるんだ？　言ひてみないと分からないじやないか」

「来ないわ。だつて……」

サファイアは剣の矛先を床につけ、吐息交じりの喘ぐような声でぼそりと呟いた。

「ゆつくり殺せないから」

言葉に心臓を射抜かれる事があるとしたら、今の状況がそれだ。バステトはそう思った。

もどかしいことに、サファイアのこの一言に、反論できなかつた。アマリリスは来ない、何故なら、もつと事態が酷くなつていなければ、人狼をゆつくりと殺して楽しむ事なんて出来ないから。人に害をなす人狼を退治する事すら異端とされる世の中に置いて、安定した場所も得られずにそれを思う存分楽しめるという状況があるとしたら、それは、世の中自体が壊れている時。

圧力が、魔女を殺せない時。

それでも。

バステトは唇を噛んだ。

「それでも……」

サファイアをじつと見つめ、バステトは呟いた。

「私はアリスを呼んでくる」

ついに日が落ちた。

プシュケにとつては、一番来て欲しくない瞬間だった。ランにとつても同じだらう。いや、ランに至つては、そんな瞬間を考えるまでもなく、恐ろしさに震え続けていたかも知れない。

プシュケとランは、階段裏の倉庫に閉じ込められていた。人狼騒ぎがあつた直後、住人に見つかってしまったのだ。そして、捕えられた。理由は分からぬ。住人達も錯乱していたし、怪しかつたのは確かだ。しかし、もし犯人だと思っているのなら、プシュケ達では明らかに不可能であることに、誰も気付いてくれなかつた。

倉庫の中は真っ暗だつた。プシュケには、ランが胸にしがみ付いていることしか分からぬ。絶えず聞こえる震えた吐息がランのものである事しか分からぬ。この場所にいるのが、本当に自分とランの二人だけなのかすらも、プシュケには分からなかつた。

「出して！ お願い！ あたし達は違うの！」

ランが震えた声で叫んだけれど、近づいてくる足音は聞こえなかつた。

「どうしよう、あたし達、どうなつちゃうんだらう」

縋りついてくるランを、プシュケは手探りで撫でた。

外出した時は、ランがついて来た事を疎ましく思つていたのに、今はまるで反対の気持ちだ。暗闇の中で、プシュケはランの存在に感謝すらした。それに、この状況だからこそ、ランに宿る暖かな気が、いい具合に身に沁みてくる。閉じ込められているうちに、気力も体力も消耗してしまつてゐるのだろう。ランから感じる暖かな気だけが、今のプシュケの光だつた。

「大丈夫、きっと、誰かが助けてくれるわ……」

自分で言つていて、鼻で笑つてしまいそうな言葉だと思った。誰がここにいると気付いてくれるだろう。助けてくれるなんて、どうして期待できるだろう。誰も気づかないだろうし、住人の気が変わらない限り、この状況を打破するなんて無理だ。そんな事、分かつていた。

それでも、プシュケは、ランに言い続けた。

「すぐに助けは来てくれる。どんな形であれ、わたし達がここで野たれ死ぬはずがない」

だつて、最期は決まっているもの、とプシュケはランをぐつと抱えた。真つ暗で見えないけれど、ランはちょうどプシュケの胸元にいる。このまま取り込んでしまいたい程、ランの身体は暖かかった。そんな時だった。

すぐ扉の向こうで、物音がした。

「誰？」

プシュケの鋭い質問に、扉の向こうの者は、吐息を荒げ、やがて小さく嗤つてみせた。何の感情も窺えない動作だ。プシュケは不信感を募らせて、ランを抱いたまま、扉から少し離れた。

「誰なの？」

「誰、と名乗つても、君には分からぬだろ？」

若い男の声だった。もしかしたら、プシュケともそんなに歳は変わらないかもしない。どうであれ、プシュケには馴染めない声だつた。少し聞いただけで、うんざりとする。

「でもまあ、名乗つても支障はないだろう。僕はロノア。こここの住人さ」

ロノアと名乗る少年がくすくすと笑つた。その声を聞いて、ランは一層怯えた。その反応、もしかしたら、とプシュケは悟つた。恐る恐る扉の向こうに訊ねてみた。

「あなたは、人狼？」

「はい、と出るか、いいえ、と出るか。反応を見ようと思った。口

ノアは一瞬間をあけると、再び静かに笑い始めた。「ごく自然な笑いだつた。

「面白い質問だね。人狼は君じゃないのかい？」

「違う。わたし達はただここにいただけ。人狼は別にいるの」

「普シュケの訴えに、ロノアは「うん」と頷いた。

「そうかもね。でも、明日にはそうじゃなくなる。明日、君達は町に晒されて人狼退治に乗つ取つた方法で処刑される。死んだ後の君たちは人狼の一昧という事になるのさ。そして、本物の人狼はひとつりと転居して、別の場所で狩りを始める」

「そんなバカな」

普シュケの叫びも、ロノアは嗤いで封じ込めた。

「バカみたいだろ？ だけど、そうなるつて決まったのさ。君たちは不運だつたんだよ。もつと違う場所に興味を持てば、巻き込まれずには済んだのにね。そして、僕は運がいい」

「あなた、やつぱり人狼なの？」

「人狼になりたい、そう思う事はしょっちゅうだよ」

ロノアは即答した。

「僕が言つているのは、君たちのおかげで、僕が処刑されずに済んだつて事さ」

その言葉に、普シュケははつとした。人狼狩りがここで始まる。ロノアが殺されるはずだったのが、自分達になつた。つまり、明日の朝には、決まつてしまつ。

「じゃあね、僕の命の恩人たち」
ロノアの声が響いた。

この世で一番哀れな匂いのするアパート。

サファイアの持つた感想は、そのようなものだつた。この匂いに覚えがないわけではない。何度も何度も嗅いできた匂い。この匂いは、サファイアが求める快楽のすぐ隣に、いつも寄り添つているものだつた。サファイアとは関係のない、取るに足らない匂い。だが、今は違う。

違う事がよく分かる。バステトが去り、サファイアはただ一人でこの場所にいる。単身で森に追いやられた生活を送つてきたから分かる。この場所は、魔のうろつく野外と何ら変わりない場所だ。むしろ、これほど追手に優しい環境は、ここに巢食う魔物にとつても嬉しいものだつただろう。

遊んでいるのか。

サファイアはアパートの空気を胸一杯に吸い込んだ。

まるで、この場所自体に漂うあらゆる者たちの感情までもを体内に取り込んでしまえるかのような幻想。サファイアはその奇妙な心地よさと、危機を察知する本能からの緊張を以て、静かにアパートを歩き出した。

確かにここに、プシュケがいる。確かにここに、ランがいる。魔物であろうと、人間であろうと、自分以外の者がプシュケに手を下すなど、サファイアには許せない事だつた。彼女の命は自分のもの。そのためには、リヴィアサンの息の根を止めることをも辞さない。サファイアのその独占欲は、恐怖よりもずっと冷たく、そして、大きく燃え盛つていた。

プシュケ、何処にいるの？

ここに住まう人々もいるはずだ。だが、実際の中は廃墟のようだつた。いや、廃墟とも違う。この場所からは、生を感じられない。しかし、かつて生のあつたものが朽ちたという感覚すらもない。まるで、ここは時を止めてしまったかのような、荒んでいく闇から逃れたいが為に、永遠に晴れない影の中に閉じこもってしまった世界。

サファイアの青い目には、そう見えた。

何処かに隠れているの？

アパートの中を歩き始めて、最初に目につけたのは、入つてすぐの大階段の裏のスペースだった。そこには物置のような小部屋があつた。長い間使われていないというわけでもなさそうで、周囲は埃もなにも被つていらない。ためしに開けてみると、中はすんなりと開いた。

誰もいない？

剣を構えながら、サファイアはそつと物置の中に入つた。閉じ込められる事はない。この扉、鍵が壊れていてしまらないのだ。錠前もなければ、扉自身、歪んでいてきちんと閉まらない。

「ん……？」

サファイアはじつと扉の下部を見つめた。傷がついている。これが原因で扉が閉まらないのだろうと推測できるが、その傷は異様に新しく見えた。

「最近開けられたばつかりってわけね」

サファイアがその傷にそつと触れた時だった。

空間自体がねじ曲がりはじめたかのように、視界が揺らぎ始めた。その揺らぎは、サファイアの身体を芯から突き上げ、何か熱いものを体中に送り出していく。徐々に意識が朦朧とし始め、黒くて大きな影が、自分を包み込んでしまうような幻想を、サファイアの瞳が一瞬だけ捉えた。

その幻想は、しかし、すぐに打ち消されてしまった。

嘘のように辺りは静まり返り、何事もなかつたかのようにサファイアを取り囲んでいる。だが、代わりにサファイアの耳に届いたの

は、女の悲鳴だった。

プシュケとランは、アパートの一室で荒くなつた呼吸を必死に整えていた。プシュケはだが、この息が整う時は、まだもつと先の事だろうと理解していた。

「こんなことして、本当に大丈夫なの？」

プシュケは不安で仕方なかつた。

過ぎるのは、さつき扉の前で冷やかしにだけきた狼になりたいとか言つていた青年の声。今この瞬間でさえ、彼の気配が消えた時からそれほど経つていないのだ。これで、本当に大丈夫なのだろうか。プシュケが心配しているのは、自分達ではなく、寧ろ、目の前にいる男性の方だった。

「だつて、あなたもここのはじめなんでしょう？」

プシュケとランを連れだしたのは、見知らぬ男だった。中年に届くか届かないかくらいの、物静かな男。彼は説明もなしにプシュケとランを物置から出し、そのまま五階端の部屋へと導いた。導かれるままについて来たプシュケとランだが、彼がここのはじめで、他の者たちに無断で自分達を連れだしたといつのは、男から伝わつてくる雰囲気ですぐに分かつた。

だからこそ、男の部屋が五階にあるといつのも、恨めしい事態だつた。

何処かで何かの物音が聞こえるたびに、プシュケもランも心臓が止まつてしまいそうだった。怖いのは住人だけでない。このアパートの何処かに潜んでいる人狼が一番怖い。

賢い人狼だつたら、自分達を狙つたりはしないだろう。もつと関係のないものを餌食にして、その罪を疑わしい自分達になすりつけ

るはずだ。そう分かつていいのに、それでも、人狼に出来わすと考えると、理性なんて吹っ飛んでしまう。

だから、落ちついて男の話を聞くまでには、結構な時間を要した。

「さて、誰かが外に出たな……」

男は小さく呟くと、扉越しに廊下を窺つた。

せつかく落ち着いてきた呼吸が、さらに荒くなる。プシュケは嫌になつた。

「……いな……ぞ……！」

微かに、声は聞こえた。

「お……い！ 誰……あいつらが……ないぞ！…」

段々と声は近づいてくる。同時に、複数の扉が開く音もした。

「大変だ！ あいつらが、逃げたぞ！…」

やつとはつきりと声が聞こえた。

もうばれたの？

プシュケは無意識に、ランの手を握つた。

「あいつら、どうやって逃げたんだろう？ やつぱりあいつらが、人……」

その時、声が不自然に途切れた。遅れて聞こえたのは、階段中を共鳴し合つ悲鳴。そして、乱暴に扉を閉める音と、何か水のようなものが勢いよく流れ出る音、そして、満足そうな笑い声だった。外で何か絶対的に嫌な事が起きた。

音を聞いただけで誰にでも分かる事だつた。

「狼狩りの魔女が立ち寄つた……」

さつきまでと違う声がした。それは、比較的、若い声に聞こえた。

「姉さん、あいつの事なんだろう……？」

独り言のようだつた。沢山の悲鳴を浴びながらその声は、新しい悲鳴を作つた。プシュケとランがじつへつと聽けるのは、ここまでだつた。

「隠れろ！ 奴は皆殺しにする気だ！」

プシュケとランは、慌てて部屋の奥へと逃げ込んだ。

アマリリスは非常に不快だった。

何がどのくらい不快なのか、考えるだけで切りがない程の気持ち悪さだ。たつた今帰宅したバステトがその張本人というわけではないのに、ついあたつてしまいそうになる。すぐ傍にいるディアナだつてそうだ。今のアマリリスには、自分を含めた全ての存在が腹立たしかつた。

それもこれも、町を歩いていたときに、あんなアパートなんて見つけてしまったからだろう。

もしも、あのアパートを知らなかつたら、こんな不快な思いはないで済んだ。

「で？ サファイアは残つたわけ？」

アマリリスは冷たくバステトに訊いた。

「ああ、プシュケとランを助け出すつて……」

「ランはついでね」

「そろは言つては……」

アマリリスの言葉に、バステトは否定しよつとしたが、途中で口籠つてしまつた。誰でもわかる。サファイアにとつて今、一番大切なのは、プシュケ。それも、いづれ自らの手で殺すという事を前提に守るという狂つたような信念を持っているらしい。

「そりやあ、他人に獲物を横取りされるのは無様ですものね」

アマリリスは吐き捨てるようにそう言つた。

気に入らないのは、自分が見捨てたアパートに偶然とはいえ噛みつかれてしまつたという事だけじゃない。サファイアの態度だ。どうせ来ないと彼女は言つたという。アマリリスの事を見通したつも

りにでもなっているのだろうか。とはいっても、確かにブショウケとランが迷い込んだくらいだったら、助けに行く気なんて起きなかつたかもしれない。

だからこそ、気に入らないのだ。

人食いのくせに……。

サファイアに見透かされた事が気に喰わない。そして、その予想を裏切るために、自分の意思を曲げるという事も気に入らない。なにより、あのアパートの住人達にまた会いたくないのだ。あの場所にいる人狼なんて、アマリリスは興味なかつた。

しかし、このままだと、サファイアの言つた通りという事になつてしまふというわけだ。

バステトとディアナが見つめてくる視線が、今のアマリリスにはこの上なくうつとおしかつた。

「悪いわね、バステト、ディアナ、でもあたしは、どうしても行きたくないの」

「どうして？」

ディアナが縋る様に訊いてきた。

「人狼でしょう？ あなたが求めている人狼なんじやないの？」

「そうね、あれば人狼。だけど、あたしが殺したい程美しいものじゃない」

「そんな……」

バステトが震えながら拳を握つた。アマリリスはその様子を冷静に見つめ、小さく溜め息を吐いた。

あのアパートにいる狼。あれは、最後の仕上げを整える前の狼だ。アパートを壊滅させて、そこから町のあちこちに被害を拡大させていく。あの狼が美しくなるのは、もつと後。沢山栄養を付けて、毛艶がよくなつた狼だ。

寧ろ、アパート全員分くらい栄養を付けて貰わないと、面白くない。

アマリリスはそつとまで思つていた。しかし。

「でも行くわ

アマリリストはつまらない表情で吐き捨てた。

「サファイアなんかにそう思われるのは、癪だもの」

悲鳴が随分と止んだ。

そんな不吉な事実を、プシュケは捉えた。部屋の鍵はしつかりと締められているけれども、扉をぶち破る音も何度も聞こえた事が、ずっと頭に残っている。

プシュケはランと共に寝室の隅に隠れていた。この部屋の住人で、あろう男の姿は見当たらない。恐らく、プシュケ達とは別の場所で息を潜めているのだろう。廊下から聞こえる音に耳をそばだてて、プシュケはどうにか呼吸をしていた。自分とランの吐息と鼓動が、こんなに物音をたてるものだつたなんて知らなかつた。きっとこの音は、廊下にまで聞こえているに違いない、プシュケは何度も何度も自分に言い聞かせた。

そうしていつづけに、足音が聞こえ始めたのだ。

足音はゆづくと進み、部屋の端々から扉を叩く音、ぶち破る音、争う音、悲鳴、静まつた音を作りだして、また廊下へと向かっていく。それを繰り返し、繰り返し、段々とこの部屋へと近づいている。このアパートの中で、生きている者はあとどのくらいいるのだろうか。

何かが部屋の扉を大きく叩いた。

来た。

何度も何度も扉を叩く。

扉はそれほど頑丈なものではない。人狼くらいの力なら、簡単に壊すことが出来るだらう。せめて、この扉が鉄で出来ていたら。プシュケは思わずランを抱きしめて、恐怖した。今の彼女にはもはや、この部屋の持ち主や、どうやってここを回避し、どうやって

逃げるかという考え方など浮かんでいなかつた。あるのはただ、パンツ。

木材がねじ切られる音。プシュケにも、ランにも、それは怖い音だつた。特に、樹と共に過ごしたランにとつて、その音は、生きている者の肉をねじ切るようなそんな想像を搔き立てられる程恐ろしい音に感じた。

荒い吐息と共に、息を止めたくなるほど生臭い空気が流れ込んできた。濃厚すぎる鉄の匂いが、部屋に充満していく。これが何物なのか、プシュケには痛いほど分かる。

サファイアが好みそうな匂い。

プシュケは気付けば嗤つていた。自分に對して。この場所に對して。人狼に對して。嗤うしかない。もう、生きていられるわけがない。武器も持たずこんなアパートに迷い込んだ自分がバカだつたのだ。それも、ランまで巻き込んで。

あなたに食べられずに死ねるわ。

ざまあみろ、とプシュケは悪態を吐いた。もう死ぬのは怖くない。ランを道連れに自分はサファイアとの戦いに勝利するのだ。プシュケの思考は段々と固まつていった。

寝室の外で、動きがあつた。

何者かと何者かが争う音。

きっと、ここに招いてくれた男と人狼だろう。プシュケは呻いた。彼が助かるわけがない。人間が人狼に敵うなんて思えない。そんな事出来る者がいたとしたら、それは、魔女に近い者。サファイアのように、人間でありながら魔を宿す者だ。もしくは、プシュケ自身のようだ、ヒトでない者。

しかし、そのような者は、ひと目見ただけで大体分かるものだ。あの男は、普通の人間にしか見えなかつた。

「悔しい」

プシュケは呟いた。武器さえ持つていれば、彼を助ける事が出来る。武器さえ持つていれば、人狼なんて怖くない。武器さえ持つて

いれば、武器さえ持つていれば……。

「悔しいよ、ラン」

ランは何も言わず、閉ざされた扉の向こう、物音の聞こえる方向を凝視していた。音と音がぶつかり合い、呻きと呻き、唸りと唸り、咆哮と咆哮が弾き合つて空気の波を乱す。その様子を、見えない場所から、必死に見つめていた。

プシュケは背中からランを抱き、静かに寄り添つた。

こうなつては、一人とももう駄目だ。プシュケはそう思つていた。プシュケに出来るのは、『』。ランに出来るのは、癒し。所詮、人狼に癒しの価値なんて分かりはしないのだ。

しかし、ランの放心は、プシュケの思つていたものではなかつた。

「この匂い……」

ずっと黙つていたランが、小さく呟いた。

「この匂いは……」

扉の向こうを見つめたまま、小刻みに震える。

プシュケはその様子を見つめ、やつと扉の向こうの事態に気づき始めた。プシュケには匂いなんて分からぬ。見えない場所の様子なんて、しつかりと掴めない。けれど、気付いてから見つめると、目に見えなくとも感じられるものが、段々とはつきり輪郭を成していく。それは、プシュケだからこそ、素早く捉えられる、そんな存在だった。

見えない場所に光り輝くのは、真つ青な宝石。

「サファイア……？」

「サファイア！」

その瞬間、プシュケは自分でも理解出来ない行動に出た。あんなに強く掴んでいたランの手を放し、人狼の居るはずの扉のノブへと手をかけたのだ。

「プシュケ、駄目！」

ランがすぐに飛びかかってきた。自分とプシュケを守るための必死の抵抗。この扉を開けることは、ランにとって、確実な死を意味する行為なのだ。しかし、プシュケはそんなランを押しのけてしまつた。自分でも制御出来ない程の衝動が、彼女に扉を開けさせようとしていた。

「ラン、隠れていって。危なくなるわ」

「じゃあ、開けないで……！」

「それは出来ない」

プシュケはそう言つと、ノブをあつさりと回してしまつた。自分でも制御出来なかつた行動。目に映つた人狼への恐れの反応だけが、今の自分のなかで一番理解しやすいものだつた。『恐怖』そのものを身にまとつた狼は、本来の姿でそこにいた。ただ、その姿は、絶対的捕食者の形ではなかつた。

プシュケの目の前にいたのは、人狼よりも確実に自分の肉を狙う存在だつた。かつて、他のどんな魔物よりも狡猾で残忍な方法で陷阱ようとした悪魔。そして、今でもプシュケの心を縛つている愛しい程憎らしい女が、其処にいた。

「サファイア……」

「プシュケ、中にいなさい」

重みを帯びたその声は、いくらかの疲れを隠せていなかつた。手に持つている剣の血潮を払い、サファイアはそれを煌めかせ、人狼を威嚇していた。

守ってくれている？

「プシュケ、死にたくなかつたら中にいなさい。リヴァイアサンを倒す前に、お前を失う事態なんて、私は認めない」

人狼は唸り、新たな獲物であるプシュケに目をやり、薄つすらと笑いを浮かべた。

「なるほど、そのスケープゴートがお前の財産つていうわけか。そこまで守るからには、さぞ味に期待しているのだろう？ 魔の者め」

「お前とお喋りするつもりはないの。今すぐここを去りなさい。腐るほどたくさん食べて、お腹は一杯になつたでしょ？」

サファイアの声は、いつも以上に冷たく感じた。

だが、後ろ手にプシュケを庇うその手の温もりは、驚くほど暖かかつた。

「残念だが、そうでもないんだよ。ただの人間ばかり食つているとね、喰つても喰つても満足できなくなるんだ。お前達のような、ひと癖ありそうな味が恋しくなるんだよ」

人狼の嗤い声はこの上なく不快なものだつた。アマリリスさえも見向きしないような、美しくない狼。ただの魔物。こんな魔物に食べられて死ぬなんて、プシュケは嫌だつた。

「隠れてなさい」

サファイアの一度目の忠告に、プシュケは息を呑んだ。

「」さえあれば、こんな敵、怖くもなんともないのに。

「ランもいるんでしょう？ あなたが守つてあげなさい」

サファイアの言葉の背後で、人狼の目がきらりと光つた。

プシュケの頭の中は真っ白になっていた。

自分の『』、サファイアの剣、人狼という者は、もつとひ弱なものだと思っていたからだ。サファイアの剣は、プシュケにとつて絶対的強さの象徴だった。町に害をなす魔を弑する太古から伝わる退魔の剣。それが、サファイアの持つ古ぼけた剣の名前だった。見た目はぼろいが、刃毀れもした事がない。どんなに頑丈で固い肉を切っても、血糊を払えば、元の輝きを必ず取り戻す不思議な剣。

そう、プシュケはこの剣さえあれば、サファイアは無敵だと信じていた。

だから、彼女がヒトの肉を好む人間の皮を被つた悪魔だと知つた時、逃げるという事しか考えられなかつた。

「サファイア……」

プシュケの目の前に落ちている剣。それが、サファイアの命の要。一度、自分の命を左右した者の存在が、この剣にかかつてゐる。しかし、プシュケは恐ろしくて動けなかつた。この事態は、プシュケのせいなのだろうか。サファイアが、今、人狼に押さえつけられているこの状況は、プシュケのせいなのだろうか。

「プシュケ……ランを連れて逃げなさい……」

「サファイア」

「私以外の奴に喰われたら承知しないわ
ここで逃げる？」

プシュケは答えに窮した。サファイアの事は憎かつた。自分を騙し、殺そうとしたヒト喰いの事など、理解出来ない。けれど、このまま人狼に喰われるだけの彼女を放つて逃げる事なんて、プシュケ

に出来るだろうか。

「だつて、私は……。」

「ラン、隠れているの？」

プシュケは背後に潜むランに声をかけた。吐息だけが聞こえる。人狼に怯え、震えているのだろうか。たまに嗚咽のようなものも聞こえてきた。無理もないだろう。ランにとつて、この状況は、死に包まれている。彼女は自分よりも、ずっと無力なのだ。

「独りで逃げるか、このままそこで隠れているか、自由よ。でも、逃げるなら、私が奴の気をそらしてあげるから、早くしなさい」

返答はない。

プシュケはじっと人狼を見つめた。人狼も、プシュケを見つめている。彼にとつてサファイアは、人質なのだろうか。それとも、サファイアのみが注意すべき敵と認識しているのだろうか。時空が端々から凍りつきそうな状況で、プシュケはそつとサファイアの剣を拾つた。

「プシュケ！」

その直後、サファイアの怒声が、絶叫に変わつた。人狼が彼女の腹を踏みつけたのだ。

あの場所は、確か……。

「痛むのか？ ほう、冷徹な奴だと思ったが、弱点があつたか」

追放された時につけられた古傷。あれでサファイアは野たれ死ぬだろうと誰もが思った。プシュケはその光景を目にしてから、かの町を去つたのだ。あんな事をするような者達の町に、これ以上住む事なんて出来やしない。

「サファイア……！」

プシュケは剣を握りしめた。剣なんて使つたこともない。けれど、自分が使つしかないのだ。人狼はそんなプシュケを見つめ、笑みを作つた。

「お前のような小娘に何が出来るというのだ」「やつてみないと分からぬじやない」

プシュケは剣を払い、人狼を睨んだ。

「サファイアを放して！」

人狼は笑みを浮かべたまま、大きく吠えた。遠吠え。仲間を呼ぶ声。そうだ。処刑も肅清も何もまだ行われていないようなアパート。一匹だけでこの中に潜んでいるなんて思えないのだ。

「すまないね、お嬢さん。こいつも、お前も、奥に潜んでいる奴も、皆仲良く俺達の腹の中さ。さあ、それまでせいぜい楽しませてくれよ」

足音がする。それが複数なのか、単数なのか、聞きわける暇なんてプシュケにはない。ただ、怖さと緊張と怒りだけが、プシュケの身体を支配していた。

サファイアはそんな彼女を観て何か呟いていた。だが、何と言つているのか、プシュケには届かなかつた。

「さあ、かかつておいで、どうせ、お前なんて一瞬でばらばらにされるしか道はないのだけどね」

プシュケは大きく息を吐き、震える足を踏み出した。サファイアに襲われた時はうまく動かなかつた足が、しつかりと動いた。たまたまつすぐ人狼を追つて、プシュケは剣を突き出した。人狼も鋭い爪を突き出して、プシュケに襲いかかつた。

その時だつた。

プシュケの全身に、血しぶきが襲いかかつてきたのは、

一瞬で視界は開け、目の前にふさがつていたはずの黒い物体は、跡形もなく消え去つっていた。真つ赤な色と、吐き気すらする匂いの向こうで息を切らしながらこちらを見ているのは、辺りを染める血しぶきに負けないくらい赤い服を着た者だった。

人狼騒ぎは瞬く間に広まつた。こうなつてはアマリリス達のいる場所はない。人狼を残らず軀にしたのはアマリリスだが、そんな彼女を魔女として偏見に満ちた目でしか見られない者が、人間の大多数を占めるものなのだ。特に、かつてここでは事件があつた。魔女狩りの剣士に救われたという、事件。

アマリリスとて、町全体を相手にのんびりとしてはいられなかつた。

「さあ、行きましょう」

ここにはもう居られない。比較的大きな町で起こつた人狼騒ぎの噂は、伝染病のように広まつていくのだ。それを聞きつけた魔女狩りの者たちが来るのは、時間の問題。

アマリリスはこれ以上、あの者達と関わりたくなかつた。
だって、彼らは……。

「アマリリス、ごめんなさい」

ふと、裾を掴む者の頭を、アマリリスは無言で撫でた。ふわふわとした耳が手に当たる。ランの大きな目が、アマリリスを見上げていた。一足遅かつたら、確実に喰われていただろう。あのアパートの殆どの者たちのように。

「あなたが謝ることないわ……ねえ」

アマリリスの言葉に、身を強張らせるのはプシュケだつた。彼女は言葉に窮しながら、じつとアマリリスを見つめ、困つたような顔をしていた。プシュケが悪いとは、アマリリスは思つていない。運が悪かつたそれだけだ。それに、あのアパートに人狼が潜んでいると知つた時点で、次の日には去る予定だつた。今この世の中では、

人狼がいる事と、魔女が狩られる事は、同一の事。そのくらいに考えておいて間違いはない。

「プシュケ、あなたもよ。ただ、もつと慎重になりなさい」

アマリリスはそれだけ告げると、さつさと歩き出した。この言葉がどのくらいプシュケに伝わったかという事は、アマリリスにどうはどうでもいい事だった。所詮、これ以上、アマリリスには何もできないし、するつもりもない。それ以上の必要性も感じなかつたのだ。

今はともかく、先の事を考えるだけ。

何処へ向かい、何処へ消えるか。それを考えるだけ。

「アリス……」

ディアナの問いに答えぬまま、アマリリスは空を見上げた。町から離れてすぐ、だだつ広い平原の端から見える蒼い空。滴が垂れるように着色されたそれら空間は、アマリリス達を囲むように見下ろしていた。その薄暗さは、町の近くのみ目立ち、平原より向こうは明るくなつてきている。

早くこの場を去らねば、とアマリリスは思った。この薄暗さは『恐怖』なのだろうか。

「あなた達の身体を蝕む煙が、濃くなつてきたわ」

アマリリスの瞳に、汚れた姿が映り込む。

彼女の求めているのは、もつと美しいもの。比べる事すら愚かな程、美しいもの。それは、もつこにはいない。もつと美しいものは、他の場所にいる。

「さあ、いきましょうか」

ゲネシスが人狼に出会ったのは、なにも初めてというわけではない。けれど、今までゲネシスにとつての人狼とは、魔物の一つに過ぎなかつた。人間の皮を被り、人間のふりをしているが、所詮は魔物。その思慮、觀念など、どうでもいい事だつた。

だが、今、目の前にいる人狼は、恐ろしい程違うものだつた。剣を構え、威嚇の意を示すゲネシスの姿なんてまるで見えていない。その目に映つているのは、もつと遠くの何か。美しい容姿を凍りつかせ、恐ろしい配色で彩つっている何者か。それを、怨みがましく見つめていた。

ゲネシスは剣を下げた。

目の前の人狼は動こうともせず、その美しい宝石のような目で、虚空を見つめている。ゲネシスの存在を知りながら、排除しているようなその意識。草原に無数に生える雑草に何の疑いも持たないよう、ゲネシスの存在に疑いを持たずに無視を続ける。

彼女は、自分の目の前の事よりも、ずっと高次の物事に注目していた。それも、怨みの籠つた目で。その唸り声は、まさに狼そのもの。彼女の美しさに相反しているが、それはそれで心苦しくない音色だつた。

「お前、恨んでいる?」

ゲネシスの問いに、人狼の目がちらりと動いた。それはやはり、ゲネシスの存在にずっと気付いてたという目。敢えて無視をしていたという目だつた。

「何かを恨んでいる。ニンゲン? それとも、別の何か?」

ゲネシスの剣はすっかり鬪志を失っていた。いかに人を欺く魔物

とはいって、襲いかかって来ない者を切り捨てるなど、ゲネシスの剣の美意識に反する行い。それに彼女は、ゲネシスの心に訴える何かを秘めているようだつた。

「どうしてそんなに恐ろしい目をしているの？」

ゲネシスの問いに、人狼は動じずにじつと見つめるという答えを示した。ゲネシスも同じく、じつと見つめるという答えをそれに返した。やがて、人狼の美しい口元が動き、笑みを作つた。妖艶で、吸い込まれてしまいそうな、不思議な笑みだつた。

「面白い事を訊くね」

人狼はやつと言葉を発した。美しい声。ゲネシスの心を揺さぶるような、透明で綺麗な声だつた。

「私は人狼だよ？」

ゲネシスを見つめるその顔は、作られたかのような美しさだつた。その美しさを上手に纏い、自分のものとしてさらに美しく着飾る。その人狼は、特別な力を持つていた。

「私はオーロール」

人狼は言つた。

「あなた、誰？」

問いかが、ゲネシスを包む。その瞬間、魔法のような力がゲネシスから言葉を引き出していく。意識的にしろ、そうでないにしろ、ゲネシスの口からが漏れたのは、自分の名前だつた。

アマリリスが引き寄せられた場所は、とても見慣れた場所だった。知らない間に迷い込んでしまったのか、無意識に戻ってきてしまったのか、アマリリス自身にはよく分からなかつた。ただ、ディアナとバステトが、いち早くそれに気付き、警戒の意を見せているのだけは気付いた。

そう、ここにはアレがいる。

アマリリスがひと目見た時から欲しかつたモノ。目の前でそれを我慢しなければならなかつた苦痛の源が、またこの先にいる。ディアナとバステトが警戒している気持ちは分かる。彼らはアレを傷つけたくない。人間という獣の本能が、警鐘を鳴らしているのだろう。けれど、アマリリスには分からぬ。アマリリスは魔女だから。

「ここ、知つている匂いがする」

ランが呟いた。

「とても落ち着く場所。穢してはいけない聖地。不思議な感覚。ベヒモスのいたあの場所にそつくり」

ベヒモス。それが何なのか、アマリリスは知つていた。それはこの場所の何処かに潜んでいる大いなる者と同じ位置に属する者。果てしなく這いずり、己だけの場所で足を休める大陸の霸者。それは、果てしなく彷徨い、己だけの場所にて泳ぎを止める大海の霸者、そして、果てしなく飛び続け、己だけの場所にて羽を休める大空の霸者と同じ存在。

この場所は、羽を休める場所。

そう、ここにいるのは、大空の霸者だ。

サファイアが、表情を滲らせた。

「どういう事、アマリリス。あなた、偉大な獣に加担するつもりなの？」

サファイアが彼らを嫌う理由。分かつっていた。彼女はプシュケを食べたい程愛している。海の供物であるプシュケを、奪い返したい。大いなる生き物は、三体で一つ。つまり、ここにいる者は、いつかサファイアからプシュケを奪うであろう生き物の分身のようなものなのだ。

「サファイア、空にも供物はあるのよ、知つてた？」

アマリリスはぽつりとそんな事を言った。ディアナとバステトが警戒している相手。それは、すぐ近くでこちらを見つめている。アマリリスにとつてそれは、可愛いくらい分かりやすいものだつた。ディアナとバステトが、いよいよ表情を強張らせた。

「そんな顔しないで、二人とも」

アマリリスは言った。

「あたしはあたしを抑えられる。多分、今回は……」

そして、その視線は、自分の欲望を刺激して止まない対象へと移つていく。アマリリスは必死に自分の中の自分を抑え込んだ。単純で、慣れやすく、一点の穢れもない純粹な本来の自分。誰もが持つてている本能という名の自分。

「出できなさい」

アマリリスの声が響いた。

美しい狼。人を食わない狼。血の穢れから、その時まで静かに守られる存在。目の前の狼は、ある意味でプシュケと同じものだつた。サファイアはその姿を見て、いつか自分がプシュケを奪おうとして、アマリリスに止められた事を思い出していた。

なるとすれば、あの時と、逆。

アマリリスの平常心は、少しずつ蝕まれていく。

「お前、また来たのか」

人狼が喋つた。真っ白な姿。その体毛はいつしか髪になり、爛々と光る狼の目は、真っ青なヒトの目へと変わつていた。襟襷切れを纏つた、美しい娘。サファイアの目から見ても、その美しさは絶対的なものだつた。狼でなければ、きっと食べたいと思つただろう。サファイアはそう思つた。

人狼の澄んだ目が、アマリリスをじっと見つめる。警戒に満ちた瞳。しかしその様子は、何処か弱々しかつた。

「何をしに来たの？ この私、ヴァラヴァオルフの血と肉を欲してまた来たというの？」

警戒の向こうに潜む、諦めの感情。サファイアはそれを見逃さなかつた。獲物を追い詰めて命を奪う者ならば、その光を逃すはずがない。恐らくそれは、アマリリスにも見えただろう。しかし、アマリリスは微動だにしなかつた。

違うわね。

サファイアの見つめるアマリリス。彼女は震えていた。必死に抑え込んでいた。ほんの少し鎖を緩めただけで、恐ろしい魔物が出来あがつてしまふだろう。そして、そんな事をしてしまえば、目の前

のこの美しい狼に未来はない。

「それとも、ジズ様に用事でもあるの？ 用事でもあつたの？」

「ただ、様子を見に来ただけよ」

アマリリスがやつと答えた。サファイアの思つた通り、アマリリスの声には張りがなかつた。

人狼はアマリリスの姿を一頃り見つめると、いきなり俯いた。
「様子……？ 何の様子……？ 呪われた魔女がこの地に何の様子を見に来たつていうの……？」

人狼の様子は明らかに変だつた。だが、襲つてくる様子はない。そうではない、サファイア達の意識を掴んで放さなかつたのは、他にある。その人狼は、泣いていたのだ。

人狼は暫く泣き続けると、より蒼くなつた目でアマリリスを見つめた。

「お前が……やつたの？」

「何のことかさつぱりだわ」

アマリリスは静かに答えた。

だが、その答えで人狼が満足するはずもなかつた。

「嘘、嘘だ……。お前が、お前が来てから、全てはお前が来てから狂い始めたんだ……。ここに魔女や人間が踏み込んでしまうなんて、ここにジズ様を穢す者が入りこんでしまうなんて、私は、私は……大地の供物なのにッ！」

「ツバキ」

アマリリスが呼びかけた。それが彼女の名なのだろうか。ツバキと呼ばれた人狼は、再び俯き、急に動かなくなつた。

「ツバキ、本当なの。あたしには何のことかさつぱり分からぬ。ただ、変な予感がしてきただけなの。お願ひ、何があつたか教えて。本当に、あたし達、知らないの」

「嘘……」

ツバキは俯いたまま、目をあわさずに呴いた。

「嘘……お前は私の事、食べようとしたじゃない。ジズ様にも恐れ

ずに、残酷な欲望をもつて、私を生きたまま解体しようとしたじゃない。騙されない、お前には騙されない。誰が、お前なんかに、話すものか

顔を上げたツバキの目からは、すでに涙は引いていた。

「一緒にいる奴らも同じ。そいつに味方する者は、すべて私の敵。騙されない。お前達には騙されない。お前達も、ここに来た人間どもも、皆、敵。私の敵……」

「ツバキ、待ちなさい」

ツバキの姿が消えていく。風に攪われるように、姿をくらまそうとしている。アマリリスの呼びかけなど、到底届くわけもなく、美しい白の姿はこの場所から消えようとしていた。

「待つて！」

それに手を伸ばしたのが、ディアナだつた。瞬時にクーガーとなつた彼女は、他の者たちが声をかける前に、ツバキの後を追つて、走りだしてしまつた。

他の者たちが獣の足に追いつけるはずもなく、ただ立ち尽くしている他なかつた間に、一人の姿は岩山の狭間へと消えていつてしまつた。

アマリリスはそちらをじっと見つめ、体中を刺激する醜い欲望の渦を抑え込みながら、肩を落とした。

ゲネシスは思つた。この世の中において、絶対あり得ないと信じることには、実は根拠がないという事。そして、生まれてから死ぬまでかかっても、自分を取り巻く世界の全てを捉えることなど不可能かもしれないという事。それだけ世界は広く、不安定な渦そのものだった。

ゲネシスが旅をする上でもう何十匹も斬つてきた人狼と共に今この場の空間を過ごしている事も、その一つ。不安定で捉えどころのない現実そのものだった。

オーロールと名乗つた人狼の女。恐らく、彼女に目を付けられた人間は、男だろうが女だろうが逃げられないだろう。美しさの下に、爪と牙を持つ人食い。人間の皮を被つている彼女は、何処からどう見ても、狼には見えなかつた。

無人小屋の暗がりの中で古ぼけた布を被り、濡れた身体を丸める彼女の姿は、森に迷い込んだ娘以外の何者でもなかつた。

「ゲネシス」

オーロールが口を開いた。背を向けたまま、ゲネシスの姿は見づに。

「どうしてあなたは逃げないの？」

「どうして逃げなくてはいけないの？」

ゲネシスはぽつりと呟いた。殺氣を持つ人狼。人を見れば欺き、皮を被り、やがては狙つた者の肉を喰らう魔物。しかし、オーロールは、他の人狼と何処か違つた。食べるための人を襲うのではなく、怒りの為に人を襲つてゐるという感覚。それも、目の前に現れたゲネシスよりも、ずっと遠くの何者か。それが誰なのか、どうしてな

のかは分からぬけれど、ゲネシスには、オーロールが、自分に直接害を及ぼす魔物には見えなかつたのだ。

「どうして？ 呆れた。あなた、死にたいの？ 私は人狼なのよ？ 私の気分次第で、あなたの剣なんか圧し折つて、唇を奪うついでに生きたまま喰らいつくことだつて容易なことなのに。あなたは恐れないつていうの？」

「オーロールといったね？ 私は自分から名乗つて人に名を訊ねる人狼なんて初めてだ。普通、人狼つていつたら、名前の先に騙すではないの？」

「そうよ、私は人狼。騙すのが私の専売特許。所詮、あなたに名乗つた名前だつて、本当の名前なんか分からぬじやない」

月光を避けて、暗闇の中で縮まりながら唸るオーロールを、ゲネシスはじつと見つめた。意地になつたかのよう自分を怖がらせようとするオーロールの姿が、ゲネシスには何処か可愛く見えた。

「やつぱり君は、他の人狼と違うね、オーロール。君が私を食べるとなつたら、もうとつくなに襲いかかつてきているでしよう？」

「言つたでしよう？ 私は騙すのが売りなの。あなたの事だつて、段々と信用させておいていつか酷い方法で食べてやるんだから」 オーロールがちらりとゲネシスを睨む。しかし、その目には、人狼にある恐ろしさというものが足りなかつた。ゲネシスと出会つた時は濃かつた憎しみも薄れ、ただ、純粹な獣としての色だけが、その目には宿つていた。

「それは怖いね。覚えておくよ。君なんて信用しない」 ゲネシスは静かに微笑んで、視線を返した。

こうなったのはお前のせいなのか、アマリリスはそうツバキに訊かれた時、違うという言葉をはつきりと言えなかつた。

だが、この場所で起こつてゐる事を把握してからは、それが自分に出来るはずもないという事がしつかりと分かつた。この場所において、アマリリスにとって、理性を崩される程、惹かれる相手はツバキのみ。相手が人狼でない以上、いかなる理由があつても、手を出してはいけないものに手を出そななどという事をするわけがなかつた。

そう、アマリリスには、大いなる空の生き物であるジズに手を出せるはずがないのだ。出すとすれば、ツバキに。ツバキを欲しいからと言つて、ジズに手を出すという事も、考えられなかつたし、欲求に支配された状態の自分が、そこまで頭が回るなどと思つてはいなかつた。

だから、ジズに手を出した人間と、自分は関係ない。アマリリスはそう思つていた。

ならば、ジズに手を出したという愚かな人間どもは何者なのだろうか。いかに人間とはいえ、手を出していいものといけないものの区別くらいつくはずだ。それが出来なかつたのか、本能に逆らつてまで倒すような理由があつたのか。

「アリス……？」

怪訝そうなディアナの表情を見つめ、アマリリスはふと前を見た。いつの間にか自分は移動していたらしい。そこは、ジズの降り立つ場所だつた。人工的でない自然な祭壇。見えない心の神殿。神聖なその場所。空全体を司る大きすぎる存在の居場所。しかし、アマリ

リス達が辿り着いた時、そこにいたのはその供物であるツバキだけだった。

ツバキは泣いていた。

ジズの降り立つその場所に伏せながら、泣いているようだった。彼女が何を見たのか、アマリリスには分からない。それに、アマリリスは、ツバキが自分に話してくれるとは思えなかつた。自分はかつてツバキの命を狙つた。そんな者を信用するような事があるわけがない。

泣いているツバキの傍へ、駆け寄る者がいた。

「 プシュケ……？」

プシュケは人狼であるツバキを恐れる事もなく、その傍に座り込むと、そつと肩に手を置いた。ツバキの目がはつと見開かれる。プシュケ、そして、ツバキ。お互いにしか分からぬ思いが、そこにあるのかもしねり。

「 教えて、何があつたの？」

プシュケの静かで落ち着いた声が、ツバキの耳をそつと撫でる。ツバキはプシュケの姿をまじまじと見つめ続け、そして、涙を浮かべた。彼女達にしか分からぬ感情が、行われている。アマリリスには一生かかつても分からぬ感情が、その場所で交わされている。ツバキはプシュケの胸で一頻り泣き続けると、やがて、重たい扉を開くかのように、口を介して言葉を綴り始めた。

その人間達が来た時、ツバキは違和感を覚えなかつた。

ここは様々な者が、様々な因縁に結ばれて、たまたま通りかかる聖地。それが偉大なる空の霸者ジズの地と知れば、どんな生き物も恐れをなし、ジズの怒りに触れぬよう相応な態度を示すもの。その理には、人間も例外でないのだ。ツバキの信じるそれこそが、この世の仕組み。そうとまで思つていた。

それなのに、この現状はなんだらう。

その人間達が来た時、ツバキは気付かなかつた。

氣付かずに、忠告しかしなかつた。

ツバキが氣付かなかつたもの、それは何だらう。人前で狼の姿を晒し、這う這うの体で逃げ出さざるを得ないこの状況を作り出したのは、いつたい何だらう。それよりも、人間どもの狙いがツバキには分からなかつた。狼狩りの者か、はたまた、自分を空の供物と知つての事なのか。

分からなかつたから、己の主の場所へと向かつてしまつた。気付けなかつたから、自ら道案内ともなるような行為をしてしまつた。

後悔。

自分が空の供物だと知るまで、魔物として生きてきたツバキにとつて、この言葉は無縁ともいえる存在だつた。後悔するのは人間のみ。今のみならず、過去や未来をも生きようとする人間どもの奢りの言葉とさえ思つていた事があつた。

しかし、この状況は何だらう。

後悔。

この言葉が、まさか、自分の頭に浮かんでくる日がくるなんて思

いもしなかつた。

「ジズ様……」

人間は三人しかいなかつた。だから、ツバキはジズならば、この人間を何とか出来ると信じていた。ジズは大いなる生き物。人間などに手を出せる生き物でないはずなのだ。ならば、自分がここへ導いてしまつたこの三人の人間は、何者なのだろう。

人間の一人が剣を抜いた。全てを見透かすかのような真つ青な目。ツバキはこの目が怖かつた。怖かつたから、逃げてしまつた。逃げてしまつたせいで、こうなつた。

「そんな……」

「ツバキ……」

ジズの言葉が、ツバキの頭の中で響く。

逃げなさい。

三人の人間を前に、ジズは咆哮した。時をも揺るがすその咆哮は、とても悠々としたもののはずなのに、ツバキにはとても悲しい響きに聞こえた。そんなはずはない、ジズが負けるはずがない、そう思つていても、ツバキにはこれ以上、ジズの姿を見る事が出来なかつた。

「ジズ様……」

ジズが再び咆哮する。

「来るがいい、愚かな人間どもめ！」

直後、ツバキの目に映つたのは、人間達の影の向こうで、この様子をじつと窺つ別の視線だつた。自分によく似た気配。あれは……。

よく似ているけれども、何処かが違う。そんな気配。

人狼？

ツバキの言葉の端々には、自身の主人たるジズへの敬愛の念がしつかりと籠もつていた。

ツバキがジズに持つ信頼と狂信的なまでの依存を目の当たりにしたプシュケは、その独特な不気味さのみならず、ちょっとした関心を引かれた。

ツバキは空の供物。そして自分は海の供物。

大いなる生き物たちの相違点は、自我と姿と住む場所ぐらいのものであるとされている。彼らは同じ魂を分け合つて生まれた命。その体内には、色は違えども同じ輝きを放つ炎を宿している。

それは、昔、プシュケがごく普通の人間になる前、まだサファイアにも出会つていなかつた頃、大いなる生き物たちを祭つた神殿で聞かされた伝説だつた。もしもこの話が本当だとしたら。

主人がそういうものだから、供物も同じようなものなのかも知れない。いや、きっとそうなのだ。

かつては單なる伝承、伝説に過ぎなかつた話が、こうして我が身に降り掛かると、一気に違つて見えてくる。

神殿に遊びに行つっていた頃に何気なく聞いた話は、もはやプシュケにとつて、己の成立を示す書物にも等しかつた。

わたしも……。

プシュケの身を案じ、いつかその命の火を消すであろう存在、リヴァイアサン。

わたしも、リヴァイアサンを敬愛する日が来るのかしら……？

「それで、ジズはその人間たちと人狼に……？」

アマリリスの問いに、プシュケは我に返つた。アマリリスに対す

るツバキの警戒は近くにいるプシュケによく感じ取れるものだつた。それもそうだらう。アマリリスは狼狩りの魔女。ツバキにとつて、最も信用ならぬ者であるはずなのだから。

「妙だな……」

バステトが呟く。

人狼と人間が関わり合つてジズに手を出した。そんなことが有り得るのだろうか。人間だけでも想像しがたい事態なのに、人間以上に世の理に影響を受ける人狼が、そんなことをするなんて思えなかつたのだ。

しかし、ツバキが嘘をつくようなことも同じく考えにくいこと。それに、ジズに起こつたことの真偽など、この場を見れば明らかのことだつた。それほどまでにこの場は荒らされていたし、今更ジズが何処にいるかを捜す気にもならなかつた。

こんな場所、もはや聖地とは言えない。

こんなにも血で穢された場所など、聖地とは言えない。

「私は……どうしたら……」

ツバキの小さな嘆きが、この場を静かに揺るがした。ツバキはジズの祭壇の傍らで座り込んだまま、プシュケの胸から離れ、空虚にしかならないその目で大空を見上げた。その瞬間、ツバキの中で何かが着実に崩壊したのを、プシュケは感じ取つていた。

ゲネシスがどんなに関心を示さずとも、オーロールはついて来た。彼女の言う事は、どれも人間を惑わすような事ばかりだったため、ゲネシスにとつて彼女は悪魔にも等しかつたのだが、危害を加えてこない以上、追い払うことぐらいしか出来ない。そして、その事についても、オーロールに一言加えられるのだ。

当てもなく、ただ魔女を捜して放浪するだけの旅に、人狼がついてくる理由は何となく察していた。所詮、魔物同士、世間が言うよう人に狼と魔女は仲がいいわけではないのかも知れない。しかし、人間に危害を加える者とすれば、どちらも同じようなものだった。当てのない独り旅。

同行者がいるとはい、それは空しいものだ。

「お前は本当に変わった討伐者だ」

暗闇から声をかけてくるのはオーロール。もはや彼女の声を聞いただけで皮肉と分かつていた。ゲネシスは剣を磨ぐ手を止め、ふと空を見上げた。満天の星空がゲネシスを見下ろしている。その懐かしい輝きを放つ星々は、だが、故郷にいた頃のものとだいぶ違うものに見えた。

「気付いているのか？ 討伐者になるという意味について」

煌めく星達の包む世界の中で、様々な音が混じり合つてゲネシスの耳に入りこんでくる。けれど、その中で、ゲネシスの頭へと沁み込んでくるのはオーロールの声だけ。オーロールの言葉だけだった。ゲネシスは星空から目を放し、暗闇の中で光る眼光へと目を向けた。

「君は知っているのかい？」

剣が月光に照らされて光る。もうすでにこの剣は人ならざる血を

多量に浴びているはずなのに、それを隠すかのように美しい輝きを放っていた。オーロールの視線は、その剣に向けられていた。

「その剣……」

「低く、確信を持つているかのような声。

「その剣は、いつからお前の手元にある?」

「さあね」

ゲネシスは即答した。答えるつもりもなかつたし、答えるために考えるのも面倒だつた。ただ、事実として今があるだけ。ゲネシスはそうとだけ理解していた。いつ自分が他の討伐軍の者のようになつたとしても、それはそれで構わない。ゲネシスには失うものなんてなかつた。

ゲネシスにとって大切なのは、過去と今この時だけ。未来なんて、どうでもよかつた。

「剣……」

ゲネシスはオーロールから田をそらし、芝生の上に寝転がつた。次の町まではまだまだ距離がある。今日もまた星空を見上げながら眠りに就くことになる。

「剣が、関係しているのかい?」

ゲネシスは寝入る前の意識の中で、オーロールに訊ね返した。しかし、オーロールは、返答しなかつた。

これから何処に行くべきか。

ジズの聖域を後にした時から、アマリリスはずっと思考に耽り、
プシュケもずっと黙つたまま。ディアナはその状況にうろたえながらも、皆の様子を窺い、口を開く事が出来ずについた。プシュケは落ち込んでいるように見えた。

結局、ツバキはあの場所を離れようとしなかつた。彼女の狂信的なジズへの敬愛が、彼女自身を縛つている。それが供物という事なのだろうか。

どちらにせよ。

この不気味な状況が、自分達とは無関係なことならば、ディアナは介入したくなかった。自分の中のクーガーの心が、そう言つているのだ。獸としての本能が、ディアナに警告しているのだ。しかし、そうはいかないことをディアナは知つていた。

ジズの領域がどうして侵されたのか。どうしてジズだったのか。それが気になつて仕方がない。

大いなる生き物は三体でひとつ。ジズにされたことは、他の生き物にも少なからずの影響を及ぼすものなのだ。一体これからどうなるのか、ディアナは不安だつた。

何故ならここにはプシュケがいる。海の供物として生まれてしまつた、プシュケ。

ジズを倒したという人間達が何処へ行くのか、ディアナには予想できた。嫌な予想だつたけれど、確認しない理由もない。しかし、アマリリス達の様子を見ていると、その事は恐ろしくて言えなかつた。

しかし、ディアナのほかにもそわそわしている者はいた。

ランだ。

「ラン、どうしたの？」

バステトの小さな問いに、ランはびくんと身体を震わせる。その様子は、何か言いにくいことを隠しているようにしか見えなかつた。ランは皆の表情を窺うと、恐る恐る口を開いた。

「あの……」

ランの声には戸惑いもあつた。その近くには小鳥が数羽、小さく鳴いている。その声が、ディアナの耳に入りこんだ瞬間、ランが何を言いたいのかがはつきりとした。小鳥たちがランに訴えているのだ。その言葉が、今のディアナにはよく分かる。

その小鳥たちが何処から来て、何を訴えているのか。力のありそうな者たちを縋り、プライドを捨ててまで希望を託すという状況が、どういうものなのか。

「森で……放つておけない事が……」

小鳥たちの悲鳴にも似た声が、ランの言葉を後押しする。

「この子たちの守っている領域が、大変なの……」

ランの言葉に、ブシュケがはつと顔を上げた。彼女にも予想できただろう。やはり、ディアナの予想していた通りの事が、起きていた。

ジズは三位一体のもの。ジズのされたことは、他の一柱にされたことと同じ。

アマリリスは見越していたかのよつにランを見つめると、極々小さな声で、呟いた。

「森ね……」

ランが前にベヒモスに出会った森に辿り着いた。

だが、ここに祭壇があるとも限らない。ベヒモスは移動していたからだ。混乱しているらしい小鳥たちは当然にならないし、もしもベヒモスの祭壇がこの森でなければ、ラン達にはどうしようもない。だが、ラン自身、ベヒモスにはもう一度会いたかった。彼女のおかげで狂ったサファイアをおとなしくさせることができたのだ。彼女に出会わなかつたら、今頃こうして呼吸する事さえ出来なかつたかもしだれない。だから、ベヒモスに危機が迫つてゐるというのなら、助けたかった。

森に入った途端、ふとサファイアが立ち止まつた。

「ここでベヒモスに会つた……」

確認するような咳きに、ランは小さく頷いた。

「うん、前にサファイアにあげた花、ベヒモスに貰つたの……」

「これのこと……？」

サファイアが差し出した花を見て、ランは驚いた。あれからもうどのくらい経つただろうか。前に確認した時、惨めな枯れ姿をみてから、サファイアの手に渡つたあの枯花。しかし、サファイアの差し出した花は不気味なほど綺麗な姿を見せたのだ。

「これ、枯れたはずだったのに、いつの間にかこうなつてゐたの。確かに生きているらしい花なのに、枯れる様子もないの。復活してからはまるで時を止めてしまつてゐるかのよう」

サファイアは花を胸に抱き、小さな声で呟いた。

「きっと私が落ちついていられるのも、この花のおかげね」

その様子からは、ちつとも彼女が人食いであるようには見えなかつた。そう、この様子を作りだしてくれたのがベヒモス。ランは小

鳥たちを見上げて、一人呟いた。

「さなきや……。

「「」の森にベヒモスの祭壇があるかも知れないってこと?」

サファイアの問いに、ランはおずおずと頷く。確かにないのだ。小鳥たちの言葉は不確かで、しつかりと伝わってこない。小鳥たちが混乱しているからなのか、それとも、他の理由があるからなのか。しかし、ランの不明瞭な答えにも、サファイアは納得したようだった。

「そう、それなら分かつたわ」

サファイアはしばし俯くと、アマリリスの方を向いて口を開いた。「あなた、前に言ったわよね。私がプシュケを食べること、そんな勿体無い事は許さないって。でもこれだけは覚えていて。私はプシュケを諦めたわけじゃないの。ただ大いなる生き物に邪魔されたとなれば、私なんか手を出せるわけがないでしょ?」

「何が言いたいの?」

アマリリスの静かな問いに、サファイアは瞼を閉じた。白い花はその腕の中にある。けれど、その落ちついた心で考えている事は、とても穏やかでないことに違ひなかつた。

サファイアは小さく笑み、告げた。

「ベヒモスの祭壇に似た場所を知ってる。けれど、私にとつて、三位一体の獣がどうなると知つたことじゃないの。何者か知らないけれど、その人間達が早い事リヴァイアサンを倒してくれればいいのについて思うくらいよ」

「で、でも……」

ランが恐る恐る口を挟んだ。

「でも、ベヒモスのおかげでサファイアは……」

「勿論、それには感謝しているわ」

サファイアの声は低く、静かなものだつた。

「だから、アマリリスに約束してほしいの。そしたら、すぐに案内してあげる」

「何……？」

「私の邪魔をしないで。ブシュケは私のもの。私だけのもの。邪魔するのなら、祭壇の場所なんて教えない」

サファイアの要求を聞きながら、アマリリスは澄ました表情のまま、じつとサファイアの姿を見つめていた。何の感情も読み取れない表情。アマリリスはそのまま、サファイアに一言返答した。

「そう

サファイアの案内した場所は、誰も覚えられなさそうなくらい入り組んだ所だつた。サファイアがその場所を覚えていた事に呆れるほど、曲がりくねつた道や道なき道を進む羽目になつた。

サファイアの持ちかけた取引に、アマリリスはきちんと応じていない。けれど、サファイアはそれを承諾と取るといい、案内したのだ。プシュケにとつては、気が氣でない事態だつた。アマリリスが止めてくれるからこそ、サファイアの近くにいても気が済むという話なのに、もしもアマリリスが本当に承諾してしまつていたら、自分は何処へ行けばいいのだろう。

暗い想いが、プシュケを包んでいた。

「ここよ」

サファイアが最後の茂みを潜つた。それに続くと、プシュケは奇妙な感覚に見舞われた。ジズのいた場所でも感じたものだつたかもしれない。ともかく、初めてではなく、一度か二度経験した感覚だつた。言葉ではとても表せない懐かしさと、魂を揺さぶるような音と匂い。それだけならば、この場所は好ましい場所に違ひなかつたのに、今、この場は違つた。

『恐怖』と『嘆き』。

踏み込んではいけない者たちが、この場所を穢していた。ランについて来た小鳥たちが、一層けたたましく鳴き叫ぶ。プシュケには彼らの言葉はちつとも伝わつてこないけれど、何を言わんとしているかだけは分かつていた。

彼らは嘆いている。この場所にかつていた偉大な存在を失つたことを。

「やつぱり、ツバキの言つてた人間達の仕業……？」

「お前達は、悪い奴ら？」

ディアナが呟いた時、突如、上から声がした。慌てて見上げても、そこには誰もいない。木々が空を覆っている以外は、何もない。

「答えて。悪い奴らなの？ 違うの？」

それは、まだ幼い少女の声。まるで木が喋っているようにも感じた。だが、その声は、確かにそこにいる声だった。幻ではない。誰かが木の上にいる。バステトが木の一点を見つめ、窺うように声をかけた。

「お前こそ、誰だ？ 怪しい奴には答えたくないんだけどね」
挑発するような口調だったが、木の上の声は特に気にする様子もなく、返答してきた。

「それは悪かったわね。あたしはこここの住人。ここはベヒモス様の場所でもあって、あたしの場所でもあるの。だから、聞く権利はあたしにあるってわけなの」

その返答だけで、彼女が何者かが分かつた。偽物ではないという事も、プシュケになら分かつた。むしろ、そう言つてくれてやつと納得出来るような、そんな雰囲気を声の主は醸し出していた。

バステトは苦笑い、さらに声に返答した。

「まあ、ここに踏み込んだ時点で十分怪しいだろうが、別にここを荒しに来たわけじゃない。私はバステト。他は、ディアナ、プシュケ、サファイア、ラン、そして、アマリリスだ。嫌な予感がしたからこちらの様子を見に来ただけさ」

「ベヒモス様にはお世話になつたの……」
ランが力のない声で、付け加えた。

「嫌な予感……？」

木の上の声は少し窺うような口調でそつと、溜め息をついた。

「じゃあ、あなた達、あいつらとは関係ないのね」

「あいつらって？」

バステトの問いに答えずに、声の主はむりに言った。

「その嫌な予感について訊きたいわ」

「あいつらって誰だよ？」

「いいから、その嫌な予感について話しなさいよ」

バステトはやや翻弄されてしまった。飽く迄も自分のペースで話さなければ気が済まないらしい。呆れて返す言葉も出ないでいると、突如、アマリリストが口を開いた。

「話すわ。だから、姿を見せて頂戴」

「え？」

「姿を見せないと、話さないわ」

アマリリストの言葉の後、しばしの沈黙が過ぎ、やがて、木々が揺れた。枝と枝の間から木の葉を揺らしながら飛び降りてきたのは、ランとプシュケの間ぐらいの歳の、左右に対称的な色の目を持つ、少女だった。

ゲネシスの目の前に、一人の少年が倒れていた。

別に行き倒れを初めて見たわけではない。こういう時、世話が出来るのは、自分に余裕のある強者だけだ。そして、その強者というのは、たいてい、付近に住む村人や町人達の事だ。しかし、彼らだって常に豊かな生活を嘗んでいるわけではない。『恐怖』に支配されるこのご時世、行き倒れた者が善意に固められた村人や町人に助けられるというのは奇跡でしかないという話を聞いたことがある。

ゲネシスも何度か、経験している。

猛獸に襲われて傷を負つた時、或いは、行き倒れている者を発見したものの、ゲネシスにはどうしようも出来なかつた時、人狼をはじめとした魔物が跋扈するこの大陸で、それらを疑いなく助けてくれる村や町なんて殆どないのだ。助けてくれる者がいたとしても、今度はその者が白い目で見られてしまつ事がある。何故なら、村人や町人にとって、余所者は、人間であるという証明のない得体の知れない者だからだ。

それでも、疑い深い彼らが動いてくれる時がある。

金、或いは、その地方で手に入りにくい物だ。特に、町では金、村では物が大きな権力を握つている。それさえあれば、ゲネシスには直接的に支援できない者も、間接的に助けてやることだってできるのだ。しかし、それは、そのものを十分に所持している時に限ること。

ゲネシスにとって、その時は、タイミングのよくない時だつた。「行き倒れに構うのかい？ 構つたところで命が数分延びるだけだろ？ 心配しなくても、そいつが死んでも無駄にはならない。わ

たしの食料になるだけなんだから」「

そう言つたのは、相変わらず付きまとつてくるオーロールだった。彼女が付かず離れずゲネシスの近くに潜み、度々声をかけてくる。その言動はまるで、ゲネシスに付きまとつ悪意と識別される心のようだつた。

ゲネシスは膝を折り、その少年の傍に座り込んだ。まだ呼吸はしつかりとしている。今、助ける事が出来れば、もしかしたら。

「本当は見捨てたいんでしょう？　わたしの前だからいい子ぶつているんじゃないの？　これだから人間つてくだらないわ」

オーロールが言えば言う程、ゲネシスの中で迷いが晴れた。

「少し待つてろ。探していく」

そう言つて、剣で仕留められる食料と、水を探して森へと進んだ。それは、ゲネシスが兼ねて持つっていた人間としての善意だつた。行く手を阻む盗賊や、自分に危害を加えようとする者を斬る時には何も感じていない死という概念が、少年を見つめた瞬間に、突然恐ろしいものに思えてきたのだ。

だから、この時のゲネシスは、まさかこの弱々しい少年ラジカが、この殺戮の道の同行人になるなんて、思いもしなかつた。

「あたしに名前はないの。ただ、ニコンペーって呼ばれているだけ」アマリリス達の前にて、その少女は言つた。左右違つ色の目が光つていた。

ニコンペー……。

それは、精霊の総称。永遠の処女と呼ばれ、森に隠れ住む、ヒトとは決して交われぬ者。

本来、ニコンペーにも名前はある。そう、プシュケもニコンペーに近しい者。ニコンペーを従えし者は、多大な力を得られる。そういつた噂さえもあつた。

そして、この娘は、かなり高位の存在だった。

「ベヒモスは、あなたのことをニコンペーと呼んでいたの？」

プシュケの問いに、ニコンペーの娘は頷く。じつとプシュケを見つめ、円らな瞳でじつと伺う。

「あなたもニコンペーなの……？」

娘の問いに、プシュケは首を横に振る。

「ニコンペーではないの。でも……それに近い者ではあるわ」

プシュケの言葉に、ニコンペーの娘は意外そうな顔をした。が、すぐに表情を戻し、さきほどのプシュケの質問に答えた。

「ベヒモス様は、あたしの事、ニコンペーって呼んでた。ここいらのニコンペーはあたししかいないし、あたしも生まれた時に貰つた名前を名乗れないから

「名前を忘れたの？」

プシュケは柔らかな声で訊ねた。相手に安心感を与えられるのは、プシュケが一番得意なことかもしれない。特に、ツバキの警戒をも解いた供物となれば尚更だ。

ニコンペーの娘は、首を横に大きく振った。

「違うの。名乗ってはいけないの。ニコンペーの決まりよ。ベヒモス様に捧げられてしまえば、もうあたしは過去のあたしではないんだって。ベヒモス様は名乗つてもいいって仰ったわ。でも、あたしをここに連れてきた人達が、それを許してくれないの」

「連れてきた人達？」

「ええ」

ニコンペーの娘の目は鋭く光っていた。頑なな心が目に宿っている。押さえつけられているわけでも、そういう封印を施されているわけでもなく、自らの信じて守っているということであることが、よく分かった。

この娘にそれだけの影響をもたらした、供物をさげた人達。プシュケにとって気になる存在だった。

「それは、誰なの？」

ニコンペーの娘は一瞬返答に困ったようだった。しかし、これについてはタブーではなかつたようだ。恐る恐るではあるが、彼女は答えてくれた。

「ベヒモス様の血を引き、ベヒモス様を祭る村の人たちよ……」

とても小さな声だった。

プシュケは不思議に思つた。ベヒモスを祭る村があるというのなら、おかしくはないだろう。ジズを祭る村や、リヴィア・イアサンを祭る村、その三体全てを祭る村というのは、普通にあり得るからだ。しかし、プシュケが引っかかったのは、「その血を引く」と名乗つてゐる所だった。

「そんな村があるの？」

ニコンペーの娘は答えない。

ただじつと下を向いているだけだった。

「教えて、何処にあるの？ ジズやリヴィア・イアサンの血を引く人達も、何処かにいるっていう事なの？」

ニコンペーの娘は困り果てた目をして、プシュケを見上げた。そ

の目を見つめ、プシュケはさうに出かかっていた質しの言葉をいつたん飲み込んだ。

ニコンペーの娘は申し訳なさそうな顔をして、首を横に振った。
「教えられないの。教えてはいけない決まりなの。でも、あなた、
大いなる海の御仁にやがて仕える者なのでしょう? その御子孫に
会つたことはないというの?」

「ない。だから、じうして、問い合わせているんじゃない……」
「そう……」

ニコンペーの娘は俯き、視点を変えた。それは、穢された祠に向
いていた。もとの岩肌をまだらに彩る錆ついた色は、まだ新しいの
か鮮やかなものだった。

「ベヒモス様があたしを守つてくれた。あたしはここでベヒモス様
を待つことしかできないの。だから、今も待つてる。ベヒモス様の
あの大きな魂が、消えてしまうはずないもの。肉体は滅んでも、ベ
ヒモス様そのものが滅んでしまうはずがないもの」

「何があったの?」

ランが口を挟んだ。ニコンペーの娘は、それに静かに答えた。
「狩り」

振り返る色の違う双眸は、どちらも同じ色に染まっていた。真つ
暗な、絶望の色。

「力を持て余した怪物の、狩りよ」

狩り、と彼女は言った。

その状況は、魔物退治の場と変わらぬ、闘志、殺戮、雄叫びに溢れていたのかもしれない。だが、話を聞くアマリリス達には、ただ嫌な予感ばかりが付きまとつた。体中の細胞が、危機を伝えてくる何かを焦らせるそれらは、しかし、具体的なことをアマリリス達に教えてくれない。

「三人の人間……一匹の狼……」

「ユンペーの娘は、小さく言った。ベヒモスに何があつたのか、アマリリスには予想できた。ジズの時と同じ事、何か、不可思議で奇怪であり得ないような災いが、起こっている。そんな気がした。血で穢れたベヒモスの祭壇には、もうベヒモスは現れない。

「いいえ、ベヒモス様は出かけているの」

「ユンペーの娘は自分の思考を蝕むものを振り払つかのように、そう言い放つた。

「ベヒモス様は出かけているのよ……」

かつてベヒモスが座つていただろう場所に、小鳥たちが止まる。ユンペーの娘と同じくらい、ベヒモスの不在を嘆いているようだつた。

アマリリスはユンペーの娘を見つめ、呟いた。

「そうね、出かけているのね」

「ユンペーの娘はちらりとアマリリスを見上げた。木陰のせいだろつか、その表情はやや暗く感じた。三人の人間と一匹の狼。彼らが何をしたのか、わざわざユンペーの娘の口を借りてまで問う事でもない。そんな事をしたとしても、今この場にベヒモスがいない

とこゝの事実は変わらないのだから。

狼……。

アマリリスの心を掴むその狼。人間を唆しているのか、人間に唆されているのか。それは一体、どれほど狂つた魔物なのだろうか。大いなる生き物を弑す力に加担する魔物。自然の流れといふものに抗う魔物。それはもはや、魔物ですらない。

唆されているにしろ、唆しているにしろ。

アマリリスの眼に、狼の影が映る。

それは、どんな狼なの……？

「ねえ、あなた達……」

ニコンペーの娘が、ベヒモスの祭壇を見つめたまま、問い合わせてきた。

虚ろな眼。この色の違つ眼が、アマリリスにとつて、一番印象的なものだつた。ベヒモスの場所を必死に守る眼。もう帰つてこないかもしぬない主を必死に待つ眼。そして、その《嘆き》と《絶望》と必死に戦いながらも、次第に衰弱していっているこの眼。

名前を言えない娘の視線が、アマリリス達に向いた。

「あなた達は、海の御方の場所に行くのでしょうか？」

ニコンペーの娘の問いに、プシュケの目が揺らいだ。

「もしもそつうなら、お願ひしたいの」

答えを待たずに、ニコンペーの娘は続ける。

「もしも何処かでベヒモス様に会つたら。もしもベヒモス様に会えたなら。この聖域はしっかりとお守りしているので安心くださいと、伝えて欲しいの」

ニコンペーの娘の声が、言靈となつてその場を舞つた。

そのニュンペーの娘の姿が見えなくなるまで、プシュケはどうしても彼女の事が気にかかっているようだつた。それがどういう事が、バステトには理解できるわけがない。だが、とんでもない事に巻き込まれつつあることだけは誰にでも説明できる程理解していた。

そもそも、人狼のダミーとして殺されるはずだつたところをアマリリスに救われたその時から、大変な事態に巻き込まれていると言つても過言ではない。アマリリスが何故自分を助けたのか、何故自分が離れるのをよしとしないのか。それまでアマリリスには理解できない要素しか見いだせずにいたため、あまりその事についても考える機会はなかつた。

でも、今度は違う。

大きな勢力が魔女を狩りだし、大いなる生物達は命を消されていくこの世の中。アマリリスが向かつてるのは、その渦の中央。渦を生み出している何かだと薄々気付いていた。魔女狩りの者たちも、聖域を侵した者たちも、その渦の外側にすぎない。アマリリスはその荒れ狂う渦から最後の聖域を守りに行くよう見せかけて、本当はもつともつと攻撃的な衝動と共に行動を起こそうとしているのではないか。バステトはそう考えていた。

そして、それは少なからず外れてはいないようだ。では、それなら、バステト自身はどうすればいいのだろう。アマリリスから解放されたところで、ただでさえ自分に行き場はないに等しい。得意な盗みで生活を営む事が出来るわけがない。

かといって、余所から越してきてまつとうに暮らせる村なんて、奇跡でもない限り辿り着けるはずもない。ましてや、魔物の溢れ方

が尋常でないこの頃だ。余所者全てを魔物と思う人間がいて、当然だつた。事実、これまでの旅で、バステト達も遠巻きに見つめられ、警戒されたことが何度もある。大いなる生き物が一柱も弑された今、その空氣は病的なほどに濃厚なものになつてゐるだろう。

プシュケは海の供物。サファイアはそれを認めたくない者。そして、アマリリスは彼らを征した者。自分はただ、偶然、アマリリスに拾われた人間の女。ランのような癒しの力も、サファイアのような狡猾なほどの力も、ディアナのような特異的な能力もない。

ただ身軽で、卑怯な手を使うのが得意なだけの、人間の女だ。

ふと、ニュンペーの娘の言葉が蘇る。もしも、プシュケがリヴィアサンに出会えば、プシュケもああなつてしまふのだろうか。もしも、リヴィアサンが弑されてしまつていたら、残された供物達はどうなつてしまふのだろうか。

いざという時、自分はプシュケ達を守れるのだろうか。

アマリリスやサファイア、ディアナの足手まといにならずに、ランやプシュケを守る事が、そして、アマリリス達を手助けすることが出来るのだろうか。

バステトの心に、不安がよぎつた。

三人の人間と、一匹の狼……。

ジズ、そしてベヒモスとを倒したのだろう者たち。リヴィアササンの場所を探すとアマリリスが告げた時、彼らと見えない糸で繋がつたような予感がした。嫌な時ほどよく当たる、泥棒の勘だ。

バステトは体中に忍ばせる凶器の重みを感じながら、一息吐いた。当たらないでほしいな。

人狼を怖がらない氣のおかしい子。

オーロールは、ラジカの事をこう評価していた。何よりも、ひ弱でいはずれ食べることになるだろうものとしか思っていなかつたというのに、ゲネシスの奇妙な偽善によつてこの少年の体力が回復したという事が、オーロールにとつて面白い事でもなかつた。

こんな子どもを食べるなんて、こつちから願い下げだな。

ラジカは世間知らずの子どもだつた。普通、人間ならば、子どもでさえも人狼を知つてゐるものだ。人狼は怖がる人間達を騙し、命を絞り取るその直前まで『恐怖』の餌食にさせるという行為を楽しむものだ。それなのに、ラジカはオーロールを怖がらない。まるで、ただの大人が、もしくは近所の犬かなにかのように接してきている気がしてならなかつた。

もしそんな事を言えば、オーロールの牙が黙つていなものなのだが、かといつて、怖がりもしない子どもを喰い殺しても何の樂しみもないし、誇り高いこの牙が錆つくだけだ。オーロールはこのことにうんざりしていた。

しかし、かといつて、ゲネシスの傍を離れようと思つまでは至らなかつた。

オーロールは初めて、日々の糧以外の視点で人間というものに興味を持つたのだ。剣に守られし若人。『恐怖』に支配されぬ不思議な人間。ゲネシスを見ていると、ふと違う顔が過ぎつっていく。ゲネシスに感じる何かを、何処かでも感じたような気がしてゐた。

「ねえ、オーロール」

馴れ馴れしい声に、オーロールはちらりと目を向けた。目を向け

てやつただけでも感謝して欲しいものだ。ラジカの話しかけてくる事はいつも興味のない事ばかり。オーロールには関係のない事ばかり。だから、目を向けただけで、オーロールの返答は終わっていた。

「あ、待つてよ！」

本来の狼の姿を晒し、オーロールはラジカから離れた。辺り着くのは影の領域。ここなら、人間が、況してや子どもが関わろうとする事など出来ない。不用意にこの場所から飛び出していたのもよくなかったかもしれない。

「ねえ、オーロール、出てきてよ」

オーロールは答えずに、じっとラジカの後ろに堂々と座る人間を見つめた。無表情、無感情に見えて、その身体の中では、沢山の複雑な情報の伝達を怠らず、誰の干渉も受けずに、綺麗に流している。己の意思で魔女を狩る討伐人。魔女狩りの剣士。

オーロールには興味があった。

その不可思議な目に。その不可思議な身体に。それらを宿している、崇高な魂に。そして、何よりも、冷静の裏にて静かに燃やし続けている、破壊と略奪を渴望する醜き欲求の堪えない怪物の心に。

次は何処で魔女を狩るの？

オーロールは影の中で一人笑む。

面白いものを見つけた。とてもいい暇潰しを見つけた。この怪物が、自分の仲間を殺していくた魔女たちを捕まえ、切り刻む姿を早く見たかった。あらゆる所で魔女に加担し、自身も魔女になりかけている者たちをこの怪物が捉え、全てを奪つていく姿をもつと見たかった。

馴れ馴れしい子どもなんて、いくらでも我慢できる。

こんなに面白い退屈しのぎがあるのでねば。

リヴィア・イアサンのいる場所なんてどうやって知ればいいのだろう。ジズの時も、ベヒモスの時も、ただ運命とでも言うべき名の鎮に引き寄せられただけの話。自ら近づこうとしても、まず、偶然では辿り着ける場所でもない。それは、アマリリスにとつての狼狩りと同じ事でもあった。捜そうとして見つけだしているわけではなく、見つけたから捜し出しているに過ぎない。アマリリスのその万能な千里眼にも似た感覚は、実際のところ万能なはずもなく、人狼以外のものとあつては悲しい程役に立たないものだった。

確かに、ジズの時の変化は嗅ぎとれた。

しかし、それは、ジズの場所だけの話……。

アマリリスはジズを知っている。ジズのいる場所も、そして、ジズの持つているモノがアマリリスにとつては相当羨ましいものだったということも、覚えている。例えるならば、アマリリスにとつてのツバキは、サファイアにとつてのプシュケにも似ていた。どんなに欲しくても、どんなに手に入れたくても、大きな外壁がそれを妨げている。

極上の人狼を手に入れている者。

ある意味、アマリリスにとって、ジズは特別な存在だった。ならば、リヴィア・イアサンは？ プシュケは？ 残念なことに、アマリリスには、ベヒモスの場所が案内されるまで悟れなかつたようだ。リヴィア・イアサンの場所もちつともぴんとこなかつた。リヴィア・イアサンは何処にいるのか。声しか聞いた事のない相手を、どうやって捜すのか。

確かにここにはリヴィア・イアサンに捧げるべき供物はある。しかし、

プシュケはリヴィア・アイサンの場所など分からぬといつ。恐怖から言つてゐるのではなく、本心であることをアマリリスはきちんと見抜いていた。もしくは、『恐怖』が彼女の本能を刺激しているのか。どちらにしても、プシュケではどうしようもない。となれば、ここで役に立てそうな者は誰だらう？

「あのニュンペー……」

不意にサファイアが口を開いた。白い花を身につけてゐるはずの彼女の目は、アマリリスを一瞬ぞつとさせるほど荒々しく光つていた。

「大いなる生き物たちの子孫がいると言つていたわね……」

その声は不穏なものだった。何を考えているにせよ、それはあまり好ましい事態でない印。とはいって、サファイアの考えそうなことは、アマリリスの頭を何度も過ぎることである場合も多い。大いなる生き物たちの子孫。それが、何処にいるのか、何処で暮らしているのか、そして、それぞれの生き物との関係はどういうものなのかな。「リヴィア・アイサンの子孫……ね……」

アマリリスの言葉に、サファイアはそつと呟いた。

「そいつらの場所さえ分かれば、私……」

何を言わんとしているのか、アマリリスには理解出来た。

広い大陸の一つや二つくらい、ある種、閉鎖的な意識を持つ村があつてもおかしくはない。

特に、ジズ、ベヒモス、リヴィアイアサンなどの聖地の付近では、そういう意識を持ちながら排他的な独自の文化を築く村というものも隠されているものだ。

もう随分前、サファイアの元に冒険家の男が残した言葉だった。
世界は自分が思っているよりも狭く、自分が信じているよりも果てしないものでした。

リヴィアイアサンの子孫を名乗る者たちの村が、リヴィアイアサンの聖地に最も近い場所にあるだらうことはよく分かっていた。ただし、その噂がどのくらいあるのか、そのうちのどれだけが單なる狂信に過ぎないのか、辿りつけたとして、プシュケを目の前にした彼らがどう動くのか、サファイアの意識を揺るがす要素は限りなく多かった。

アマリリスに言いかけたこと、そして、アマリリスが悟つたことは、実現することかもしれない。懐に仕舞う白い花が、一体いつまでその効力を残すのだろうか。

サファイアの胸の内が、燃えるように熱くなつた。

アマリリスによれば、自分が放浪してきた中に、リヴィアイアサンに関わるような雰囲気の場所は全くなかつたという。むしろ、大いなる三つの生き物を否定するかのような信仰ばかりが渦巻いており、そんな場所の近くでリヴィアイアサンが身体を休めるとも思えない、という事だった。

考えるのならば、そういう場所だ。今までだつてそうだつた。限りなく空に近い場所に居たらしいジズ。大陸のうちでもつとも深い森を広げる場所に居たベヒモス。彼らと繋がりのある生き物ならば、同じように特別な海の場所を気にいるのではないだろうか。

特別な海……。

生憎、サファイアには海の事など分からなかつた。海なんて、一生に一度行くかもしない程度にしか考えたことがない。ただ、プシュケの事があつてから、気になり始めたに過ぎない場所だつた。特別な海の場所……。

「海神騙りの民草……」

ふと、サファイアの頭を過ぎる言葉があつた。

「己の信仰を深めるために旅をしているというある国の若者がぼそりと落とした言葉だつた。彼の語る世界は、前に来た冒険家名乗りの者とは大きく異なり、大いなる生き物たちを崇める者たちを、まるで悪鬼か何かを崇めている罪深い狂信者かのように語つていた。その裏側には、彼自身の崇める神への愛の強さが感じ取れたのだが、あまりのギャップにサファイアは内心驚いたものだつた。

そんな彼が呟いたのだ。

海神……？

彼は何処でそれを感じたのだろうか。とても綺麗な海だつたと彼は言つていた記憶もある。だが、それは一体、何処だつただろう？

大きな町に行けば様々な人が集まる。つまり、様々な話を聞けるはずだ。

それは分かつていて、分かつてているのだが、アマリリス達にはそれを期待できない理由がいくつもあった。一つは行く先々に漂う人狼の気配。そして一つは行く先々に漂う魔女狩りの討伐隊の気配。自ら危険に飛び込んでいくしか道はないと言え、行く先、行く先ですでに滅んだ町や村、もしくは待ち伏せしていた討伐隊の者たち、もしくは人狼以外の魔物達しか迎えてくれないと、さすがに気力を失う。

旅の疲れを癒せず、それどころか戦いに巻き込まれる。特に、元々体力のないプシュケやランには辛いものだった。結局、確実にひと休み出来る所と言えど、人里離れた森の中ばかりだった。人を住まわせる機能を失った廃町廃村、よりも、鬱蒼と茂る森の中の方がずっと安全だった。

しかし、森の中に居ても、リヴァイアサンの事、そして、リヴァイアサンの子孫の事に関しての情報は得られない。途方に暮れるのも無理のない事だった。

アマリリスの苛立ちは頂点に達していた。既に形なきものになつた人体ですら、アマリリスにとつては邪魔なものとなつていて、そのため、魔力が尽くるまでそれを解放してしまつてもいいという具合に、亡骸を傷つけ続けていたのだ。

他の者たちも、もはやそれを見ないという事でしか自分を守れな
いまでに疲労していた。

食物を摂り、寝るだけではない。この先行くべき場所が見つかる

という事が、今の彼らには一番の栄養だつた。アマリリスはふと、攻撃を止めた。やつとそれが死んでいる事に気付いたからだ。

「人を殺しても、何も面白くない」

アマリリスの心を掴んでいるのは人狼だけ。人を喰らう人狼を命の端々まで喰らう事だけが、アマリリスの深く黒い欲を満たしてくれる。

最近、人狼に出会っていない……。

血だまりの中で佇むアマリリスの田に、うつすらと影が映り込んだ。

「アリス……」

呼びかける声に、影がすつと消える。

「これから……どうするの？」

ディアナの声だった。彼女の姿は黒いクーガーのまま。変身を解く氣力さえも、ないというのだろうか。アマリリスとは田をあわさず、下を向いたまま座り込んでいた。真っ黒な毛並みに、べつとりとつく血糊。黒に赤という色合いで、それははつきりと確認できた。

アマリリスはじつと他の者たちの顔も見た。皆、疲れているようだつた。町よりも魔物が多い。村よりも討伐隊が多い。少し前ならば想像出来なかつた乱れが、明らかに蔓延していた。

これは、どうしてだろう？

討伐隊が現れ、ジズが消え、ベヒモスが消えた。その結果なのだろうか。それとも、もつと違う何かがもたらしたものなのだろうか。どちらにせよ、これ以上この状況が続く事が、どれほど恐ろしい事か、今のアマリリスには理解出来た。

「少し動きましょ。ここでは休むことも出来ない」
呼びかける声には、冷静さが戻つてきていた。

オーロールやラジカが共に行動するようになつてから、何故か、ぱつたりと魔女についての噂が入らなくなつた。それまでゲネシスの元には、聞こうとしなくとも勝手に耳に入り込んでくるかのように魔女の噂が絶えなかつたものだつた。

しかし、今や魔女の存在など忘れるほど、魔女についての噂を耳にしなくなつていた。

「魔女を討伐するだの大層なことを言つていても所詮人間。本物の魔女がそう易々と見つかるわけがない」

オーロールはそんな事を言つた。つまりそれは、今までゲネシスが手にかけてきた魔女たちが、実は魔女でもなんでもないただの人間に過ぎないという事だろうか。いや、しかし、それでもゲネシスは、彼女達を殺さざるを得なかつた。ゲネシスは、町の者たち複数に密告された者、そして、本人すらも自称する者だけを殺してきたのだから。

「何と言おうと、わたしは魔女を見つけ次第殺さなくてはいけない者さ」

影に潜むオーロールに向かつて、ゲネシスは呟いた。ラジカはすっかり更けこんだ夜に吸い込まれるかのように眠つてゐる。火を焚くその影からゆらりと見える人狼の影が、こちらを振り返つた。オーロールはしばし黙つたのち、失笑するかのように息を吐き、捨てるようになつた。

「別に殺すなど言つてんじゃない。魔女が減るのは私達にとつても嬉しい事だからね」

魔女討伐を目的に剣士として育てられてゐた頃、ゲネシスは常に魔女と魔物は親しい関係にある者として教えられてきた。特に、卑

劣な手で村や、時には町すらも滅ぼす人狼は、魔女が呼び寄せるものだというのが国で蔓延する通常の考え方となっていた。しかし、オーロールの様子を見ていると、どうやらそつでもないらしい事が分かる。オーロールは魔女を嫌っていた。

「その剣……」

オーロールの目が、こちらを見ていた。

「いつから手元にある?」

前にも訊ねられた質問だつた。ゲネシスは俯く。常に持ち歩いているこの剣。片時もその身から離したことはない。剣士として育てられる前から、そして、剣士として育てられている間も、常にこの剣はゲネシスの傍にいた。

しかし、ゲネシスはその質問に答える事が出来なかつた。

「知らない」

影の中で光るオーロールの目を見つめ、ゲネシスは小さく笑む。

「覚えていないんだ」

「」く小さな沈黙が、オーロールとゲネシスの間を通つていく。オーロールの目線は、ゲネシスよりもずっと剣に向いていた。前から、彼女は剣を気にしていたが、その理由は言わない。そして、今日も、言つ事はなさそうだつた。

「そう、か。ならいいわ。それよりも……」

と、オーロールは正面を見つめた。ゲネシスもはつとそれに気付く。何者かがすぐ近くにいる。獸ではない。魔物でもない。この気配は、人間のような気がした。それも、一人ではない。

「出てきたらどう? そんな瘦せ細つた硬そうな肉など、さつき喰つた猪肉にも劣る」

オーロールの声に反応してか、かさりと茂みが動いた。しかし、出てくるまでに気持ちは動かなかつたらしく、その後の様子を見るかのように動かなくなつてしまつた。

「言つただろう? お前らは喰いたくない。人間ならまだしも、お前らのような輩はまずいからね」

人間ならまだしも。ゲネシスは少し動搖した。この気配は魔物とは思えない。しかし、オーロールはそう言った。では、そこにいるのは一体何者なのだろう。

がさり、と茂みが大きく動いた。葉が大きく揺れて、散つて、二人の人間らしきものが現れる。これが人間でなく、何だというのだろうか。しかし、人間だとしても、弱々しい双子の少女がその場所にいる事自体、不自然な事ではあつた。

「あなた、人狼でしょう？ どうして人間と一緒にいるの？」

少女の一人。赤みがかつた髪の長い少女が、オーロールに恐る恐る訊ねた。もう一人の赤みがかつた巻き毛の少女は、じつとゲネシスとラジカを見ていた。

「変ね、あなた達。でも、どうでもいいわ。それよりもあなた達、食べるもの、持つてない？」

巻き毛の少女がゲネシスを見つめて言つた。その目は信じられないほど深い色をしていて、何色と表現することも出来ないくらい混じり合つていた。

二人の少女はオーロールが言つた通り、瘦せ細つていて、そして、何処か人間離れした印象のある者たちだつた。

来るな。そう言われている気がした。プシュケの中でも、もしくは、外で。早く来い。そう言われている気もした。プシュケは身震いした。二つの声が、それぞれプシュケに呼び掛けている。

来てはいけない。

助けてほしい。

この二つの呼び声が、プシュケの感覚を一方向に結び付ける。サファイアはそれを悟っている。プシュケの細やかな反応を見切る、何処に進むべきなのか心得ている。少なくとも、プシュケはそう感じていた。

別方向に進もうとするアマリリス達を、さり気なく誘導するときも、或いは、勝手に先に進むときも、その直前には必ず、プシュケの様子を見ていた。

プシュケに訊ねてくるわけでも、確認するわけでもなしに、その方向は常に正しかった。

早く来い。

来るな。

声は段々強くなる。正しい。この先に行くのが正しいとこ、う事だ。では、呼んでいるのは誰だらう。拒んでいるのは誰だらう。どちらかがリヴィアイアサンであることは確かだつた。己が供物であるプシュケを待つてゐる偉大な海の生き物。リヴィアイアサンの声は、プシュケを呼んでいるのだろうか。では、拒んでいるのは誰なのだろう。

「こつち

サファイアがプシュケの様子を見ながらアマリリス達を誘導して暫く、段々と不審感を増していったディアナが、ついに歯向かい始

めた。

「一人で先走らないでよ」

歯向かったのはディアナだけだった。元から読めないところのあるアマリリスはともかく、バステトも、ランも、不審に思いながらも特に異論を唱えず、黙つてサファイアについて行こうとしていた。ディアナだけが、進むごとに露骨に警戒を強めていた。獣としての本能が、彼女を苛立せているのだろうか。変身してもいのにも、サファイアに不快を示す彼女はまるで、恐怖におびえて牙を剥ぐクーガーそのものだった。

「何があるっていうの？ そっちにリヴァイアサンにまつわるものがあるの？ お願ひだから説明して。何があるかだけでも説明してよ」

「それは出来ないわ」

サファイアはゆっくりと、冷静に、微笑みを浮かべながら答えた。ディアナの感情を逆なでするかのような冷笑に、プシュケの方が緊張した。ディアナの猛禽のような目に反感が浮かぶ前に、サファイアは蒼い目をプシュケに向けて、抑揚のない声で続けた。

「だつて私は、この子の反応を読んでいるだけだもの」

いきなり注目を自分の方に逸らされて、プシュケは動搖した。サファイアの事だから、いつか丸投げしてくるだろうと思つたけれど、まだ心の準備が出来ていない。興奮したディアナに問い合わせられることは目に見えていた。

しかし、ディアナの目は、プシュケを捉えた瞬間、落ち着きを取り戻した。代わりに、怒りのような強い陽の感情ではなく、恐れのような強い陰の感情が醸し出されてきた。

「勘が鋭いだけあるわ。わたしよりもあなたの方がプシュケの感じているものを読み取ることが出来るでしょうね」

サファイアはそう言つて、アマリリス達を見やつた。アマリリスはじつと黙つてサファイア達のやりとりと観察していた。他の二人は、寧ろ、どうしていいか分からぬといつた様子だったが、アマ

リリスだけは明らかに違つた。じつとサファイアの蒼い目を見つめた後、やがて、彼女の口が開いた。

「ディアナ」

「淡々としているが、威圧的な声だった。

「落ちついた？」

ディアナはアマリリスを振り返り、何かを訴えようとした。けれど、威圧的なその存在に、何も言えないまま俯き、そのままゆっくりと頷いた。もしくは、何を言おうとしていたのか、ディアナ本人にすらも分からなかつたのかもしれない。ともかく、アマリリスの一言で、ディアナはおとなしくなってしまった。

「落ちついたようなら行きましょう

アマリリスの冷静な声が、プシュケとサファイアに向いた。

呼んでいる声は強まり、拒んでいる声は弱まってきた。

むしろ、呼ばれている感覚しかないといつてもいいかもしない。プシュケを遠ざけようとしていた何者かは、衰弱しているようでもあつた。弱々しく、果敢無げで、もはや先はないと思つ程、绝望的な声。

プシュケはじつと耳を澄ましながらも、そちらに行くことに対する躊躇いも大きかった。拒んでいる声が恋しい。そちらが勝つてくれればよかつたのに。無意識にそう思つてることに気づき始めた。けれど、サファイアの足取りは容赦なかつた。サファイアがどうしてそうするのか、プシュケは理解しようとも思わなかつたけれど、確かなのは、サファイアのせいで嫌な思いが強くなつていくこと。純粹に敬愛していた時の感覚なんて、ほとんどもうなかつた。残つているのは、裏切られた瞬間から今も確かに存在する傷跡と、恐れに支配される感覚。

だから、プシュケには、サファイアのすることに対する抵抗が出来なかつた。

アマリリスはこの事態をどう思つているのだろう。彼女と、サファイアに任せつぱなしというのは癪なはずだ。しかし、自分に何一つ期待できる要素などないということをプシュケは知つていた。アマリリスは魔女。本物の魔女なのだ。魔女は人間ではない。根本的に人間ではない。それは、善か悪かといった単純な話ではなく、価値観そのもののずれ。アマリリスがプシュケを守つてくれる可能性なんて、期待できるものでもなかつた。

同情を期待できるとすれば、ディアナとバステト、ランがいる。

けれど、同情だけではどうしようもない。サファイアに勝てる相手がアマリリスしかいないというのは、プシュケにとってなかなか不穏なものだった。

当のアマリリスは、サファイアの導きに對して反感も、苛立ちも、驚きも、期待も向けていなかつた。ただ、注意深くサファイアの宝石のような目を見つめ、言葉に従うだけ。簡単に返事をする時もあれば、ただ黙つてサファイアの行く道に進むだけ。時折、襲つてくる危機感に震えるティアナを、主よろしく嗜めるくらいで、サファイアに對しては何も言わない。

プシュケは不安だつた。このまま進んでいくサファイアは、何を思つているのだろうか。アマリリスは何を思いながらついて行つているのだろうか。

進んでも進んでも、声の導きは終わらない。けれど、進めば進むほど、確實にその場所へ近づいていふことは、プシュケにはよく分かつた。

もうすぐ、広大な海とその産み落とした命から生まれた者たちが、プシュケ達を迎えるはずだ。彼らはプシュケを見て、プシュケをどうするのだろう。サファイアは彼らに出会いつて、彼らをどうするのだろう。これから先に起こるどうう混沌に、プシュケはもう混乱させられていた。

どうしたら、この不安と混乱などの雑然としたものを、解消できるのだろう。

その間に答えられる物は、プシュケの中にはいなかつた。

プシュケがおとなしくなつた。

その身体の中は、少し前までは確かにあつた恐怖も、恐怖も、躊躇いも、戸惑いも、すべて消え去つて、別の感情に支配されている。サファイアは深く息を吐いた。

そろそろ、といつわけだ。ここから先、自分が魔と呼ばれるにも関わらず、人間から人間でしかない存在として生まれたことを呪うような未来や宿命が待つてゐるだろう。すぐ近くにいて、とても遠くにいる愛しいものを手に入れたいが為に、命を賭けるといつ覚悟。おかしいな。

サファイアは静かに笑んだ。

どうして自分は、ここまで決意を固めているのだろう。どうして自分は、ここまでこの娘に固執するのだろう。初めてあつた時も、標的と定めた時も、ただの娘にしか映らなかつた。快樂目的で、すぐ消し去つてしまつても痛くない相手でしかなかつた。そこまで固執するような相手でもなかつたはずだつた。それなのに、どうしてここまでして欲しいのだろう。

面倒な獲物なんて放つて、手に入れやすい方に乗り換えればいいのに。

どうしてのかしら。

「そろそろね」

アマリリスが小さな声で呟いた。すぐ傍にいるサファイアですら聞き洩らしそうな程の声。他の者に聞こえたかは分からなかつたが、サファイアはそつと頷いて見せた。アマリリスはサファイアには目を向けなかつたものの、その頷きを確認したように、険しい表情を

見せた。

「空間がざわついている。さほど遠くない場所で、あたし達を警戒している者たちがいる」

木々の向こう、何があるか分からぬ場所へと、アマリリスは目を向けていた。

「あちらから、来るか、あたし達が、行くか

「来るんなら、来るまで放つておくのもいいんじゃない？」

サファイアは同じく小さな声で答えた。確かに居る。近づいて来ている。プシュケに気付いたのか、ただ侵入者として認識しているのか、それは分からぬけれども、こちらに段々と近づいて来ている。

「アリス……」

少し離れた所にいたディアナが、不安げにアマリリスを見た。彼女も気付いているようだ。彼女の中のクーガーが、危機を感じているらしい。アマリリスが彼女に對してどういう表情を送ったのかはサファイアには見えなかつたが、それでも、ディアナの不安は消えずには残つていて、ただは分かつた。

「来た……」

その瞬間、プシュケが歩み出した。近づいてくる足音に向かって、プシュケはゆっくりと歩き出した。誰も、それを追えなかつた。追つていゝものかどうか、判断に困つた。やがて、迷つているうちに、足音の持ち主たちは姿を見せた。

すべて、海の者の血を引くことを証明するヒレのある亜人たちばかりだつた。

彼らはプシュケを見るなり表情を変えた。そして、一言、サファイア達には分からぬ言語で何かを呴きあつた後、一番前に立つていた初老の男がこう告げた。

「お待ちしておりました。あなたが来るのを、ずっと
サファイア達にもよく分かる言葉だつた。

長い髪の子がオフィーリア、巻き毛の子がルナと名乗った。名乗つたと言つても、ルナは自分から名乗らなかつた。オフィーリアは、ルナの名前について、自分が考えて付けたということを強調した。

ゲネシスは不思議に思つた。

彼らはどこから来て、どうしてあの場に居たのだろう。名前にしても、オフィーリアは名前を貰つていると自称するのに、ルナはオフィーリア自身が付けたと言い張る。

しかし、二人はどう見ても双子だつた。オフィーリアも、そうだと肯定したのだ。

ルナはやはり何も言わなかつた。ルナが喋つたのは、最初に会つた日だけだ。それも時間とともに、ルナではなくオフィーリアが話したのではないかと錯覚してくるほど、ルナは話さなかつた。

ルナは滅多に話さないのだとオフィーリアは教えてくれたのだが、話せても喋れないのか、ただ単に話さないのか、ゲネシスには判断がつかなかつた。

オーロールは何か知つているのだろうか、と、ふと考えたものの、彼女のような人狼が、ゲネシスに、人間に、本当のことを教えてくれるとは限らない。だから、聞いても無駄であることを、ゲネシスは弁えていた。

しかし、この二人の出現、とくに、話せないとはい、ルナがこの旅路についてくるということは、ラジカにとつていいことだつた。人間ばなれしているうえに、外見に似付かわしくないほど老いたような心を持つていて、オフィーリアはともかく、ルナは話さない代わりに、無邪気な振る舞いと豊かな表情でラジカと会話してくれる。

「ゲネシスが『与えられないもの』を、この人間によく似た少女は、与えることが出来るのだ。

オフィーリアは、そんなルナのことを『特別な力を持つ子』と呼んでいた。

「あの子は滅多に話さないけど」

オフィーリアは言った。

「本当は、偉大な力を持っているの」

オフィーリアの言葉には、彼女なりの確証が籠められていた。

「特別な力ねえ」

オーロールは呆れ口調で呟いていた。

ともかく、オフィーリアとルナがついてくるようになつてから、ゲネシスの魔女狩りはペースを落とした。というのも、魔女に出会わなくなつたからだ。魔女が減つているとは思えない。なぜなら、討伐された魔女よりも、はるかに、反り討ちにされた戦士のほうが多いと聞くからだ。

実際、ゲネシスも苦戦したことばかりだった。多くは、剣に救われ、もしくは、運に救われ、何度も生き延びてみせたが、はじめは生還するたびに冷やかしたオーロールでさえも、次第に触れなくなるほど、魔女のしぶとさはゲネシスの生存を脅かした。

逃がしたり、逃げ帰ることも多かつた。特に、付近の里にラジカを預けているときはともかく、茂みやうろに隠しているだけの時は、悟られないように気を付けるばかりだった。

最近は、魔女のほうも警戒して、あるいは、煩わしく思つて、討伐軍を襲う。ゲネシスが望んでいようと、魔女とのぶつかりは避けられなかつた。

そんな日々だから、オフィーリアとルナと行動を共にした途端、魔女と出会わなくなるというのは本当に奇妙なことだつた。

しかし、この不思議な双子との時間が深まれば深まるほど、次第にゲネシスは、魔女を狩るという目的すらも忘れてきていた。

そして、そんな日々が続けばいいのに、と心の何処かで感じてい

た。

海の血を引く者達の表情は読めないものだった。けれど、誰もそれを恐れたりはしなかった。道行く先で出会う魔物達の表情豊かな顔の方が、その内に秘める思考も、心情も読み取りづらく不気味なものだから、亞人であり、襲ってくるはずもない彼らを恐れる理由などないというわけだ。

特に、こちらにはプシュケという存在がある。彼らにとつてプシュケは、待ちに待つ秘宝とでも言うべきものだつただろう。彼らの祖先、リヴァイアサンがプシュケを求めていないわけがないのだから。

アマリリス達が通されたのは、集落の中央。皆、プシュケをひと目見ようと集まつては、プシュケと目が合いそうなものは恐れて目を逸らしたりなどしていた。畏怖のような感情が、一気にプシュケに向けられている。この状況下で、アマリリス達など、神聖なる海の供物を載せる神輿の付属品にすぎなかつた。しかし、だからといって、アマリリス達が邪険に扱われるという事もなさそうだ。

あとは、プシュケが捧げられる場所への同行を許されることを祈るばかり。

「リヴァイアサン様は大変苦惱されている」

この集落の長らしきものが、アマリリス達は振り返らずに静かに言つた。その声は異様に小さく、異様に頭に響くものだつた。もつと言えば、空間を介していない声。空気の振動によつて伝わる声ではなかつたような気がした。

「ここのところ、不穏な風が我々の世界を齎かしている。何かある前に、とかの御方は、供物を求めていらした。こ足労感謝する、魔女

よ

アマリリスはそつと意識の幅を狭めた。礼を言われたものの、少し不快だった。気を抜いていたとはいえ、自分の意識の中に他者の声の侵入を許してしまったという事が、何とも気に喰わなかつた。別に、この海の者が憎いわけではない。見落とした自分が許せなかつたのだ。

アマリリスは男の声を追いだすと、目を細めた。

「礼には及ばないわ」

極々小さい声で、そう答えた。他の者たちには聞こえなかつたのだろう、小声とはいえ、突然亥いたアマリリスをちらりと見つめた。集落の長らしき男は、そこでやつと振り返つた。その表情からは、はやり何も読み取れない。魚の表情だ。もしくは、竜の表情とでも言つべきなのだろうか。血と肉への執着を振りかざし、醜い欲求と共に襲いかかつてくる魔物達の方が、まだ豊かな表情をしている。その事実はアマリリスは何度もかみしめた。

だが、表情そのものは危険ではない。表情は読み取れずとも、非攻撃的な意図は読み取れる。やはり、ここが人間と魔物との違いなのだろう。

「それよりも、これから何処へ連れて行くつもり？」

一斉に、彼らの足が止まる。プシュケは少し怯え、傍にいたランを抱きしめた。魚の目のような鈍い輝きを放つ彼らの視線は、アマリリスから、ゆっくりとプシュケに向いていく。彼らがどうしてプシュケを求めていたか、求めた後はどうするのか、分かりきつた質問ではあつた。だけど、アマリリスには確認しておく必要があつた。

「あたし達も、ご一緒に出来るのよねえ？」

やや、アマリリスの姿を見つめる男の目の輝きが鈍つた。元々、違う予定が組み込まれていたにせよ、もはや、誰もアマリリスの意思を曲げることなど出来ないだろう。そんな力のある者は、生憎、ここにはいなかつた。

「ああ、いいだろう

男はあっさりと告げた。異論もなかつた。
「ついてくるがいい、客人」

ここが、プシュケの還る場所。

サファイアはその土地を踏みしめた途端、自分の心を揺り動かす大きな存在に気付いた。その者は、サファイアの心の中を見透かし、警戒して、大口を開けて威嚇していた。その子孫たちは、亞人にしては随分と鈍い感性を持つていてるらしい。プシュケの手を引こうとする亞人達の手を、サファイアは掴んだ。突然の拳動に、手を掴まれた亞人はうろたえつつ、サファイアの目を見、そして、驚愕した。

サファイアは、人食いがばれてからというもの、自分が人間から後ろ指をさされるような存在であることをやつと自覚していた。気に入つた者を籠絡し、心も体も捩じ伏せて、その獲物となる者が気付くより先に肉を喰らつていた時は、自分が何者なのかなんて深く考えていなかつた。ただ、サファイアの一族には獵奇的な嗜好のある者ばかりだつたから、それが断罪される事だとは知つても、人間として不自然なことだとは思わなかつたのだ。

でも、今なら分かる。自分は人間の身体を持つた、魔の者であることを。

「サファイア、止めなさい」

魔の者を止められるのは、同じくらいの力を持つた魔の者だけ。

アマリリスの言葉に、サファイアが気を取られた隙に、手を掴まれていた亞人は、渾身の力を込めてその場を離れていつた。他の亞人たちは何が起こつたか分からなかつたようだ。それもそうだろう。これは、手を掴んだサファイアと、手を掴まれた亞人の間だけで交わされた出来事。第三者でこの事態に気付けたのは、魔女であるア

マリリスと、同じようにして心と体を貪られかけたプシュケぐらいだろう。

プシュケはがたがた震えながら、サファイアの姿をじっと目に映していた。ランを必死に抱き寄せるその姿は、悪夢を見た子どもが必死に柔らかい掛布にしがみ付いている姿そっくりだった。ランは自分を抱き寄せるプシュケが、どうして急にこんなにも震え始めたのか分からなかつたらしく、小動物さながら、プシュケと、プシュケの目線の先にいるサファイアとを見比べていた。

「お前、人間じゃない……？」

手を掴まれていた亜人が、呂律の回らない調子でサファイアに言った。その落ち着きのなさは、どう見ても異常だった。

「何をされたんだ？」

他の亜人が訊ねても、その亜人は答えられない。答えられるはずもないのだ。とにかく、彼が感じただろうことは、自分の命が丸々噛みちぎられかけたという事。掴まれた手が、一瞬の後に引き千切れられていたのではないかという、不確かな予感。

アマリリスはじつとサファイアを見つめていた。彼女にはどのくらい、サファイアの魂胆が見えているのだろう。サファイアにとつて、アマリリスの魂胆が見えづらかつた分、何処まで自分の心が見透かされているのかが気になつた。

「静まれ。この場はリヴィア・イアサン様の場所。許しなく争つていい場所ではない」

亜人の長が言つた。勿論、サファイアはそれを心得ている。争おうと思つたわけではない。ただ、邪魔な亜人の手を引っこ抜こうとしただけ。リヴィア・イアサンに対し、無礼を働くこつと思つてゐるわけではない。礼儀正しく、その命を貰いたいだけだ。

「騒がしいなあ。供物の気配がすると喜んでいたのに……」

その時だつた。聞き覚えのある声がした。人間の放つ声ではない。空気の揺るがし方が大きく違う。深く、強大なその振動は、ここにいる者達全体を包み込んでいる。そう、これは、かのジズやベヒモ

スと同じような声だつた。

「供物だけでなく、違う者も紛れてしまつたとは……」

「声だけで、姿は見えなかつた。それでも、亜人たちが怯えるのには十分だつた。

「申し訳ございません。ですが、この者たちは、大切な贊を遠い地より守りぬいて来られた者たちで……」

亜人の言葉を遮る様に、その者は大きく咆哮する。薄つすらと発生する霧の向こうにいるのは、長い体を持つた、魚とも竜ともつかない姿の生き物だつた。

「違う」

低い声で、その生き物は言つ。

「私が見ているのは、影にいる者だ」

「影？」

亜人たちが聞き返した時、やつと、サファイアもアマリリスも、気付いた。この場に、最初はいなかつたはずの者が、潜んでいる。

何が起こつたのかすぐには分からなかつた。

ただ、ディアナが見たものは、この場全体の揺らぎと、その揺らぎの中心より、強靭な意志を以て剣を突き立てて、まっすぐリヴァイアサンへと突っ込んでいく、人間の姿だつた。

人間？ まさか……！

ディアナはたつた今見たものそのものが信じられなかつた。このような大きな意志を、力を、風を以て、強大過ぎる相手に何の躊躇もなく突っ込んで行けるような者が、本当に人間なのだろうか。いや、寧ろ、生き物なのだろうか。

そこからが、ディアナにとつて疑わしい所だつた。

リヴァイアサンの子孫たちは、完全に冷静さを失つていた。大まかに分けると、怒る者、嘆く者、恐れをなして逃げる者などがいた。だが、ディアナにはどうでもいいことだつた。あの人は、彼らには危害を加えないだろう。

リヴァイアサンが咆哮する。人間は風変わりな剣を構え、その頭に叩きつけていく。だが、そう簡単に、リヴァイアサンのような存在を、斬り伏せる事が出来るわけがない。一瞬にして、偉大なる海の生き物の姿は消え去り、後にはその人間だけが残されていた。霧が晴れ、段々と、リヴァイアサンに襲いかかる者の姿がはつきりしてきた。剣士。魔女の討伐を担う剣士によく似た姿の者。そして、影より現れ、剣士に走り寄つて行くのは、二人の少女。双子だつた。彼女達は人間ではない。どちらかといえば、プシュケによく似た存在だつた。

「貴様ら、何者だ……！」

やつと混乱から立ち直つた集落の長が、その人間達を問い合わせる。

双子の少女たちは、おずおずと彼らの姿を見つめるばかりだった。剣を構える人間の方は、じつとリヴァイアサンの血を受け継ぐ者たちを見やると、表情を変えずに低い声で言い放った。

「お前達には興味はない。私が欲しいのは、お前達の生みの親の命。悪いが、頂いて行くぞ」

男の声とは思えなかつた。かといって、女であると断言も出来ない。ともかく、ゲネシスと名乗つたこの剣士の狙いは、リヴァイアサンにあつた。もしかして、とディアナは思う。ジズ、ベヒモス、姿を消していつた偉大なる生き物たち。そして、その場に残つていたのは、三人の人間と、一人の人狼の影。それは、この者たちなのではないのだろうか。

と、その瞬間、ディアナの嗅覚をくすぐる刺激があつた。血の匂いでも、鉄や火のような嫌な匂いではない。どちらかと言えば、懐かしく、愛おしく、そして思えば思う程激しく憎らしい匂い。そして、憎らしいのは、その匂いの元ではない。その匂いと共に存在し、その匂いを無理矢理に己の一部にしてしまつた禍々しい生き物。ディアナにとつては、存在自体が許せないような者。

影から注意深く、こちらを見ている視線を、ディアナのクーガーの目は、見逃さなかつた。

「オーロール……」

違う。この名はディアナにとつて大切な人の持つていたもの。彼女は死んだ。よつて、この名を名乗れるのは、今、ディアナの視線の先にいる者の名前ではない。美しく笑むその顔も、死んだ旧友のものであつて、この憎らしい魔物のものではない。彼女は、だが、ひつそりと笑みを浮かべ、ディアナへと向けて言葉を放つた。

「そう、私はオーロール。村に拾われたあなたを手厚く介護した者

……」

違う。これはオーロールじゃない。そう自分に言い聞かせた瞬間、ディアナの身体の中で、抗えきれない衝動が、生まれた。

「ディアナ」

その衝動をぴったりと止ませる声があった。

「来なさい」

それは、アマリリストの声だった。

久しぶりに魔女の目撃情報を耳にした。耳にした以上、それを追うのが討伐を命じられた者の役目だ。オフィーリアとルナと出会ってから、初めての魔女狩りだつた。言つべきか、言わざるべきか。この双子にとつて、ゲネシスの行う魔女狩りと「うのはど」のようにな映るのだろうか。

どちらにせよ、隠し通せるものでもない。ラジカも、双子も、誰一人として、里に預けておくことが出来なかつたからだ。

(安心しなよ)

オーロールの声が頭に響く。

(誰かが死んだ時は、私が跡形もなく掃除してやるよ)

人狼に相応しい励まし方だ。しかし、それを冗談と受け取つてしまふ程、ゲネシスは冷静でなかつた。ラジカ達は物陰に隠れていればいい。戦うのは、ゲネシスだけ。標的である魔女に、三人の存在が気付かれないうことが一番だ。だが、それを期待できるような相手も出もないことを、ゲネシスは感じ取つていた。そして、かどついて、オーロールを頼ることが出来るわけもないことを、よく知つていた。

ゲネシスは祈つた。ここまで心をこめて祈つたのは、初めてかもしない。どうか、無事にこの戦いが終わるよう。祈りつつ、祈りつつ、ラジカと双子を茂みに隠し、ゲネシスは気配を頼りに歩きだした。影を伝つてついてくるのは、オーロールの気配。

頼む。

伝わらないことを覚悟しつつも、哀願せずにはいられなかつた。三人を守つてくれ。

くすくすと笑う声が、耳元で聞こえた。ゲネシスの小柄な体全体を、人狼特有の気配が覆い尽くしていく。ぴたりとついて離れないその匂いに、ゲネシスは思わず表情を濁した。

（私がそんなことすると本気で思つていいのかい？）

分かつっていた。ゲネシスには分かつっていた。オーロールがそのような事をしてくれないことぐらい、よく分かつっていた。けれど、この不吉な予感の付きまとう戦いの間だけは、例外であつてほしかつた。今から狙う魔女の命を完全に吹き消すまでは、或いは、それが己の命を潰すきっかけになつたとしても、オーロールには、あの三人を守つていて欲しかつた。

駄目か……。

（忘れないのか？）

オーロールの気配が、ゲネシスの影の中で蠢く。

（私は人狼なのだよ。私は私の好きなようにさせてもらひつよ）

分かつているとも。

ふと、ゲネシスは足をとめた。風向きが変わり、人間には馴染みのない色の風が、向かい側から吹いて来た。ゲネシスは剣を握りしめ、その風の向こうを睨んだ。来ている。気配が近づいて来ている。あちらはもう、ゲネシスと戦う気なのだろうか。それとも、ただ様子を見に来ているだけなのだろうか。どちらにせよ、ゲネシスが戦うに十分な理由だつた。

少しずつ、気配に姿が加わつてくる。思つたよりも小柄で、思つたよりも幼い少女の姿。ゲネシスの姿を見つめているその日は、遠くに居てもよく光つていた。

影に潜むオーロールが、鼻で笑つた。

（嫌なタイプの魔女だ。ぜひ仕留めて、私に奴の肉を貪らせてほしいものだよ）

ゲネシスは剣を解き、矛先を少女へと向けた。

別にお前の為に仕留めるのではない、人食い。

（釣れないのは、相変わらずだね）

オーロールがけらけらと笑った時、少女の口元が少しだけ動いた。

「ねえ」

小さいのに、よく響く声だった。

「誰と喋っているの？」

ゲネシスが駆け出したのは、その時だった。

リヴィアイアサンが襲われている。

剣を持つた人間に、その首を狙われている。

そう思った瞬間、プシュケの中に、不思議な感情が芽生えた。それは、たった今見ただけのこの主に対する、慕情。今にも首を落とされそうなりヴィアイアサンに向かつて、プシュケは自分でも気付かない内に、大声で叫んでいた。

「逃げて！」

リヴィアイアサンはその大きな眼を細めた。それは、剣を持つた人間に對して嘲笑の念を向けているようにも見えたけれども、プシュケにとつては、自分に微笑みかけているようにも見えた。或いは、その両方。プシュケは段々、この人間が憎くなってきた。

「やめてよ！ やめて！」

人間に對して否定の感情をぶつけながら、プシュケは無意識的に背負っていた弓矢を取つた。少しづつ、少しづつ、力を込めていく。やがて、その狙いを人間に迷うことなく向けたプシュケは、一気に、自分の中で今にも爆発しそうな感情の留め具を壊すように、矢を放つた。

滑る様に、そして、空間を切斷するかのように飛んでいく矢は、まるで糸で繋がっていたかのように、リヴィアイアサンに夢中な人間の剣を持つ方の腕に食らいついた。人間が小さく呻き、剣を落とす。その隙に、リヴィアイアサンは、その大きな存在を消してしまつていった。

「リヴィアイアサン様……」

プシュケはじつと主のいた場所を見つめた。その大きな命は消え

てはいない。だが、求めた時に触れられるように、姿を見せてくれることはしばらくなさそうだとプシュケは悟った。悟った瞬間、とてつもなく寂しい感情が押し寄せてきた。

この感情だけは、他の者たちには伝えられなかつた。

きつと、ジズの供物であつたツバキも、ベヒモスの供物であつた名もなきニコンペーの娘も、この感情を味わつたはずだ。いや、彼らはもつと苦しい思いをしたのかも知れない。ならば、それならば、どうして堪えられたのだろう。どうしてたつた一人で己の場所を守る事が出来るのだろう。

自分はたつた今、主となる生き物と出会つたばかりだ。それなのにもう、心の中の主の存在は、大きすぎるものになつてしまつてゐる。他の者たちはどうして堪えられているのだろうか。いや、もしかしたら、堪えられてなんていなかつたのかも知れない。表面にはその悲しみと絶望が、半分も漏れていないのかも知れない。プシュケに見えなかつただけで、彼らの中身は、どす黒くて、渴ききつていて、ざらついていて、錆ついていて、感情だけで空間を破裂させられるぐらいい壞れていたのかもしれない。もしくは、真つ白で、ただ広くて、広くて、何もなくて、空しさだけがその中を漂つてゐる、そんな状態だつたのかもしれない。

そのくらい、プシュケも苦しかつた。でも、命は守れた。剣を持った人間は、リヴァイアサンを捜しつつも、弓を放つたプシュケを物凄く恐ろしい形相で睨んでいた。剣には黒い血。その頬も、黒い血で汚れていた。しかし、見つめられたプシュケは驚愕した。その剣士の整つた陶器のような顔に。その剣士のガラス細工のような双眸に。そして、中性的な怪しさを漂わせる、その姿そのものに。ふと、誰かに腕を掴まれて、プシュケは心臓が止まりそうになつた。乱暴に立たされるその感覚で、それが誰かは分かつた。

「プシュケ、来なさい。あなたは恨まれた。あの子の狙いはリヴァイアサン。でも、美しいあの子は邪魔をする者には容赦はしないでしょう」

サファイアだ。暗がりで光っているように見える彼女の目は、まつすぐ剣を持つた人間に向いていた。挑戦的にも見えたし、諭しているようにも見えた。

「あなたを殺させはしないわ」

サファイアは静かに言った。

「だつて、あなたを殺すのは、私だから」

サファイアの手に握られる剣が、光を反射した。

物静かな雰囲気の少女の姿。

彼女がそつと微笑んだ瞬間、ゲネシスの全身を雷のようなものが貫いていった。そして、その感覚が、威圧からくる恐怖によるものだと悟るのに、しばしの時間を要した。

この魔女は、何かが違う。

「あなた、独りじゃないのね」

少女が首を傾げた。長い黒髪が、さらりと肩にかかる。美しい顔をしていた。整った顔立ちと、見れば見る程吸いこまれていきそうなほどの、綺麗な目をしていた。ただ、その幼さと美しさを湛える少女の姿は、冷たい印象を与えるものだった。

「狼と一緒にいる

「お前は何者なんだ……？」

ゲネシスは恐る恐る訊ねた。訊ねずにはいられなかつた。少女はもう一度首を傾げ、少しだけ目を見開いた。自ずと動き、喋り出すこと以外は、まるで、精巧につくられた人形のようだ。

「あたし？」

少女は聞き返し、ゲネシスを真つ直ぐ見つめていた。正確には、その影まで。オーロールの潜む影までを含めて見つめていた。

「あたしは、キュベレー。それだけがあたしの全て」

キュベレーと名乗った少女は、軽く辞儀をして、飛びはねるよう に一步、ゲネシスへと近づいき、「それで？」と、子どもが大人に話を急かすように、無邪気な表情でゲネシスに訊ねた。

「あなた達は、誰？」

ゲネシスは覚悟を決めた。剣をゆっくりと動かし、まっすぐキュ

ベレーに向ける。キュベレーはほんの少し驚いたような表情を見せたが、すぐにくすりと笑つて見せた。

「あなた、剣士なんだ。魔女を殺す剣士？ 魔女狩りをしているの？ あたしを殺しに来たの？」

まるで、他人事のようなキュベレーの態度。ここまで得体の知れない者を相手にするのは初めてかもしれない。キュベレーを前にして初めて、今まで討伐してきた魔女が、人間のようになるとでもあつたことに気づかされる。

「退屈していたの。ねえ、剣士さん、ゲームしよう」「みう」

キュベレーは再び跳びはね、ゲネシスのすぐ近くにある大岩へと近づき、座つた。座り込んだキュベレーは、肘をついて前かがみでゲネシスをじっと見ている。

「かくれんぼしよう。まずは剣士さんが鬼。あたしを見つけられたら、今度はあたしが鬼になるの」「かくれんぼは出来ない」

ゲネシスは低い声で返答した。

キュベレーは本当に意外そうな表情で、また首を傾げた。
「どうして？」

「お前を殺したいからだ」

ゲネシスはもう隠さなかつた。不意打ちをしても、返り討ちにされて終わりだらう。それほどの脅威を、このキュベレーという名の少女からは感じられた。ゲネシスの影の中で、オーロールが低く唸り始めていた。

「そんなの、つまらない」

キュベレーはわがままが通らなかつた子どものように、不貞腐れた表情を見せた。場合が場合でなければ、普通に可愛い少女に見えただろう。しかし、彼女は危険な匂いのする魔女。ゲネシスの緊張は、限界に達していた。

「遊んでから戦つたつていいじゃない」

ゲネシスは無言で剣を振るつた。

（あまり、刺激しない方がいいと思うわね……）

オーロールがひつそりとした声で言った。

キュベレーはまっすぐゲネシスの剣を見つめ、さらにつまらなさそうな表情を見せた。そして、大岩から降りて、ふらりとゲネシスの方へと歩み寄り始めた。

「そう。遊びたくないのね。なら、仕方ないわ。でも、あなた、本当に、今、戦いたいの？」

「悪いが、そうだ。今すぐ、お前の命が欲しい」

「あたしの命？ そんなに欲しがるような価値のあるものでもないと思うけどな。でも、あなたが戦う気なら、仕方ないわね。でも、あなた、本当にいいの？」

「何度も言わせるな。命が惜しいか？」

「違うわ」と、キュベレーはまっすぐ一方を指差した。それは、ゲネシスのいる位置よりも、ほんの少し左にずれた方向だつた。オーロールの溜め息が聞こえた。ゲネシスは一瞬混乱したが、おずおずとそちらへと目を向けた。

「あなたが大切にしているモノ、壊れちゃうかもしれないけれど、いいの？」

キュベレーの声が、歪んだ。

100 ·

遠くで動きがあつたのを、アマリリスはすぐに感じ取った。

無意識に、遅れてくるディアナの手を握る力が強くなる。バステトはすぐ近くにいる。ランもだ。姿が見えないのは、プシュケとサファイア。二人の姿は、人混みのなかで隠れてしまっている。何処にいるかは、まだ分からない。

ランが不安そうな顔でそつと振り返った。

アマリリスはゆっくりと息を吐き、ランの見ている方向をじっと見据えた。

「ディアナ、バステト……」

落ちついているけれども、低く険しい声。ディアナとバステトは、やや戸惑いつつアマリリスに目線で答えた。ディアナの手を放し、アマリリスはランの見ている方向を見たまま、言った。

「ランを守つていなさい」

「待つて、アリス」

ディアナの声に、アマリリスはちらりと目線を動かしてその姿を見つめた。ディアナは再びクーガーの姿になつていて。自分達に迫つている危険を感じ取っていたのだろう。このあたりはまだ、安全地帯ではない。

「気を付けて」

引きとめるわけでもなく、ディアナはそうだけ言った。

アマリリスは微かに笑み、去り際に言葉を残した。

「そちらこそね」

アマリリスは気付いていた。ディアナ達のすぐ傍に、纏わり憑いている影。さつき撒くことができなかつた、飢えに苦しむ狼の危険な香り。アマリリスにとつてはとても芳しいものだつた。本当なら

ば、いきますぐに彼女の潜んでいる場所へと魔力に向けて、その肉を引き千切つてしまいたい。彼女の痛む姿を思う存分目に焼き付け、少しづつ少しづつ魂と精神を喰らうかのようにいたぶりたい。隙あらば、そんな欲望がアマリリスの意識を支配してしまった。けれど、アマリリスは堪えた。今行くべきは、そちらではないことを、理性がきちんと捉えていた。こんなことは初めてかもしれない。いや、そもそも、一人で行動している時は必要のないパターンでもある。

1、2、3、4、5……。

アマリリスは心の中で数を数えた。この数唱はまじないのようなもの。これをしていると、不思議と攻撃的な興奮が治まつていくよう気がする。数を数えているうちに、もう肉片が飛び散るのを見たいだとか、血が飛び散る感触を味わいたいだとかの異様な欲求は薄らいでいくのだ。

そして、代わりに現れるのは、いつも罪悪感だった。殺してしまった人を襲う魔物への同情の心。

しかし、今は罪悪感も同情も感じずに済んだ。オーロールは、何度も取り逃がした人狼だが、彼女を狙っている暇はない。今は、もつと違う事に時間を使うべきだとアマリリスは分かっていた。

6、7、8、9……。

数を数えているうちに、貪りたくてしかたないような人狼の匂いは気にならなくなつていった。代わりに、意志がアマリリスの身体を支配しはじめる。

サファイア、プシュケ……。

二人の居る場所は、何処か。

何故だ。どうしてこんなことに。

ゲネシスが魔女と戦うようになつて、どのくらい経つただろうか。オフィーリアやルナと出会う前、ラジカと出会う前、そして、オーロールと出会う前から、ゲネシスは数え切れない『魔女』を殺してきたことになる。今でも鮮明に覚えている魔女もいれば、あまり思い出せない魔女もいたかもしれない。魔女と戦うように教えられて、魔女を殺すために国から出されたゲネシスにとって、魔女というものは鹿狩りの鹿、狐狩りの狐、熊狩りの熊のようなものだつた。ゆえに、この状況など、あり得なかつた。

しかし、これは。

魔女を前に逃げなければならない状況というものの存在を、ゲネシスは改めて実感した。どうしてこうなつたのか、どうして、あの場に、ラジカとオフィーリア、ルナが迷い込むような事があつたのかは分からぬ。そして、どうして、キュベレーに見破られたのかは分からぬ。

もしかしたら、キュベレーがこの三人に目を付けたのは、偶然だったのかもしれない。もしかしたら、ただ人間同士というだけで脅しに使つただけなのかもしれない。だけど、天は悲しい事に、キュベレーに味方しているようだ。キュベレーの放つた魔法が、ゲネシスも、オーロールをも避けて、ラジカにぶつかつた時、それははつきりとした。

ほんの一瞬だけの悲鳴とともに、呆気なく倒れたラジカの姿を見て、ゲネシスは生まれて初めて頭が真っ白になつた。それから、ラジカを抱えて逃げ出すまでの記憶はあまりない。

「落ちついて。あなたらしくない」

オーロールの声がゲネシスにそう告げたけれども、ゲネシスには響かなかった。

落ちつく？ これが落ちついていられるのか？

キュベレーは追つてきていた。オフィーリアとルナに事情を聞きたいところだが、それすらも出来ない。いや、事情を聞けたとしても、今のゲネシスの耳には入ってこないかもしない。抱きしめるラジカの身体は冷たく、生き物の身体に感じる流動が、淀み、鈍っている。今のゲネシスにとっては、ラジカの様子がおかしいということを理解するだけが精一杯だった。

そして、その原因を作ったのが、キュベレーという事も。

「待ちなさい」

オーロールが影から何かを告げようとした瞬間、後ろから涼しげな声が聞こえた。と、同時に、ゲネシスの行く手の岩が砕け、道が塞がれてしまった。オフィーリアの小さな悲鳴が聞こえた。ゲネシスが一瞬、判断に迷ったのが、分かれ目だった。

氷のような視線を受けて、ゲネシスの全身から汗が噴き出す。

「そう、お利口ね」

ゲネシスが振り返った先のキュベレー。彼女は、道の真ん中にただ立っていた。微かに笑みを浮かべながら、じつとゲネシス達を見つめていた。

ゲネシスはそつと、オフィーリアとルナを自分の後ろに隠した。ゲネシス以外の者から狙つつもりかもしれない。ラジカだけでは彼女の欲求は満たされそうもない。

「あらあら、その子たちもくれたつていいじゃない」

キュベレーは不満そうな表情を見せて、首を傾げた。目線の先には、ゲネシスの抱きかかえるラジカの姿。

「その子、呆気なく止まっちゃったね」

幼子のように、キュベレーは無邪気な様子でそう言った。

「あたし、野蛮なのはいやなの。遊ぶわけじゃなくて、野蛮なこと

するだけなら、ちょっとの痛みも仕方ないでしょ？

キュベレーは当たり前のようにそう言った。

「だから、あなたの知り合いつぱいの子に、ちょっと悪戯しちゃつたの」

「何をしたんだ……？」

ゲネシスはどうにか声を出した。焦りと緊張とそして、怒りで、
ゲネシスの身体は震えっぱなしだった。

「あたしを見逃してくれたら、その子の治し方、教えてあげるよ？」
治し方？

彼女に戦う気はないらしい。ただ、力の違いを見せつけるだけの
為に、ラジカを利用した。どうして、あの場にラジカは来てしまつ
たのだろうか。しかし、こうならなければ、あの魔術を受けて『止
まつていた』のは、ゲネシスのほうだったかもしれない。

ゲネシスは荒い呼吸を整えながら、少しづつ少しづつ言葉を放つ
ていった。

「どう……すれば……いい？」

その瞬間、キュベレーの笑みが深まった。

サファイアは剣を静かに振つて、リヴィア・サンを探し続ける剣士の気を引いた。剣士はやはり、自分を煌々とした目で睨むサファイアの存在を捨て置くことができなかつたらしく、その視線をプシュケからサファイアへとゆっくりと移した。それだけでも、サファイアの目的は達成されている。

鋭い眼差しだつた。戦いぬいて来た人間特有の、猛禽類のような目。サファイアの闘争心を搔き立てはしても、食指は動かすことは出来ない目。その険しい表情が、整つた顔立ちを際立たせていた。

サファイアは冷笑した。

その剣士がどう動こうとしているのか、サファイアに対して勝算はつかめているのか。サファイアにはどうでもいいことだった。ただ、この強そうな相手を前に、今から剣と剣をぶつけるという事に對しての嬉々とした感情が、彼女に冷たく静かな笑みという表情を作らせる。

しかし、剣士は無表情だつた。

ぼそりと独り言のよう口元を動かし、そつと己の剣を持ち直した。変わつた剣だつた。サファイアが持つていていたものと似ていて、かなり違う。たつた今、ひと目見ただけだというのに、まるで、その剣は、使用者のことを庇護するという意志をしっかりと持つているかのようだ。

まともにぶつかれば、どうなるかは分からぬ。そう思った。

「あなた、どうしてリヴィア・サンを攻撃したの？」

サファイアの問いに、剣士は答えない。ただ、険しい表情を変えずに、サファイアを見つめているばかりだつた。サファイアはその睨みに負けないように、じつと見つめ返した。しかし、ふと、剣士

の様子の違和感に気づいた。

あちらが攻撃できるタイミングとこののは、もうすでに何十回も過ぎ去っているところに、剣士はじっと睨み続け、攻撃しようという姿勢は保ちつつも、動き出す気配も見られなかつたからだ。もしも、サファイアを切り捨てようといつ氣ならば、すでに剣はぶつかり合つてゐるはず。しかし、その音が聞こえるのも、だいぶ先だとしか思えなかつた。

剣士は何を狙つてゐるのだろうか。

そう考えを切り替えたサファイアが、危機に気づいたのはすぐのことだつた。

「プシュケ……。

すぐに振り返り、サファイアは後退した。それを見計らつたかのように、剣士は攻撃態勢に入つた。サファイアが悟るのも計算済みだつたらしい。ただし、サファイアはそんな剣士のことになどもつ構つていられなかつた。

プシュケの背後に見える一つの手。プシュケはまだ気付いていない。剣士の傍から、いつの間にか、エルフの双子の娘たちが消えていること。明らかに捕えようとしている手が、プシュケのすぐ後ろにまで伸びてゐること。

「プシュケ！」

間に合わないと氣付いて叫んだ途端、サファイアの背中を、焼き付けるような衝撃が襲つた。

「恨むなら恨むがいい。私にはそのくらいの覚悟はある」

空氣を凍らすようなその言葉。剣士の声だ。サファイアの胸に秘める小さな花が、ぽとりと地面に落ちていつた。

自分の命を守りながら相手を貫く剣の光は、ゲネシスの研ぎ澄まされた心そのものを表しているかのようだつた。

つい、数日前に、国に命じられた魔女狩りよりも遙かに大切な目的が、ゲネシスの中に芽生えた。魔女を狩るという役目は、やるべきことのないゲネシスにとつては、いわば、穴埋め。暇つぶしのようなものだつたのだろうと、ゲネシス自身痛感した。

何よりも優先したい目的の出来た今、ゲネシスにとつて魔女狩りは、放棄しても構わないほどどうでもいいこととなつていて。

そんなゲネシスに同行するのは、一匹の人狼と双子の娘達。ゲネシスの影に潜み続ける人狼と、ヒトに限りなく近い何かである娘たちは、ゲネシスの決断に口を出さなかつた。

ただ、ゲネシスが決断を口にした時、自然と言う大きな理の中で生きている人狼であるオーロールは、やや硬い表情を見せていた。

「それで、お前が後悔しないというのならば、私は何も言わない」
オーロールはまるで人間のように、そう言つた。

誰も反対しなかつた。だから、ゲネシスに選択できる項目は、ひとつしかなかつた。全ては、触れてはいけなかつた恐ろしき魔女キユベレーに捉われた、たつた一人の少年のため。ゲネシスは向かうしかなかつた。

「共に来なくてもいいんだ」

ゲネシスはオーロールと双子にそう言つた。

「私はきっと、生き物として最低の事をするのだろう。人間として生まれ、人間として生きた私にとってそれがどのくらい恐ろしい事なのかな、恥ずかしい事に分からんんだ。でも、もしかしたら、

皆には分かつてゐるのかもしない。もし、無理をしてついて来ているのだったら、そんな事はしなくていいと言つておく」

その言葉を聞いたルナが、じつとゲネシスを見つめた。何も言わないルナの瞳は、魔力の全てがこめられているかのように強く、ゲネシスはしばしその瞳に捉われた。訴えかけるような視線を送りつつ、ルナはずつと無言であつた。代わりに口を開いたのは、双子の片割れのオフィーリアの方だつた。

「わたし達は、別に、仕方なくあなたについて来ているわけじゃないの」

それは、ルナの代弁でもあり、自分自身の考えでもあるようだつた。

「わたし達が見つけたのは、あなたという居場所。あなたの傍といふ居場所。だから、わたし達のことを気にする必要はないわ」

オフィーリアの言葉には、嘘がなかつた。ゲネシスにはこの言葉が有難く、そして、怖かつた。自分が他人を巻き込んでいるような気がした。けれど、どうしようもない。誰がついてこようと、誰を巻き込もうと、そうしなければ、ゲネシスの助けたい人は、助からないのだから。

オーロールは何も言わなかつた。ただ、ゲネシスの影の中で黙り込んでいるだけだつた。人狼には人狼の考え方があるのだといつかオーロールは言つた。そうニンゲンに説明するのは初めてだとも、言つていた。オーロールはもはや、ゲネシスにとつて、もはや、見たらすぐに切り捨てていいような魔物ではなかつた。魔物がここまでヒトと交流できることもあるのだと知つた初めての存在だつた。

何も言わないオーロールは、ゲネシスの影の中に、居座り続けた。ゲネシスは静かに剣を握り、自分の行く手を見つめた。

まず行くべきところ。キュベレーに指定された場所。その行く手には、とても美しい空が広がつていた。

アマリリスは、独り心を落ちつかせていた。目指す場所はすぐ傍にある。けれど、それはとても遠い場所もある。鎖を外してしまつた魔物と、尋常でない存在をすでに一一体も倒してしまつてゐる魔人とが、ぶつかり合つてゐる。

サファイアと、突如現れた剣士。サファイアが理性を手放した理由を、アマリリスはすぐに見通した。目に見える前から、察していきことでもある。プシュケによく似た気配が一つ、プシュケの周りを取り囲んでいることは、それくらいすぐに分かることだった。

サファイアが理性をかなぐり捨ててまで剣士たちを相手にしているのは、そのためだ。理性という重石を捨てたサファイアを前に、剣士も、エルフも、どのくらい太刀打ちできるかなんて、考へる必要もなかつた。

だが、問題はその後にある。アマリリスにとって、重要なのはそこだつた。

剣士は倒していい。エルフだつてそうだ。今の彼らはアマリリスにとつては邪魔なだけ。命は奪わないにしても、再起不能ぐらいにして欲しかつた。動くのは、その後だ。エルフたちと剣士が倒れた後、サファイアが目を向けるのは、経つた今、自分が助けたプシュケであるだろう。

アマリリスには今のサファイアの心がよく分かっているつもりだつた。

サファイアの心を大きく占めている、食肉の欲求。そして、プシュケに対する強い支配欲。サファイアがプシュケを助けるのは、単純にプシュケが愛しいからではない。その愛しさには、複雑で、より官能的で、より残虐な欲求から生まれるたくさんの感情が、ま

とめられ、こめられている。

プシュケにぶつけられるそれが、今のアマリリストは堪えられないものだった。自分でも不思議なくらい、不快なことだった。サファイアが、理性を捨てて戦っている今のこの状況事態、とても不快なことだった。況してや、サファイアが、プシュケを襲つて、そして食べてしまうという事。

止めなれば。

何処から生まれたかもわからないその想いが、アマリリストの心の根底にて、渦巻いていた。

「さて、どうするべきなのかしらね……」

サファイアと剣士が剣を交える。その光景を直接目にしたアマリリストは、ほんの少しだけ表情を歪めた。自分で、剣士を少なからずみくびついていたことを、経つた今知つたのだ。大いなる生き物を「一体も沈めたこの剣士は、やはり、只者ではないらしい。

サファイアと対等に打ち合ひの剣士のその姿は、光に対する影を思わせる雰囲気を持ちながら、どこにも穢れというものを持たないような、純潔の印象を見る者に『えるよ』うなものだった。

今のサファイアに対して、正反対のもの。

それは、対等にぶつかり、対等に反発し得るものだった。

この世を覆い隠す美しい空の源が、ゲネシス達を包み込んでいた。その美しさは、この場所をただ捨て置ける場所でないこと、そして、ゲネシス達のような人間達が踏み込んでいい場所でないことを、ひと目で知らせるものだった。

美しさは、空だけではなかつた。ゲネシス達の目の前に佇む、一人の白髪の女もまた、心が凍つてしまふ程美しかつた。白髪の女は、ゲネシス達を見据え、煌々とした目を向けて、透き通るよつな声でこちらに向かつて言つた。

「人間、精靈、そして……」

凛とした視線が、ゲネシスの影へと向ぐ。ゲネシスは自分の影の中で、オーロールの気配が動いたことを感じた。

白髪の女は、目線をゲネシス達に戻し、言つた。

「奇妙な組み合わせ。だけど、誰だつて同じだ」

ゲネシスはそつと片手で剣に触れた。ここで間違いない。それは確かだつた。キュベレーに指定された通りに来た場所。大いなる空の生まれる場所。そして、目の前にいるのは、恐らく。

（間違いない。私と同じ種族の女だ）

ゲネシスには見破れなくても、オーロールの目は誤魔化せない。いや、むしろ、その美しさは妖魔の類に他ならないほどだ。ゲネシスにも、この目の前にいる女が、もしもニンゲンだつたとしても、ただ者でないことぐらい分かつていた。

ゲネシスの中で、決意が生まれた。

ゆるやかな意識の変化。行動に全く現れない程度の、些細な変化。

しかし、ゲネシス達を見据える白髪の女は、それを鋭く察知した。

「立ち去れ。今すぐに！」

澄んだ高い声ではあるが、狼の咆哮によく似ている。ゲネシスはその声を合図に、走りだした。オーロールは影となつてついて来ている。オフィーリアとルナがどうしているかまでは、把握できなかつた。

白髪の女の姿が歪む。ゲネシスの突進を避けると同時に、彼女の姿は美しい白狼へと変化していた。

ゲネシスは剣を構え、その美しい人狼へ訊ねた。

「これが私の挨拶だ。この場所は私の剣が制圧するだろう。止めると言うのなら、私は容赦しない。かかつてこい」

白狼の表情が怒りに満ちた。直後、白い矢のように彼女は突進してくる。ゲネシスはその速さに一瞬だけ翻弄された。道中で出くわすような人狼とは比べられない程、その動きは俊敏だつた。しかし、ゲネシスはすぐに冷静さを取り戻した。

所詮、俊敏さだけだ。

剣をはらつて、その攻撃をかわす。矢のようだつた白狼は、すぐに動きを変えて、ゲネシスの攻撃を全て避けて見せた。だが、ゲネシスは焦らなかつた。

この美しい雌狼に足りないものを、ゲネシスは知つていた。

攻撃を続けながら、ゲネシスは白狼の動きを注意深く観察していた。

今だ。

剣をわざと白狼から逸らす。白狼はそれを避けようと、一瞬だけゲネシスの近くへと寄つた。待つっていたのはこれだつた。ゲネシスは素早く蹴りを入れた。賭けに近いこの攻撃は、どうにか当たつた。まともに蹴ることのできた白狼の身体はとても軽かつた。

白狼が地面に叩きつけられると同時に、ゲネシスは剣を構えたまま走り寄つた。近づいてみると、いつの間にか、白狼は白髪の女に戻つていた。

「や……やめて……」

白髪の女のが弱々しく言った。さつきまでの凛とした目の光が、

しほんでいく。そこには、獵銃を突き付けられた獲物しかいなかつた。

「お願い、やめて……」

ゲネシスは剣を構えたまま、その矛先を、女の喉元に突き付けた。女が息を呑む。その動きが、剣をつたつて、ゲネシスにもわかつた。ゲネシスは静かに女を見下ろすと、淡々とした口調で言った。

「悪いな」

剣の光が、ゲネシスの目に入りこむ。

「これが、私のやり方だ」

手に力を込めて、剣を動かす。頭で考えるまでもないその動作を、敢えて、ゆつくりとしようとしたその時、ゲネシス達を包む空間が、振動した。大きすぎる何かが、この場所を支配しようとしている。ゲネシスの手がふと止まった。

女を殺そうとしているその行為を、怒りをもつて押さえつけようとしている者がいる。

その者が、いま、ゲネシス達の前に降り立とつとしている。空が割れて、その向こうから、鋭く、大きな猛禽の双眸が、ぎろりとゲネシスを睨んでいた。

「愚かな……者め」

深く、どつしりとした怒りの声が、ゲネシスの耳を襲つた。

アマリリスの影も、気配も、巻き上げられる砂煙の向こうへと消えてしまった頃、ディアナは改めて、自分で中で血が煮えたぎりそな程の情緒の渦巻きが起きていることを実感しながら、今すぐにクーガーへと変わつてその渦巻きを作る原因となつてゐる者へ飛びかかつて行きそうな衝動を、必死に抑えていた。

その存在に気付いているのは、ディアナだけではない。バステトもまた、自分達を包む影の気配に気付き、ずっと警戒を解かなかつた。

ディアナは唸りつつ、その影を睨んだ。

ずっと纏わりついている、人狼の匂い。惨たらしい感情を、ディアナに与えた張本人。ほんの少しだけ姿を見せて、優雅にディアナを挑発した彼女が、影からじつと見つめている。

「ディアナ」

バステトは、ディアナの手を握つた。クーガーの前脚へと変わり、その手を、しっかりと握つた。どんなに人狼が挑発しても、どんなに人狼が危険な動きを見せても、応戦だけは避けたかった。不穏な挑発は買つべきないことを知つていたからだ。まるで、ディアナを誘い込むようにまとわりついてくるこの気配には、単純でない動機が付属してゐるはずだつた。

しかし、ディアナの我慢はすでに限界だつた。クーガーへと変身すれば、否が応でも影に潜む人狼へと飛びかかるうとするだらう。そして、もしもそれをバステトが止めようならば、バステトでさえも跳ね飛ばしてしまつ勢いだらう。幾らなんでも、それだけは避けたかった。

「バステト……」

「いよいよ我慢が解かれると感じた時、ディアナはついに口を開いた。

「お願い、手を放して」

冷たく、突き放す声だった。

アマリリストがひと声で封じたディアナの衝動は、バステトには大きすぎるものだった。しかし、バステトは手を放す気にならなかつた。例え、跳ね飛ばされたとしても、ここで手を放して、みすみすディアナを行かせてしまうよりはずっとマシだと思っていた。

影からは、依然として、人狼が見つめている。

「お願いだから……」

ディアナが苦しそうに言つた。

力いっぱい、変身への衝動を止めているのだ。変身という感覚すら分からぬバステトにとって、その苦しさは全くの未知である。しかし、今のディアナの様子から、それは、とてつもなく苦痛を伴うことであるのは明らかだつた。

影から、ぬるりと、目が、そして、手が出てくる。

「どうしたの？」

涼しげな声。正体の見破られた人狼が、次の犠牲者へ向ける、優しげな声。彼女が自分達を襲う気でいるのは、バステトにもはつきりと分かつっていた。

「ディアナ」

人狼がディアナを刺激する。

「私が憎くないの？」

美しい顔が、影から覗く。ディアナがよく知つていた者の顔。バステトには想像も出来ない。親しかつた者が、全く別の生き物に乗つ取られてしまうという恐ろしさと憎しみ。

「私が、憎くないの？」

ディアナが嗚咽を漏らし始めた。身体は震え、冷や汗まで出ている。限界であるのは、バステトにも分かつた。そして、このままで

は、ディアナの自我すらも崩壊してしまつかもしないことも想像できた。それなのに、バステトは手を放す事が出来なかつた。

「ディアナ……」

人狼が、その外見に相応しい、美しい声で語りかける。バステトは、いよいよ覚悟を決め、手を握る力を緩めた。

ちょうど、その時だつた。

遠くから、不思議な音が聞こえた。鐘を鳴らしているようにも聞こえた。けれど、よくよく聞いてみれば、それは、魂の宿つたものであると分かつた。生きている者が発する、独特の波長。言うなれば、何かの声。そう、何かの鳴き声。綺麗なその音色は、この場全體を揺るがした。

バステトも、ディアナも、たつた今までの状況をすべて忘れ去り、しばし、その音に意識を奪われ続けた。それは、この場にいる全ての者が同じだつたらしい。ディアナを誘惑し続けた人狼もまた、この音の魔力からは逃れられなかつた。

戦う者、逃げまどう者、怯える者、その全てが、呆然とこの音のする方向を眺めていた。

記憶を遡る限り、自分の宿命をはじめて知った時からずっと、ツバキは疑うことがなかつた。

大いなる空の霸者ジズの聖地を守るという使命の絶対性について、或いは、その場所が、ツバキ自身の揺るぎない安住の地であることについての、不動な信頼。ツバキにとって、ジズは絶対だった。ツバキのこれから、そして、ツバキのこれまで全てを支配する者。空の霸者であるジズは、空の供物であるツバキにとって、この世が続く限り、永遠にツバキを包み込む大きな存在だつた。

しかし、今、信じていたものが、ツバキの目の前で、少しづつ剥がされている。惨い剥がし方だつた。突如現れた見知らぬ生き物たちは、村を滅ぼす人狼のようだと、人狼であるツバキは思った。自分を襲つてきたのは、ただ、ジズをおびき出したかつただけ。彼らの本当の狙いは、ジズにあつた。

私のせいなの？

ツバキは呆然と、剣を持つて舞う剣士とその剣士の相手をするジズとを見ていた。

精霊の血を引く双子に守護されているだけの剣士。片や、ジズといえば、世界の空を支配することを許された大きな存在である。しかし、なぜだろう、どうしてだろう、ツバキには、ジズの方が押されていることに、早々から気付いていた。

私のせいだというの？

ツバキに助けに行く術はない。同じ人狼である女に拘束されるている今、自由すらもない。悔しかつた。ただただ悔しかつた。ただの人狼の女に負ける自分が悔しかつた。ジズを助けられないのが悔し

かつた。そして、自分の敬愛するジズが、人間の剣士」ときに倒されそうになっているこの状況が、とても悔しかつた。

「怖いの？」

人狼の女に問われ、ツバキは気付く。ツバキは泣いていた。涙を流していた。狼の唸り声と共に、たくさんの涙が溢れていた。

「自分の居場所がなくなるのが」

人狼の女の声には、奇妙なものが宿つていた。怒りでもなければ、嘲りでもない。憐れみでもなければ、喜びでもない。複雑に絡み合つた何かが、女の声の向こうに宿つている。

ツバキはその得体の知れない何かを睨んだ。

自分を拘束する女の力は強く、ツバキには抜け出すことが出来なかつた。しかし、それでも、唸り声の調子を変えて、煌々とした目で、女を睨むことは出来る。一人の人間に味方する奇妙な人狼。大勢の人間を陥れようとしている巨悪の人狼。

「私が居場所を失うということは……」

ツバキはこの美しい女を恨んだ。

「やがて、あなたの居場所もなくなるということ。あなた達は私達を巻き込んで、自分の首を絞めているのよ」

しかし、人狼の女からの視線の色は、変わらなかつた。

ジズが叫び声をあげる。ツバキの目に映る空が、真っ赤に染まつた。空も大地も染める赤。羽毛とともに飛び散るのは、その赤をまとつた肉片だつた。

真っ赤な雨が大地に降り注ぐ。その雨を全身で浴びながら、剣士の目が冷たく光つている。

ツバキは息をすることを忘れそになつた。たちこめる血と肉の匂い。ジズの咆哮には、憤怒だけではなく、痛みによる悲鳴も混じつているように思えてならなかつた。

剣士は剣を払つて返り血を落とすと、まっすぐジズを見つめた。ジズもまた、剣士を見つめた。肉を削られ、血を流しているのは、どちらも同じ。しかし、生き物として致命的な傷を負つているのは、

ジズだけだった。残る力を振り絞り、ジズは剣士を睨みつける。

「……逃げてください」

ツバキは言葉を漏らした。

「……お願い！ 逃げて！」

剣士の足が、地を蹴つた。

プシュケがその音をひとつの一言葉だと気付くのに、少しばかりの時間を要した。

目の前でサファイアは斬られ、大切な意識そのものであつたはずの白い花は、地面に投げ出されている。斬られたサファイアは、膝を折り、頃垂れているばかりで、プシュケからはその様子がよく見えない。プシュケの頭に直接響くこの不思議な音が鳴り続けている間も、サファイアは頃垂れた格好のまま、微動だにしなかった。

（愛しい我が子）

中性的な声が、プシュケの耳の中に響いた。紛れもなく、プシュケに向けられている声。リヴィアイアサンの、深い声だった。彼の声はプシュケの耳の中で弾け、プシュケの言語能力を借りて、姿を現していた。プシュケはリヴィアイアサン自身の声を感じつつも、いつの間にか自分の頭の中で自分の声が再生されていることに気付いた。（お前はいつまでも私。）

リヴィアイアサンの言葉は強かつた。プシュケには理解しづらいものであつたけれども、プシュケの身体には、その強い言葉がしつかりと沁み込んでいった。そのまま、リヴィアイアサンの声は、プシュケを通り越して、俯いたままのサファイアへと向いた。

（我が供物を欲する魔を宿し者よ……。）

サファイアの身体はぴくりとも動かない。だが、リヴィアイアサンの声は、なおも語り続けた。

（私は運命を受け入れよう。お前が私を真の意味で屈伏させた時、お前は我が供物を手に入れる事が出来るであろう。）

再び、言葉でない声が空間に響いた。プシュケやサファイアだけでなく、この場にいる全員に向けて発せられている声。その声の霧

の中から、リヴィア・イアサンの姿が、再び現れた。その時、プシュケを捕まえようとしていたことを忘れていた双子の精霊たちが、はつと我に返った。

「ゲネシス！」

双子の片割れがそう叫んだ時、ゲネシスと呼ばれた剣士が己の剣を持ち直し、その鋭い瞳でリヴィア・イアサンを睨みつけた。その光景を見た瞬間、プシュケは寒気を感じた。

今、この場で、誰かが悲鳴をあげている。その声は、何かを思い出す声。何処かで見てきた光景を思い出す声だつた。例えば、大空の聖地にて嘆きに暮れていた人狼のツバキ。例えば、大地の聖地にて寂しさに身を焦がしていた名もなきニユンペーの少女。絶対的居場所を失つた彼らを鮮明に思い出すよつな悲鳴が、プシュケの耳に届いていた。

そして、それがやつと自分の口から発せられているものであると氣付いた時、剣士は剣を握りしめて、リヴィア・イアサンの元へと走り出していた。

「やめて……」

プシュケの手に力が籠る。

嘆くだけではいけない。叫ぶだけではいけない。それだけでは、あのゲネシスとかいう剣士の足は止まらない。それだけでは、居場所を失つた供物達と同じ末路を歩む事となる。そんな思考が、プシュケの意識を冷やし始めた。

握りしめる弓と矢をなぞり、プシュケは真っ直ぐゲネシスを見た。さつきまでプシュケを拘束しようとしていた双子は、今やゲネシスとリヴィア・イアサンの衝突ばかりに気を取られている。

そう、プシュケに出来ることは、これしかない。そして、そうすることが、主を救う術もあるはずなのだ。

「やめてつて……言つていいのうー」

プシュケの構える弓が、しなつた。

放たれた矢は真っ直ぐ剣士へと突き進み、その片腕へと突き刺さ

る。それを見届けた瞬間、プシュケの意識は曖昧となつた。自分に出来るのは、剣士の歩みを止める事。自分に出来るのは、それだけだという考えが、プシュケの頭で再生され続けていた。

一つの命がバラバラに解体されていく様子を、ツバキは見つめ続けていた。ついさっきまでは反抗し、ついさっきまでは抵抗し、ついさっきまでは唸り、ついさっきまでは眼光の鋭かつたその命は、黒い血にまみれた剣を払う剣士の目を、じっと見つめたまま、いつのまにか事切れていた。

ツバキにとつて大きな存在であったものはいつしかただの肉片となり、かつて聖域だつたこの場所には、血と肉と臓物とが散り散りに巻かれていた。深手を負いつつ暴れ戦つたジズ自身の散らしたものである。ツバキはそれをずっと見つめ続けていた。どうしようもなく、ツバキにはどうしようもなく、ただ命を奪われていくジズを見つめていることしかできず、ただ死んでいくジズを見つめていることしかできず、こうして今も、自分よりも格下であったはずのただの人狼女に抑えつけられながら、それすらも必要としないほど頑垂れながら、屍のすぐ横に佇む剣士を、じっと見つめていた。

憎しみよりも先に、恐れがあつた。何故ならこの剣士は、女の身でありながら、肢体をひとつも失うことなく、ニンゲンとは比べ物にならないぐらい尊大な生き物の命を奪つてしまつたのだ。確かに、精靈の血をひく双子の助けはあつた。だが、彼らの力等微々たるものだ。並みの剣士が相手ならば、絶対にこうならない。こんな展開を予想もしない。追い風を得た蟻がたつた一匹で象に勝てるだろうか。それも純粹なる力比べのみで。

この戦いは、ツバキにとつてはそういうものだつた。だから、始めるうちこそ、オーロールとかいうこの人狼女に拘束されつつも、何処かに油断があつたのだ。その油断を見事に突かれてしまった。

もう一度と、ジズは甦らないだろう。この大空が生まれた時から共に生まれたというジズ。彼が死ぬなんてことを、一体誰が予想しただろうか。

「ゲネシス……」

ふと、オーロールが低い声で呟いた。それは、仲間が勝利した事への讃れではなく、驚愕と恐れの入り混じった相手を探るような声に近かつた。同じ人狼であるから分かつた。この人狼女は、目の前のゲネシスという一人の女剣士を恐れている。恐れているからこそ、取つて食いもせずにその影に潜んで何処までもついて行き、まるで手助けでもするかのように振る舞うのだ。

つまり、これは単なる確認。

ツバキの頭が真っ白になつた。そこからの記憶はさらに断片的なものだつた。体中がいきなり熱くなり、自分の輪郭があやふやに感じられ、触覚も、視覚も、聴覚もおかしくなつてしまつた。ただ、見えるのは、それまでゆつたり構えていたオーロールの焦りにも似た目。そして、どちらのものかは分からぬ、狼の血の匂い。それらがツバキの身体全体に急速に廻つて行つた直後、ツバキの意識は突然暗闇の中に落とされた。頭部に感じる鈍痛。全身を駆け巡る激痛。心をかき乱す悲痛。それらに包まれながら、ツバキはゆつくりと、闇へと落ちていつた。

そして、再び目が覚めた時、剣士たちはもはやおらず、聖地はただの岩山と化していた。

110 ·

アマリリスはもはや手を出さなかつた。

動いた所でこの事態を止められないということはよく分かっていたし、そうである以上、動く必要性も感じなかつた。ただ、見守るということだけに集中していた。

精靈の血を引く双子の片割れが呼んだ、ゲネシスという名。アマリリスの頭に、その名が刻まる。今、目の前で起こつてゐるような出来事をやつてのけた張本人。天変地異の出来事をほぼ一人の力で巻き起こしたその主。人間の分際で、世界に牙を剥けた愚かな強者。

アマリリスはじつと、削がれる側の命を見つめた。

これから、どうなるの？

削がれる側の命は、剣士の背中¹¹にアマリリスを見つめていた。

（我が娘を、頼む）

声として届いたか、言葉として届いたか、アマリリスには把握出来なかつた。ただ、今からただの有機物となり果てようとしている偉大なる大海の霸者は、男とも女とも取れぬ表情で、じつとアマリリスの返事を待つていた。もうこの生き物に残された希望は、安らぎしかなかつた。

アマリリスは小さく肩を落とした。

誰も、これから起ることを知らない。アマリリスにも、剣士にも、恐らく、剣士によつて首を落とされようとしているリヴァイアサンにだつて、誰にもこれから的事なんて分からぬのだろう。アマリリスの目に、閃光のような剣士の姿が映つた。貫かれた肩を引きずりながら、もう片方の手のみで剣を握り、大いなる海の生き物のその巨体へと飛びかかる姿。そして、それを勇猛と迎え撃たんと

構えるリヴィア イアサンの姿。

この数秒先の展開で、この世界がどうなつてしまつのか、そして、それを誰が望んだことなのか、今のアマリリスには予想も出来なかつた。

サファイアも、そして何よりブシュケも、そのブシュケを心配して近づいて来たランも、この瞬間を見ずには済んだ。恐らく、ディアナやバステト、そしてリヴィア イアサンの子孫たちも、ゲネシスとかいう剣士の仲間たちも、アマリリスほどこの瞬間を凝視してはいないだろう。アマリリスと同等に凝視している者がいるとすればそれは、ただ一人、ゲネシスだけだろう。

ゲネシスが片腕で振るう剣は、まるで、稻妻のようだつた。音のない稻妻。素早い動きだけが、その衝撃を生んでいる。リヴィア イアサンはもはや、その一太刀を浴びるためだけに、ゲネシスを威嚇していた。

いいわ。

アマリリスは心の中で呟いた。

あの子を守つてあげる。

リヴィア イアサンの表情が、やや緩んだように見えた。その大きな首の間を、稻妻が過ぎつていつた。空と大地と海が、真っ赤に染まつた瞬間だつた。

111.

(おめでとう)

ジズにつき従つていた美しい人狼が愕然とした表情で膝を折つた。その時、ゲネシスの耳にそんな声が届いた。ここにいる者の声ではない。それは、遙か遠くにいるはずのキュベレーの声だった。

(これで、空が解放されたわ)

淡々とした少女の声。今のラジカの全てを管理する、絶対的強者の呟き。狩るはずの魔女に、絡め取られたと気付いた時にはもう遅かつた。ゲネシスの頭には、ラジカを元に戻すこと、それだけしかない。ゲネシスがこのキュベレーという魔女を殺した瞬間、ラジカは元に戻らない。

(あとは二つよ)

ゲネシスに告げる少女の声は、まるで見世物を楽しんでいるかのようだつた。そう。これはきっと、己の力を過信して自分を殺しに来た愚かな弱者を甚振るという暇潰し。蟻を一匹一匹潰すような残酷な暇潰し。ゲネシスがラジカの為に身を滅ぼしていく姿を、面白がつてているのだろう。

それが、この行動に、何か期待しているのかもしね。

(次は何処から責めるの？ 誰を粉々にするの？)

ゲネシスは耳を塞いだ。この声が耳から入るのではなく、直接頭に届いていることは分かつっていた。けれど、耳を塞がずにはいられなかつた。うるさくて仕方がない。言葉が届けば届くほど、笑い声が届けば届くほど、ゲネシスの心と体が揺れ動いた。

辛い。自分が情けない。浅はかな判断で、そして、力を過信するあまり、大変な事態を招いてしまつた。もつと注意深くなるべきだ

つた。自分の力を信じなければよかつた。いくら剣との相性が良くても、相手を見る目がなければ意味がない。力があつても、敵わない相手の前にあつては意味をなさない。そのことを理解しておくれだつた。そう、ゲネシスはまだ若かつた。そこそこの力はあつても、判断能力は育つていなかつた。その事を、苦しい程思い知られた。誰が強者で誰が弱者か、正確に判断出来ていなかつた。そういつた後悔の全てが、ゲネシスの身体を押しつぶし、内部からはち切れさせようとする。ゲネシスはそれが辛かつた。

（情けない、だと。過去に捉われて、前を見ない方がよっぽど情けない、と思うがね）

不意に、オーロールの声が頭をよぎつたことで、ゲネシスはその苦しさから一瞬だけ解放された。

（魔女狩りのくせに、心まで魔女に狩られるつもりかい？ 今はそれどころじゃないだろ？）

オーロールの言うとおりだつた。

ツバキと名乗り、ツバキと呼ばれていたジズに捧げられた供物が、死んだような目でゲネシスを睨んでいた。生氣は宿らず、死氣ばかりが漂つてゐる。だが、攻撃ではなく、それは訴え。絶対的居場所を失つた絶望を、ゲネシスにぶつけているようだつた。

「殺せ。私を、殺せ」

狼の唸り声がこだまする。

（供物の血と肉……）

オーロールが震えるように咳いた。魔物は特に同種食いを嫌うとゲネシスは覚えていたが、それでもないらしい。それとも、影に潜んでいるオーロールがゲネシスにも分かる程身もだえするのは、この美しい人狼が、供物と言う特殊な存在だからなのだろうか。

ともかく、オーロールのそれは、まるで、ゲネシスにねだつているようでもあつた。

「私を殺せ。殺せ……」

だが、ゲネシスの剣は煌めかない。ジズを殺した瞬間の感覚、そ

して、あのキュベレーの笑みだけが、全身に纏わり憑いて離れない。

「お願いだ、殺せ、殺してくれ、死なせてくれ……」

「出来ない」

ゲネシスは一言、それだけを呴くと剣を鞘におさめた。

ツバキは完全に生氣を失っていた。真っ白なその狼は、生きているにもかかわらず、剥製のようにさえ見えた。ツバキはそれ以上、言葉を発せなくなつたようだつた。ゲネシスの一言によつて、完全に絶望へと落とされていった。

オフィーリアとルナが、ゲネシスの両腕を引っ張る。彼女達はまるで、ツバキが見えていないかのようだつた。ゲネシスはもうツバキの姿を見なかつた。ただ、双子に引っ張られるままに、ジズという大いなる生き物を殺した過去も振り返らずに、その場を去つただけだつた。

世界が真っ赤に染まつた時、プシュケの意識は白い靄に捉われてしまつた。

禍々しい赤からまるでプシュケを守ろうとするかのように、プシュケの視界は段々と白くなつていぐ。そして、こみ上げてくるのは吐き気。咳が止まらず、涙と鼻水で息をするだけでも苦しい。まるで、自分と世界をつないでいたものが音を立てて崩壊しているかのようで、プシュケの頭の中では、その原因が何かを理解しようとする力と、それを頑なに拒否する力とがひしめき合い、混ざり合い、反発し合い、プシュケの身体を内部から引き裂いてしまつかのような莫大な力へと変わつていつた。

自分の吐瀉物と埃と砂と、少しづつ降つてくる赤い霧のような雨とで身体はすっかり汚れていたけれども、そんなことに構つていられる余裕もないほど、プシュケの頭は混乱していた。視覚を襲う赤と黒、聴覚を襲う怒声と悲鳴と雜音、嗅覚を襲う鉄と生ものと汚物の匂い、触角を襲う液体と固体と粘々とした物体、味覚を襲う胃液と鉄の味。そして、それらすべてを遮断しようとしている意識というものの狭間で、プシュケは苦しんでいた。

この状況は何だろう？ この状況はどうして産まれた？ この状況は誰が産んだ？

これらの疑問が、一気にプシュケの意識を覚醒させた。見開かれたプシュケの目には、肌を赤斑に染めた剣士の姿が映つていた。猛禽のような目を血走らせ、整つた顔にひとつ表情も浮かばせずに、ただプシュケの射抜いた片腕のみを引きずらせて、血にまみれた愛剣を払い、ひたすら狙い続けた獲物の変わり果てた姿を何の感情もなしに見つめているその姿を、プシュケは捉えていた。

「……」

もつと力を込めて、もつと狙いを定めて、もつと多くの矢を射れば、ここにはならなかつた。そんな後悔が、プシュケをゆつくりと、立ち上がらせた。

「……」もつと力を込めて、もつと狙いを定めて、もつと多くの矢を

震える手を動かして、少しづつ弓を構えるプシュケ。

「ゲネシス！」

誰かが叫んだ。しかし、誰だつて構わない。プシュケの眼中には入らない。プシュケが見つめるのは、この剣士のみ。ゲネシスという女のみだつた。

ゲネシスがプシュケに気付いた。表情は少しも変わらない。無表情に剣を払い、空を斬る。すでにその狙いはプシュケに向いていることは、明らかだつた。しかし、プシュケは少しも怖くなかった。むしろ、望んでいた。このゲネシスという剣士だけは許せなかつた。切り込む前に、血管を貫いてやりたかつた。切り刻まれる前に、心臓に穴をあけてやりたかつた。

「危ない！」

誰がどちらに放つた言葉なのか、少しも分からなかつた。きっと、ゲネシスにもきちんと届いていないのだろう。ゲネシスはまるでそれが聞こえなかつたかのように、剣を持ちかえて、一步、二歩、軽く跳ねるようにプシュケへと向かつてきつた。

氣味の悪い氣配がした。

豊かな緑の風の中を、小鳥の轟りと虫のさざめきの中を、小鹿のように駆ける名もない少女。ただ、主からニコンペーとだけ呼ばれる精靈の少女は、その氣配の来る方向へと近づいていた。少女にとって美しくて愛しいこの森だけれども、その少女をも危険にさらすような存在は多々あるものだつた。けれど、近づいてくる氣配は、そのどれとも違つて、根本的に異なるもので、それでいて興味深いものだつた。

ベヒモス様が知つたら、叱られてしまつ。

そう思つたニコンペーの少女は、たつた独りで氣配に向かつて走つていた。あれほど分かりやすい氣配を醸しながら近づいてくるような者たちだ。こちらが氣配を殺せば、そう田敏く見つけることもないだろう。そう思いながらニコンペーは、ぐいぐいと氣配に向かつて近づいていた。

それが、いかに危険な行為であつたかを悟つたのは、もう姿が見えるかと思われる程、氣配が近くなつた時だつた。

ニンゲンの匂いがする。

ニコンペーの少女は首を傾げた。氣配に向かつて走つてきた時から、匂いはあつた。けれど、それは、ニンゲンなどの匂いではなく、狼の匂いだつた。だから、てつくり彼女は、人狼が紛れこんできたのだろうと思つていた。けれど、違う。当り前の人間の匂いがするのだ。狼の匂いは別にある。二つの匂いは、まるで、仲良く寄り添つてゐるかのように、混ざり合つていた。

少女にとつてこれだけで、異常なことだつた。そして、奇妙で、

不吉なことだつた。人狼が足を踏み入れたというだけでも警戒すべきことなのに、その人狼と一緒に何故、人間がいるのだろう。そして、彼らから漂つてくる並々ならぬ禍々しさは、一体何なのだろう。

ベヒモス様に知らせなきや……。

そう思い、知られぬように引き返そうとした瞬間、少女の身体は固まつてしまつた。音も気配も匂いも、濃く目立つていたこと。もしかしたら、自分は、油断していたのかかもしれない、と少女はやつと氣付いた。少女の左手の、目と鼻の先、茂みの中から、美しい毛並みの狼が顔を出して、少女をじつと見てゐる。ただの狼でないことは重々分かつてゐた。そして、その目が血走り、飢えを訴えていることもよく分かつてゐた。

狼は茂みから這い出ると、一步、二歩と少女へと近づいて行つた。金縛りにでもあつたかのようにじつと見つめる少女を、同じくじつと見つめ、狼は静かにニンゲンの皮を被つた姿へと変わつた。

「大人しく、言う事を聞いてもらおうか」

その狼は、女だつた。美しい女。しかし、少女には分かる。この姿は、かつて他人のものであつたはずだということ。哀れな人間の女を襲つて、無理矢理自分の物にしただけだということ。

「荒々しいことはしたくない。お前は喰つてもまずそうちだからね」

少女は氣付いた。この狼だけじゃなかつた。匂いはまだあつた。人間の匂いがあつた。そう、この近くに、他にもいるのだ。

「お前は取り囮まれてゐるんだよ。名前もないお嬢さん」

少女の身は強張つた。内面を見透かされるほど氣味の悪いことはない。ともかくこの状況から抜け出したい。そのため出来ること、それはまず、冷静になること。

「そうだ。冷静になつて……」

「そう、冷静になつて……」

少女の足に力が籠つた。

「私の言つ事を聞くんだ」

「ここから早く逃げなくては。

リヴィア・イアサンが滅んだ。

その衝撃は、オーロールにも伝わっていた。獲物であるティアナとバステトもまた、大きな存在がひとつ消えたことに対する衝撃から逃れられていなかつた。オーロールもまた、この二人が動けないでいることを確認することは出来ても、すぐさま攻撃に移れる程、意識が整理されていなかつた。

まさか、人間の身で生まれながら、自然の摂理に逆らつてしまつことを本当に成し遂げられる力を持つ者がいるなんて、オーロールには信じられなかつた。それは、ジズが滅ぼされた時も、ベヒモスが滅ぼされた時も同じだつた。しかし、リヴィア・イアサンまでもを滅ぼしてしまつ事に、驚いていた。

心のどこかで、きっと負けるだらう、きっと喰われて終わるのだろうという気持ちがあつたのかもしれない、とオーロールは思つていた。ともかく、リヴィア・イアサンは滅んだ。滅ぼされてしまつた。

残されたのは、海の供物……獲物の仲間であるブシュケだけ。

今のゲネシスは、大きな玩具を解体して興奮している怪物のようなものだとオーロールは把握していた。それにちよつかいを出すブシュケが、哀れだつた。

勝ち目なんてないのにねえ。

きっと、泣きつくだけなら、絶望し立ち尽くし恨み嘆くばかりだつたら、ゲネシスは無視しただらう。しかしブシュケは違う。偶然であろうけれども、一矢をゲネシスの身体に打ち込んでいるのだ。その瞬間、彼女の運命は決まつてしまつた。

惜しいな。

オーロールは苦く笑み、まだ放心しているティアナとバステトを見やつた。

實に惜しい。

誰も、プシュケを助けになんていけない。あの人狼狩りの魔女、アマリリスでさえも、ゲネシス達に近づけないでいるのだから……。否、アマリリスは本当に、近づけないでいるのだろうか。ふと、オーロールは、獨りだけ離れた場所で佇んでいる赤い魔女を見つめた。アマリリスは、陶器のような皮膚に包まれた整つた顔を、赤く染まつた空に向けていた。

まるで、そこに何かが現れるのを待つてゐるかのように。プシュケとゲネシスの戦いに興味がないといった様子で、空をじっと見ている。

その直後だつた。オーロールの持つてゐる感性全てが、危機を伝えてきた。アマリリスによるものではない。それよりもずっと強く、危険で、関わつてはならないような種類のものだつた。アマリリスがじつと見ているのは、それ。

「……これは」

オーロールはすぐさま氣配を殺した。現れようとしている者の目的。それは、まだ自分には向けられていない。今のうちに面倒は避けなくては、と本能が伝えてくる。幸い、誰もがこの状況に呑まれていて動けないでいる。突如現れた強い殺気のようなものは、そのなかでも、ゲネシスとプシュケというぶつかりへと向いていた。

惜しいな。

オーロールは影に呑まれながら、静かに思った。

實に惜しい。

「ユンペーの少女は、必死に走った。

逃げ切れないと知っていても、相手が悪い事を知っていても、逃げる以外にいい方法なんて思いつかなかつた。ただ、逃げる方法はいくらでもあつた。ここは森の中。彼女を守る迷宮もある。侵入者がその迷宮を隈なく知っているはずがない。だから、ユンペーの少女は逃げられるだけ逃げた。適当な道を、走れるだけの早さで、ぐるぐるとぐるぐると。追手の姿がみえなくなるまで。

そして、もう自分が追われているのかどうかすら分からなくなつた頃、ユンペーの少女は己の主、ベヒモスの待つ場所へと向かつた。侵入者をベヒモスの元へと連れていくわけにはいかない。でも、十分引き離した。もうこれで大丈夫なはずだった。

しかし、いざ、ベヒモスの待つ場所へと向かおうとした時、ユンペーの少女は気付いてしまつた。

「まさか……」

自分を見つめる視線。殺氣立つた視線。それだけで命を縮められてしまいそうなほど、強い視線だつた。ユンペーの少女は慌てて周囲を窺つた。しかし、何処に居るかが分からぬ。見られているのは分かるのに、相手の姿が見えない。見えないことで、自分が何に監視されているのか、彼女には分かつた。

「人狼……？」

「ご名答」

物陰から返答があつた。ユンペーの少女の身が竦む。ニンゲンでないとはいつても、人狼が怖いわけがなかつた。追つてくる剣士たちも剣士たちだ。何故、人狼と行動を共にしているのだろう。何より、何故、自分を追つてくるのだろう。物陰からすっかりと顔を

出した美しい人狼の女を見つめながら、ニュンペーの少女はひとつだけ理解した。それは、今、自分がとても危険な状況下にあること。「言う事を聞かない悪い子はちょっと痛い目にあって貰わないと、だね」

人狼の女がくすりと笑った。その笑みが、ニュンペーの少女の身体を凍りつかせる。ニュンペーが人狼に勝てるはずがなかつた。逃げることしか抵抗のしようはない。でも、もう存分に逃げた。ニュンペーの少女には、もう、成す術もなかつたのだから。ただ、心の中で、助けを求めて嘆くのみ。

ベヒモス様……。

ぶつかり合おうとしていたプシュケは、直前でそれを止めた。自らの意志ではなく、どちらも、もつと強大な力を持つ何かに動きを縛られたといった方が正しかつた。今、この場での命の危機を体中で感じ取つていた。が、動くことも叶わず、ゲネシスを睨んだ状態で制止していた。

ゲネシスもまた、動くことが叶わないようだつた。額には汗を浮かべ、睨んでいるのはプシュケだが、その警戒の心が向いているのは、別にあつた。

たつた今、リヴィア・イアサンが滅んだその場所に、この場に居なかつた者が現れた。その者が現れた瞬間、逃げまどつリヴィア・イアサンの子孫達の悲鳴が、ぱつたりと止んだ。何がどうなつてているのか、動くことのできないプシュケには分からぬ。

だが、この状況が非常に危険なことだけが、よく分かつた。

「お久しぶりね、ゲネシス。やつぱりあなたはすごいわ」

少女の声だつた。とても幼く、ランよりも年下であるうとプシュケは思つた。だが、それは上辺だけの事。この幼い声の裏には不気味なほど、警戒すべき何かが隠されている。

ゲネシスが睨んでいるのは、この少女だつた。姿を見ることは、出来ない。プシュケも、そしてゲネシスも、今は、視線を動かすことすら難しい状況だつた。

ただ、ゲネシスは力を込めながら、口を開いた。

「キュベレー……」

キュベレー。それが少女の名なのだろうか。プシュケの心にはじわじわと少女から発せられる気が入り込んでいた。只者ではない氣配。それに似た氣配を、プシュケはよく感じ取つてゐる。そう、

それは、アマリリスのものとよく似ていた。アマリリスの醸す氣配に、とてもよく似ていた。

本物の、魔女の氣配。

それも、ただの魔女ではない。

「どういふこと……」

プシュケはぽつりと言葉を漏らした。それすらもかなりの体力を要した。

「キュベレー？ あの少女は、何者なの？」

「お前に教える義務はない」

ゲネシスはそう言つた。苦しんでいることは、プシュケの目にも明らかだった。苦しいのはプシュケも同じだ。しかし、それだけではない。ゲネシスを苦しめる何かを、キュベレーとかいうあの魔女は、持つている。

「おまけに、供物もおびき出してくれるしね」

キュベレーの声が移動した。何処に行つたか考えるまでもなかつた。プシュケの背後に、非常に冷たい氣配と吐息が、瞬時に現れたからだ。うなじにかかる冷たい吐息に、プシュケは身震いした。腕を掴み、体に触れるその手は、生きているとは思えないほど冷たく、妖艶だった。

「美味しそうだわ。本当に、美味しそう。カーバリストの二ングンの気持ちもよく分かる。だつて、こんなに可愛くて、美味しそうなんだもの」

幼い声がいつそ不気味だった。サファイアとは全く違う捕食者の声。どう頑張つても動けないプシュケは、今すぐに助けを求めたかつた。だが、声が出ない。

「あの二ングンが起きる前に、ね、すぐ済ませてあげる」

キュベレーの手に力がこもる。プシュケの頭の中が真っ白になつた瞬間だった。

だめ、だめです。

ニュンペーの少女は必死に祈っていた。殴られて、蹴られて、噛みつかれて、引っかかれて、地面に叩きつけられて、体がぼろぼろになつても、肉を噛み千切らんばかりの人狼の吐息を間近で感じながらも、ニュンペーの少女は必死に耐えていた。今の少女の心にあるのは、後悔。一瞬とはいえ、救いを求めたことへの後悔。

絶対にだめ。

暴行を受け、痣だらけになりながら、血まみれになりながら、ニュンペーの少女は察していた。人狼の女が何を目的としているか。奇妙にもこの人狼の仲間らしかった人間達が、何故姿を見せないのかということも。ニュンペーの少女の体は、もはや動かなかつた。いや、動かそうと彼女が思えば、動いたのかもしれない。だが、彼女にはもう、立ち上がり逃げるという余裕すらもなかつた。

ただ、今の彼女を支配しているのは、祈り。
どうか。

人狼の両手が少女の首筋を掴んできた。だが、このまま殺されたとしても、少女はもう助けを求めようなどと思わなかつた。惜しむべくは、たつた一度。たつた一度、助けを求めてしまつたこと。そのたつた一度を見逃すような者ではないのだ。

ベヒモス様。

「声も上げられないの？」

人狼の女が囁いた。やつてゐる事とは裏腹に、水のように透き通つた声だつた。じわじわと人狼特有の力がニュンペーの少女の細い首にかかる。じつくりと襲い掛かってくるその苦しさと不安に、少女の体は強張つた。

「助けをもとめてみなさいよ」

人狼の女は少女の耳元で囁いた。

「そうしたら、もつと楽に殺してあげる」

ベヒモス様。

助けを求める。それこそが、この人狼達の狙いだとニュンペーの少女は察していた。彼らの狙いは自分の主。そう分かつた以上、みすみす主を危険にさらすような真似は出来ない。だからこそ、少女は悔やんだ。助けを求めてしまったことを。その声が、ベヒモスに届いてしまったことを。

……お逃げください。

ニュンペーの少女が一向に助けを求めないため、人狼の女は冷徹な眼差しで少女を見降ろした。少女はまっすぐ人狼の女を見つめている。怒りでもなく、恐れでもない。その目に映っているのは、焦燥。主を守るために、少女は急いで自分を殺そうとしていた。

人狼の女はそれを見て、今度は冷たい笑みを浮かべた。

「だめよ。それは反則。そんな悪いことする子は、生きたまま内臓を引きずり出して食べてあげるわ」

そう言つて人狼の女はゆつくりと、ニュンペーの少女の腹部をなぞつていく。その感触によつて、必死に自分を殺そうとしていた少女の意識は、一瞬にして恐怖と緊張に縛られてしまった。

その時だった。

遠くから地鳴りが聞こえ始めた。それが何者かの足音であることは、数回響き渡つてから理解出来た。ニュンペーの少女にも、人狼の女にも、それが誰の足音であるか分かつていた。

ダメ。

人狼の女は音のする方向を見やり、両手で少女を地面に押さえつけた。

「来た」

動けない少女は懸命に首を動かして、その音のする方向へと目をやつた。足音がどんどん近付いてくる。木々が数本倒れていくのが

見えた。そして、すぐ近くの木々が倒れると、少女にとつて、この場に一番来てほしくなかつた者の姿が見えた。

「ベヒモス」

人狼の女がほくそ笑んだ時、周囲の茂みに動きがあつた。隠れていた人間達が動き出したのだ。それを感じ取つたベヒモスはちらりと周りを見渡してから、それでも落ち着いた様子で、じつと人狼の女とニユンペーの少女とを見比べた。

老婆のように溜め息をついて、ベヒモスは言つた。

「私の可愛い娘を返してくれるかしら」

何が起こったの？

プシュケの体のすべての感覚が、震えていた。襲い掛かる衝動。全身を覆う恐怖。肉を千切られて、噛みつかれて、バラバラに解体されるという緊張。それらが一瞬にして、止まった。だが、プシュケの視界は白いまま、何も見えない。ただ、感じるだけ。

すぐ傍で感じる恐怖はそのまま。じつと動かず、ただ吐息だけがプシュケの体に当たってきた。

「もう動けないの？」

聞こえてくる声は、田の前にまだ居るはずのキュベレーの声ではなかつた。プシュケの耳に馴染みきつた声。透き通る色に、切れ味のいい刃を持たせたかのような不思議な声。

「アマリリスト？」

プシュケの問いに、アマリリストは答えなかつた。だが、それは確かにアマリリストだつた。プシュケを喰あうとしている魔女と、プシュケを殺そうとしている剣士の傍に、アマリリストの鋭い視線を感じた。

「とても面倒なことをしてくれたわね。抑えるのも大変なのに……」

アマリリストの言つている意味は、プシュケには分からない。だが、不穏なことには違ひなかつた。アマリリストの声に含まれている焦燥からも分かる。プシュケの体を抑えるキュベレーの手に力がこめられた。消えていた威圧的な気配が、また少しづつ漏れ始めている。

「あなた、誰？ 仲間にしては面白い子ね。人狼を殺したくて仕方ない子。今のわたしには、あなたが好きそうな世界をあなたのために作りだすことも出来るのよ」

「それで買収しているつもり？」

「あなたはその欲望に抗う事も出来ない」

少しづつ、プシュケに闇が近づいて来ているのが分かつた。それは、今話しているキュベレーではない。動けなくなっているはずの剣士でもない。もつと獸に近い何かが、プシュケを狙っていた。キュベレーも、剣士であるゲネシスも、さらにはプシュケを助けようとしているアマリリスさえもを敵視している闇が、少しづつ、少しづつ、プシュケに近づいて来ている。

そして、プシュケは、その闇が何なのか、すでに分かつっていた。

大空として生まれ、大空と一体化し、大空を支配していると言われていたジズ。大地として生まれ、大地と一体化し、大地を支配していると言っていたベヒモス。そして、大海として生まれ、大海と一体化し、大海を支配していると言っていたリヴィアイアサン。

人間の身でありながら、彼ら三大獣と呼ばれる存在を滅ぼしたゲネシスは、恐怖に慄いていた。人狼という人間と何ら変わらない程度の力を持つ生き物ばかりを狩るだけの魔女、アマリリス。自分では三大獣に手も出さなかつた魔女、キュベレー。そして、今、目の前で繰り広げられている光景が、とっくに呪縛から解き放たれるはずのゲネシスの身を、雁字搦めに縛っていた。

リヴィアイアサンを敬愛し、リヴィアイアサンに食され、一体化するために生まれた少女。さつきまで、ゲネシスに向かつて憎しみの籠つた弓矢を放つてきたプシュケという名の娘。アマリリスは彼女を守ろうと動いていた。キュベレーから？ プシュケの血と肉を狙う彼女。

きっと、とゲネシスは淡々と感じていた。ジズを敬愛していた美しい人狼の女。ベヒモスを敬愛していた無垢なニュンペーの娘。キュベレーに言われたターゲットでない彼らの命を、奪う必要はなかつた。だから、見逃した。けれど、とゲネシスは感じていた。

彼女達は、きっと……。

だが、一人で動けないプシュケを得たのは、キュベレーではなかつた。

「プシュケ！」

アマリリスが悲鳴を上げた。不思議なほどに、違和感のある声。それは、悲鳴というものに慣れていない声だった。その後、ゲネ

シスには何が起つたのか、分からなかつた。目が追いつかなかつた。空高く、飛び上がる黒い影が見えたのは確かだつた。人間の物とはとても思えない眼光と、その素早さ。いや、もしかしたら、そんなに急速なことでもなかつたのかもしれない。

ただ、ゲネシスが気付いた時、アマリリスが必死に守りつとしていたプシュケは、血に染まつていた。

そして、ゲネシスの目に映るのは、プシュケを彩る血と同じくらいの赤の衣に身を包むアマリリスの姿。青ざめた顔と、宝石のような目で、真つ直ぐ、呆然と、プシュケを見つめ、そして、呟いた。

「サファイア……」

思えば、生まれてこの方、あたしを包み込んでいる色はたまざまあつたけれども、その中でも一際青い光が始終あたしの心を掴んで放さなかつたような、そんな気がする。新鮮な血潮が煮えたぎつたような情熱的な赤も、沢山の命が生み出したような美しい緑も、どれも好きだつたけれど、それでもあたしの心にずっと引っかかる色は、青だつた。

けれど、その色は、あたしの色ではない。あたしの色と呼ぶのは躊躇われるくらい、あたしはその色に惹きつけられていた。あの色は、あたしとは違つ。もつと高貴で、もつと恐怖すべきもの。あたしのすべてを渴望させ、あたしのすべてを崩壊させる色。

その色がどんどん、どんどん、あたしの存在を侵していることなんて、とっくに気付いていた。あたしの奥深くまで侵して、あたしを内部から腐らせていくこの色のことが、とても怖くて、とても不気味で、大嫌いで、けれど、どうしようもなくくらい愛していた。あたしを包み込むこの色。大空の色でもなければ、況してや、あたしに縁のあるはずの大海の色でもない。もつと違う青。輝く青。あたしの心の奥深くを捕えて、あたしを壊していく青。

その青が、あたしの目の前に姿を現した時のこと、あたしは永遠に意識がなくなつてしまつその瞬間まで、忘れないと分かっていた。その色が、その最期の時まで、あたしの目の前で輝き続けるのだろうことも、分かつていた。

だけど、その日が本当に来てしまつなんて、思いもしなかつた。あたしの目が、あたしの涙に混じつて、赤く染まつていくのを呆然と見つめながら、段々と迫つてくる永遠の闇を感じながら、食られる感覚に身を委ねて、その先に、希望も絶望もなにもない真っ白な

世界があたしを待つて いる事を知つた。

苦しかつた。痛かつた。きっと、あたしは泣き叫んでいたと思ひ。声にならない声を張り上げて、最期の時まで悲鳴を上げていたと思う。

でも、その一方で、この痛み、この苦しみが、まるであたし自身に起つて いる事ではないような気がして、まるで他人事のような気がして、ただただ悲しいといつ気持ちと共に、あたしは死にゆくあたし自身を見つめていた。

その終わりの瞬間まで、あたしの目に映つていたのは、青。サファイアの目だつた。

これまで、アマリリスが一番恐れていたのは、自分だった。人狼を見つけた時の自分。人狼を殺す時の自分。そしてそれを想像している時の自分が、そして人狼に引っ張られるままに歩いている自分が、一番怖かった。その恐れは、ある時は意識的で、ある時は無意識的なものだが、確実であり、かつ唯一のものだった。しかし、今、この瞬間、アマリリスの恐れは、変容した。

アマリリスの目に映る、赤。そして、その赤を貪る、宝石のような青い目。あの赤が、さっきまでアマリリスのよく知る、命ある存在だったなんて、想像もつかなかつた。辺りに飛び散る精霊の血が、時すらも凍りつかせる。大いなる力を持つ魔女であるはずのキュベレーでさえも、その光景に目を奪われていた。

サファイア。ただの人間であるはずの彼女が、今のアマリリスには人狼とは比べ物にならないほど、凶悪な怪物に見えた。

リヴィア・イアサンの最期を見届け、守ると誓つた命が、ほんの数十分の間に消えてしまつたという喪失感が、アマリリスの中で生まれた。それは、初めての喪失感だった。人狼を殺し続けたいという欲求が満たされた時の喪失感とは全く違う。守りたかったものが、壊されてしまった。そして、今も、壊され続けている。その喪失感が、アマリリスの動きを封じた。

「ニンゲンのくせに……」

呟いた声に、朦朧としていたアマリリスの意識が戻つた。呟いたのは、キュベレー。青ざめたその顔は、憤慨の心に満ちていた。そう、サファイアが貪つているものは、キュベレーが狙つていたもの。彼女にとつては、横取りされたも同然。それも、人狼のような魔物でも魔女でもなく、ただの人間に横取りされたのだから、想定外か

つ腹立たしかつたのだろう。その魔女の怒りは、アマリリスにとつて、警戒すべきものだった。

逃げなければ。

アマリリスの頭に、真っ先にその選択肢が浮かんだ。この場はもう取り返しがつかないほど危険だった。目があつたただの人間であるゲネシスも、同じことを考えているような素振りを見せていた。アマリリスはすぐに辺りを見渡した。

探ししているのは、連れ逃げるべき者達。

みんな……。

アマリリスの目に、黒いクーガーの姿が映った。それに乗るバステトの姿も。見つけたのはその二人だけ。もう一人。もう一人がいない。バステトを乗せて高く跳躍したクーガーが、アマリリスの目の前に着した。その獣の目に促されるままに、背中に乗るバステトの手を取る。

「逃げよう。なんだかヤバいことになつてきた！」

バステトがクーガーの背中を軽く叩く。

もう一人。

アマリリスの目が、移り変わる景色を捉え続ける。

何処にいるの？ ラン。

122 ·

もうここはだめだ。ゲネシスはすぐに理解した。キュベレーが女を睨んでいた。サファイア、と呼ばれていたあの女を。サファイアの体はその名とは裏腹に、真っ赤に染まっていた。いや、赤ではない。もはや、茶色に近い赤。その色が何なのか、三体の大きいなる獸を倒してきたゲネシスはよく知っている。だが、獸を倒した時とは全く違う感情が、ゲネシスの中でうごめいていた。

キュベレーの目が光った。その瞬間、ゲネシスの体は自然と動いた。

逃げなければ。

キュベレーの「怒り」に少しでも触れてはいけない。そう本能が告げている。己が目的をあと少しという時に邪魔された彼女の「怒り」が、魔力となつて溢れだしてきている。それが破裂して、周囲に飛び散る前に、この場から遠く離れた場所へと逃げなければいけない。ゲネシスは、そう判断した。

「オフィーリア、ルナ、どこにいるんだ？」

ゲネシスの声が、姿の見えない彼らに届くわけがなかつた。血の匂いのする霧が、ゲネシスの行く手を遮ろうとする。その霧は、音すらも混沌とさせ、どこかにいるはずの双子を探す手掛かりすら残させない。

ゲネシスは、自分がどこを走っているかも分からぬ状態で、ただ前へと逃げていた。とにかく、前へ。キュベレーの「怒り」から遠ざかる場所へ。そうしなければ、双子と合流するどころじゃない。ゲネシスにとって、今の状況では、双子が各自の本能通りにこの場を逃れていることを願うことしか出来なかつた。

（こっちだよ）

その時、声がした。頭の中で響く声。人外の女の声。間違いなく、オーロールの声だった。ゲネシスが振り返ると、また声がする。

（そつちじゃない）

はつきりとした声。彼女にはゲネシスのいる場所が分かるのだろうか。ただ、今は、自分の影にオーロールが潜んでいるわけではないことは、ゲネシスにも感じ取れた。

（そうだ、こっちだよ）

再び前を見るゲネシスに、オーロールはそう言った。声のする場所へ慎重に向かっていくうちに、濃霧の間から少しづつオーロールの姿が見えてきた。

さらに近づくと、オーロールの隣には双子の姿が。そして、もうひとつ、見慣れない影が、ゲネシスの目に映った。

「それは？」

ゲネシスはすぐに、オーロールに訊ねた。

オーロールは呆れたような表情で、双子を横目で見て、答えた。

「双子が連れてきたんだよ、双子が」

「わたしは違う！」

即座に反論したのは、オフィーリアだつた。オフィーリアは隣に佇む双子の片割れを指差し、強い口調でゲネシスに言った。

「ルナが勝手に拾つてきたのよ！」

ルナは無表情と言つてもいいくらい感情を無くした顔で、ゲネシスを見上げていた。その瞳は虚ろで、何もかも吸い付くしてしまうかのようにゲネシスには思えた。

ゲネシスは、改めて、ルナの拾つてきた、『それ』を見つめた。がたがたと震え、どう見ても羊のものにしか見えない耳を、ぴつたりと顔にくつづけている。

その円らな瞳は、この場にいる誰もから逃れるように、ただ地面を見つめており、緊張と恐怖がゲネシスにも伝わってくる。

「おい」

ゲネシスは、がたがたと震える『それ』に、短く声をかけた。し

かし、その声が届かなかつたのか、《それ》は全く反応しなかつた。

「おい！」

強い口調で声をかけると、《それ》はやつとゲネシスを見上げた。大きな目は、獣そのもの。《それ》は、亜人のなかでも、より獣に近いようにゲネシスには思えた。

「お前、名前は？」

ゲネシスの問いに、《それ》はじつと見つめるばかり。言葉は通じないのでどうか。

しかし、《それ》の瞳の映す虚空は、やがて、ゲネシスをしっかりと映した。

ゲネシスは気づいた、いま、やつと、《それ》の頭に自分が刻まれた。

《それ》は、呆然とゲネシスを見つめると、俯き、吐き捨てるようにはいた。

「……ラン」

涙と汗が、ランと名乗つた亜人の影を濡らしていた。

ディアナは黒いクーガーのままで、アマリリスとバステトに寄り添うように座り込んでいた。その黒い毛皮に身を潛めて、アマリリスとバステトは息を殺しながら、周囲の気配を窺っていた。

かつて大いなる海の霸者と呼ばれていた生き物、そして、その孫達の住んでいた村のあつた場所は、いまはもう無くなっていた。そこを取り囲むのは、黒い霧のような瘴気。付近の里々で、そこに迷い込んだものはたちまちのうちに体の内部から命を奪われていってしまうと噂されるようになるのにもさほど時間はかからなかつた。そんななかで、ぼそぼそと呟くように話していたのは、バステトだつた。

「……ともかく、ランを探さなきゃならない……違うか……わたし、間違つたこと言つてるか……？」

バステトが憔悴したように言つていたのは、話しかけている相手であるアマリリスが何も言わないからだつた。何も言わず、感情すらも宿していないかのよくな顔で、バステトに寄り添つていたのだ。その様子には、クーガー姿のディアナも怪訝そうに窺う程だつた。

「なあ、アリス……返事してくれよ……アリス……」

バステトは俯いた。アマリリスの様子はまるで、魂の入つていな空っぽの人形のようだつた。人形でさえも、今のアマリリスよりも魂の入つたモノがあるといふのに、アマリリスは屍と表現するよりも、ずっと無機質な存在だつた。自分がどんなに呼びかけてもアマリリスの様子が変わらないことを悟ると、バステトはますます落ち込んだ。どうすればいいのか、バステトにも分からぬ。だから、アマリリスの傍にいるしかないのだ。ディアナと共に寄り添つてい

るしかない。

ふと、クーガー姿のディアナが、一点を見つめ、唸りだした。こんな場所に誰かいるとすれば、誰であろうと敵である。バステトは焦つた。アマリリスはそれでも動こうとはしないのだから。しばらくすると、ディアナが唸つていた方向から、こちらへと近寄つてくる影が見えてきた。

「ディアナ、どうしよう……ディアナ？」

バステトが呼びかけた時、ディアナが唸りながらその影に走つていった。追いかけようと思ったが、バステトはそれを留まつた。今ディアナはクーガーなのだ。後を追いかけたところで、何になるのだろう？ それに、バステトは恐ろしかつた。クーガーのままの姿でいると、時々ディアナは人間としての感覚を失つてしまつてゐる気がしたのだ。ともかく、手癖が悪いだけのただの人間であると実感しているバステトにとつて、この状況は一番恐ろしく破滅的なものだつた。

「どうしよう……どうしよう……」

しかし、どうしようもない。ただ、見守つていてことしか出来なかつた。しかし、バステトの心配をよそに、ディアナはしばらくするヒトの姿で戻つてきたのだった。しかし、その目はとても鋭く、獸の感性が強く残つたままの目をしていた。

ディアナの後からついてくるようにやつてきたのは、彼女よりも随分背の低い影。よく見ればそれは、魔物だつた。バステトは顔をしかめた。その魔物は野牛と虎を足して二で割つたような姿をしているくせに、一足歩行をしていて、立派な毛皮があるというのに服まで着ているのだ。それはとても滑稽で、バステトにとつて、何故かとても不快な感情をもたらすものだつた。

「そいつは何なの？」

バステトは思わず強い口調で言つてしまつた。しかし、ディアナは声をかけられて少し人間の感性が戻つてきたのか、獸としての荒々しさがやや治まつた目で、その魔物を振り返り、呴いた。

「分からない」

それは、バステトにとつて、得とならない情報だった。

だが、バステトが再び口を開く前に、その魔物の方が口を開いた。
「ニンゲンに魔女、半獣……君達はどうしてこんな所に居るのかね
？」

まるで、富豪の紳士のような口調で、その魔物は言った。バステトはますます顔を引き攣らせた。どうしてここに居るか、それはバステトの方が彼に聞きたい程だった。その姿はまるで、町の絵師が描く夢魔のようでもあるのだ。ともかく、不快だった。

ディアナはじっと警戒した目で見ていた。

「あつちで気配がしたから様子を見てきたの。人狼じゃなかつたけれど、勝手についてきたのよ」

「勝手にとは失礼な。突然クーガーがやつてきたと思つたら、目の前でニンゲンの姿に変わって去つていいく。ワタクシは、それを追わない程、冷静な人間でもないのでね」

よたよたと歩くその姿は、とても奇妙だった。

「ともかく、君達はどうしてこんな場所にいるのかね？　ここがどういう場所か知つているのかね？」

「知つている」

突然、アマリリスが口を開いたので、バステトは驚いてしました。そんなバステトを余所に、アマリリスは何かを諳んじるかのように、ぼそぼそと話しだした。

「海、陸、空の霸者が死んだ。それに捧げるモノも壊された。それだけでも歪むというのに、肉を手に入れたただのニンゲンの女に、全てをめちゃくちゃにされた」

バステトには、やはりよく分からなかつた。ディアナもまた同じだつた。

「キュベレーはたいそう御怒りよ。かつて女神と讃えられた面影は、もはや残つてはいないでしようね。貴方は知つてはいるのかしら。こちらの世界で、今、何があつたのかを」

「知っていた。だから、ワタクシは貴方達を見つけた。だが、あちらの世界でそんな事があったのは知らなかつた。しかし、疑問だ。ただのニンゲンと君は言ったね、魔女。どういう事かね、それは本当にニンゲンなのかね？」

紳士風の醜い魔物にそう問われ、人形のようだつたアマリリスの表情が微かに動いた。青く透き通るような眼が、魔物へと向いた。さらりと動く金の髪が、とても綺麗だつた。

アマリリスはじつと魔物を見つめ、淡々とした様子で答えた。

「分からぬわ」

ランは純粋な子どものような雰囲気を持つた者だった。だが、年齢などゲネシスに分かるわけもない。オーロールは彼女を非常食程度にしか思っていないようだったが、普段は大人しいルナが頑なに守るため、誰も手出しできない状況に居た。ルナの片割れであるオフィーリアでさえも、勝手にランに触れることすら出来なかつたのだ。ランは何も覚えていなかつた。ゲネシスが一、二、質問をしても、全く答えない。ただ、無垢な瞳をじつと澄ませてゲネシスを見つめるばかりである。ゲネシスは早々からこのランに質問をするという事を諦め、これからどうすべきかを考え始めた。

「子どもは諦める。魔女も人食いももはや手がつけられない」

それがオーロールの意見だつた。所詮、人の血を啜る人狼の意見だ。そう分かつていても、ゲネシスの頭にも限界という二文字は過ぎつていた。たつた一人の少年のために、この世の成り立ちを壊そうとした罪を感じながらも、それでも、少年を救いたかつた己の気持ちは無駄にしたくなかった。だから、ゲネシスは静かに剣を握つていた。

「魔女を探す。彼のために」

ゲネシスの重たい言葉に、オーロールは苦笑を浮かべた。しかし

それは、まるで、最初から分かつていてかのような笑みだつた。

「どうせ、世界は壊れてしまつたのだ。お前が壊したようなものだ。命尽きるまで、同行させてもらうよ」

オーロールの言葉を、ゲネシスは黙したまま受け止めた。人に成りすまし人肉を喰らう人狼の考えなど、ゲネシスには分からぬ。だが、そんな事、どうでもよかつた。誰がついてこよう、誰が離れようとも、ゲネシスには、時を止めてしまつたラジカと、そんな

魔術を彼にかけたキュベレーのことしか頭になかった。キュベレーの行方は分からない。あの人食いとともに何処かへ行ってしまった。離れるべきだととっさに判断した自分が憎かつた。そして、見失つてしまつまで気付かなかつた自分のことが憎かつた。

「ゲネシス、あなたは人間なのに、人間以上のことをやつているのよ」

オフィーリアが突然口を開いた。

「だから、仕方ないことなの。本当ならば、ラジカだつて、諦めるべきなのよ」

「そんな事……」

ゲネシスは思わず反論しそうになつて口を噤んだ。自分と、自分を守る剣が、この世界の秩序を乱したという事態が現に起こつてゐる。魔女に従わざるを得なかつたとはいへ、この世界を守つっていた三体の神を壊し尽くした事は、紛れもない事実だ。たつた一人の少年のためだつた。しかし、その約束すらも守られなかつた。あの魔女たちのせいで。

はつと、ゲネシスはルナが守つてゐる獣、ランへと視線を移した。「お前、ランといつかな、お前は確か、赤い魔女たちと一緒に居たね？」

問い合わせるも、無駄なようだつた。ランはじつとゲネシスを見つめたまま、震えている。その様子をじつと見つめて、ゲネシスは肩の力を抜いた。それはそうだろう。自分を対等に扱わない目線でじつと見つめられて安心出来るはずもない。それに、この場には人狼までいるのだ。ゲネシスは出来るだけ、優しさを込めて、ランに話しかけた。

「怯えなくていい。攻撃手段のない者に、無駄に危害を加えたりはしない。約束する。この狼も、お前を食べたりしない」

勝手にそう言われて、オーロールはちらりとゲネシスに視線を送つたが、ゲネシスはそれを無視し続けて、ランだけを見つめていた。「赤い魔女の事を教えてくれ。お前達が何をしていたかを教えて欲

しいんだ

ゲネシスの真っ直ぐな視線に、ランの瞳が揺らいだ。

ディアナとバステトがこの事態を把握するのにはかなりの時間を要した。それでも、なお、理解しきったとも言えず、二人はただアマリリスの判断に全てを委ねるしかなかつた。だが、突如現れた紳士風の魔物はそんな二人の理解を待たず、三人を誘い始めた。

「陰が覆い尽くすこの世界へようこそ」

魔物の声は深く、おどろおどろしいものだつたが、アマリリスは全く動じていなかつた。魔性のものを半分引いているディアナでさえもこの世界は恐ろしいものだつた。歪んでしまつた、とアマリリスは言つたが、ディアナもバステトも、それを理解することが出来なかつた。まず、ここは何処で、どういう場所なのか、この魔物は何者なのか、それを説明して欲しかつた。だが、アマリリスも魔物も全く説明をしてくれない。ディアナとバステトは、仕方なしに彼らについて行つた。

辿り着いたのは、村のような場所だつた。だが、人間は一人もおらず、ここへと連れてきた魔物と同じ種族の者達が住んでいるようだつた。いわば、魔物の村だ。こんな場所があるなんて、ディアナもバステトも信じられなかつた。村の住人たちにしてみれば、ディアナ達のような人間が来ることが珍しいといった様子で、三人とも、刺さるような視線を避けることが出来ずにいた。

「しばしの辛抱を。村長を紹介するのでね」

紳士風の魔物はそう言つたが、ディアナもバステトも全く安心出来なかつた。この場で一番肝が据わつてるのは、黙つたままついて行くアマリリスだらう。だが、アマリリスの心情も伝わつてこない以上、二人が安心出来る瞬間など到底なかつた。紳士風の魔物が消えてすぐに、別の魔物達が数人やってきた。ディアナとバステト

は、その魔物達の異質さに違和感を覚えていた。魔物にしては、あまりに人間くさいのだ。自分達が戦つてきた魔物達と、何かが違う。こうして彼らを見ていると、魔物もまた人間と何ら変わりないようすら見えてくるのだ。

「あなたがたがあちらから迷い込んだ者達ですね。わたしがこの村の長です」

そう言つて会釈したのは、魔物達の真ん中にいる白い魔物。恰幅のいいかなり大柄のその魔物は、アマリリスみて、眉を潜めた。「ふむ、人間に半獣に魔女ですか。変わつた組み合わせだけれど、生き延びれるのも納得がいく」

「それで、貴方達は、あたし達に何を求めているの？」

村長の話を遮る様に、アマリリスが口を開いた。彼女の余裕のある態度は、相変わらずだつた。ディアナとバステトは怪訝にそのやりとりを窺つていた。無駄に口出しさ出来ない。どうせ、アマリリスが決めた事について行くしか道はないのだ。

村長はアマリリスをしばし見つめ、ふむ、と顎を搔いた。

「なるほど、さすがは魔女。察しの早いことですね。あなたの思つている通りです。わたし達は、この世界に迷い込んだあなた達に縋らなくてはいけない。縋らなくてはいけない事があるのです」

廻りくどい言い方をして、村長は目で他の魔物に何かを命じた。その魔物が去るのを待つてから、村長は再び口を開いた。

「あの混沌を生き延びてこちらに迷い込んだあなたの方の力を見込んで相談しましよう。こちら側とあちら側の崩壊を避けるためにも。あなたの方の力を貸していただきたい」

「あたしに出来る事なら」

アマリリスの短い言葉に、村長はゆつくりとひとつ頷いた。

「簡単な事。この地を抑える杭を見つけ出し、壊してくれればそれでいいのです」

ゲネシス達は、大いなる海の生き物が没した地から遠く離れた場所にある町へと逃れていた。結局、ランは何も思い出せないのか、赤い魔女について一言も喋らず、さらにあまりにも問い合わせば、ルナが怒りだすので、ゲネシスも手を出すに出せないのだ。

「連れてていれば如何にもなるだろ?」

そう言つたのはオーロールだつた。彼女は彼女でランを非常食としか見ていないのは相変わらずだつたが、それでも、ゲネシスの肩を持つてゐるのか、無闇にランに襲い掛かるような事はなかつた。オフィーリアは、ルナの意思を尊重しているようだつた。いつもならルナの決定権すらも握つていて思えるオフィーリアだつたが、今回このルナの強い意思には、驚いてゐるようだつた。

町の中でも、ルナはランの手を握つたまま放さなかつた。行きかう人々の全てからランを守つてゐるかのように、ルナの目は煌々と輝いていた。そうして、町の宿に着くまでずっと、ルナはランを守り続けた。

「そいつが何を感じてゐるかは知らないけれど、氣味の悪いことね」
オーロールがゲネシスの影の中からそう言つた。人狼がそんな事を言つのも変な話なのだが、そのくらいルナの頑なな意思は異様だつたのだ。そして、宿に着いて、部屋へと辿り着いても、ルナはランの傍を離れようとしなかつた。ゲネシスはランに訊ねたい事が山ほどあつたのだが、構つていても時間の無駄だらう、というオーロールの助言もあり、諦めて、オフィーリアとルナ、ランを部屋に残して、買い出しに行くことにした。なんせ、リヴィア イアサンを倒して以来、ずっと旅を続けていたのだ。消耗品も底を突きてゐる頃だ

つた。それに、資金も絶えてきている。キュベレーに翻弄され続けて気にしていなかつたのだが、国の者や他の討伐軍の者達をあまり見かけなかつたのだ。今、国がどうなつてているのかなどの情報も、特に入らなかつた。

「入らないつてことは、何ともないつてことなんじやないのかい？」
オーロールは影からそう言った。

確かにそうかもしれない。だが、ゲネシスの心はなかなか晴れなかつた。不穏ばかりが包み込んでいる時勢に、心が晴れ切ることなんてあり得ないかもしれない。

「それに、この町になら、他の連中もいるかもしれないじゃないか」
オーロールはのんきにそう言った。もしもそうなれば、オーロールもまた、討伐されかねないのだが、彼女は彼女で余裕があるのでろう。そして、オーロールの言つ事は確かだつた。オーロールと密かに話しながら町を歩いていたゲネシスが見つけたのは、国に仕える討伐の戦士の姿だつたのだ。

この世を支える杭を探し出し、壊す。その何がどう簡単なのか、ディアナとバステトは疑問に思っていた。まず、この世の事をよく分かつていらない二人にとって、この依頼は未知そのものだった。けれど、アマリリスが断らない限り、彼女達には決定権もなかつた。もはや、彼女について行かなければ、どうにもならないのだ。つまり、アマリリスが引き受けるのならば、ディアナもバステトも、それに抗う事なんて出来なかつた。ここは何処で、自分達は何に巻き込まれているのか、しっかりと理解する前に事は起こつている。

「この世界を支える杭は、地底の奥深くにあるといわれている」魔物の長はそう言つた。もうすっかり、杭を壊しに行くという事になつてしまつていて、ディアナもバステトも話についていくのに必死だつた。アマリリスだけが、冷静に聞いているようだつた。

「杭は一つだけではなく、三つあるとか、五つあるとか言われている」

「つまり、定かではないのですね」

アマリリスの甘く妖艶な声が、魔物達の影に反響していく。魔物達の肌の色で薄暗くなつていて、仄赤く染まつていてのようだつた。

魔物の長は、地図と羅針盤を机の上に置いて話をしていた。今いる村には、ピンが刺してある。ディアナもバステトも見たことのない形のピンだつた。炎のような光が揺らめいていて、燃えているかのようだつたが、触つても熱くないのだ。魔物達にとつては当たり前のことの代物らしい。そして、アマリリスもまた、さして興味を持つこと

はなかつた。村を示すピンからは、三本の赤い線と、一本の青い線が、均等に伸び、四方に真っ直ぐ引かれていた。それぞれの線が突き当たるのは、いくつかの土地。赤い線は、山、海、森に、青い線は、地図上からは何があるかも分からない場所に続いていた。

「一番近いのは、森。だが、その森も広大で、杭が何処にあるかなんて分かりもしない」

魔物の長は澄んだ目でそう言った。

「でも、必ずその場所に一つある」

アマリリスの言葉に、長は深く頷いた。

「魔女の貴女の力は、我々のような一介の魔物を遙かに凌駕するのでしよう。杭のある場所はきっと貴女を導くに違いない。もしも貴女がお告げに出てきた異世界からの魔女であるのならば、杭は必ず貴女を呼び寄せるでしょう」

「杭を壊すには、どうしたらいいの？」

アマリリスの問いに、魔物の長は、他の者達に指示をして、何かを持つて来させた。それが何かは考える暇もなかつた。目の前に出されたのは、一つの剣だつた。それは、ディアナとバステトが見ても、明らかな異様さを含むものだつた。アマリリスはそれをじつと見つめ、一つ頷いた。

「剣……ヘケートの剣？」

アマリリスが驚きを隠せない様子でそう言った。

「収められているのは、エンプーサ……」

そう呟くアマリリスを、魔物の長はまじまじと見つめた。品定めをするような目つきから、段々と敬意の籠つた目付きへと変わつていく。剣を手にとつて恍惚としている彼女をじつと瞳に映すと、魔物の長は静かに頭を垂れた。

「やはり、貴女のようですね。エンプーサは長くこの地に留まつていました。この剣をここへ持つてきたのは、女神ヘケート様の使命を受けたと自称する旅人でした。彼はヘケート様からの愛を受けたと言い、この村に剣を隠すことが命であると、時の村長にエンプー

サの封じられた剣を託したのだと言います。貴女に託されるためにここへ来たのでしょう。どうか、持つていつてくださいませ」剣を持ったアマリリストの目は、まるで、人狼を殺す時のように鋭かつた。

「確かに引き受けましょう。この剣と共に」

ゲネシスはすぐに戦士の元へと歩み寄った。戦士の目は死んだようになつていて、それは相変わらずだ。実際、死んだような心の持ち主などざらだつた。あいにく、その戦士は見覚えのある者ではなかつた。だが、ゲネシスが近寄つていくと、その死んだような目に突如光が宿つた。ゲネシスは少し驚いた。国に仕える戦士にしては、あまりに活き活きとした目だつたからだ。

「君は、国に仕える者か?」

戦士がゲネシスに訊ねた。爽やかな青年の声だつた。ゲネシスは頷き、自分の懐をちらつかせた。国の紋章が刻まれている札を見せて、戦士に答えた。

「私の名はゲネシス。各地に散らばる悪しき魔女を狩るために野に放たれた獵犬だ」

「魔女狩りの、ゲネシス……」

戦士はそう呟くと、己の懐もちらつかせた。ゲネシスと同じような札が見える。だが、その形と色は若干違つた。

「私はミヒヤエル。狼を狩るために呼ばれた獵師だ」

「狼?」

ゲネシスははつとした。もしもこの男が聰いものであるならば、ゲネシスの影に纏わりついているオーロールの気配すらも読み取つてしまふかも知れないと思つたからだ。そして、この男の真つ青な目は、それすらも可能なようと思つたのだ。ゲネシスは警戒心を密かに強めながら、男を探つた。

「では、あなたは魔物狩りのミヒヤエル」

「そうなるな」

ミヒヤエルはくつくつと笑うと、ゲネシスをじっと見つめ、首を傾げた。金髪碧眼という美しさの定番のような特徴を持つている彼だが、ゲネシスにとっては、その美しさよりもずっと、身体の内側に含まれている威圧的な気配のほうが気になつて仕方なかつた。肉体の力以上の何かが、彼に宿つているような気がしてならないのだ。（思い過ごしではないようだ。この男、全てを見通しながら、それをただ見ているだけだろう。時が来るのをじっと待つのだと思う）オーロールの声が、ゲネシスの頭の中で聞こえた。その事すらも、彼は見通しているかのような目をしていた。だが、オーロールの言うとおり、彼は何も言わなかつた。

「ゲネシス、といったね。君がここにいるということは、魔女がここにいるという事？」

「同じ事をあなたにも訊ねたい」

ゲネシスは慎重にそう言つた。気の動転など、悟られるような事は今まであまりなかつた方だが、今の時ばかりは緊張が拭えずになつた。ミヒヤエルは飽く迄も涼しげな雰囲気を崩したりしない。ゲネシスにとって彼は、敵に回したくないタイプの人物そのものだつた。ゲネシスは俯き気味に、付けくわえた。

「私がここにいるのは、別に、魔女を狩りに来たというわけではない。探しているだけだ」

質問の答えを得られて安心したのか、ミヒヤエルは溜め息混じりに笑みを崩しながら、ひとつ頷いた。

「そうか。回答を得られて嬉しいよ。ならば、こちらとは事情が違うらしい。私は依頼されてこの地に来たからね

「依頼？」

ゲネシスが問い合わせた時、ゲネシスの影に潜むオーロールが、納得したかのように低く唸つた。

アマリリスに導かれて、ディアナとバステトは魔物達の村を後にした。一番近いのは森と言わっていたが、それがどのくらい近いのか。この世界における近いがどの程度のものなのか、ディアナもバステトも一抹の不安を感じずにはいられなかつた。

森はとても静かで、ディアナやバステトにとつて、自分達がよく知つてゐる世界と代わりのないように見えた。ただ、そこに住む動物達は、魔物が大半で、当り前の鳥や動物達は、見かけることがなかつた。もしかしたら、いないのかもしれないと思うようになつたのは、森を突き進み始めてから半日以上経つた時だつた。森は広大で、進んでも進んでもどこまで進んでいるのか分かりもしない。だが、アマリリスの歩みに戸惑いはなく、ディアナもバステトもそれだけが救いだつた。

アマリリスは剣を手に何度も精神を集中させては、道を決めているようだつた。もしかしたら、この魔の剣が、彼女を導いているのかも知れないということは、ディアナにもバステトにもすぐに分かつた。ただ、それについて触れることが出来なかつたのは、剣とアマリリスの間に、入りこむ余地がなかつたからだ。

「杭つて、どういうものなのかしら」

森を進み続けてもう何日経つたのかも分からぬ。ディアナはぽつりとそう言つて、そういえば、ここ最近ろくに声も発していなかつたことに気づいた。アマリリスだけが、剣の介入によつて杭について知つてゐるに違ひない。だけれど、アマリリスは何も語ろうとしないのだ。ディアナはそれが心細かつた。

「ねえ、アリス。杭つて何本あるのかな?」

五本とも三本とも言われている杭。その曖昧さは、どうにかはつきりとさせたおきたい要素の一つだ。けれども、アマリリスはやはりなにも言わなかつた。ただ剣にのみ集中を高め、黙して進み続ける。デイアナはやがてアマリリスに回答を求める事を諦めて、肩を落として後に続いた。バステトも何も言えなかつた。今のアマリリスに何を訊ねても返答は来ないだらうとわかつていただからだ。

黙して進み続けていたアマリリスが立ち止まつたのは、薦の絡む鬱蒼とした地帯だつた。今まで進んでいた涼しげな森とは一線を逸しており、その薦の先にはいかにも何かが隠されていそうな場所だつた。見るからに怪しいという場所。アマリリスはその場所をじつと目に映すと、やがて、吸い込まれるように薦の向こうへと入りこんでいった。デイアナもバステトも一瞬戸惑つたが、すぐにアマリリスの後を追つた。

「アリス。ねえ、アリス……！」

デイアナが呼ぶ名前も薦の間に絡められる。アマリリスは後からついてくる一人の存在など忘れてしまつたかのよう、どんどんと先へ進んでいった。

ゲネシスが訊ねると、ミヒヤエルは眉を潜めた。まるで、当然のことと訊ねられたかのよつたその態度に、ゲネシスは唇を噛んだ。魔物狩りの戦士であるミヒヤエルに舞い込む依頼と言えば、その内容しかない。だが、ゲネシスが気になつたのは、ミヒヤエルが狩ろうとしているのが、狼なのか、狼じゃないのかだつた。魔物狩りといつても、戦士である彼らにも魔女狩りの要請は来る。民衆にとつてみれば、魔女も魔物も同じよつたものという事だろう。

ゲネシスのそんな気持ちを察したのか、ミヒヤエルは顎を搔きながら答えてくれた。

「そうだね。君は知らないらしいから、教えてあげるよ。この町の住人達は正体のつかめない者に畏怖している。それが魔女なのか、魔物なのかは分からぬが、確實に町に潜んでいるらしい」

「正体がつかめない？」

聞いた事もない事例だつた。大概の要請では、犠牲者の状態で何が原因なのが分かる。すなわち、獣によるものなのか、否かである。食い荒らされていれば、大体は狼の所為になる。そういうものだつた。特に目立つた外傷がない場合、魔女が疑いをかけられる。いずれにせよ、疑わしい者から隔離され、処刑されていくのが常だつた。

「もうすでに、五人の犠牲者が出て、四人の被疑者が処刑されたらしい」

ミヒヤエルの一方を指差した。ゲネシスにはそれが何かが分かつた。魔女にしる、人狼にしる、処刑が行われるのは同じ方法。吊るされ、バラバラにされ、燃やされるのだ。吊るされるだけで死ねればまだ乐だろうに。バラバラにされるまで生き残つてしまふことも

あるらしいと聞く。沢山の罪のない者が、人狼や魔女の所為で殺されてしまうのだ。

（私からすれば、勝手に疑つて身内を吊るす貴方達が悪い）
オーロールがゲネシスの影でそう言つた。人狼の立場的にはそうなるのだろう。彼らも生きるために人間を狩つてゐるに過ぎない。人間が野の獸を狩るのと同じだ。

魔女ならば、魔女と噂されている者を次々に質せば終わる。人狼ならば、被害者の状況を照らし合わせていけば、必ずと容疑が絞られていく。でも、今回は正体がつかめないというのだ。それならば、この町に潜んでいる犯人をどうやって見つけ出すというのか。

「手口は分かつてゐる。若い娘が被害者だ。娘達は皆、忽然と姿を消し、三、四日後に無残な姿で発見されるのだ。全て、食い荒らされた遺体だが、その食い荒らし方が普通の人狼のそれとは少し違う」「違うと言つと？」

「噛み痕が、人間のものに似てゐるのだ」

「それは……」

人狼が人間の姿で噛み荒したからじやないかと言おうとしたゲネシスだつたが、それを真つ先に否定したのは、オーロールだつた。（姿は人間でも、本性は狼なのよ。噛み傷はどうしても狼になつてしまつもの）

他ならぬ人狼が言うのだ。ゲネシスは口を噤み、言葉の続きを待つていたミヒヤエルに首を振つた。ミヒヤエルは、やや怪訝そうにしていたが、気を取り直して続けた。

「娘達は生きている間に散々弄られ、生きたまま臓物を引っ張り出されて果ててゐる。猶奇殺人にも、娘を攫う方法が掴めないのだ」

「なら、どうやって突き止めるんだ？」

「次に犠牲になりそうな娘を見張るしかない」

ミヒヤエルの言つたことは効率の悪い事だった。しかし、今のこの状況ではそれをするしか方法はないのかもしれないとゲネシスは

納得した。若い娘というと、どのくらいの娘なのだろうか。ゲネシスは犠牲者たちのことが少し気になつた。食い荒らしているという事は、魔女であれ、魔物であれ、もしくは人間であつても、人食いに他ならない。人食い。人食いには苦い想い出しかない。世界を滅ぼしても、救いたかつたラジカ。その命運を握つたままのキュベリーを狂わせたのは、赤い魔女と一緒にいた人食いだった。
(面白そうな事だ。退屈しのぎに手伝いましょうか)

静かな笑いを漏らしながら、オーロールが言つた時、ゲネシスはまつすぐミヒヤエルを見上げた。

「で、その娘は？」

アマリリスが引き寄せられるように薦の向こうへ行つた時、思わず呼びとめてしまったのは、本能的に恐怖を感じたからかもしれない、とディアナもバステトも同じように思つていた。明らかな異様さという点で、この場所の雰囲気は、かの大きな生き物たちの住処のそれによく似ていた。だから、そんな主のようなモノがいてもおかしくないと二人とも思つていたのだ。そして、それは的中した。アマリリスだけが、冷静にそれを見ていた。森の主であろう獣。黄金の気に覆われた、剣のような牙を持つ虎のような獣だった。獰猛な目付きには、理性など宿つていなかのようだ、それは、猛獸に変身できるディアナでさえも、畏怖すべき獣だった。だが、アマリリスだけはそれを涼しげな顔で見つめていた。

アマリリスは獣の前で、剣をかざした。まるで、そうじろと誰かに指示を受けたかのように。その剣を、虎のような獣はじつと見ていた。じつと見つめ続けて、やがて、ゆっくりと唸りだした。ディアナには、この獣がなんと言つているのかが分かつた。ディアナの獣の性が、察知したのだ。

獣の目は、鋭かつたが、まるでアマリリスの事を探つているかのようだつた。ディアナとバステトの見守る中、アマリリスが剣を下した。そして、彼女は真つ直ぐな瞳を獣へと向け、ぼそりと口を開いた。

「そう。あたしは頼まれただけ。それがあたしなのかは分からぬけれど、頼まれて引き受けた。それが全てよ」

獣への返答だった。バステトには何が何だか分からなかつたが、ディアナには分かつっていた。全てのやりとりが理解出来たのだ。ア

マリリスの返答の直後、ディアナはクーガーの姿へと変身した。それを見て、バステトはどうにかこれから始まる戦闘を予感した。

アマリリスが剣を構えた瞬間、獣は咆哮し飛び上がった。その巨体からは想像も出来ないほどの速さに、バステトは怯んだ。この巨きさを誇る獣を相手に、助太刀など出来るのかという疑問がバステトの脳裏を過ぎていた。しかし、ディアナは迷わず飛び込んでいった。獣の肉体を得た彼女は、相手も獣である以上、同じことなのかもしない。バステトも、意を決して獣へと近づいていった。獣が見つめているのは、アマリリスだけである。その目を盗んで、そつと足元へと忍び寄ることは出来なくもなさそうだった。だが、飛び上がった獣が着地をすると、バステトには立っていることも困難な程の衝撃が生まれた。金の毛並みを振りかざし、獣はアマリリスにだけ向かっていった。ディアナもバステトも、すぐさま助太刀に入ろうとしたが、なにぶん、先程の衝撃の所為で一人とも行動が遅れた。追いつけるとすれば、ディアナだが、それを遙かに凌ぐ大きさと速さを獣は持っている。そんな怪物が突っ込んでくるというのに、アマリリスの涼しげな表情は相変わらずだった。

獣の鋭利な爪が、剣に軽々と弾かれた。アマリリスの魔力なのか、剣の持つ魔性なのか、見てているディアナとバステトには分からない。だが、弾かれた瞬間の隙に、ディアナが、そしてバステトが、獣とアマリリスの元へと近づくことが出来た。ディアナは近づくなり、獣の足の腱へと牙を打ち込んだ。その後、獣の怒声に混じった悲鳴を聞いて、バステトも忍ばせていたナイフで、反対側の足を切り刻んだ。これだけで、アマリリスの方が有利になるはずだった。

そして、アマリリスは、今の瞬間の好機を逃すような魔女ではなかつた。

「ホント……」

アマリリスの構えた剣が、真っ直ぐ、獣の胸部へと突き刺さる。

「杭つて、どういうものなのかしらね」

剣はそのまま天へ向かって突き上げられる。獣の体内から空へと

舞い上がった剣の周りでは、噴水のような血飛沫が空気を赤に染めていた。鮮血はそのまま地面をも色どり、緑が占めていたこの空間を赤く、赤く染め上げていった。

獣はもう何も言わなかつた。その目はただ、驚いた表情でアマリリスを凝視したまま、濁つていった。

端麗な容姿は、ゲネシスからすると、まるで人形のようだつた。ミヒヤエルが示したその娘、カーミラは、際立つた家の娘というわけではなかつたが、その容姿のおかげで、只者ではない雰囲気が存分に醸し出されていた。ミヒヤエルによれば、カーミラが狙われていると噂される影には、カーミラ自身の体験が大きく関わっている。それは、目撃。彼女が唯一人狼が一人の娘を殺害する現場を目撃した娘だつた。だが、ゲネシスは疑問だつた。どうして、カーミラは疑われていないのであつた。犠牲者や人狼を目撃したと騒ぐ人こそ、注目を浴びやすいものである。特に、殺害された時点で犠牲者の傍に居た人物ほど、吊るされかねないものである。

しかし、ミヒヤエルもまた、カーミラを疑つてはいなかつた。それには、いくつかの理由があつた。一つは、カーミラが人狼にしては、あまりに目立ち過ぎてゐること。そして、もう一つは、カーミラこそ人狼にとつて最高の御馳走になり得ること。

「どういう意味だ？」

（簡単なこと。あの娘は羊なのさ。私ですら喉から手が出るほど味わいたいくらいのね……）

オーロールの渴望的な声に、ゲネシスは眉を潛めた。人間には分からぬ魅力が、カーミラにはあるのだろうか。いや、人間にもそれは通用しているのかもしだれない。現に、カーミラは、今まで殺されずに成長できているのが不思議なくらい、誰かに殺されそうな魅力を放つていた。そんな魅力があるなんて、俄かには信じがたいことだが、実際にその目でカーミラを見たゲネシスは、よく分かつた。

「他の町がそうであるように、この町にも、集中力を高めれば、特

定の人物の正体を見破れる靈媒師が複数いるらしい。その誰もが、カーミラを無垢の羊であると評価しているそうだ」

「誰一人として、カーミラを疑う者はいないというのだろうか。それはそれで、奇妙な話だつた。しかし、ゲネシスもまた、カーミラは狼ではないという確信があつた。オーロールの所為である。そして、自分自身の直感の所為である。カーミラは、どうあがいても、殺す者ではなく、殺される者であることは確実だつた。

「依頼を受けて以来、カーミラの様子は度々見ている。実際に、人狼らしき怪しい影が彼女の近くに忍びよつた事もあつた。きっと、この町に巢食う人狼達は、カーミラを狙つてゐる。そして、他の犠牲者である娘達のように、散々弄んで喰い殺すつもりに違いない」

淡々とミヒヤエルはそんな事を言つた。

黙したままカーミラを見つめるゲネシスの影の中で、オーロールもまた妖艶な笑みを浮かべていた。

（ああ……それが出来たら、どんなに素晴らしいだろう）
その声は、ゲネシスにしか聞こえなかつた。

真っ赤に染まつた剣が、その少し前まで白刃であったことを、ディアナとバステトはそれぞれ思い出していた。同じくらい赤い衣に身を包んだアマリリスが見つめるのは虚空。血飛沫が霧のように立ち込め、ディアナとバステトの鼻に、まとわりつくような匂いが辺りに漂つていた。今さっきまで動いていた肉片には目もくれず、アマリリスはじつと虚空を見つめた表情のままで、たつた今殺した命が守つていた場所を見つめた。血に塗れた剣を握りしめているその拳。何かを決意したかのようなその姿に、ディアナもバステトも何も言えないまま見つめていた。

アマリリスはやがて、静かにそちらへと近づいていった。何も言わないまま、引き寄せられるようにそちらへと向かっていく。ディアナはどうするべきか迷つた。共に近づいていいものか。しかし、バステトが歩み出したので、ディアナも恐る恐るそれに続くことにした。一人がついて来ることに對して、アマリリスは特に気に留めなかつたのか、それとも、気付かないほどにその場所に気を取られていたのか、全く振り返らなかつた。

獣が守つていた場所に何があるのか。考えるまでもなく、それは見えていた。木漏れ日を受けて輝いているそれは、アマリリスが近づいてくるのを待つていてるかのようだつた。ディアナとバステトはその場所への入り口となつていてる地点で止まり、後はアマリリスを見守ることにした。今となつては、輝いているそれが、杭と呼ばれていたものなのかと問うあてもない。だが、アマリリスは分かつているようだつた。そして、その確信が何処から来ているのかは、ディアナには分かつた。獣とアマリリスの会話を耳にしていたディア

ナには、よく分かった。

アマリリスが杭らしきそれに到達した時、何故か、ディアナもバステトも、身震いした。とても怖いモノを見ているような気分になつた。それは、獣がアマリリスによつてハつ裂きにされた時には感じなかつたものだつた。どうしてそんな気持ちになつたのかは分からぬ。だが、今、行われようとしているこの儀式が、ただ事ではないと、きつと、アマリリスもまた、感じているのだろうと、ディアナは察した。

「 そうなのね……」

アマリリスはぽつりと言葉を漏らした。そして、振り上げられたのは、赤く染まつたままの剣。あれだけの無理づかいをされていながら、特に痛んでいる様子もない不思議な剣だつた。

「 あなたが、要なのね」

アマリリスの言つた意味が、ディアナにも、バステトにも分からなかつた。分かろうと思う事さえも、愚かに感じるほど、アマリリスとこの世界は一体化していた。

そして、アマリリスは、剣を振り下ろした。

カーミラを見守り続けて暫く。人狼の被害がゲネシスの耳に入ることはなかつた。カーミラに怪しい者が近づく気配もなければ、その他で誰かが人狼に襲われたという噂も聞かない。オーロールはそれを、単に警戒しているだけだと説明した。ゲネシスとオーロールの気配に怯えているに過ぎない、と。だが、ゲネシスはどうも腑に落ちなかつた。

しかし、ゲネシス達が町に到着して五日目の朝、人狼の被害が久々に出てしまつた。犠牲になつたのは、町のパン屋の女だつた。共に暮らしている夫が発見した時には、誰だつたのかも分からぬくらいに喰い荒された後だつたという。しかし町人達に疑われたのは、妻の死に嘆いている夫だつた。一番身近にいたこと、そして、妻がたびたび夫の暴力を友人に漏らしていたことが原因でもあつた。無論、夫は必死に反論していた。それは、ゲネシスが見えていても痛々しい程の姿だつた。だが、彼に明日はないこともゲネシスにはすでに分かつていて。

(私なら町を去る前に家族を喰い殺すけれどね)

オーロールがそう言つてゐる中で、パン屋の夫の処刑は決まつてしまつた。この惨いやりとりは、ゲネシスが来る前から行われていたのだ。狼に間違われて殺されていく者の死を見るのは、気持ちの悪いことだつた。だが、ゲネシスが止められるような事でもなかつた。

「誰かが大地主にでも掛け合つて、御触れを出させるしかないのさ。だが、そんな御触れを出す地主なんて、この大陸に居る事もないだろう」

ミヒヤエルはそんな事を言った。魔女狩り、狼狩りを率先してやるのがこの大陸に点在する国々に共通していることだった。現に、狼は何処かに居る。だから、疑わしいモノを殺してしまった事は、仕方のないことだとでも言うのだろうか。ゲネシスは明日の朝に殺される事が決まったパン屋の男を見つめながら、一人で考えた。一つだけ明らかなことは、オフィーリア、ルナ、そしてランは宿から出すべきでないこと。そして、オーロールの存在を知られないこと。自分の身を守るためにも、それはとても大事なことだった。

（私は私で勝手にやらしてもらつよ。お前だって、それを止める程不器用な人間でもないのだろう？）

オーロールに問われ、ゲネシスは黙したまま考えを巡らせた。力一ミラを見守るのは、見返りを求めているからに過ぎない。善意ならば、今も人を襲つて肉を食べているはずのオーロールをもとづくに切り捨てている。だが、それをしないで、オーロールを野放しにしているのは、誰もオーロールを退治してくれと言つていかないからに過ぎないのだ。ゲネシスはそんな自分を時に嫌悪しては、開き直つていた。

「どうしたんだい？」

ミヒヤエルに問われた時、ゲネシスはカーミラの住まいの傍にいた。ここを張つていれば、いつかこの町を襲つている人狼を見つける。そうすれば、ミヒヤエルの受け取る報酬の半分ほどを譲つてもらう約束になつていた。旅をする以上、金は必要である。金さえ受け取れば、この町も去る事になるだろう。狼狩りなんて、ゲネシスにとつては、その程度のものだつた。

ゲネシスが探しているのは、魔女。

キュベレーの居場所だ。

「まあ、いい。昨日はパン屋のおかみをやつたばかりだからね。今日は現れないかもしないな」

ミヒヤエルがそんな事を言つた時、カーミラが洗濯籠を持つて家から出てきた。

「追つぞ

ミヒヤエルの言葉に、ゲネシスは従つた。

ディアナも、バステトも、杭を壊した時、アマリリスの何かもまた壊してしまったかのようになってしまったように感じた。二人とも杭には手を出さなかつた。それに手を出してはいけないような気がしてならなかつたからだ。しかし、ディアナだけは、感じていることがあつた。

次の杭。杭があるところは、自分がだけが知つてゐる。自分がだけが分かつてゐる。そんな気がしてゐたのだ。そして、アマリリスは、それを理解してゐるようだつた。アマリリスの静かな視線を受けて、ディアナはそつとバステトに漏らした。

「次の杭は、もしかしたら……」

ディアナが感じてゐる場所は、深い海の底。地上の者が辿り着けるのかと疑うくらいの深海に、ディアナは杭の存在を感じてゐた。守つてゐる何者かが身を潜めてゐる、暗い、暗い、海の底。ディアナが行かなくてはならない場所。ディアナを呼んでゐるのは、確かにその杭で間違ひなかつた。

「引き受けたのは、あたし

アマリリスが鋭い声で言つた。

「けれど、杭が選んだのは、あなた」

アマリリスの目は、まるで人狼のようだつた。正体を現す時の人狼の目にとても似てゐるといつて、ディアナは思つた。きっと、バステトもまた、ディアナと同じような恐怖を覚えてゐることだらうとも、ディアナは想像した。そのくらい、アマリリスの目は狂氣的だつたのだ。しかし、アマリリスは狂つてなどはいなかつた。ただ、頼まれた事をやつてゐるに過ぎない。そして、次の杭がディアナを呼んで

いることを理解し、その協力をデイアナに仰いでいるだけの事だった。

ディアナはそれをゆっくりと理解し、そつと頷いた。

「アリスは、海の潜り方を知っている?」

「海……」

アマリリスは一言そう呟くと、少し考えてから返答した。

「あなたを呼んでいるのなら、あなたが行ける場所なのでしょう」
その通りだと信じたかった。だけど、不安を解消するには、その場所まで行かなくてはならない。デイアナは途方にくれた。その場所に辿り着くまで、自分の勘を頼りに進むしかないというのだろうか。これが、アマリリスの勘だったら、不思議と疑いなく従えた自分がいた。しかし、自分に委ねられてしまっては、いきなり不安が襲ってきた。不安は不安を呼び、デイアナを身体の底から苦しめる。これが、杭の呼ぶ声によるものならば、たっさと壊してしまいたいほどだった。

だけど、杭の呼ぶ声は、今、デイアナ達がいる森から程遠い場所からだった。

「あなたについていく」

アマリリスが言った。

「それが、あたしの引き受けた仕事だから

その言葉が不思議とデイアナの緊張を解した。

ゲネシスが追わなければ、と思ったのは、第六感のようなものだつた。それがミヒヤエルも同じだつたことは言うまでもなく、その事にゲネシスはとても安心していた。国に仕える者達の無機質さと言つたら、同じ国に仕える者であるゲネシスにとつても気持ち悪いものだつたからだ。それを、ミヒヤエルからは、全く感じられない。それがどれだけ安心出来るものか、ゲネシス自身計り知れない。第六感がある時点で、ミヒヤエルは他の者達とは違う、とゲネシスは信じ始めていた。

そして、ゲネシスとミヒヤエルの第六感が正しかつたことは、町中、そして、白昼堂々といつた感じで、カーミラの悲鳴があがつたことで証明された。通常ならば、悲鳴が上がつた時点で人狼をはじめとする魔物達の仕事は終わつていることが多い。今回もそうであろうと町の者達は思つていただろう。だが、今回は違う。ゲネシスとミヒヤエルはこの瞬間を狙つていたのだ。それが、カーミラを助けるかどうかは、二人とも目的から外していた。二人の目的は、人狼の命だけ。そして、その獲物は、駆けつけたゲネシスとミヒヤエルの前に姿を現していた。

人狼は本来の姿ではなく、人の姿をしていた。人の姿で、朦朧としているカーミラを抱きかかえている。顔は一瞬で覚えた。ゲネシスもミヒヤエルもこの町の者ではないので、その男が誰かなんて知らなかつたが、それでも、忘れてしまうような無個性な顔ではなかつた。人狼の男はじつとゲネシスとミヒヤエルを見つめると、にやりと笑つた。二人が駆けつけることなど、見通していたらしい。

「狼の匂いを纏つた狩人が来るとは思わなかつた」

人狼の男は、そう一言呟くと、すぐにその場を去ろうとした。ミヒヤエルは少し出遅れたが、ゲネシスはそれを見逃さなかつた。そして、ゲネシスの影に隠れている者もまた、何の気紛れか、ゲネシスに力を貸したのだつた。人狼の男はオーロールの存在に気付くと、忌々しそうに唸り、纏わりつくオーロールの気配に対し歯を剥いた。ゲネシスは急いだ。オーロールが何を目的としているかは分からぬ。だが、オーロールもまたカーミラを狙つていてただ単に横取りのために助太刀してくれている可能性もあるから、安心することは出来なかつた。もしもオーロールの存在がばれ、彼女と自分が共に現れた事をミヒヤエルに知られれば、この仕事は徒労に終わってしまう。それは避けたかつた。

「鬱陶しい女だ。女と見て油断した」

人狼の男は立ち止まって、オーロールが潜んでいるらしい場所を睨んだ。最大の隙が生まれたことに、まだ彼は気付いていない。オーロールばかりに気を取られて、人間の存在をすっかり忘れているのだ。それだけゲネシス達は舐められているのかもしけないが、舐められていようがいまいが、チャンスはチャンスであるのだから、変わりなかつた。

ゲネシスは己の剣に精神力を集中させながら、静かに人狼の男へと近づいて行つた。

潮風にあてられながら、ディアナは血で染まつた景色を想起していた。大地を染める血は、かつての仲間が散らかしたもので、その血の主もまた、かつての仲間。仲間が仲間を喰い殺すという残虐な現実は、確かにあつたことなのだ。それはいかなる獣の残虐死よりも惨い事で、悲しい事だった。

また、この潮風のべたつきは、アマリリスの表情すらも曇らせるものだつた。偉大なる海の覇者に向けた誓いを、單なる人間に破られ、最悪の結末へと繋がつてしまつたことは、いかに人狼を虐殺し続ける赤い魔女でも、気持ちが沈んでしまうようなことだった。

ディアナはプシュケの事を想い出していた。精靈の血を引く彼女と、それを喰い殺した青い目の美しい女。一人の存在が、世界そのものを歪ませてしまつた事が、いまだに信じられなかつた。

ふと、バステトが海を見つめ、目を凝らした。

「何が……」

いる、と言おうとしたのだろうか。その途端、アマリリスが動き出した。海に近づこうとするバステトを突き飛ばし、託された剣を構えて海を睨みつけたのだ。いきなりの事に、ディアナもバステトも驚いた。だが、次の瞬間、ディアナはその理由が分かつてしまつた。

アマリリスの睨む海面が盛り上がりしていく。その大きさに、ディアナもバステトも怯んでしまつた。何かとんでもない生き物が出てこようとしている。氣色悪いハ本の足が、うねうねと動いている。その巨大蛸は、まさに魔物のようだつた。柔らかそうな身体をしている反面、海面からの光を照り返している皮膚は、まるで鋼の様で

もあつた。蛸の足がアマリリス達をめがけて伸びてきた。すぐさま、アマリリスはそれを剣で払つた。

「アリス、引いて」

ディアナの言葉にかぶさる様に、剣と蛸の足がぶつかり合つ音がした。それは、生身の蛸の足とは思えない音だつた。鋼と鋼がぶつかり合つような固い音。そう、蛸は生き物とは思えないほど鋼鉄な身体を持っていた。アマリリスはそれを確認すると、ディアナの言葉に従つて退いた。

「森の時のようにはいかないみたい」

そう言つアマリリスの表情は、何故か楽しそうだつた。

ふと、ディアナは耳をそばだてた。蛸が自分達に話しかけてきているのだ。やはり、バステトには通じていないうだが、アマリリスとディアナ自身には通じている。アマリリスはますます笑みを深め、剣を構えなおした。

「そう。それなら、遠慮なく楽しめてもいいわ」

まるで、人狼を狩るときのような表情。仲間さえも不気味がらせるその表情。ディアナは蛸とアマリリスのやりとりをじばし見つめると、意を決してクーガーの姿へと変わつた。

恨めしそうな眼光が、ゲネシスの目に焼き付いた。道端で倒れ伏すのは、四肢を失くした人狼の男。怯えるわけでもなく、ただ痛みによる苦しさと怒りだけが、その表情として現れていた。ゲネシスの影で、オーロールが不敵な笑みを浮かべていた。ミヒヤエルは、そして、カーミラは、どんな表情でこの姿を見ているのか、ゲネシスはふと考えた。

辺り一帯は狼の血で染まつてあり、ゲネシスの剣も、視界も、その赤に染められていた。

「化け物……」

人狼の男が呟くように言った。

「人間の皮を被つた、化け物……」

ゲネシスはそれを聞いて、ふと笑みを浮かべた。人間の皮を被つた魔物にそんなことを言われるとは思つていなかつたからだ。返り血に塗れた顔で、ゲネシスはその男を見つめ続けた。剣をつきつけても、人狼の男は怯まない。ただ、まっすぐ、死を見据えているかのようだつた。

「どうせ、歪んだ世界だ」

痛みをも忘れたのか、男は突然笑い出した。力ない笑いではあつたが、その奇妙さはゲネシスの笑みを曇らせた。

「これ以上生きていたとしても、希望すらも無くす世界に用はない」
人狼の男の目が見開かれた。

「さあ、刺せ。殺せ。この歪んだ世界から俺を解放しろ」
狂つたのか？

ゲネシスは疑問に思いつつ、剣を喰い込ませた。すぐに男の笑み

はやみ、その口から血泡が噴きでてくる。ゲネシスはそのまま剣を横に払い、男の首を切り落としにかかる。しつかりとした人狼の首である。何度も力を入れなければ、首を刎ねることが出来ない。時間をかけて骨を碎き、その首を地面に落した頃には、四肢の断面に滲む血も乾いてしまっていた。

全てが終わり、ゲネシスがじつと狼の首を見つめているところへ、やつと声をかけたのは、もはや存在すらも忘れていた、ミヒヤエルだった。

「見事だ」

ゲネシスの闘志の消えぬ眼差しが、ミヒヤエルを映す。ミヒヤエルはこの惨劇にさほど驚いていないようだった。ゲネシスにしてみれば当たり前だ。主に魔物狩りをしている兵ならば、このくらいのことは日常茶飯事だろう。ミヒヤエルは、やや苦笑いを浮かべ、続けた。

「ただ、狩りにしては、無駄が多いな」
「……歪んだ世界とは、何の事だと思う?」

ゲネシスはミヒヤエルの笑みには答えずに、そう訊ねた。人狼の男の最期の言葉が、ゲネシスの頭に引っ掛かっていた。希望すらも無くす世界。それが、自分のしてきた獣狩りに繋がることであるような気がしてならなかつたのだ。

ミヒヤエルは首を傾げ、しばしゲネシスの表情を見つめた。だが、すぐに目を逸らすと、剣を鞘に戻し、答えた。

「知らんね。だが、ここ最近、狼が狼らしくないのは確かだ。他の魔物の様子も何処か弱々しく感じる。奴らは何一つ変わつてないかもしれないがね。ただ、奴らから伝わつてくる魔力に、物足りなさを感じるのは確かだよ」

そう言つて、ミヒヤエルは狼の首を拾つた。

殺戮が楽しいと思い始めたのはいつからだつただろうか。アマリリスも、最初はそんな自分の本性が分かつてしまふ瞬間が恐ろしくて仕方なかつた。だから、人間達が自分に人狼退治を求める事が疎ましかつた時さえあつた。そう、確かにそんな時はあつたのだ。アマリリスはそれを覚えてい。それなのに、今はどうだらう。人狼を始めとした殺してもいい魔物が目の前にいると考えるだけで、血が滾り、胸躍る悦びを感じてしまうのだ。

いつからだらう。もう分からぬ。それに、もう抗う氣もない。殺戮に殺戮を重ねていくうちに、アマリリスの心も身体も、黒く濁つていつてしまつていた。そして、巨大な蛸を目の前にした今のアマリリスもまた、そんな殺戮の欲求に取り憑かれた哀れな怪物だつた。

アマリリスは蛸をじつと見上げた。殺したい。バラバラにしたい。引き千切りたい。そんなサディスティックな欲望が、アマリリスの身体の中で渦巻いていた。蛸はそんなアマリリスの中身すらも見通しているのだろう。しかし、それでも蛸は、己の使命を投げ出したりはしなかつた。

蛸の言葉を胸に受け、アマリリスは静かに頷いた。剣が煌めいている。アマリリスにとつてその煌めきは、今にも蛸の身体を刻みたいと言つてゐるかのようと思えた。

「心配しないで。すぐにあなたをバラバラに引き裂いてあげる。そうすれば、あなたも安心して杭を託せるでしょ?」

蛸はじつと見つめて、アマリリスの声に答えた。それが、戦いの幕開けだった。この会話が通じていなければ、バステトくらいだ。

だが、アマリリスにとつては問題ない事だった。今回の相手は、バステトの力もディアナの力もいらないくらいだった。杭の場所が分かればそれでいい。今のアマリリスは、助けを受ける事が無性に許せなかつたのだ。

「あなた達は下がつていて」

鋭い声に、クーガー姿のディアナが戸惑う。だが、アマリリスはそれに構つている暇はなかつた。砂浜を蹴つて、剣を握りしめたアマリリスは真つ直ぐ蛸へと向かつていつた。とにかく、今すぐに、この蛸に一太刀浴びせたい。そんな欲望がアマリリスの動きを支配していた。蛸もそれを察知し、ハ本もある腕でアマリリスの動きを阻害しようとする。ディアナが動いた。蛸の足に噛みつこうとしたのだ。だが、アマリリスはすぐさま一喝した。

「ディアナ、バステトと一緒に下がりなさい」

ディアナの戸惑いは一層深まつたが、アマリリスに逆らうようなことはなかつた。ディアナが下がつたのを感じると、アマリリスはじつと蛸を見上げた。素直にディアナとバステトの助けを受けるのが乐だろつ。しかし、アマリリスは一人で倒したかった。この蛸だけは、ディアナとバステトに手出しさせたくなかったのだ。

だが、それで勝機はあるのか。そればかりはアマリリスにも分からなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4148m/>

Amaryllis

2011年10月10日03時24分発行